

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第133集

# 中原遺跡 中宮裏遺跡

平成9～12年度 県道島田吉田線緊急地方道道路改築（B）事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第133集

# 中原遺跡 宮裏遺跡

平成9～12年度 県道島田吉田線緊急地方道道路改築（B）事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

中原遺跡と宮裏遺跡は、県道島田吉田線バイパス建設に伴い、平成9年度から平成13年度にかけて確認調査と本調査が実施された。中原遺跡・宮裏遺跡の位置する島田市阪本地域は、大井川の右岸に位置する。当該遺跡が位置する牧ノ原台地上には、「延喜式」にも記されている敬満（きょうまん）神社が鎮座し、周囲には多くの遺跡が確認されている。かねてから地域一帯には遠江国初倉驛家（はずくらのうまや）が設けられたと推定され、眼下には萬々と流れる大井川、対岸には駿河国小川驛家（おがわのうまや）が一望できるなど、国界の地でもあった。中原遺跡の北側には「驛」と墨書きされた須恵器や螺旋・瓦等が出土した宮上遺跡、円面鏡を出土した青木原遺跡が位置し、驛家との関連を推定させる集落遺跡が広がる。また宮裏遺跡は高根森古墳群と隣接し、南側には遠江国蔴原郡（はいばらぐん）の郡寺の可能性が指摘される竹林寺廃寺（ちくりんじはいじ）跡の位置する丘陵を目の当たりにすることが出来る位置にあり、かねてから注目されていた遺跡であった。

今回は牧ノ原台地の北東端部に派生した平坦な台地部上に、北西から南東にかけて狭長な調査区を設定・調査を行い、旧石器時代から鎌倉時代までの遺構・遺物を確認することが出来た。この成果は当地域における各時代の様相をより明確にならしめることが期待されている。注目されるのが縄文時代草創期～早期にかけて見られた多編文土器の出土、牧ノ原台地上では希有な9世紀代の集落、そして『源平盛衰記』『海道記』に見られる宿「波津蔵」「播豆藏」（はずくら）が付近に存在した可能性を想起させる輸入陶磁器・山茶碗等の出土資料がある。これらの資料は島田市教育委員会による周辺遺跡での調査成果とあわせて、慎重かつ精緻な分析が必要である。その結果、当地域の歴史像に迫ることができ、かねてから郷土の歴史に対する関心が高い島田市民の、さらなる歴史的意識の醸成へ貢献することが可能となるのである。

本書では、上記の如く当地域における歴史を考える上での資料を提供することが出来る。これは偏に関係諸機関のご助力の賜物である。静岡県島田土木事務所の方々には多大なるご配慮を頂いた。また島田市教育委員会をはじめ、島田市役所の方々にも並々ならぬご協力を頂いた。ここに謝意を表したい。そして炎天下の中、現地作業に従事した作業員の方々の労をねぎらいたい。

2002年3月30日

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

## 例　　言

- 1 本書は島田市阪本に所在する中原遺跡・宮裏遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は県道島田古田線緊急地方道道路改築（B）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県島田土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を実施した。
- 3 現地調査は平成9～13年度、資料整理は平成13年度に実施した。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

平成9年度（確認調査）

所長 斎藤 忠 副所長 池谷 和三 常務理事 三村田 昌明  
総務課長 初鹿野 英治 会計係長 杉山 智  
調査研究部長 石垣 英夫 調査研究部次長兼調査研究一課長 栗野 克巳  
調査研究員 鈴木 良孝・朝比奈 剛

平成10年度（確認調査・本調査）

所長 斎藤 忠 副所長 池谷 和三 常務理事 伊藤 友雄  
総務課長 杉木 敏雄 会計係長 杉田 智  
調査研究部長 石垣 英夫 調査研究部次長心得兼調査研究一課長 佐野 五十三  
調査研究二課長 足立 順司  
調査研究員 増井 啓太（7月～10月）・勝又 直人・菊池 吉修（10月～3月）

平成11年度（確認調査・本調査）

所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 伊藤 友雄  
総務課長 杉木 敏雄 会計係長 大石 真二  
調査研究部長 佐藤 達雄 調査研究部次長兼資料課長 佐野 五十三  
調査研究二課長 速藤 喜和 調査研究員 勝又 直人・大林 元

平成12年度（確認調査・本調査）

所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 伊藤 友雄  
総務課長 杉木 敏雄 会計係長 大橋 薫  
調査研究部長 佐藤 達雄 調査研究部次長兼調査研究一課長 及川 司  
調査研究二課長 篠原 修二 調査研究員 勝又 直人・大林 元

平成13年度（確認調査・資料整理）

所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 余田 徳幸  
総務課長 本杉 昭一 会計係長 大橋 薫  
調査研究部長 佐藤 達雄 調査研究部次長兼資料課長 栗野 克巳  
調査研究部次長兼調査研究一課長 及川 司  
調査研究二課長 篠原 修二 調査研究員 勝又 直人

- 5 本書の執筆は調査研究員 勝又 直人が行った。
- 6 現地のグリッド設定、空中写真測量、また道標トレース図・遺物実測図作成の一部は株式会社フジヤマに委託した。
- 7 金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室（室長 西尾 太加二）が実施した。
- 8 輸入陶磁器の鑑定は国立歴史民俗博物館助教授 小野 正敏氏に御教授賜った。

- 9 本書の遺物写真撮影は当研究所職員が行った。
- 10 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 11 発掘調査資料はすべて静岡県教育委員会が保管している。

## 凡　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

- 1 本書で使用した方位はすべて国土地標（平面直角座標系）の方位である。
- 2 遺構・遺物の標記は以下のとおりである。

### 遺構

S A 杭列 S B 竪穴住居跡 S D 溝状遺構 S F 土坑 S H 挖立柱建物跡  
S P 柱穴 S X その他

### 遺物

P 土器 P t 土製品 S 石製品 M 金属製品

- 3 遺構図版・土器実測図中のスクリーントーンは次のとおりである。

#### ◆遺構



焼土分布域



カマド範囲

#### ◆遺物



内黒土器  
(黒色処理面)

- 4 遺構図版中の番号は遺物番号と同一である。
- 5 遺構図版中の遺物出土ポイントの表記は次の通りである。  

● 土器	▲ 金属器	■ 石器
------	-------	------
- 6 土器の色調の記述には、農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』1994年を使用した。
- 7 遺物一覧表及び観察表中の計測値における( )は、復原実測による推定値である。

# 目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡周辺の環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	
第1節 基本的上層	9
第2節 調査・資料整理の方法	10
第3節 調査の経過	11
第4章 中原遺跡	
第1節 概要	13
第2節 検出遺構	
1～1区	13
1～2区	28
2～1区	30
2～2区	45
2～3区	47
3区	62
4区	74
5区	78
6区	88
7区	104
第3節 出土遺物	
土器・土製品	
1～1区	110
1～2区	116
2～1区	117
2～2区	120
2～3区	122
3区	124
4区	127
5区	127
6区	130
石器	136
金属器	144

## 第5章 宮裏遺跡

第1節 概要	145
第2節 検出遺構	
1区	145
2区	152
3区	154
第3節 出土遺物	
上器	
1区	169
2区	171
3区	171
金属器	179
石器	180

## 第6章 まとめ

第1節 旧石器時代～縄文時代	181
第2節 古墳時代～平安時代	181
第3節 平安時代～鎌倉時代	191

## 一覧表

### 写真図版

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡周辺の地質	4
第3図 周辺遺跡図	6
第4図 基本事層図・グリッド図	9
第5図 中原遺跡調査区・グリッド位置図	14
第6図 1～1・2区平面図	15
第7図 1～1区SB-1	17
第8図 1～1区SB-2	18
第9図 1～1区SH-1	19
第10図 1～1区SH-2	20
第11図 1～1区SH-3	21
第12図 1～1区SD-1～3他	23
第13図 1～1区SD-2土器出土状況図	24
第14図 1～1区SD-3・9	25
第15図 1～1区SD-4・11～17	26
第16図 1～2区SD	29
第17図 2～1・2区平面図	31・32
第18図 2～1区SB-1・2	33

第19図	2-1区SB-3	34	第60図	6区SB-4	94
第20図	2-1区SB-4	35	第61図	6区SB-5	96
第21図	2-1区SB-5	36	第62図	6区SB-6	97
第22図	2-1区SH-1	38	第63図	6区SB-7	98
第23図	2-1区SH-2	39	第64図	6区SB-8	99
第24図	2-1区SH-3	40	第65図	6区SD-3~6	100
第25図	2-1区SH-4	41	第66図	6区縄文遺物出土分布図	102
第26図	2-1・2区SD	42	第67図	6区縄文遺物 出土地点付近土層図	103
第27図	2-1区SD-8~12	43	第68図	7区平面図	105
第28図	2-1区SD-16	44	第69図	7区SH-1	106
第29図	2-2区SB-1・2	45	第70図	7区SH-2	107
第30図	2-3区平面図	47・48	第71図	7区SH-3	108
第31図	2-3区SB-1	49	第72図	7区SX-1	109
第32図	2-3区SB-2	50	第73図	1-1区出土土器1	111
第33図	2-3区SB-3・4	52	第74図	1-1区出土土器2	112
第34図	2-3区SB-5	53	第75図	1-1区出土土器3	113
第35図	2-3区SB-6	54	第76図	1-1区出土土器4	115
第36図	2-3区SB-7	55	第77図	1-2区出土土器	116
第37図	2-3区SH-1	56	第78図	2-1区出土土器1	118
第38図	2-3区SD-1・2・9	57	第79図	2-1区出土土器2	119
第39図	2-3区SD-5・6	59・60	第80図	2-1区出土土器3、 2-2区出土土器	121
第40図	3・4・5区平面図	63・64	第81図	2-3区出土土器1	123
第41図	3区SB-2~5変遷図	66	第82図	2-3区出土土器2、 3区出土土器1	124
第42図	3区SB-1~5	67・68	第83図	3区出土土器2	126
第43図	3区SB-6	69	第84図	4区出土土器、 5区出土土器1	128
第44図	3区SB-7・9	70	第85図	5区出土土器2	129
第45図	3区SB-8	71	第86図	5区出土土器3	131
第46図	3区SH-1	73	第87図	6区出土土器1	132
第47図	4区SB-1	75	第88図	6区出土土器2、 中原遺跡出土土製品	134
第48図	4区SB-2	76	第89図	6区出土縄文土器1	134
第49図	4区SB-3~5	77	第90図	6区出土縄文土器2	135
第50図	5区SB-1・7	79・80	第91図	中原遺跡出土石器1	136
第51図	5区SB-1・7掘り方	81	第92図	中原遺跡出土石器2	137
第52図	5区SB-2	82	第93図	中原遺跡出土石器3	138
第53図	5区SB-3・6	83	第94図	中原遺跡出土石器4	139
第54図	5区SB-4・5	84	第95図	中原遺跡出土石器5	140
第55図	5区SB-8	85			
第56図	5区SH-1	87			
第57図	6区平面図	89・90			
第58図	6区SB-2	91・92			
第59図	6区SB-1・3	93			

## 挿表目次

第96図 中原遺跡出土石器 6	141	第1表 遺跡一覧表	7
第97図 中原遺跡出土石器 7	142	第2表 調査工程表	12
第98図 中原遺跡出土石器 8	143	第3表 中原遺跡土器一覧表 1	196
第99図 中原遺跡出土鉄製品	144	第4表 中原遺跡土器一覧表 2	197
第100図 宮裏遺跡調査区・ グリッド位置図	146	第5表 中原遺跡土器一覧表 3	198
第101図 宮裏遺跡 1~3区平面図	147·148	第6表 中原遺跡土器一覧表 4	199
第102図 1区SB-1·2·4	149·150	第7表 宮裏遺跡土器一覧表 1	200
第103図 1区SB-3	151	第8表 宮裏遺跡土器一覧表 2	201
第104図 2区SB-1~3	153	第9表 中原遺跡輸入陶磁器等一覧表	202
第105図 3区SB-1	155	第10表 宮裏遺跡輸入陶磁器等一覧表	202
第106図 3区SB-2	156	第11表 中原遺跡石器一覧表	203
第107図 3区SB-3a·b	157	第12表 宮裏遺跡石器一覧表	203
第108図 3区SB-4	159	第13表 中原遺跡堅穴住居跡・掘立柱建物跡 計測値一覧表	204
第109図 3区SB-5·6	160	第14表 宮裏遺跡堅穴住居跡・掘立柱建物跡 計測値一覧表	205
第110図 3区SB-7·8	162	第15表 中原遺跡山茶碗・ 輸入陶磁器類点数表	205
第111図 3区SB-9·10	163	第16表 中原遺跡輸入陶磁器破片点数表	205
第112図 3区SB-11·12	164		
第113図 3区SH-1平面図	166		
第114図 3区SH-1エレベーション図	167		
第115図 3区SD-2·3	168		
第116図 1区出土土器 1	170		
第117図 1区出土土器 2、2区出土土器、 3区出土土器 1	171		
第118図 3区出土土器 2	172		
第119図 3区出土土器 3	173		
第120図 3区出土土器 4	176	図版 1 中原遺跡・宮裏遺跡周辺	
第121図 3区出土土器 5	178	図版 2 1 中原遺跡遠景	
第122図 3区出土土器 6	179	2 中原遺跡周辺	
第123図 宮裏遺跡出土鉄製品	180	図版 3 1 中原遺跡 1~1区全景	
第124図 宮裏遺跡出土石器	180	2 1~1区SB-1、SH-1·2	
第125図 敬満神社周辺図	182	図版 4 1 1~1区SB-1	
第126図 上師器壺計測値分布図	184	2 1~1区SB-1土器出土状況	
第127図 内黒土器計測値分布図	186	図版 5 1 1~1区SB-2	
第128図 中原・宮裏遺跡土器変遷図	187	2 1~1区SH-1	
第129図 中原遺跡堅穴住居跡方位分布図	188	図版 6 1 1~1区SH-2	
第130図 中原遺跡遺構変遷図	189·190	2 1~1区SD-1	
第131図 青木原遺跡・中原遺跡 調査区推定図	192	図版 7 1 1~1区SD-1·2	
第132図 中原遺跡グリッド別 土器出土図	193·194	2 1~1区SD-3·9	
		図版 8 1~3	
		1~1区SD-2土器出土状況	

## 写真図版目次

図版 1 中原遺跡・宮裏遺跡周辺	
図版 2 1 中原遺跡遠景	
2 中原遺跡周辺	
図版 3 1 中原遺跡 1~1区全景	
2 1~1区SB-1、SH-1·2	
図版 4 1 1~1区SB-1	
2 1~1区SB-1土器出土状況	
図版 5 1 1~1区SB-2	
2 1~1区SH-1	
図版 6 1 1~1区SH-2	
2 1~1区SD-1	
図版 7 1 1~1区SD-1·2	
2 1~1区SD-3·9	
図版 8 1~3	
1~1区SD-2土器出土状況	

	4	1-1区SD-1 碑出土状況	図版28	1	3区SB-8
	5	1-1区SD-1・3 碑出土状況		2	3区SH-1
図版9	1	1-1区SD-4・12	図版29	1	3区SD-3
	2	1-1区SD-16		2	3区SD-3 碑出土状況
図版10	1	1-1区SP-23土器1 出土状況		3	3区SD-3 付近出土小皿
	2	1-1区SP-28土器1 出土状況	図版30	1	中原遺跡4区全景
	3	1-1区SF-18 碑出土状況		2	中原遺跡4区全景
図版11	1	中原遺跡1-2区全景	図版31	1	4区SB-2
	2	1-2区遺構検出状況		2	4区SB-2 カマド
図版12	中原遺跡2-1・2区全景			3	4区SB-2 カマド内土製支脚
図版13	1	2-1区SB-1		4	4区SB-2 土器出土状況
	2	2-1区SB-2 土器出土状況	図版32	1	4区SB-3・4
図版14	1	2-1区SB-3・4		2	4区SB-4
	2	2-1区SB-4 土器出土状況		3	4区SB-4 灰釉陶器出土状況
図版15	1	2-1区SB-5	図版33	中原遺跡5区全景	
	2	2-1区SH-3	図版34	1	5区SB-1
図版16	1	2-1区SH-4・SD-10周辺		2	5区SB-1 掘り方
	2	2-1区SH-4	図版35	1	5区SB-7
図版17	1	2-2区SB-1・2周辺		2	5区SB-1 土師器窯出土状況
	2	2-2区SB-1・2		3	5区SB-1 灰釉陶器・須恵器出土状況
図版18	中原遺跡2-3区全景			4	5区SB-1 上師器窯出土状況
図版19	1	2-3区SB-1		5	5区SB-7 土師器窯出土状況
	2	2-3区SB-2	図版36	1	5区SB-2
図版20	1	2-3区SB-3・4		2	5区SB-2 カマド付近土器出土状況
	2	2-3区SB-3・4 土層堆積状況	図版37	1	5区SB-3~6
図版21	1	2-3区SB-5		2	5区SB-4・5
	2	2-3区SB-6	図版38	1	5区SB-3
図版22	1	2-3区SB-7		2	5区SB-3 内黒土器出土状況
	2	2-3区SH-1	図版39	中原遺跡6区全景	
図版23	1	2-3区SD-5・6	図版40	1	6区竪穴住居跡群
	2	2-3区SD-5・6		2	6区SB-1
図版24	1	2-3区SD-5・6	図版41	1	6区SB-2
	2	2-3区SD-5・6 底面拡大		2	6区SB-2 挖り方
	3	2-3区SD-5・6 土層帶G-H	図版42	1	6区SB-3
図版25	中原遺跡3区全景			2	6区SB-4
図版26	1	3区SB-1		3	6区SB-6
	2	3区SB-4 a・b	図版43	1	6区SB-5
	3	3区SB-5		2	6区SB-5 挖り方
図版27	1	3区SB-6			
	2	3区SB-7・9			

3	6区SB-7	1-2区遺構外出土上器
4	6区SB-7内黒土器出土状況	図版60 2-1区SB-1・2・4
5	6区SB-8	SD-10出土土器
図版44	1 6区縄文土器出土状況	図版61 2-1区SD-1・SP-45
	2 6区縄文土器出土状況	2-2区SD-1
図版45	中原遺跡7区全景	2-3区SB-1・7・遺構外
図版46	1 7区SH-1・2	3区SB-8出土土器
	2 7区SH-3	図版62 3区SB-6・SD-2・SP-1
図版47	1 宮裏遺跡遠景	遺構外・4区SB-2・4出土土器
	2 宮裏遺跡1区全景	図版63 5区SB-1出土土器
図版48	1 1区SB-1	図版64 5区SB-1~3・7・8出土土器
	2 1区SB-1掘り方	図版65 6区SB-2・4・7出土土器
	3 1区SB-1・2・4掘り方	中原遺跡出土土製品
図版49	1 1区SB-1土器出土状況	図版66 宮裏遺跡1区SB-1
	2 1区SB-3土器出土状況	3区SB-1・2・3出土土器
図版50	1 宮裏遺跡1・2区全景	図版67 3区SB-3・4・8遺構外出土土器
	2 2区SB-1	図版68 中原遺跡6区出土縄文土器(表)
	3 2区SB-2・3	図版69 中原遺跡6区出土縄文土器(裏)
図版51	宮裏遺跡3区全景	図版70 中原遺跡・宮裏遺跡出土輸入陶磁器等 集合写真(表)
図版52	1 3区SB-1	中原遺跡1-1区SD-16出土白磁
	2 3区SB-2	2-3区SD-6出土青磁
図版53	1 3区SB-3 a・b	図版71 中原遺跡・宮裏遺跡出土輸入陶磁器等 集合写真(裏)
	2 3区SB-3 a	中原遺跡2-3区遺構外出土青磁
	カマド付近土器出土状況	図版72 宮裏遺跡3区SP-82出土青磁
	3 3区SB-3 a上器出土状況	中原遺跡1-1区SD-16・遺構外 出土青磁
図版54	1 3区SB-4~6	2-1区SD-1出土白磁
	2 3区SB-8	図版73 中原遺跡出土石鎚・石錐・打製石斧 剥片・石錘・砥石
	3 3区SB-8	図版74 中原遺跡出土敲打石・台石 宮裏遺跡出土ナイフ形石器・石鎚
	カマド付近土器出土状況	図版75 中原遺跡・宮裏遺跡出土鐵製品
図版55	1 3区SB-10	
	2 3区SB-7	
	3 3区SB-9	
図版56	1 3区SB-11	
	2 3区SB-12	
	3 3区SD-2・3	
図版57	1 3区SH-1	
	2 3区SP-82青磁出土状況	
図版58	中原遺跡1-1区SB-1・SD-1 SD-2出土土器	
図版59	1-1区SD-2・SP-28 SP-23・SP-77・遺構外	

## 第1章 調査に至る経緯

本書で報告する中原遺跡・宮裏遺跡は県道島田吉田線緊急地方道道路改築（B）事業に伴い、発掘調査対象となった遺跡である。両遺跡が位置する牧ノ原台地は、島田市街地の南方、大井川を挟む対岸の位置にあり、その広大で平坦な台地面は、明治期から徳川家臣等の積極的な開墾活動を嚆矢として、現在は日本有数の茶生産地として名を馳せている。

この牧ノ原台地の東側には県道島田吉田線が島田市街地へ向かって北上している。この路線は島田市街地を東西に横断する国道1号線と清水から静岡、焼津を経て吉田町まで延びる国道150線を結んでいる。県道島田吉田線は高度経済成長に伴う交通量の増加、さらに島田市と吉田町との境界付近に設けられた東名高速道吉田インターチェンジにアクセス出来ることにより、交通集中に起因する渋滞が見られるようになってきた。このような状況の中で島田市道悦鳥から阪本にかかる谷口橋にかかる新しい橋と県道バイパスの設置を求める声が高まってきたのである。このような中、静岡県島田土木事務所（以下島田土木とする）により計画された本事業による新しい道路路線は島田市旭から新設の橋を通過し、前述した牧ノ原台地上を南東方向に縱断するもので、この道路が運用された後には、渋滞等の交通障害の解消が期待されるのである。昭和63年この事業の着工時に、初めて牧ノ原台地上の路線予定地内において静岡県文化財保護指導員により遺物の出土が確認された。静岡県教育委員会文化課（以下文化課とする）との協議、再踏査の結果、敬満神社付近に宮上遺跡の存在が明らかとなり、平成元年に島田市教育委員会（以下市教委とする）により尼沢遺跡・宮上遺跡の調査が実施された。その結果、「驛」と墨書きされた須恵器が出土し、「初倉駅家」の存在を証明するものとして、新聞等の紙面を賑わすことになった。平成4年度に宮上遺跡の西に青木原遺跡が新たに確認され、平成5年度に市教委により調査が実施されている。

今回、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下研究所）が調査を実施する事になった中原遺跡は、静岡県文化財地名表にも掲載されていなかった遺跡であった。市教委により平成5年に市道谷口原本線改良工事に伴う調査、及び平成6年の畑縫ファームボンド建設に伴う調査が実施され、広範囲に遺物の表面採集がなされたことから、遺跡のおおよその範囲が推定できた。それは市道谷口原本線と直交する箇所を起点とする島田土木が進める事業路線地内を大きく包むように広がっていることを示していた。さらに予定地付近には周知の遺跡でもある高根森古墳群が展開し、路線内に未確認であった古墳の存在の可能性も想起された。平成8年冬に島田土木から工事概略表が提出され、それを受けた平成9年1月に文化課・市教委・島田土木の三者で協議を行い、路線予定地全域での確認調査が必要という結論に達した。同年4月文化課と市教委との協議で、調査は県で対応して欲しい旨の要望が出された。7月に文化課・市教委・島田土木、及び島田市建設課を交えた四者協議を行い、平成9年度中に買収が終了した区域から確認調査を研究所が実施し、さらに平成10年度以降も調査計画の組み立てを行う、ということに決定した。これにより事業対象遺跡は中原遺跡及び高根森古墳群となったが、平成10年度の調査では高根森古墳付近では古墳の存在は確認できず、古代の集落跡が確認された。現地の字名をとり「宮裏遺跡」という遺跡名をつけ、平成11年度以降の事業は、高根森古墳群に代えて宮裏遺跡が対象となつた。

## 第2章 遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

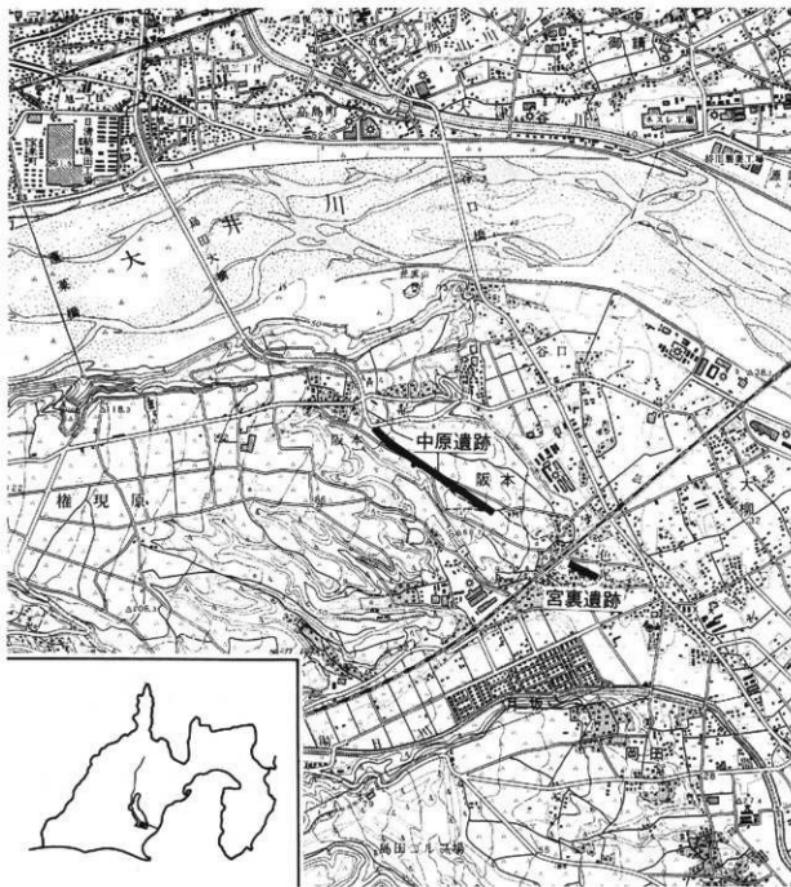
中原遺跡・宮裏遺跡は静岡県島田市坂本に所在する。これらの遺跡の所在する地域は大井川により南北に分割される市域の中の南半部にあたる。通称「牧ノ原台地」と呼ばれる平坦な台地が、その領域の大半を占めている。現在その平坦で緩やかな勾配を有する台地は、主に茶畠として利用され、全国でも屈指のお茶の生産地として知られている。中原遺跡・宮裏遺跡はその牧ノ原台地の一部、即ち北東端に派生した台地上に位置し、遺跡からは島田市街地を始め、大井川、及びその河口部、藤枝・焼津市街地を含む志太平野が一望できる。また志太平野東縁部、岡部町・焼津市境にそびえる高草山や宇津ノ谷峰の方向に目を転すれば、富士山の姿を肉眼で確認することが可能である。これら志太平野を始め、遺跡の位置する牧ノ原台地等は全て大井川の堆積物により構成されている。

大井川は南アルプス（赤石山脈）の間ヶ岳・農鳥岳・赤石岳等の標高3000m級の山々に源流を持つ川で延長160km、流域面積1280km<sup>2</sup>をはかる全國屈指の大河である。この流れは蛇行しつつ山間部を流れ金谷町・島田市街地付近から平野部へ移行し、駿河湾へと注ぐ。島田市神座付近からは駿河湾に向けて扇状地が形成され、大井川等の流路の変遷により、微高地・自然堤防等が形成されている。南アルプスでも大井川が流れる一帯は、糸魚川一静岡構造線及び中央構造線に区切られた西南日本弧外帯褶曲帶のひとつ「四十万帯」に属する。そして島田市相賀付近で「瀬戸川帯」を、金谷町志戸呂付近で「倉真層群」を通過する。四十万帯は主に中生代ターピナイト及び凝灰質岩等により構成されている。今日我々が目にすることの大井川の河川縦の大部分はこれら四十万帯に由来するものである。

遺跡が位置する「牧ノ原台地」は本来は沖積平野であり、長い年月をかけて大井川が南アルプスから運んだ堆積物が隆起したものである。中原遺跡の位置する谷口原・権現原から続く中位段丘面は「牧ノ原礫層」で構成され、堆積年代は13万～7万年前と推定されている。またこれより年代が新しい時期の河川堆積物により構成された低位段丘面が島田市色尾付近に残る。所謂「色尾礫層」がこれであり、宮裏遺跡が位置するのはこの段丘面で、牧ノ原段丘面と色尾段丘面の境をなす段丘崖が、旧初地区の天王神社付近にて現在も見ることが可能である。中原遺跡が位置する牧ノ原段丘面付近は平坦な土地が広がり、標高約82～67mをはかる。そして北西から南東に向かって緩やかに傾斜し、色尾段丘面に移行する。調査地点付近の段丘崖の高低差約7mをはかり両段丘面の境界を明瞭に示している。色尾段丘面でも宮裏遺跡が位置する一帯は標高約42mで、北西から南東に向かい緩やかに傾斜していく。段丘南側には牧ノ原台地を比較的新しい時期に開拓した湯日川が、通称「湯日谷」を形成している。大井川の河川堆積により谷口部を封鎖された結果、湯日川流域は粘土・シルトや泥炭を基調とした軟弱な泥質堆積物で構成されている。このため流域は水田耕作を基調とした土地利用がなされている。

### 第2節 歴史的環境

前節で述べたように、大井川は南アルプスから清涼な水を駿河湾に注ぎ、その冲積物によって牧ノ原台地及び河口部の肥沃な平野部を形成し、旧石器時代から人々に恩恵を施し続けている。第3図及び第1表で示したように中原遺跡・宮裏遺跡を中心とした牧ノ原台地一帯には数多くの遺跡が発見されるのはこの証左であり、郷土の人々によりこれらの遺跡、出土する遺物に対する関心が、早い時期から示されているのは、このためであると言っても過言ではない。この豊富な歴史資料に対して地元島田市教育



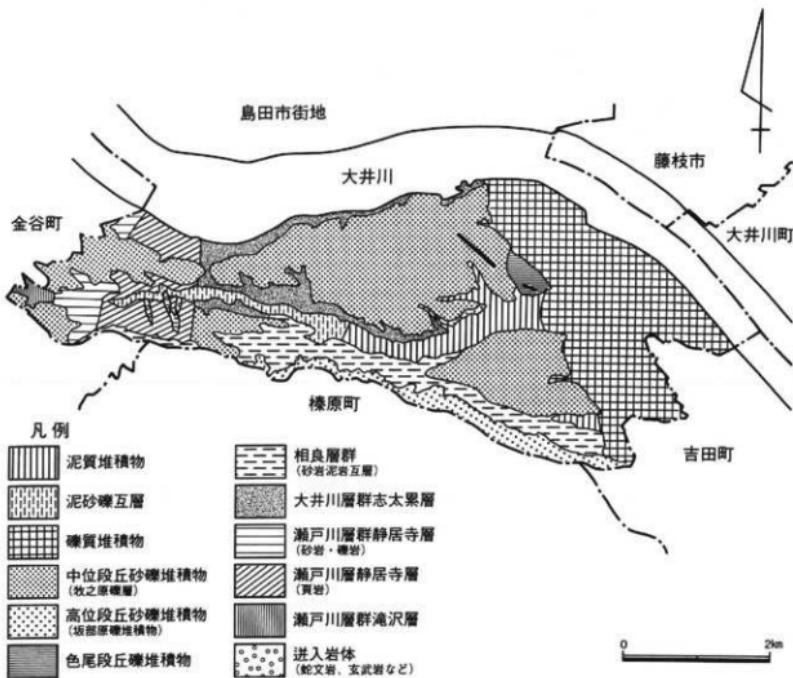
第1図 遺跡位置図 (1:25000)

委員会等が現在も精緻な調査を行っており、その成果が公にされているのは周知の事実である。

旧石器時代の遺物が多く確認されているのは、中原遺跡から約3.5km程西へ、湯日川の開析作用により形成された湯日谷の最奥部一帯で、御小屋原遺跡・屋敷原遺跡・吹木原遺跡等が位置している。ここではナイフ形石器文化終末期の良好な資料が知られる。また吹木原遺跡では黒耀石製の海老山型細石核が表面採集されている。遺跡周辺では3、原ノ平遺跡、10、青木原遺跡において旧石器時代の遺物が確認されている。原ノ平遺跡は平成3年のファームボンド建設に伴う調査で、搔器・剥片が出土している。また中原遺跡に隣接する青木原遺跡での平成5・6年における調査でナイフ形石器が出土している。これにより少ないながらも牧ノ原台地東縁部において旧石器時代の資料の存在についての関心が払われるようになっている。

縄文時代の遺跡としては3、原ノ平遺跡、4、東照宮遺跡、5、えびす森遺跡、7、大原遺跡、9、色尾原遺跡、10、青木原遺跡、11、尼沢遺跡、12、宮上遺跡、15、谷口原遺跡、22、岡田原Ⅲ遺跡、24、岡田原Ⅱ遺跡、27、南原遺跡、35、地蔵原遺跡、36、沼伏神社遺跡、44、岡田原Ⅰ遺跡、56、海戸遺跡等が知られる。原ノ平遺跡の西に隣接する東鎌塚原遺跡は、縄文時代中期の多角形住居跡が発見され以来、注目され続けている。これら紹介した縄文時代の遺跡が多く展開するのが牧ノ原台地でも権現原を中心とした地域で、中期を主体とした集落である。大井川を挟んだ地域、島田の市街地を南に臨む丘陵地においては、国道1号線バイパス建設に伴う調査等で、該期の多くの遺物が出土している。中でも旗指遺跡群第1地点で草創期の土器が出土したことは特筆される。平成6年に実施されたファームボンド建設に伴う中原遺跡の調査でも草創期の土器片が出土し、先述した御小屋原遺跡では平成4年度の幹線水路工事に伴う調査で該期の土坑から有舌尖頭器が出土、また茶畑改植に伴う調査の際には尖頭器が出土している。青木原遺跡の茶工場建設に伴う調査においても尖頭器が出土している。このように近年牧ノ原台地上における縄文時代草創期の人々の生活痕跡が検出され始めており、今後の調査事例に期待がなされている。

弥生時代の遺跡として県文化財地名表に登録されているのが、17、五輪塔遺跡、27、南原遺跡、35、地藏原遺跡、37、松ノ木原遺跡、48、長軒屋遺跡の以上5遺跡である。しかしながらその具体的な様相



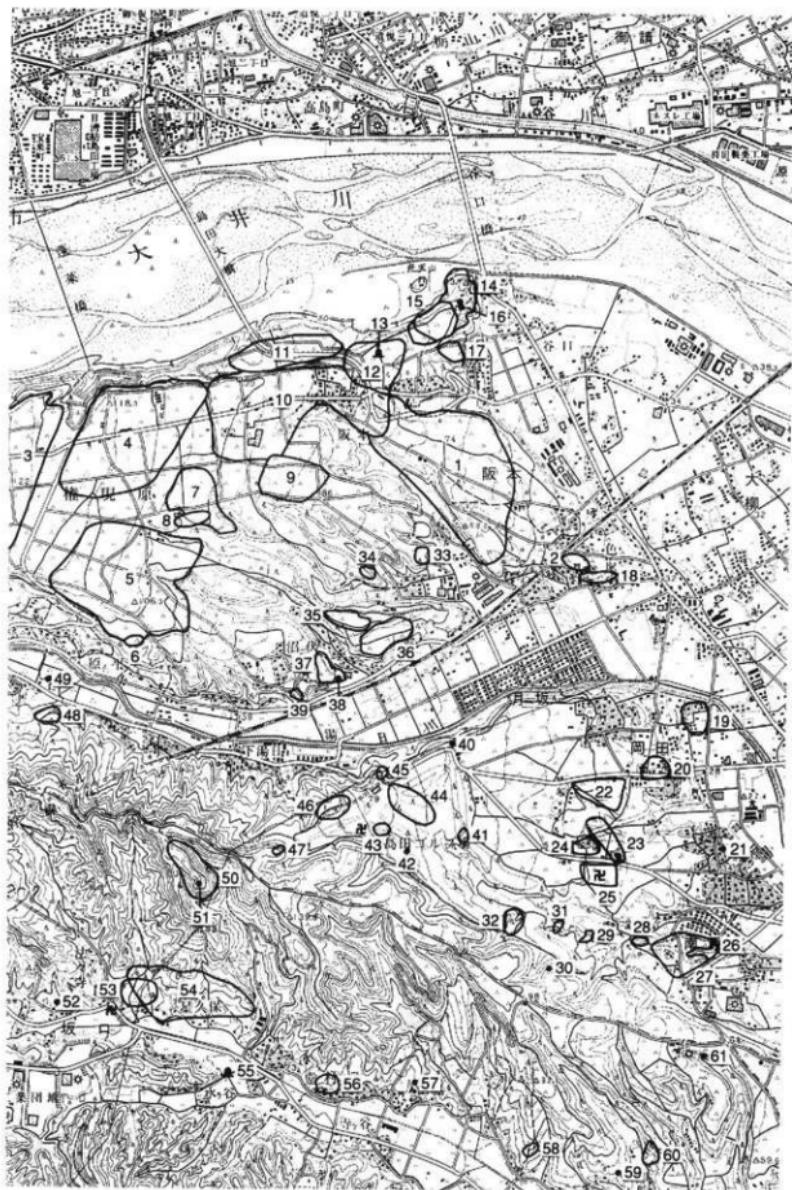
\*『しまだの自然環境』1983年参考

第2図 遺跡周辺の地質

は判然としない。島田市教育委員会により南原遺跡・地蔵原遺跡で実施された確認調査でも、該期の資料を得ることは出来なかつたという。今後の調査事例の増加を待ちたいところである。なお平成6年度に行われた12、宮上遺跡の調査では弥生時代中期の丸子式土器の破片が1点出土しており、看過することは出来ない。大井川対岸に位置する山王前遺跡では弥生時代後期の遺物を得ており、島田市域でも北側に弥生時代の遺跡の分布を見る。『初倉村誌』によれば湯日付近の田の中に共同井戸を掘った際に、青銅製の器具と推定される遺物が、また沼伏でも井戸を掘った際に、石器が出土したという。こうしたことから、湯日川流域の低地部にも弥生時代の遺跡が存在する可能性は否定することは出来ない。

古墳時代の遺跡としては牧ノ原台地の最東北端に位置する14、谷口原古墳群から湯日川沿いに18、高根森古墳群や44～47、水掛上古墳群A～D群、丘陵を南に挟んで坂口谷川沿いには54、星久保古墳群等、他多数の古墳、古墳群があげられるなど看過できない地域となっている。集落遺跡では1、中原遺跡、10、青木原遺跡、12、宮上遺跡、祭祀遺跡では39、沼伏遺跡が知られる。敬満神社の北東に展開する谷口原古墳群は弁天支群と森下支群に分かれ、これらの中間に島田市指定史跡である16、愛宕塚古墳が位置する。時期は6世紀後半～7世紀代とされている。かつては「初倉千塚」とも呼ばれた当該古墳群はこれまでに3度の調査が実施されている。昭和34年の墳丘測量調査では23基の古墳を確認した。昭和35年には久永晴男氏の指導のもと、愛宕塚古墳及び森下支群森下2・3号墳の測量及び石室内清掃が行われた。この結果、愛宕塚古墳が帆立貝型に近い前方後円墳であることが明らかとなった。また横穴式石室内部において組合式箱形石棺の存在、そして玉・鉄鏃・太刀残欠等を確認している。昭和37年には新幹線建設に伴う土取り工事により2次にわたる緊急調査が行われ、6基の古墳を確認している。高根森古墳群は宮裏遺跡に隣接する古墳群である。先述の谷口原古墳群が位置する面より一段下の色尾面の南縁部に展開し、眼下に湯日川と大井川河口部を臨む。かつては9基存在したと伝えられる当該古墳群も現在確認できる墳丘として、色尾天王神社境内にある9号墳、及び近隣住民地宅内にある6号墳のみである。人正4年3月に2号墳が地元住民の手により調査が行われ、その後に後藤守一氏によりその存在を全国に知らしめられている。現在石室は消滅し、出土遺物は東京国立博物館に納められている。金銅製頭椎大刀を始め、玉類、馬鐸、銅鏡、及び壺・半瓶・提瓶等の須恵器類が出土している。なお出土須恵器については近年、中村浩氏により精緻な分析がなされている。水掛け古墳群は湯日川の右岸、坂部原丘陵上に位置し、A～D群に分かれている。A・C群については、遠州考古学研究会により昭和39年ゴルフ場建設に伴う調査が行われ、約20基が確認された。その結果、A群は7世紀～、C群は6世紀後半に營まれていたと推定している。またC群については平成9・10年にかけて静岡空港建設に伴う調査で県埋蔵文化財調査研究所が3基の横穴式石室を有する円墳を3基確認し、D群は平成13年度に新たに確認された。C群の時期はA群とは同じと報告されている。以上、地方史的にも学史的にも重要な3つの古墳群を紹介したが、当該地域に見られる古墳のほとんどが古墳時代後期のものであり、前・中期代の古墳の様相は残念ながら判然としない。古墳時代の集落が確認されている中原・青木原・宮上の3遺跡は本来的には一つの遺跡である。検出されているのは堅穴住居跡が多く、時期的に7世紀後半（古墳時代後期後半）と推定されている。この阪本を中心とする地域ではまだ古墳時代前・中期の集落跡は検出されていなかったが、近年榛原町坂口の54、星久保古墳群において、静岡空港関連の調査が県埋蔵文化財調査研究所により行われた。その結果、時期的に中期代まで遡る可能性のある集落跡を確認しており、今後周辺地域でも該期の集落跡が検出される可能性は十分あると言えよう。祭祀遺跡として県内でも名の知られる沼伏遺跡では昭和38年に開墾作業中に発見され、高杯・壠等の土器類や有孔円盤・剣形石製模造品が出土している。また平成6年には県道拡幅に伴う調査でも小堀高壙が出土しているという。26、向山遺跡では古墳時代後期の須恵器窯が確認されており注目される。

白鳳時代～平安時代になると当該地域は遠江国榛原郡（榛原郡）に含まれ、郡と東国とを結ぶ「駿路」



第3図 周辺遺跡図 (1 : 25000)

1	中原遺跡	14	谷口原古墳群	27	南原遺跡	40	庚申塚古墳	53	正屋敷寺院
2	宮裏遺跡	15	谷口原遺跡	28	南原瓦窯	41	六ツ塚古墳群	54	星久保古墳群
3	原ノ平遺跡	16	愛宕塚古墳	29	南原古窯	42	9TEE古墳	55	水ヶ谷経塚
4	東照宮遺跡	17	五輪塔遺跡	30	福荷山古墳	43	水掛土遺跡	56	海戸遺跡
5	えびす森遺跡	18	高根森古墳群	31	六千ヶ谷瓦窯	44	岡田原I遺跡	57	神ノ郷古墳
6	原ノ平遺跡	19	岡田城跡	32	窓ヶ谷古窯	45	水掛土古墳群A群	58	浄雲寺古墳群
7	大原遺跡	20	医王寺南遺跡	33	鶴ヶ谷古墳群	46	水掛土古墳群B群	59	入道ヶ谷古墳
8	沼伏原古墳群	21	南原古墳	34	鶴ヶ谷南古墳群	47	水掛土古墳群C群	60	御馬ヶ谷古墳群
9	色尾原遺跡	22	岡田原Ⅲ遺跡	35	地蔵原遺跡	48	長軒屋遺跡	61	遠原古墳群
10	青木原遺跡	23	宮裏中原古墳群	36	沼伏神社遺跡	49	船山古墳		
11	尼沢遺跡	24	岡田原Ⅱ遺跡	37	松ノ木原遺跡	50	權現様御陣場		
12	宮上遺跡	25	竹林寺	38	沼伏古墳	51	御陣場古墳		
13	敬満神社経塚	26	向山遺跡	39	沼伏遺跡	52	作寺古墳		

第1表 遺跡一覧表

が整備されている。東には駿河国との国界の川でもある大井川が眼下に流れ、交通の要所を占めていた。現在までに伝世された諸記録にもこの地域の名が多く見られる。10世紀に成立した『後名類聚録』では秦原郡内に質倅・初倉・藤原・大江・細江・神戸・船木・勝田・相良の以上9つの郷名を上げ、初倉は「驛家」として記されている。驛家は「駅制」すなわち朝廷と地方との間を結ぶ緊急情報伝達システムに伴う施設で、往来する駅使の休息・宿泊及び駅馬の乗り継ぎが主な役割である。『延喜式』によれば遠江国内に猪鼻・栗原・引摩・横尾・初倉の以上5つの駅家があり、そしてそれぞれ駅馬が10頭配置されたという。初倉驛家は遠江国の東端の駅家であり、東側には駿河国との国境線でもある大井川、及び志太平野上に置かれた駿河国小川驛家（現在の焼津市小川付近）が遠望できる位置にあった。また当時橋山川と黒石川付近に本流が流れていたと推定される大井川下流部には渡船が置かれ、『類聚三代格』には4艘置かれていたと記述されている。この初倉驛家の位置については早い時期から論議の対象となっていたが、平成元年の12・宮上遺跡の県道島山吉田線建設に伴う調査で、「驛」と墨書きされた8世紀代の須恵器が出土したことから、「初倉驛家」が宮上遺跡を中心として1、中原遺跡、10、青木原遺跡等の敬満神社周辺に設けられたとする説があり、平成5年の青木原遺跡の調査では円面鏡・刀子が、平成6~7年の宮上遺跡の調査では白鳳~奈良時代の瓦・螺旋・釘等が出土し、初倉驛家の住人のための寺院が存在した可能性が報告されている。これらの遺跡の中心地に鎮座する敬満神社は『延喜式』によれば名大神に格付されている式内社である。一説によれば渡来氏族のひとつである「秦氏」の祖である秦始皇帝十二世の孫「功満王」を祀っていたとされる。『続日本紀』・『続日本後紀』には秦原郡に在住していた「赤柴長浜」「秦黒成女」等渡来系氏族出身の人々の名前が見られ、この地に渡来系氏族の移住を窺わせている。寺院跡として知られるのが25、竹林寺・庵寺跡、53、土屋敷寺院である。特に前者は藤原郡守の可能性もある。昭和50~54年にかけて齊藤忠氏を団長として調査が実施され、創建年代が奈良時代初頭で平安時代中期には廃絶したと思われる寺院伽藍の存在が明らかになった。塔基壇や金堂基壇、講堂基壇、掘立柱建物跡、そして寺院地と俗地を隔離する外郭溝や堅穴住居跡が確認された。遺物では瓦類、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦塔、陶瓶等が出土し、平安時代初頭に一度火災に遭っていることが判明した。またこの寺院に瓦を供給した28、南原瓦窯、31、六千ヶ谷瓦窯等がその存在を知られている。なお、この藤原郡と仏教との関連については、9世紀に成立したと推定されている日本最古の仏教説話集で景戒が著した『日本書異記』の中巻第十九、及び下巻第三十五に紹介されてい

る。中巻第三十九では大井川の河原で薬師仏が掘りだされ、株原郡鶴田里の住人らにより「鶴田堂」を建立したという説話が紹介されている。この鶴田里は実際は駿河国の部域にあたり、現在の島田市野田付近にある。当地には鶴田寺という寺院があり、寺院の縁起としても知られているが、この説話自体が天平寶字二（758）年、淳仁天皇の治世と伝えられている。説話自体が歴史的に事実を元に纏われたのか否か等の検証はともかく、大井川を望む位置に位置し螺旋を出土した宮上遺跡や、奈良時代に広智菩薩により開山されたと伝えられる天台宗智満寺、そしてこの説話の存在は、大井川流域における仏教信仰の浸透を示唆するものと理解される。平安時代後期になり当該地域を始め、金谷町をも含んだ一帯は賀信牧（賀信莊）の領域となる。この莊園は11世紀初頭に遠江守大江公資により獲得された私領として成立したとも推定され、長暦年間（1037～1040）に藤原道長の六男、民部卿藤原長家に寄進されている。その後、糺余曲折を経て大治3（1128）年に賀信牧を所有した文章博士藤原永範により円勝寺へ寄進された。当寺院は鳥羽天皇の女御で崇徳天皇、後白河天皇の生母となった待賢門院藤原璋子の御願寺であった。藤原永範によるこうした上級權門への莊園の寄進行為は、現在では国司による取扱を防ぐための措置だったとも考えられている。大治4（1129）年に賀信牧を事實上監督していた待賢門院府により遠江國へ立券手続きを命じられ、その際の文書である『遠江國賀信莊立券文案』には「初倉原貳百拾町」という記載がある。おそらく3、原ノ平遺跡～1、中原遺跡までの権現原、谷口原等の広大な平坦地がその「初倉原」に該当し、當時湯日郷の領域に含まれていた事を示している。該期の遺跡として湯日郷の領域内では平成3年度に島田市教育委員会により、平成7年度に県埋蔵文化財調査研究所が調査した丸山古窯が湯日谷の最奥部に位置している。後者の報告では12世紀前葉の山茶碗窯であったと報告されている。また26、向山遺跡では平成5年の調査で10世紀中葉、10世紀末～11世紀初頭の灰釉陶器の窯が検出されており、現在極めて注目されている。湯日川の南側の坂部原段丘に位置する島田市ミヨウガ原遺跡では静岡空港関連の調査が、県埋蔵文化財調査研究所により進められ、古代末の集落跡、祭祀遺構が検出されている。一帯は賀信莊と現在の株原町及び大井川町に至る範囲を有していた「初倉莊」との境界部付近にあたり、その遺構群の性格が注目されている。

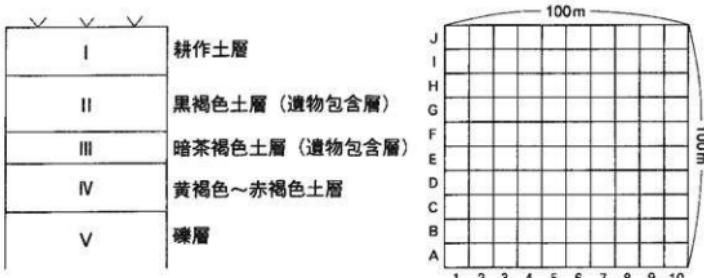
鎌倉時代では未だに円勝寺領賀信莊は存続していたが、源頼朝により地頭が派遣されている。大井川を挟んで現在の島田市街地には伊勢神宮の所領であった「大津御厨」が所在していた。その大津御厨と賀信莊との兼任で板垣三郎兼信が地頭に任命されていたが、年貢の横領の罪で文治5（1189）年に解任されるという事件がおきている。この一件以降賀信莊には地頭は置かれずいる。中原遺跡が位置する「初倉」の地名は『源平盛衰記』や『海道記』で「波津藏」「播豆藏」と紹介されている。これらの資料から鎌倉時代の初期までは当地には律令制の瓦解に伴い、駅制すなわち「驛家」・「驛路」は衰退して往時の姿は消え去ったとはいえ、交通路としての東海道がまだ依然として機能していたと推定される。しかし源頼朝により文治元（1185）年に「驛路之法」すなわち伊豆国～近江国まで上洛する使者に対して、権門莊園に馬・食料の供給を命じており、その頼朝本人が建久元（1190）年に後白河上皇・後鳥羽天皇に拝謁し、鎌倉への帰途の途中、駿河國島田宿で宿所をとっている。この島田宿は中原遺跡が位置する牧ノ原台地とは大井川の対岸の位置、すなわち現在の島田市市街地付近と推定される。よって当時すでに東海道が牧ノ原台地上を東進し、初倉を経由して大井川を渡河するコースだけではなく、元島田から片瀬・旗指・牛尾山等の山沿いのルートをとり、大井川を越えて対岸の新宿（金谷町）へ抜ける進むコースも存在していたと推定される。該期の遺跡としては1、中原遺跡、2、宮裏遺跡、10、青木原遺跡、12、宮上遺跡等が知られ、山茶碗の伴った構造遺構等を検出、区画性を有すると認識されている。また株原町坂口の曹洞宗石雲院付近では銅鏡を伴った骨蔵器が出土しているという。

## 第3章 調査の概要

### 第1節 基本的土層

前章で触れたように、中原遺跡・宮裏遺跡が位置する牧ノ原台地は大井川河川堆積物により構成されている。中原遺跡が位置する「牧ノ原疊層」、宮裏遺跡が位置する「色尾疊層」は共に、東遠地方の隆起活動の結果、丘陵化したものである。疊層より上位には黄褐色～赤褐色系の粘性を持つ土の堆積が認められるが、これらも疊層と同様、大井川河川堆積物に由来する。したがってこれらの層位には人間の活動した痕跡が見られることは考えられない。今回、報告する両遺跡とも同じ牧ノ原台地上に占地するとはいえ、中原遺跡の調査区（1区～7区）の総延長は約700mをはかり、さらに約450m先に宮裏遺跡が位置しており、若干の違いが観察される。また周囲が茶畠として利用されている中に、在来種からやぶ北茶への転換事業や、その後の茶樹自体の改植のため、重機により遺構面が搅乱されている箇所も見受けられる。よって当然存在してしかるべき層位が消滅していたり、耕作直下に遺構面が広がる調査区もあった。つまり調査区ごと違いが認められた。よって本報告では最も遺存状態が良かった中原遺跡6区北西端部付近で観察された土層を基準として、中原遺跡・宮裏遺跡の基本的土層を第4図左のI～V層のように模式化し、提示してみたい。

- I層 耕作土層：茶畠耕作に由来する土層。須恵器・山茶碗などの遺物が含まれ、この層上面、すなわち地表面でも表面採集できる。
- II層 黒褐色土層：所謂「黒ボク土」である。牧ノ原台地が開墾される以前に存在した広葉樹林に由来する。粘性はあまりない。遺物を含む。この土を覆土とする遺構もある。
- III層 暗茶褐色土層：粘性はあまりなく、遺物・カーボン粒・砂粒・小砾が少量含まれる。宮裏遺跡3区では比較的小砾が多く混じる2～3区北西端部、6区北西部、宮裏遺跡3区東半部ではこの層上面で、豊穴住居跡や柱穴などの遺構プランが確認された。搅乱で消滅した地区も多いが、上記の調査区の場合は下層のわずかな地形の落ち込みに、この暗茶褐色土が堆積していたものと思われる。中原遺跡北西端部、特に縄文土器が出士した付近では、さらに2つの層に細分できている。ところで島田市教育委員会による青木原遺跡や宮上遺跡の調査結果によれば、本来この層とIV層の間に暗赤灰色土層が堆積しているものと推定され、今回、当研究所で検出した遺構のいくつかに覆土として認められたが、調査した区域ではその堆積した状況を満足に確認



第4図 基本土層図・小グリッド図

することが出来なかった。しかし堅穴住居跡の中にはⅡ層を覆土とする例もあるので、暗赤灰色土が牧ノ原台地上に満遍なく堆積していたのではないであろう。

- IV層 黄褐色～赤褐色土層：粘性が強く、しまりも良い。小礫がわずかに混じる。下位に行くほど含まれる礫の大きさ、量が増えてくる。宮裏遺跡周辺では小礫の混じりが多い。多くの調査区でこの層上面で遺構プランを確認した。検出した遺構の覆土はⅡ・Ⅲ層等であり、極めて明瞭に遺構の有無を観察することが可能である。本来的に黄褐色土層の下位に赤褐色土層が観察されるが、本報告ではひとつの層にまとめて報告する。
- V層 積層：先述したように「牧ノ原疊層」「色尾疊層」の本体である。疊は挙大のものから直径30cmぐらいの大疊まで層状になって堆積しており、これらの疊の堆積状況に川の水流作用による複瓦構造（インブリケーション）が観察される。またマンガンが層状に薄く凝固して疊層の間に観察された。

## 第2節 調査・資料整理の方法

今回発掘調査を行った地区は全て茶畠として土地利用がなされていた。よって茶樹伐採、根の粉碎を行った後、重機（バックフォー）を使用して表土除去を行った。この際に生じた排土は県島田七木事務所の指示する地点へダンプカーにより運搬した。重機による表土除去を実施した後、作業員を投入して丁寧に確認面まで掘り下げている。手掘り排土はベルトコンベアを使用し、調査区外へ排出した。遺構は土壙帯等を設け、作業員により掘り下げを行い、必要があれば遺構内の土層堆積状況を図化している。遺構番号・遺物番号については年度によっては同時並行で調査を行った調査区もあったので、調査区毎に番号を付与している。遺物の取り上げはトータルステーションを使用して国土地標と高さを記録して取り上げている。調査員による現地での写真撮影は $6 \times 7$ （モノクロ）・35mm（カラー・モノクロ・リバーサル）等のカメラを使用している。現地平面図は㈱フジヤマに依頼して平面図（1/20・1/100・1/200）等をラジコンヘリコプターを使用した空中写真測量により作成した。その際には空中景観写真撮影も実施している。現地のグリッド杭は10mメッシュで国土地標に依拠し打設を依頼している。今回、調査を実施した中原遺跡・宮裏遺跡の調査区は北西から南西にかけて長大であるため、100×100mの大グリッドで遺跡付近を方眼区画（第5・100図）し、番号を付与した。さらに大グリッドを10×10m規模の小グリッド（第4図右）で方眼区画した。小グリッドは南から北へA～J、西から東へ1～10と番号を付与した。したがって各文章内におけるグリッドの表記は大グリッド番号一小グリッド番号（例：10-B 3）となっている。

資料整理は研究所本部で実施している。主な遺構図版については現地調査と並行して㈱フジヤマに依頼作成し、編集及びその他の遺構・遺物図版は研究所にて作成している。遺物のうち石器と土器の一部については実測・トレースを㈱フジヤマに依頼し、その他については研究所内で整埋・調査を行った。土器は破片資料が多いため、調査区・グリッド・遺構毎に分類し接合を行っている。接合できた土器については実測図（1/1）作成・写真撮影（ $6 \times 7$ ・ $4 \times 5$ ）を行っている。また復原が可能な上器については石膏等を充填する作業を行っている。金属器については研究所にてレントゲン撮影を行い、保存処理手順等を検討した上でクリーニング・図化・写真撮影を行っている。そして最後に保存処理を行い腐食等による劣化を防ぐ措置を講じている。

### 第3節 調査の経過

今回、報告する中原遺跡・宮裏遺跡は、平成9年度から平成12年度にかけて現地確認調査・本調査を行った成果によるもので、その整理作業は平成13年7月～平成14年3月まで行っている。これらの調査工程の概要を第2表にまとめてみた。

静岡県島田上木事務所からの依頼を受け、研究所が調査を開始したのは平成9年11月からである。作業員募集・関係機関との連絡・現地資材の手配等の準備工が終了し、作業員によるトレンチ掘削を開始したのは11月下旬であった。中原遺跡については起点（1-1区）側から1～11地点まで地区に分割し、そのうち2・3・5地点は年内に、8・9・10・11地点については年を改め平成10年1～2月にトレッヂによる確認調査を行った。対象となる地区全ての茶樹伐採が望ましかったが、地元の要望等もあり茶園の現状変更を最小限に留め、トレッヂ・排土置き場設定部のみの伐採を行った。調査の結果、2・3・5地点については本調査対象とした。

平成10年度は7月から開始した。前年度の結果を受け、2・3・5区を本調査、10地点及び高根森古墳群1・2・3地点の確認調査を実施することとなった。本調査2・3・5区は7月中に表土除去を開始し、10月には2区を、12月には3区、1月には5区が終了した。遺構の検出量が当初の予想を下回り、それを受けて作業量が減少する見込みになり、平成11年1月からは中原遺跡1・4区の本調査に着手。また高根森古墳群でも確認調査の結果を見て、一部（1・2区）本調査を行う事とした。その結果、1・2区では古墳の存在を確認できなかったことから、字名をつけ「宮裏遺跡」として報告した。なお中原遺跡1・2区については、本報告内で1-2区・2-3区と呼称を変更、報告している。

平成11年度は7月より調査を着手した。島田市教育委員会が調査した青木原遺跡F地区に隣接した区域（1区）から表土除去を開始し、2-A・B区まで表土除去を行い、調査を行った。その間、7・8・10地点の確認調査を行っている。10月中に中原遺跡については調査を終わらせ、11月には宮裏遺跡3区の調査を実施した。この年度に調査した中原遺跡1区、及び2-A・B区については1-1区、2-1・2区として呼称を改めている。また10月28日には中原遺跡の現地見学会を実施し、近隣住民の皆様等約40名に参加していただいた。

平成12年度は7月より調査を開始した。まず昨年度において確認調査を実施した6・7区を表土除去を行い、7区から調査を行った。その結果、予想以上に遺構が少ない上に、昨年度未買収のため確認調査が出来なかった7区の西半部～6区南東部にかけて茶園の改植による重機擾乱がひどく、遺構面が破壊されていた。そのため作業量が当初計画より減少する見込みとなり、計画では11月までとした現地調査期間を10月までとした。

平成13年度も7月から調査を開始し、また整理作業と同時に並行して、10地点、阪本地区の確認調査を行った。8月から平成14年3月まで研究所施設内での整理作業、報告書編集作業を実施した。

平成9年度

	11月	12月	1月	2月
準備工				
中原遺跡	2地点	—		
	3地点	—		
	5地点	—		
	8地点	—		
	9地点	—		
	10地点	—		
	11地点	—	—	
	撤収工			—

平成10年度

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
準備工	—								
中原遺跡	1-2区							—	
	2-3区	—							
	3区		—						
	4区							—	
	5区			—	—				
	10地点					—			
宮裏遺跡	1区						—		
	2区					—			
	撤収工								—

平成11年度

	7月	8月	9月	10月	11月	12月
準備工	—					
中原遺跡	1-1区	—				
	2-1区		—			
	2-2区		—			
	7地点		—			
	8地点		—			
	10地点		—			
宮裏遺跡	3区		—			
	撤収工				—	
	整理工					—

平成12年度

	7月	8月	9月	10月	11月
準備工	—				
中原遺跡	6区	—			
	7区	—			
	撤収工				—
	整理工				

平成13年度

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
準備工	—								
中原遺跡	10地点	—							
	撤収工	—							
中原遺跡	報告書								
宮裏遺跡	整理作業						—		

第2表 調査工程表

## 第4章 中原遺跡

### 第1節 概要

中原遺跡は静岡県島田市阪本字中原・下原・大土上に位置する。ここに設定した調査区は1~7区まである。その間、多少の断続はあるが北西端の1区から南東端の7区まで約700mをはかる。調査区の幅は最大約15m程度で、調査区によっては3mもない調査区も存在する。全体的に狭長で、調査中、特に手掘りの排土の処理は難渋している。遺構確認面の標高は1~1区端部で約80.8m、7区付近で約65.8mをはかり、比高差約15mである。南東方向に向かって緩やかに傾斜していくのが観察される。遺跡では概してIV面で遺構の検出を行っている。一帯は茶園として利用されており、それに起因する重機による土の攪拌が行われており、ほとんどの調査区の遺構面で重機のバケット痕、及び暗渠が見られる。よって確認面までの層位は擾乱層が多く、標準的な土層は判然としなかった。遺構・遺物は概して北西端、すなわち1区で古墳時代~奈良時代、平安時代末期~鎌倉時代の遺物が多く出土した。重機による表土除去中、及びその排土から山茶碗片が散見されたので、1~1区については手掘りで攪拌された層を10~20cm程度削除し、遺物の抽出に努めている。2区から南東へ調査区が展開するにしたがい、遺構の検出は散発的となり、堅穴住居跡はある程度のまとまりをもって検出されている。また山茶碗等の中世遺物を含む溝状遺構も検出されているが、積極的に該期の建物とおぼしき遺構は確認できなかつた。6区においては縄文土器の出土する箇所が確認されている。平面積合中に堅穴住居が確認できる層中に土器片が含まれるのを確認している。空中写真測量が全て終了した後に、トレンチを設定、遺物が認められた箇所を約88m<sup>2</sup>ほど拡張、掘り下げている。6区南東部から7区にかけては攪乱著しい状況であった。中原遺跡で検出できた遺構は堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構・土坑・柱穴で、古墳時代~鎌倉時代・江戸時代に位置づけられる。

### 第2節 検出遺構

#### 1~1区（第5・6図 写真図版3）

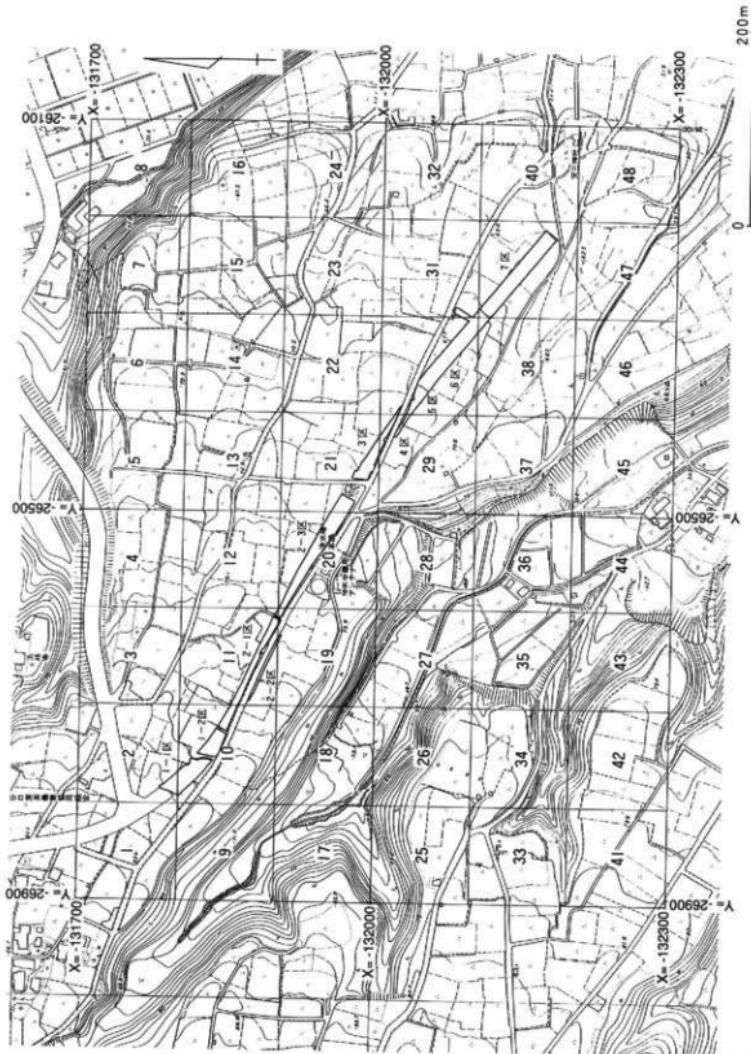
この調査区は今回の調査対象地でも北西端に位置する（第5図）。2-B2から10-G5の間に展開している。調査は平成11年度に実施している。実測面積は860m<sup>2</sup>をはかる。北側・東側の調査区境界に擾乱等が見受けられ対象外としたため、調査区のプランはややいびつになっている。西側は平成5年に島田市教育委員会が調査し、古墳時代から奈良時代にかけての集落域を確認した青木原遺跡F区にある。従ってこの調査区と青木原遺跡F区とまたがるように検出されうる遺構の存在も考えられた。奈良時代と推定される堅穴住居跡は2基、掘立柱建物跡が3基検出され、また平安時代末~鎌倉時代の区画性を有する溝状遺構を検出している。

#### 堅穴住居跡（SB）

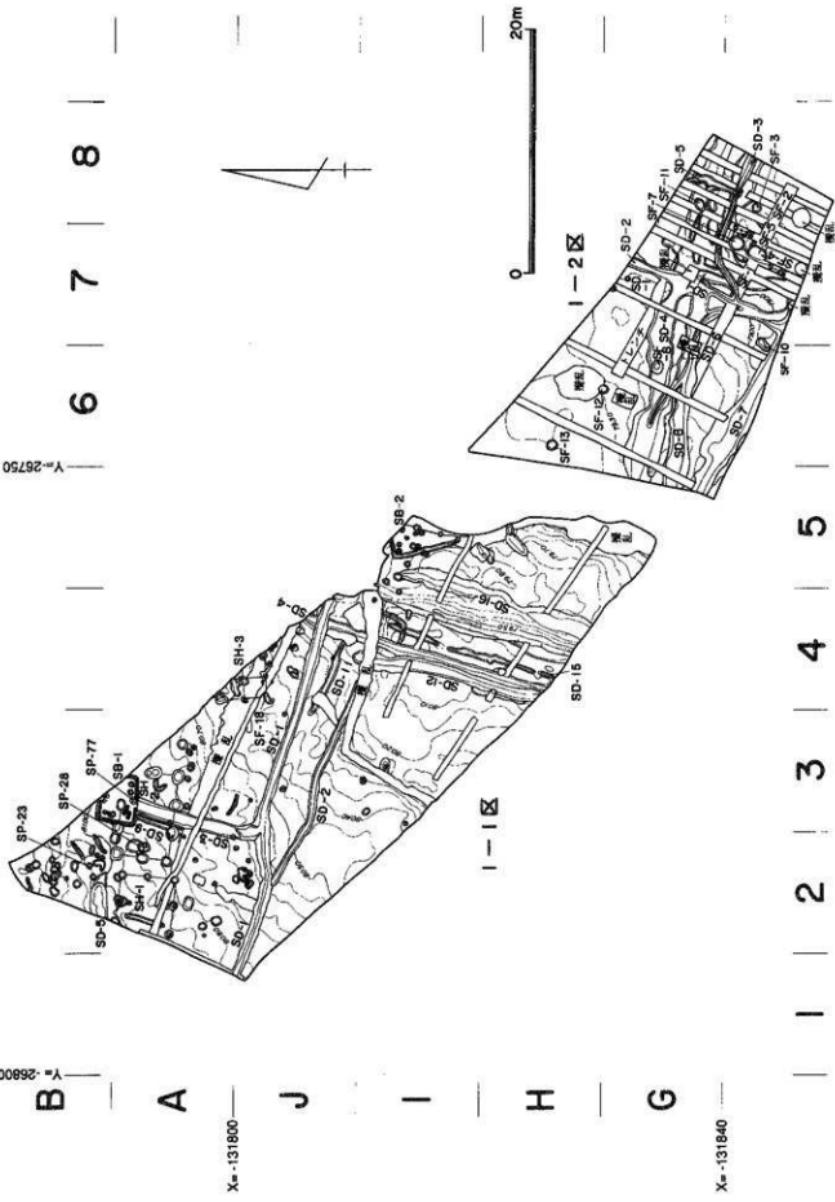
##### SB-1（第7図 写真図版3・4）

SB-1は2-B3・A3に位置する。平面形はややゆがんだ方形を呈し、規模は3.4×4.17mをはかる。住居の建物方向はN-6°-Eで、住居北東隅は調査区外にあり未調査である。床面は堅緻で、面積は約8.3m<sup>2</sup>で、未調査部を含めた場合、約10m<sup>2</sup>をはかると思われる。北壁中央部にカマドが検出された。袖部はかろうじて確認できた。床面には住居に伴うと推定されるビット（P）が10基確認でき

第5図 中原道路調査区・大グリッド位置図



第6図 1-1・2区平面図



た。主柱穴とおぼしきビットは判然としなかった。S P - 76・78はS H - 2に所属し、時期的に住居より古い。壁溝は南壁中央部、及びカマド付近で途切れている。断面形は方形である。P - 5とP - 8の間の床面上には遺物の散乱が見られた。住居の時期は出土した土器から8世紀前半と推定される。

#### S B - 2 (第8図 写真図版5)

S B - 2は10-I 5に位置する。調査区の北東隅に位置する。住居の約1/2は調査区外に広がるが、攪乱により破壊されている。住居の建物方向はN - 14.5° - Wである。P - 7付近には焼土の分布が見られカマドの存在を示している。住居に伴うビット (P) は11基ある。P - 5については、そのビットが位置する住居西壁付近の壁溝の幅が広がることから、住居に付属することが明らかである。遺物は覆土上中に須恵器細片が見られた。時期は建物の方向からS B - 1と同じ8世紀前半と推定される。

#### 掘立柱建物跡 (S H)

##### S H - 1 (第9図 写真図版3・5)

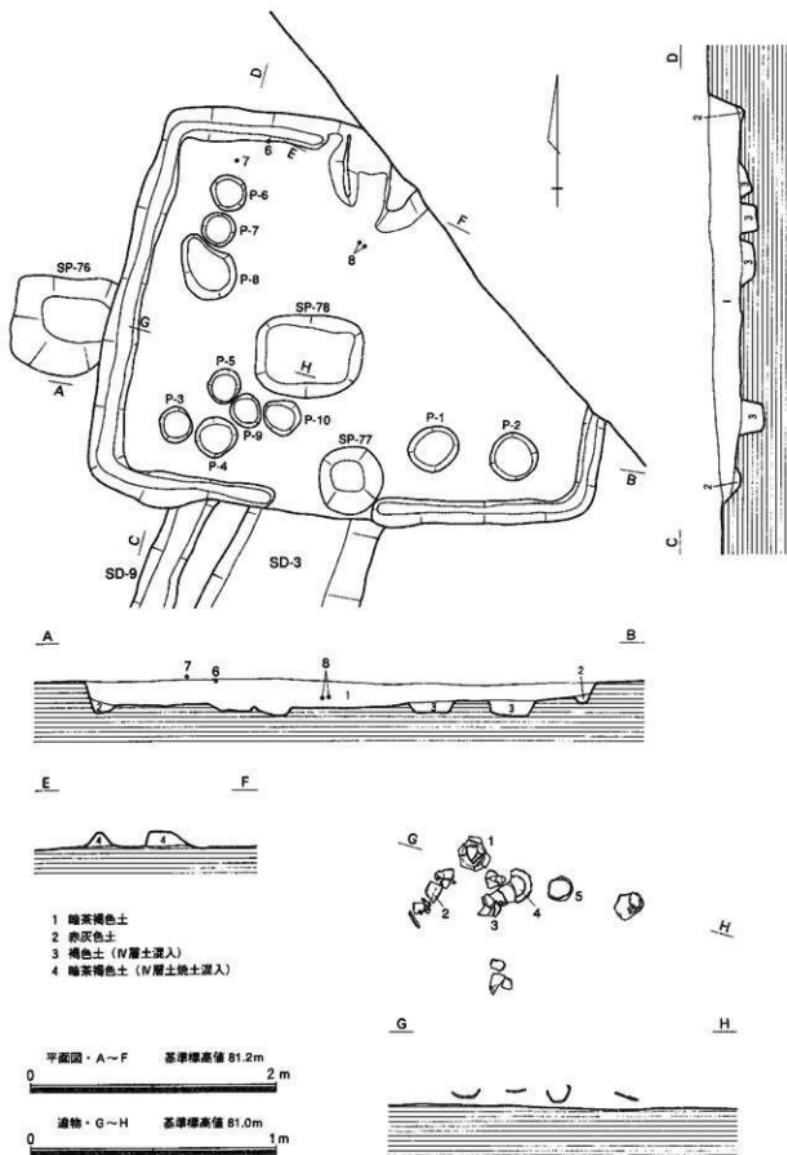
S H - 1は2-A 2、調査区西端際に位置する。建物方向はN - 8° - Eである。東西方向は2間分、南北方向は2間分検出した。検出状況から調査区外に建物跡が延びるものと思われた。しかし西側に隣接する青木原遺跡F区(平成5年島山市教育委員会調査)では該当する柱穴は残念ながら検出されていない。南面の柱穴距離はS P - 1・6間が2.46m、S P - 6・56間が2.04m、北面はS P - 75・S F - 1間は1.77m、S F - 1・S P - 91間は2.17mと全体的に数値のばらつきが大きい。東面の柱穴距離はS P - 56・8間が2.36m、S P - 8・9間が2.07mとばらつく。柱穴の深さは平均0.51mで、底面標高値は平均80.42mをはかる。柱穴の掘り方の平面形は円形を呈し、直径0.7m程度である。柱穴の覆土は暗褐色土でしまりは良く、カーボン粒を含む。S F - 1から須恵器細片、S P - 8では土師器壺細片が出土している。時期は建物方向から8世紀前半と推定される。

##### S H - 2 (第10図 写真図版3・6)

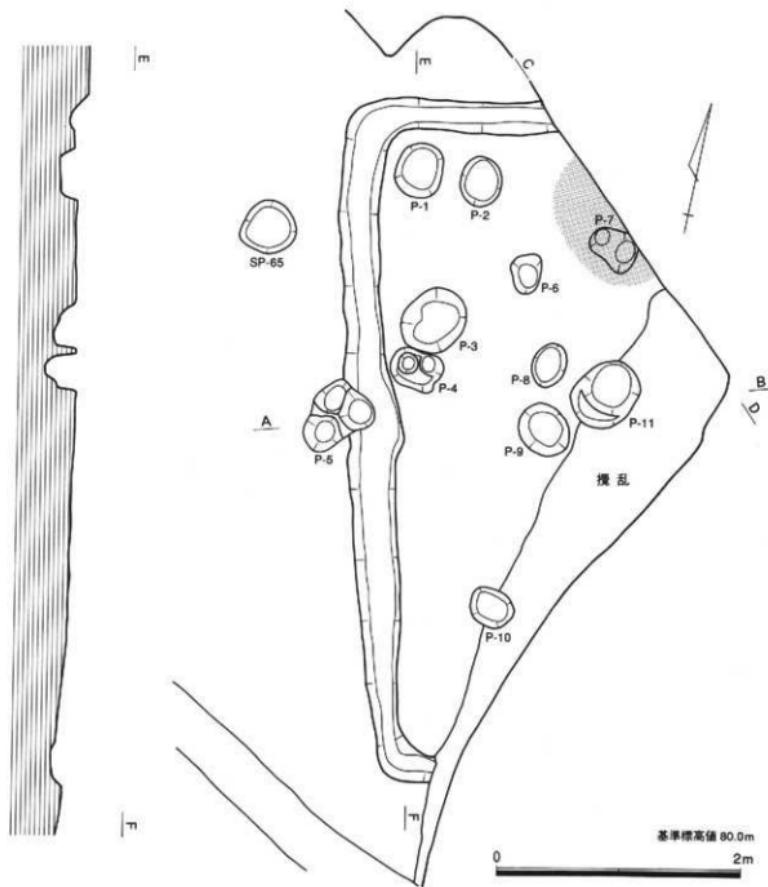
S H - 2は2-A 2・3に位置する。建物方向はN - 7° - Eで、S H - 1とはほぼ同じ方向をとる。東西方向は3間、南北方向は2間である。北東隅の柱穴は調査区外にある。南面の柱穴距離はばらつきが少なく平均2.3mであるが、北面は2.07mをはかり異なる。南北方向の柱穴距離は平均2.13mであまりばらつきは無い。柱穴の深さは平均0.6m程度で、底面標高値は平均80.27mをはかる。柱穴の掘り方の平面形は方形～楕円形で、最大幅1.3m、概ね1mである。この掘立柱建物跡の南側には庇を支えたと推定される柱穴が確認されている。S P - 30の南側は暗渠で破壊されているが、南側桁行柱の南側に各々1基づつ合計4基存在したと推定される。主柱穴と庇柱穴との距離は平均1.02mであるが、西に向かって僅かに広がる。柱穴の覆土は褐色～暗褐色土である。しまりはきわめて良く、カーボン粒を含む。遺構の時期的な前後関係はS H - 2が建立された後にS B - 1が建てられたものと思われる。S P - 26～28はS H - 2より後出する遺構である。S F - 8からは土師器壺細片、S F - 14・S P - 30からは須恵器細片が出土している。時期は8世紀前半と推定される。しかしS H - 1やS B - 1とは時期差があると推定される。

##### S H - 3 (第11図)

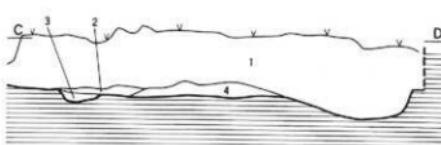
S H - 3は2-A 4、10-J 4に位置する。本遺構は調査時は攪乱等で掘立柱建物跡として識別出来なかった。建物方向はN - 5° - Wで絶対建物跡と推定される。東西方向2間分、南北方向2間分を検出した。建物の大半は調査区外であるが、柱穴の様子から南北方向へは2間以上は延びないものと思



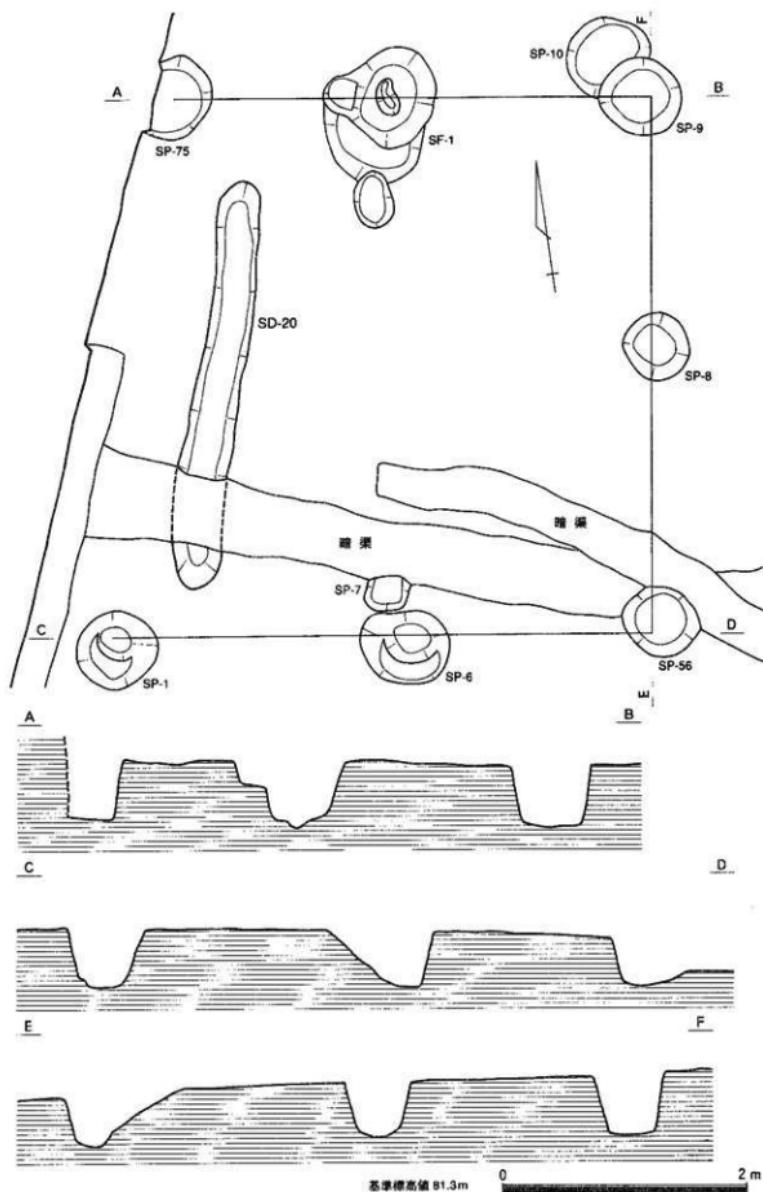
第7図 1-1区SB-1



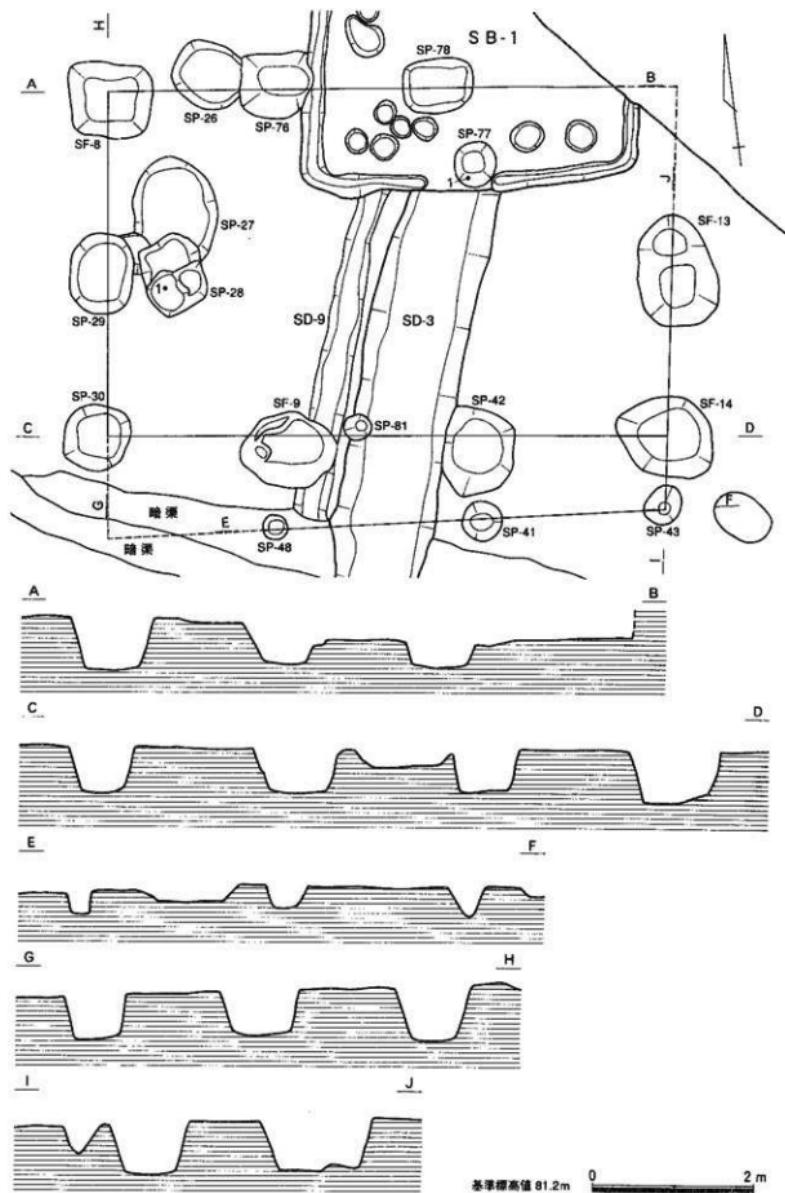
- 1 耕作土  
 2 黒褐色土層  
 3 棕色土  
 4 黄褐色土混じり焼土

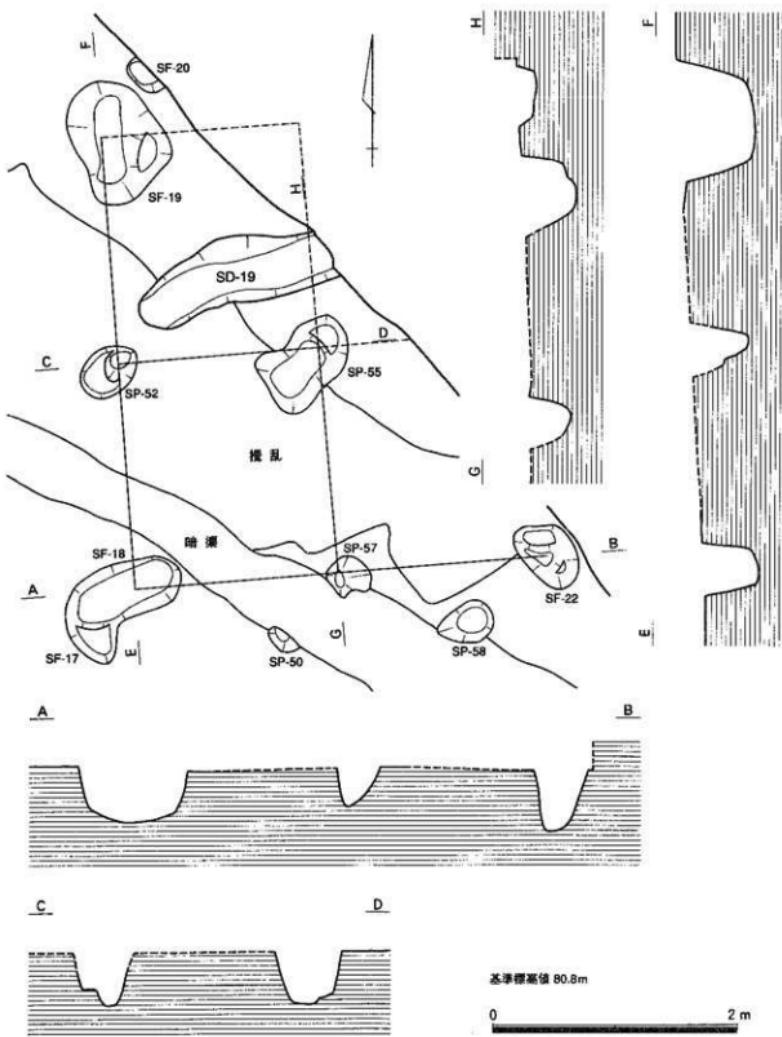


第8図 1-1区SB-2



第9図 1-1区SH-1





われる。南面の柱穴距離は平均1.7m、西面は1.87mをはかる。柱穴は整然と配置されている。各柱穴の深さは平均0.47mで底面標高値は平均80mである。柱穴の掘り方の平面形は不定形であるが、隅柱は長梢円形である。柱穴の覆土は暗褐色土である。しまりはきわめて良く、S F - 18・19、S P - 55には柱材の痕跡が見られた。S F - 18・19の底部には平石が存在した。遺構の時期的な前後関係はS H - 3よりもS F - 17は後出する。遺物としてS F - 18・19・52・55より須恵器細片が、S F - 22より土師器壺細片が出土している。時期は建物方向から8世紀前半と推定される。

#### 溝状遺構（SD）

##### SD-1 (第12図 写真図版6・7・8)

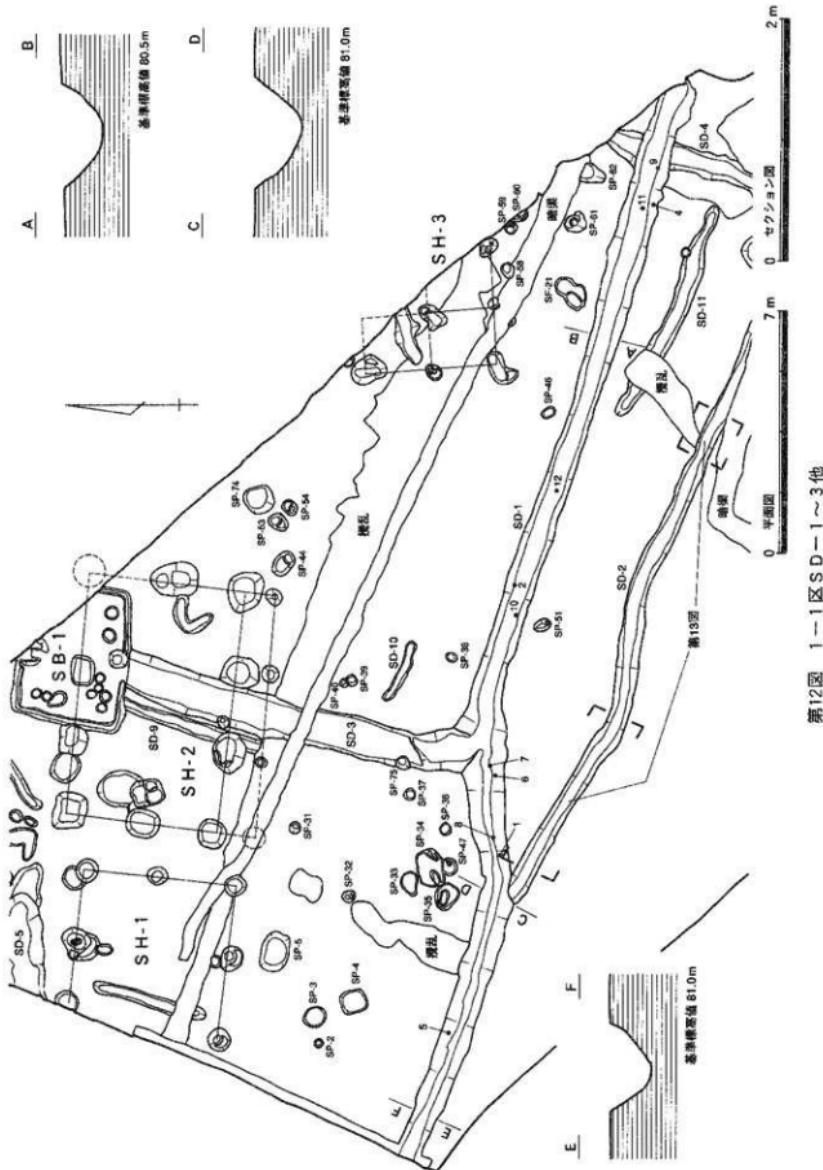
SD-1は10-J 1~4に位置する。調査区西端から東端へ2箇所で屈折しながら延びる状況が検出された。断面形は逆台形～V字形を呈する。調査区西端から8.5m付近まではE-18°-Sの方向へ延び、深さは平均0.3mをはかる。8.5mから13.8mの間は方向をE-4°-Nに転換し、この区間はSD-3との分岐点があり、深さが約0.4mと深く掘られている。13.8mの地点からはE-17°-Sへと方向を変えている。深さは約0.2m程度で浅くなる。この溝状遺構の底面の最高・最低標高値は80.45m・79.84m、傾斜角は1.5°でほとんど水平である。SD-3との分岐点付近が周囲の溝底面よりも深く掘り進められている点もあり、排水溝と考えるより区画溝であろう。溝内部、特にSD-3との分岐点付近に2層中位から下位にかけて直径10cm程度の礫が投棄された状態で検出された。遺物は山茶碗・須恵器等が出土している。所属時期は12世紀後葉以降と思われる。

##### SD-2 (第12・13図 写真図版7・8)

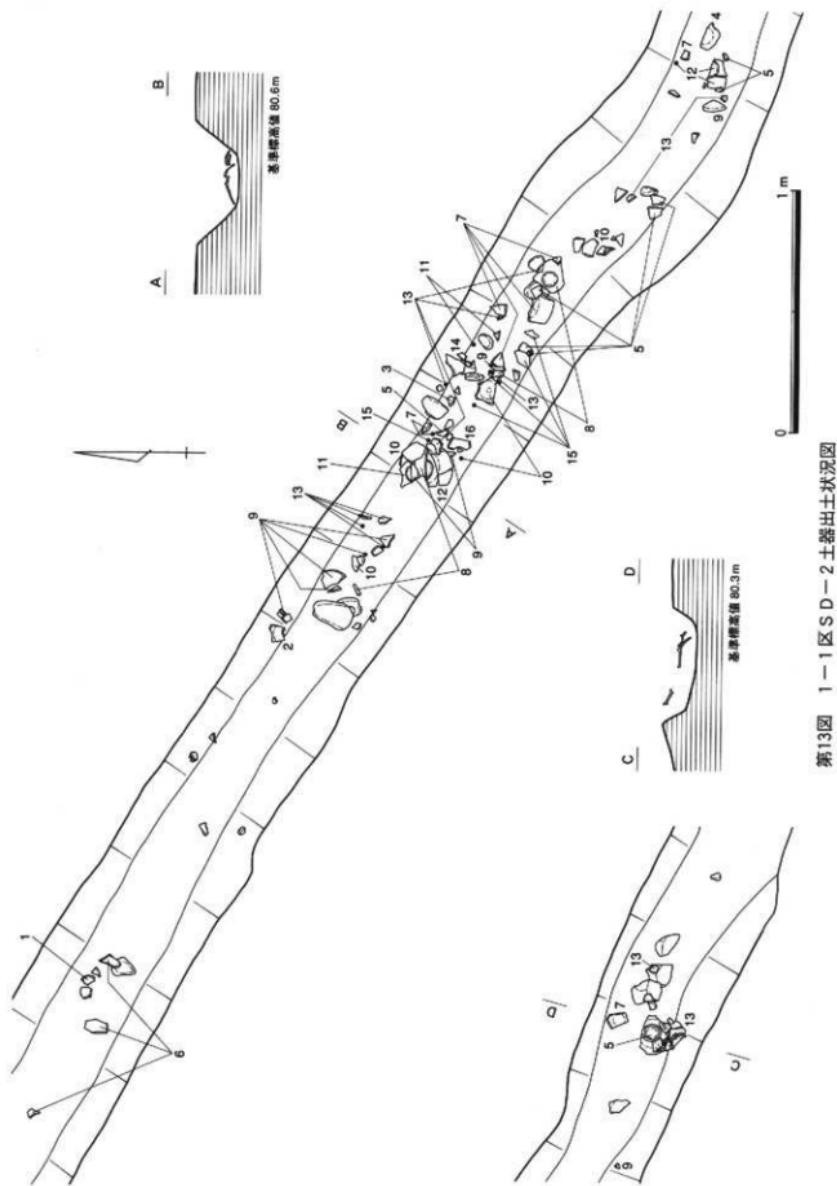
SD-2は10-J 2~4、調査区のほぼ中央に位置する。西端はSD-1と交わり、途中で2箇所で屈折しながら延び、東端は擾乱により消滅している。断面形は深い逆台形を呈する。この溝に直交するようにSD-12が北に延びており、本来はSD-2と12は同一の溝状遺構で、擾乱で破壊された部分がコーナー状に屈曲していた可能性も捨てきれない。SD-1との分岐点から6m付近まではE-31°-Sの方向へ延び、深さは平均0.17mをはかる。この区域には山茶碗がまとまって投棄された状態で出土している。6m付近から9.6m付近まではE-8°-Sの方向へ向きを変え、深さも0.14mと浅くなる。9.6m付近から17.7m付近まではE-25°-Sの方向へ延びる。深さも0.11mとかなり浅い。溝の西端底面の標高値と東端標高値は80.46m、80.09mではほぼ水平である。SD-1と同様、区画機能を主とした遺構と思われる。しかし両溝状遺構ともに屈折して東に延びる状況は同じであり、その2箇所の屈折部に何らかの意味・機能が存在した可能性がある。所属時期は出土した山茶碗から12世紀後葉と推定される。

##### SD-3・SD-9 (第14図 写真図版7・8)

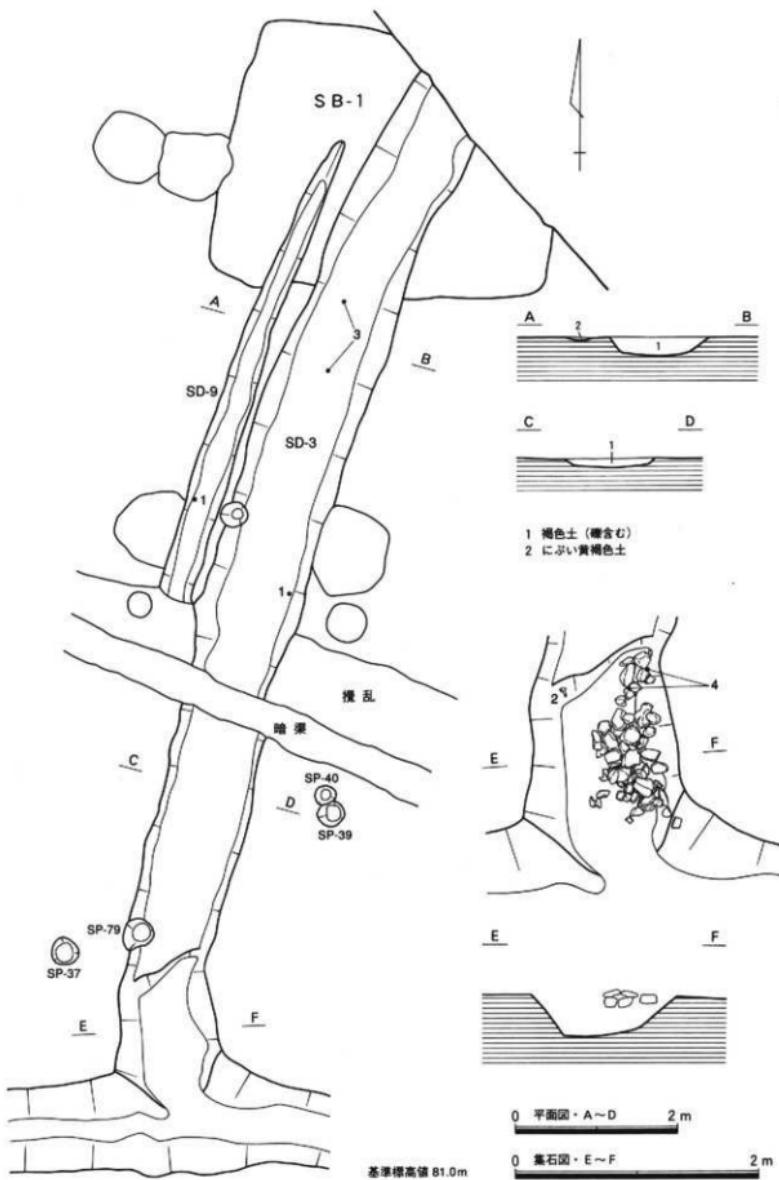
SD-3は10-J 2・3、2-A 2・3に位置する。SD-9は2-A 3・B 3に位置し、SD-3の西側を沿うように延びている。両遺構は2-A 3付近で茶畑の暗渠により破壊されており、暗渠から南ではSD-9は検出されていない。両遺構とも断面形は深い逆台形を呈している。SD-3の南端はSD-1と接している。このSD-1・SD-3との分岐点から段を有する1.7m付近はN-7°-Wの方向へ向き、深さも約0.4mと深く掘削されている。1.7m付近から調査区北壁まではN-16°-Eとやや東よりも向きを変えている。深さも0.16m程度である。この遺構の底面最高標高値と最低標高値は80.63m、80.50mをはかる。南へ約1°傾斜し、ほぼ水平と言える。SD-9もSD-3と並行し、延びる方向もN-16°-Eで、SD-3と同じである。深さは0.04mと浅い。SD-3とSD-1との分



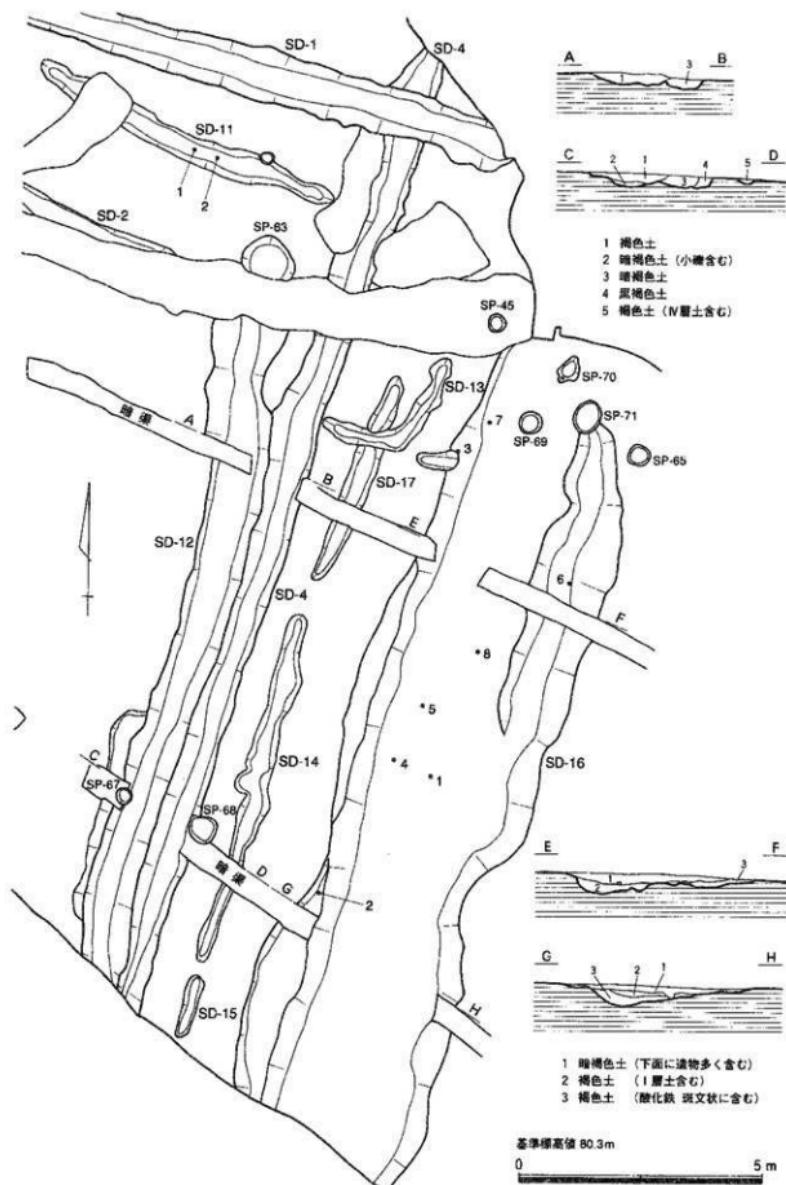
第12図 1-1区SD-1~3他



第13図 1-1区SD-2土器出土状況図



第14図 1-1区 SD-3・9



第15図 1-1区 SD-4・11~17

岐点には直径15cm前後の礫が投棄された状態が確認された。SD-3からは須恵器等が出土している。所属時期はSD-1と接続している点から12世紀後葉以降と推定される。

#### SD-4・SD-12（第15図 写真図版9）

SD-4は10-H4・I4・J4に位置する。調査区南壁から北壁まで直線的に延びる遺構である。SD-12は10-H4・I4に位置し、SD-4と同様、直線的に延びる。両遺構とも10-I4北縁部において茶畑の暗渠により一部破壊されている。そのため西から東に向かって延びるSD-2とSD-12との関係は判然としないが、継続する溝状遺構であった可能性も考えることができる。SD-4はN-17°-Eの方向へ延び、SD-1とはほぼ直交する。深さは平均0.17mをはかる。SD-4の床面はほぼ水平で、北壁付近の標高値と南壁付近の標高値は80.00m、79.85mをはかり、南に1.5°の傾斜を持つ。SD-12はSD-4よりもやや北よりの方向、N-13.5°-Eへ延びる。深さは平均0.22mをはかる。北端と南端の底面標高値は79.89m、79.77mでほとんど水平に近い。SD-4・12はその土層堆積状況から、SD-4が埋没した後、SD-12がやや西よりに掘削されたもので、両者の性格は同一であったことを想像させる。SD-1とSD-4との前後関係は判然としなかったが、SD-1がSD-4と比較し、深く掘削されている状況が観察される。遺物は輸入陶磁器・山茶碗・須恵器等、両遺構とも多数出土している。所属時期は12世紀後葉以降と推定される。

#### SD-11（第15図）

SD-11は10-J4に位置する。北側にSD-1、南側にSD-2が位置する。方向はSD-2と同方向であるE-25°-Sへ並行して延びる。深さは最大0.08mと浅い。同様に深い溝状遺構であるSD-14・15・17との関係も想起される。西端の底面標高値は80.27m、東端は80.09mをはかる。深さは平均0.05mで極めて浅い。覆土は暗褐色土で、遺物は輸入陶磁器・須恵器等が出土している。所属時期は12世紀後葉以降と推定される。

#### SD-14・15・17（第15図）

SD-14・15・17は10-H4・I4に位置し、遺構の西側にSD-4・12、東側にSD-16がほぼ同一方向に延びる。この3条の溝状遺構は本来同じ1条の溝状遺構であったと思われる。SD-14・15の方角はN-15°-E、SD-17はN-22°-Eでやや東に傾く。SD-17の延長線上にはSD-11の延長線が直交する。深さは最大深度0.1mをはかる。覆土は3条の遺構とも暗褐色土で、SD-11と同一である。遺構内から山茶碗・須恵器が出土している。所属時期は12世紀後葉以降と推定される。

#### SD-16（第15図 写真図版9）

SD-16は10-H4・I4・I5に位置している。方向はN-21°-Eである。最大幅は4.2m、最大深度は0.5mをはかる。この溝状遺構の北東端部付近は茶畑耕作の影響が強く、プランが判然としなかった。調査時は1条の溝と思われた。しかし掘削及び土層観察の結果、褐色土を覆土となす溝状遺構と、やや方向を北に向けた1・2層を覆土となす溝状遺構の計2条の遺構である可能性が出てきた。北端の底面標高値は79.7m、南端は79.44mをはかる。遺物は1層の下位から2層上面にかけて砾と共に出土している。輸入陶磁器をはじめ、山茶碗・須恵器等が出土している。所属時期は出土した輸入陶磁器・山茶碗の時期から12世紀後葉以降と推定される。

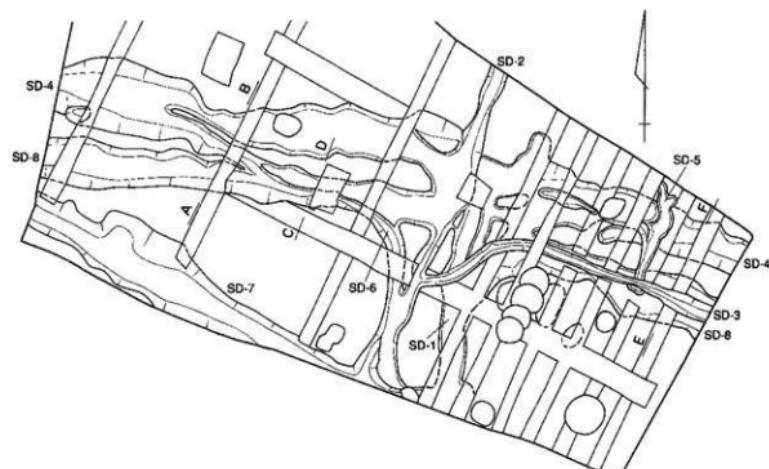
### 1-2区（第6図 写真図版11）

1-2区は10-G5から10-F8の間に展開した調査区である。調査は平成10年度に実施している。実掘面積は435m<sup>2</sup>をはかる。調査区の長さは約33m、幅は11~20m程度である。本調査区は1-1区とは検出遺構の様相が大きく異なる。調査区全面に溝状遺構が縱横無尽に延びるのが検出されている。ただし茶畠の暗渠・擾乱により破壊を受け、これら溝状遺構の位置の把握・重複関係等確認といった作業が極めて困難であった。この報告では確認した8条の溝状遺構を中心に述べてみたい。

#### 溝状遺構（SD）

##### SD-1~8（第16図 写真図版11）

これらの溝状遺構は時期差が存在したものと思われるが、前述したように、その重複関係は判然としない点が多い。また1-1区と異なり、出土遺物の少なさも起因してこれらの溝状遺構についての位置づけを困難にしている。SD-1は調査区南壁から北に向かって延び、東から延びるSD-3と合流する。深さは0.1m程度で、断面は浅い台形を呈する。SD-2は調査区南壁付近でSD-7と合流し、北へ向かって直線的に延び、調査区外に続く。深さは0.1m程度で、断面は浅い台形を呈し、調査区北壁付近では断面が浅い皿状に呈する。調査区中央部でSD-3・4・6・8と交差する。東・西側から蛇行して合流するSD-3・6とはその検出状況から同時期となる可能性がある。SD-3は調査区東壁から直線的に延び、10-F7付近で南南西の方向へ曲がり、SD-2と合流する。溝の掘り方は二段で、調査区東壁付近では深さ0.1m程度で断面が浅い皿状に掘り込み、さらに中央部で断面がU字形で深さ0.3mに掘り込んで溝をしている。しかしSD-2との合流部では上段部は検出されていない。SD-4は調査区東壁から西壁にかけて延びる溝状遺構である。SD-2・5と交差し、10-G6中央部付近でSD-6と合流する。調査区東壁付近では断面は浅い皿形を呈しており、深さは0.1mである。幅は1.5m程度であるがSD-6と合流する地点では0.5m程度にすぼまる。SD-5は長さは4.5m、幅0.6mをはかる。10-H・G8に位置し、SD-3・4・8と重複している。深さは0.2m程度で、断面はU字形を呈する。底面には小礫が敷き詰められた状況で検出されており、道状遺構の可能性を有する。時期的にはSD-3・4・8よりも新しいと思われる。SD-6は前述したSD-4と分岐し、東へ直線的に延びるが、すぐに南へ曲がりSD-2と合流する。幅は0.7m程度で、深さは0.2mで、SD-8との交差点では幅広いU字形を呈しているが、SD-2との合流点では深さ0.1mで断面はU字形へと変化する。SD-7は調査区南壁沿いで検出された溝状遺構である。南壁中央部から調査区南西隅部へ延びる。最大幅は2.5mで、長さは15mである。SD-2を削平している点や、覆土にしまりが無い点、付近で近世陶磁器が出土している点から時期的にもかなり新しい溝状遺構かもしれない。SD-8は調査区東壁から西壁に向かって直線的に延びる。幅は1.3m程度で、深さは0.2m程度である。断面は浅い皿状を呈しており、埋没後のSD-3を削平し、SD-1・2と交差する。時期差は不明である。以上、SD-1~8の所属時期は1-1区で検出した溝状遺構との関連や、出土遺物の時期から13世紀以降と推定される。



A 79.5m

B



C 79.3m

D



E 79.0m

F



- 1 にぶい黄褐色土（カーボン粒含む）
- 2 黄色土（カーボン粒・焼土粒・砂含む）
- 3 暗褐色土（カーボン粒・焼土粒・砂含む）
- 4 にぶい黄褐色土（カーボン粒を多く含む）
- 5 褐色土
- 6 暗褐色土（カーボン粒含む）

平面図 0 10m

セクション図・エレベーション図 0 2m

第16図 1-2区 S D

## 2-1区（第17図 写真図版12）

2-1区は10-F 8から19-J 9の間に展開した調査区である。調査は平成11年度に実施している。実掘面積は828m<sup>2</sup>をはかる。調査区の長さは124m、幅は4~10m程度で狭長な調査区である。本調査区は茶畠耕作の影響は既して少なかったが、10-F 8・9及び11-A 8・9付近は改植時に使用された重機による激しい攪乱が認められた。公道を挟んで南側には2-2区が展開している。なお2-1区は調査時は2-A区としていたが、編集時に変更している。この調査で古墳時代から奈良時代の堅穴住居跡5基、掘立柱建物跡4基、平安時代末期以降の区画性を有すると思われる溝状造構等が検出されている。

## 堅穴住居跡（SB）

### SB-1（第18図 写真図版13）

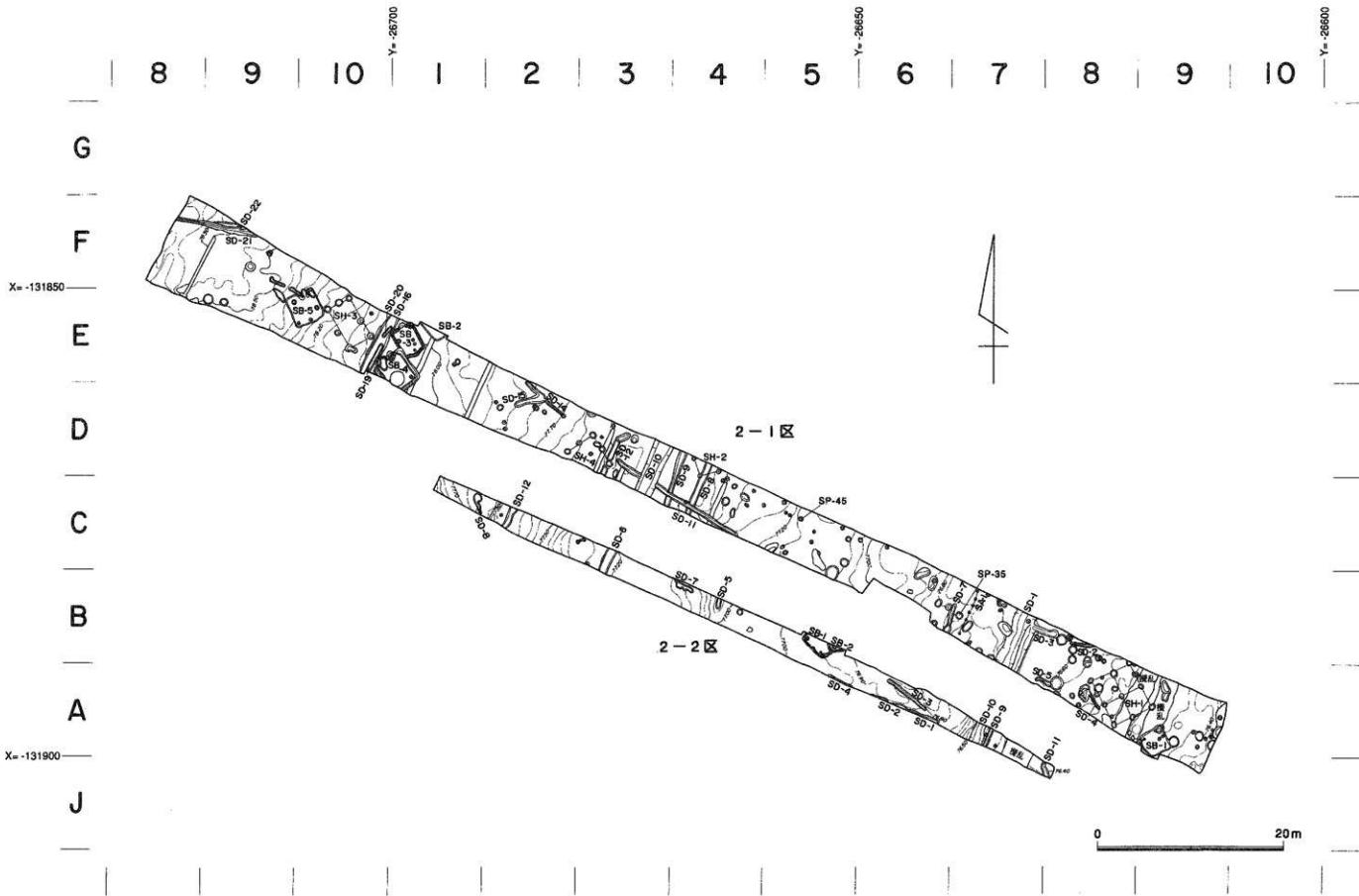
SB-1は11-A 9に位置する。平面形は方形を呈し、規模は2.72×2.78mをはかる。そのため正方形に近い形状をなす。住居の建物方向はN-31°-Wである。周囲は茶畠改植の際に重機による攪乱を受けており、SB-1も一部攪乱を受けている。SF-3により南東隅部を破壊されているが、住居跡全体を検出する事が出来た。床面はあまり堅緻ではなく、地山中に含まれる礫が露出していた。貼床は検出出来なかったため、本来は貼床とは別のものを床に敷設していたのかもしれない。床面積は6.3m<sup>2</sup>をはかる。焼構は認められなかった。カマドは北東隅部に1基確認した。袖部等は検出できなかった。南西隅部には焼土を中心とした土の堆積が見られた。当初、SB-1のカマドと考えられたが、カマド構築土と思われる4層の下位にSB-1の覆土である7層が延びており、SB-1とは別の造構により遺物包含層でもある9層（Ⅲ層上）が切られている状況等が確認された。よってSB-1が埋没した後にSB-1の南西側に別の堅穴住居が作られたものと推定される。残念ながらその住居は調査区外に延びており、その位置から調査区に面する公道により破壊されているものと思われる。SB-1の床面で住居に伴うと推定されるピット（P）が4基検出した。遺物は灰釉陶器・土師器壺等が出土している。大部分がカマド付近で出土している。時期は9世紀末~10世紀初頭と推定される。

### SB-2（第18図 写真図版13）

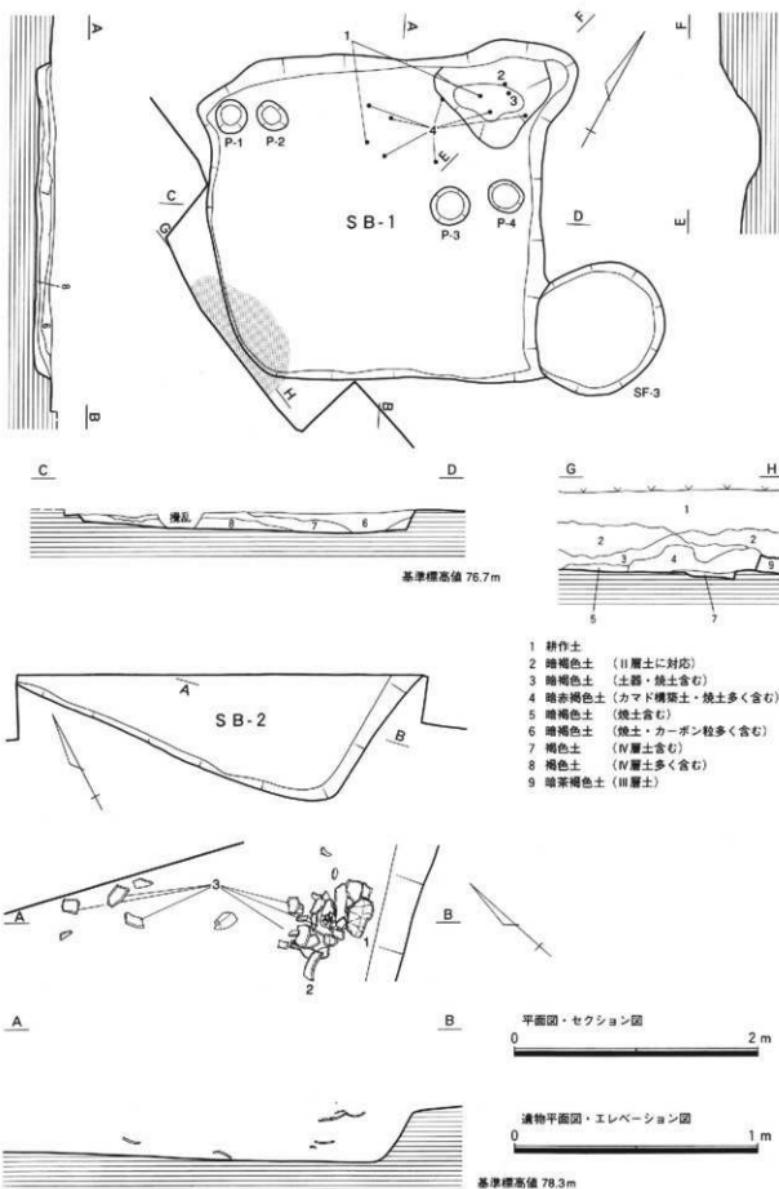
SB-2は11-E 1に位置する。調査区北側で検出され、おそらく面積の2/3は調査区外に延びているものと思われる。建物方向はN-39°-Wと思われる。覆土は暗褐色上である。周囲は確認面であるⅣ層上面まで茶畠耕作の影響が及んでいたが、覆土上位に僅かであるがⅢ層の流入が認められた。床面はあまり堅緻ではなく、壁溝も認められなかった。また床面には柱穴も確認することが出来なかった。遺物は土師器壺等が出土している。床面上で出土した土器と覆土上位で出土した土器に時期差があると思われる。床面上の遺物の中に駆逐壺が含まれる。時期は8世紀代と推定される。

### SB-3（第19図 写真図版14）

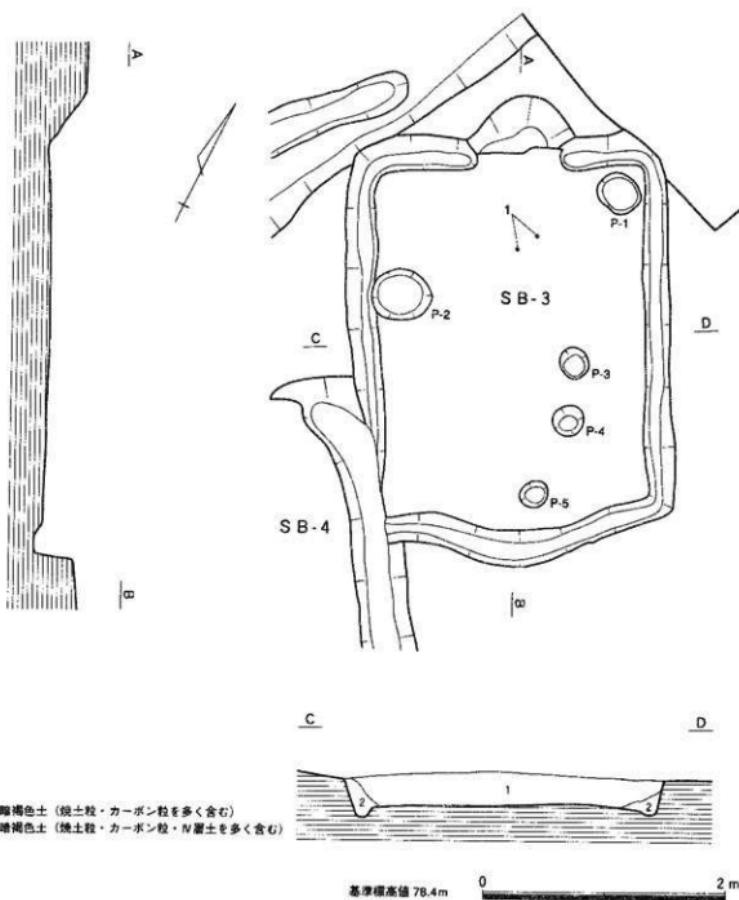
SB-3は11-E 1に位置する。平面形は長方形で、南壁中央部は膨らみを有する。規模は2.64×3.61mをはかる。住居の建物方向はN-29°-Wである。住居南西隅部がSB-4により破壊されているがほぼその全体を検出できた。床面は堅緻で、床面積は6.4m<sup>2</sup>をはかる。北壁中央部にカマドを検出した。しかし袖部および焼土等を含んだカマド構築土は確認出来なかった。床面には住居に伴う推定されるピット（P）が5基確認したがどれも浅く、主柱穴とおぼしきピットは確認出来なかった。P-5については膨らみを有する住居南壁中央部に近く、昇降施設に伴うピットであった可能性がある。壁溝はカマド付近で途切れてはいるがほぼ全周する。遺物は須恵器壺・土師器壺が出土しているが、細品で



第17図 2-1・2区平面図



第18図 2-1区SB-1・2

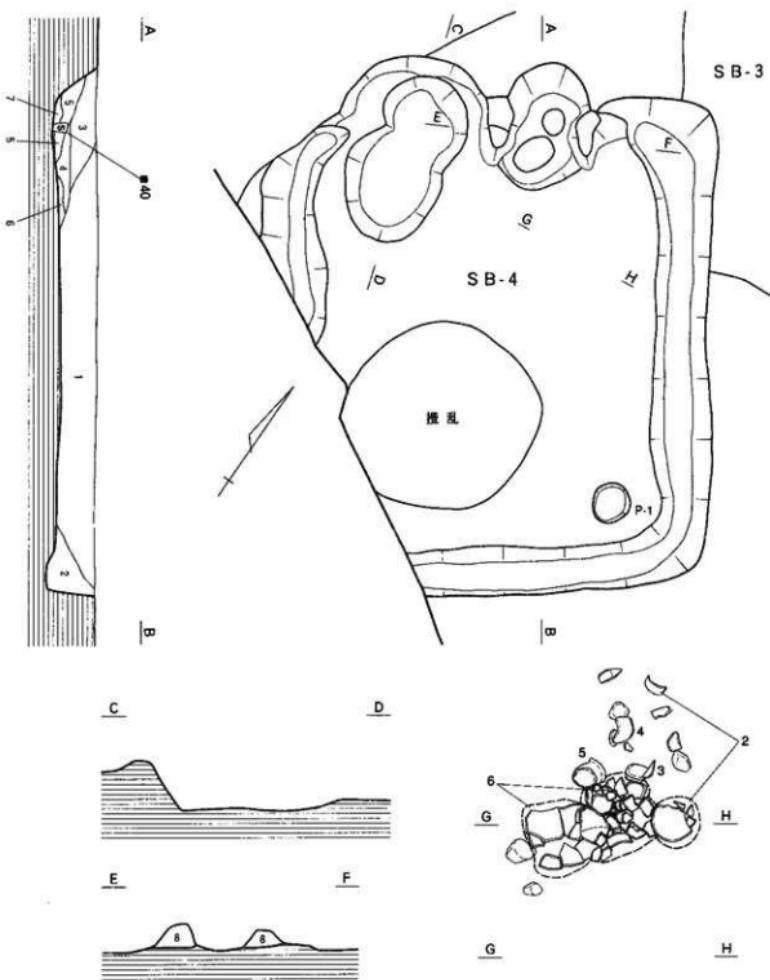


第19図 2-1区SB-3

且つ少量であった。住居の時期は出土した土器及び重複するSB-4の時期から勘案して、8世紀代と推定される。

#### SB-4 (第20図 写真図版14)

SB-4は10-E10、11-E1・D1に位置する。平面形は方形を呈し、規模は3.72×4.13mをかる。住居の建物方向はN-34°-Wである。住居の北西隅部はSD-20により、住居中央部からやや南西よりの位置は現代の擾乱により破壊されている。南西隅部は調査区外にあり未検出である。床面は堅緻で、面積は本来、9.0m<sup>2</sup>程度の広さを有していたものと推定される。住居北壁にはカマドが2基検出されている。東側のカマドにはIV層土である黄褐色土を混ぜた袖部が辛うじて検出された。カマド中



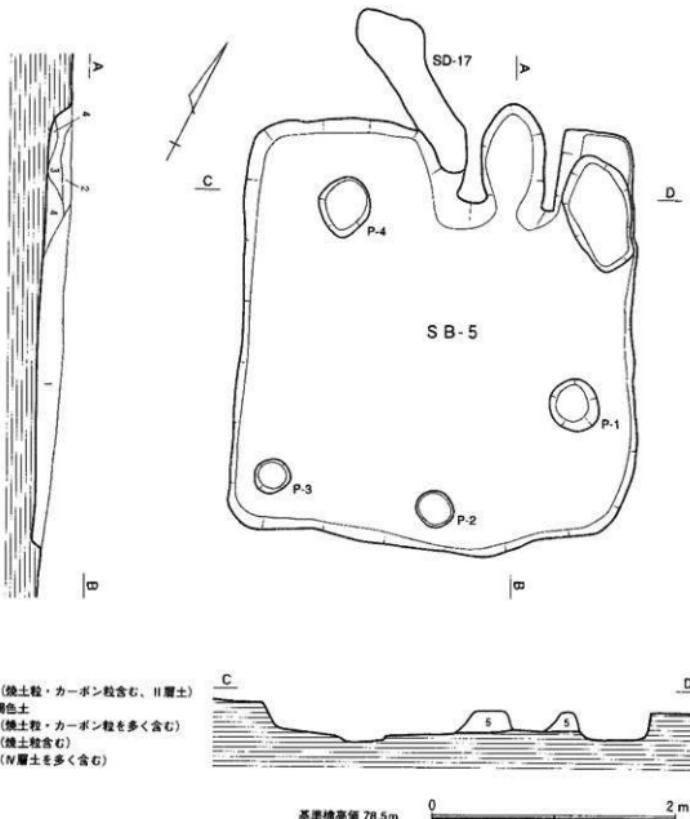
- 1 黒褐色土（カーボン粒・鉱土粒を多く含む）
- 2 始褐色土（IV層土含む）
- 3 略褐色土
- 4 にかい黄褐色土
- 5 棕色土（焼土ブロック・カーボン粒を多く含む）
- 6 略褐色土（カーボン粒・小礫を多く含む）
- 7 黄褐色土（IV層土）
- 8 黄褐色土（黒褐色土を多く含む、IV層土）

基準標高値 A～F 78.4m  
G～H 78.0m

遺物平面図・エレベーション図  
0 1 m

平面図・セクション図  
0 2 m

第20図 2-1区SB-4



第21図 2-1区 SB-5

央部では砂岩礫が出土し、その出土状況及び礫表面の被熱状況から支脚として使用されたものと推定された。西側のカマドは東側のカマド以前に使用されたカマドであり、住居廃棄時にはカマド構築土は既に無かったものと思われる。掘り方のみの検出であり、貼床を行った状況は確認されなかった。よって土坑として機能していた可能性、貯蔵穴としての利用法も想起される。住居床面にはピット(P)が1基検出されたのみであり、主柱穴とおぼしきピットは検出されなかった。壁溝は幅平均0.4m程度をはかる広い溝で、カマド付近を除きほぼ全周するものと思われる。断面形は浅い方形状を呈する。遺物は板土中、及び床面付近で出土している。特にカマド1の南東側の床面上に須恵器蓋・甕、土師器台付甕等の遺物が出土している。住居の時期は出土した土器から勘案して8世紀代と推定される。

#### SB-5 (第21図 写真図版15)

SB-5は10-E 9・10に位置する。平面形はほぼ正方形を呈するが、SB-3と同様、住居南壁

中央部に僅かだが膨らみを持つ。規模は $3.32 \times 3.56$ mをはかる。住居の建物方向はN-24°-Wである。カマド付近を一部、SD-17により破壊されている以外は、遺存状態が良好である。床面は堅微で、床面積は $9.3\text{m}^2$ をはかる。北壁中央部からやや東寄りの位置にカマドを1基確認した。カマドには袖部を辛うじて検出した。構築土中にIV層土を混ぜているようである。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)を4基検出した。P-2については膨らみを有する住居南壁中央部付近に位置することから、昇降施設に伴うピットであった可能性がある。カマドの東側には浅い土坑状の掘り込みが確認された。機能として貯蔵穴である可能性も想起されるが、やや浅い感もある。壁溝は全く検出されていない。遺物は覆土中に須恵器・土師器が少量認められた。住居の時期は出土した上器から7世紀後半と推定される。

#### 掘立柱建物跡 (SH)

##### SH-1 (第22図)

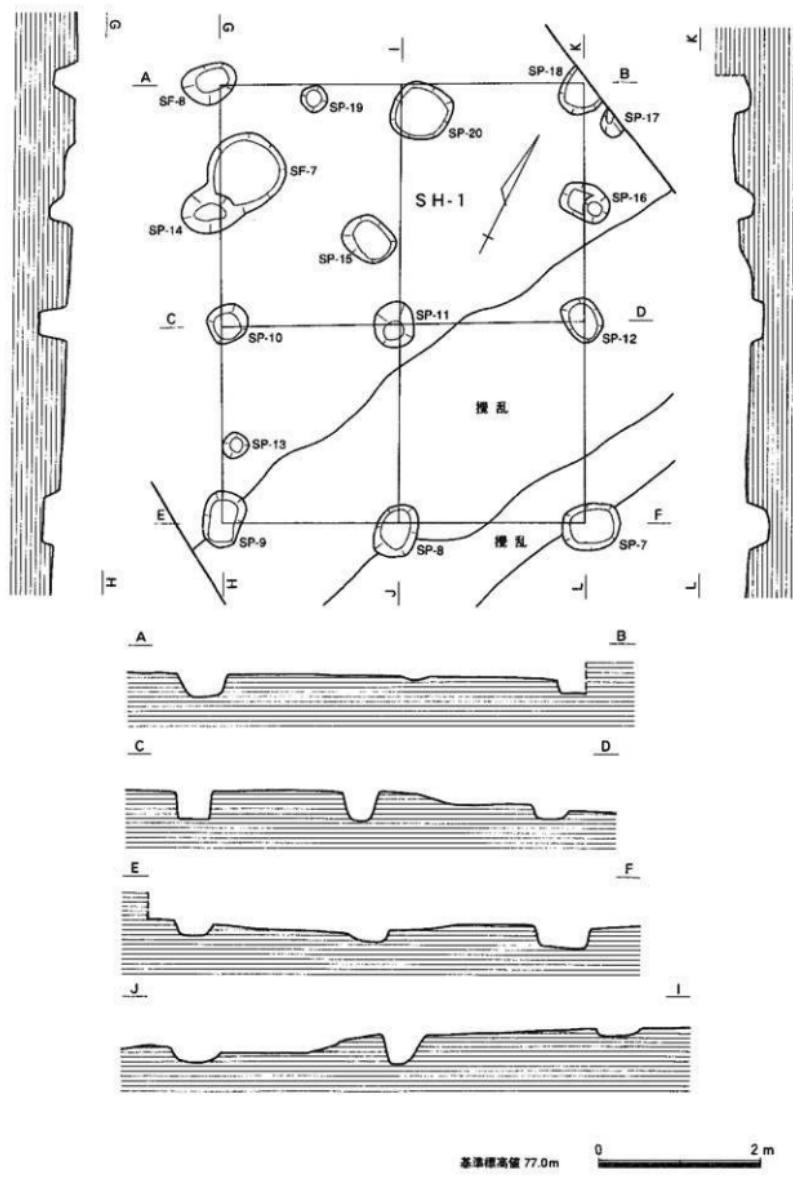
SH-1は11-A9に位置する。建物方向はN-26°-Wである。東西方向・南北方向共に2間の縦柱建物跡と推定される。この掘立柱建物跡が検出された区域は、茶畠改植に伴い重機により擾乱を受けしており、特にSH-1から南東に位置するSB-1にかけては、特に激しい擾乱を受け、遺存状態は良好ではない。南面の柱穴距離は約2.2mで、東面の柱穴距離は約2.4mをはかる。柱穴の掘り方は円形～楕円形を呈し、直徑0.5m程度である。深さは平均0.35mで、底面標高値は約76.2m前後である。柱穴の覆土は黒褐色土でしまりは良く、カーボン粒・焼土粒を含む。遺物としてSP-9から須恵器・土師器の破片が出土しているが、細片のため器種は判然としなかった。SH-1の所属時期は、南東に位置するSB-1と建物方向が一致する点、また後述する山茶碗を伴う区画性のある溝状遺構とは明らかに建物方向が異なる点から、SB-1と同じ9世紀末から10世紀代と推定される。

##### SH-2 (第23図)

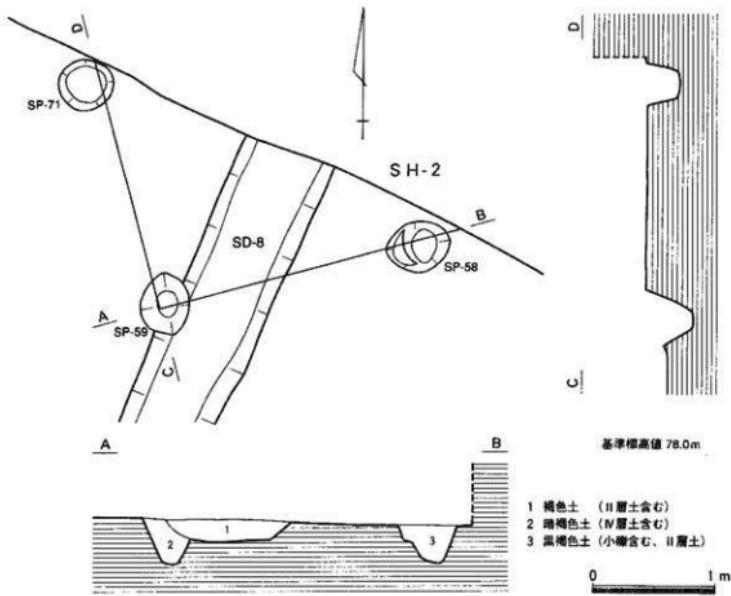
SH-2は11-C・D4に位置する。建物方向はN-15.5°-Wである。調査区北壁際で確認しており、その状況から調査区外に建物跡が延びているものと思われる。東西・南北方向共に1間分のみ検出できた。南面SP-58・59の柱穴距離は約2.2m、西面SP-59・71の柱穴距離は約1.95mをはかる。柱穴の掘り方は円形～楕円形を呈し、直徑約0.4mである。深さは約0.3mで、底面の標高値は約77.1mである。遺構の前後関係として、SP-59が埋没の後にSD-8が掘削されており、SH-2はSD-8に先行する時期に所属することがわかる。各ピットからは遺物は出土していない。所属時期はSD-8よりも先行し、2-1区内で検出されている堅穴住居跡・掘立柱建物跡の建物方向がほぼ同一である点から、7世紀代の建物跡と推定される。

##### SH-3 (第24図 写真図版15)

SH-3は10-E10に位置する。建物方向はN-29.5°-Wである。東西方向1間、南北方向2間を検出した。南面であるSP-77・78間の柱穴距離は2.75mをはかる。西面SP-78・80は2.04m、SP-80・83は2.74mをはかり、かなりばらつきがある。柱穴の掘り方は円形を呈し、直徑約0.6mをはかるが、底面の標高値はSP-81・83は約77.8m、SP-79・80は約77.6m、SP-77・78は約77.7mをはかり、ばらつきが認められる。このSH-3付近にはこの柱穴群と関連性の認められる遺構は全く認められておらず、各柱穴の並びが通っている点、さらに覆土が暗褐色土でほぼ同一と認められる点から1棟の掘立柱建物跡と認めた。遺物はSP-77・80・81・83で須恵器・土師器の細片が出土したにすぎない。SH-3の所属時期は、周囲に見られる堅穴住居跡であるSB-2～5の建物方向が



第22図 2-1区SH-1

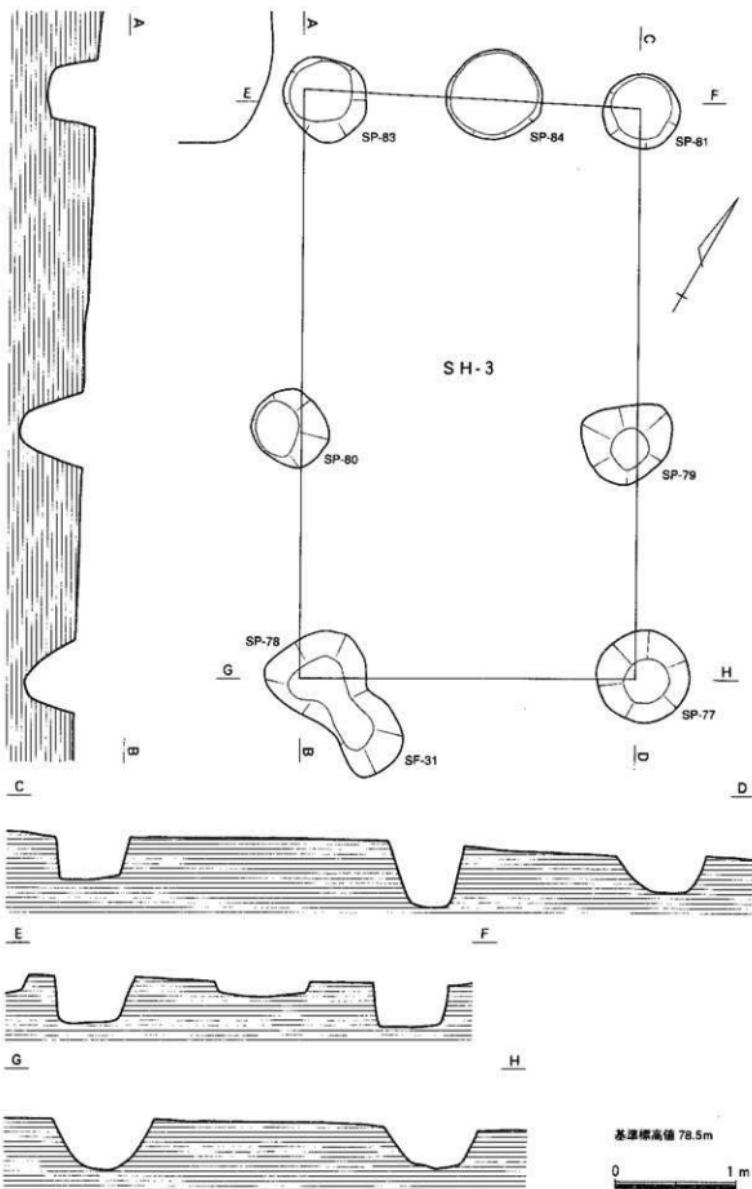


第23図 2-1区SH-2

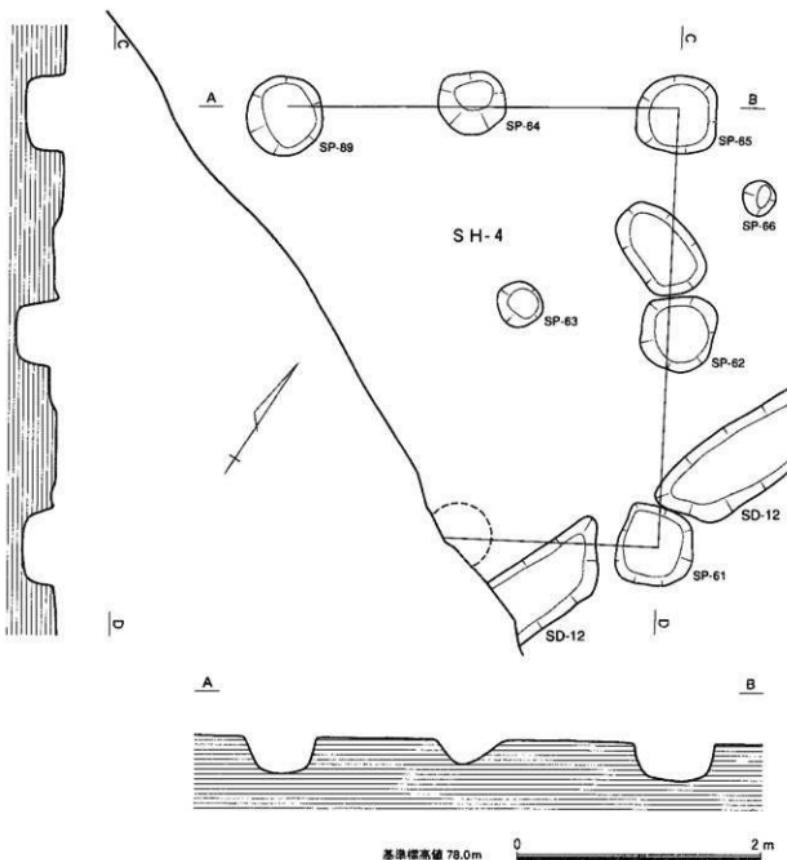
本遺構とほぼ同一である点から、7世紀～8世紀代と推定される。しかし北西に位置するSB-5と近接しすぎる点から、同時に存在した可能性は無い。また南東に位置するSB-3・4とは一定の距離を置いている点から、いずれかの住居と時期的に並行して機能した可能性があろう。

#### SH-4 (第25図 写真図版16)

SH-4は11-D 2・3に位置する。建物方向はN-30.5°-Wである。東西・南北方向共に2間を検出した。この遺構は調査区南壁際で検出し、東西方向が調査区外にどの程度延びているかは不明である。また東北から南西の方向へ茶畑耕作に伴う暗渠によりSP-62が一部破壊され、さらにSP-61と共に南側の桁行を構成したと思われる柱穴1基がほぼ完全に破壊され、調査時にはわずかにその痕跡を留めていたにすぎない。本報告ではその柱穴を破線で表現している。北面のSP-89・64、及びSP-64・65の柱穴距離は1.54m・1.69mとややばらつきがある。東面のSP-65・62、SP-62・61の柱穴距離は1.86m・1.76mとややばらつきがある。柱穴の掘り方は円形～隅丸方形を呈し、幅約0.6mである。深さは約0.3mで、床面の標高値は約77.3mである。遺物はSP-65・89より上師器細片が、SP-64より須恵器細片が出土している。SH-4の所属時期は、2-1区内で検出された竪穴住居跡・掘立柱建物跡等の建物方向がSH-4とほぼ同一方向であることから、これらの遺構と同じ7世紀以降の建物跡と推定される。



第24図 2-1区 SH-3

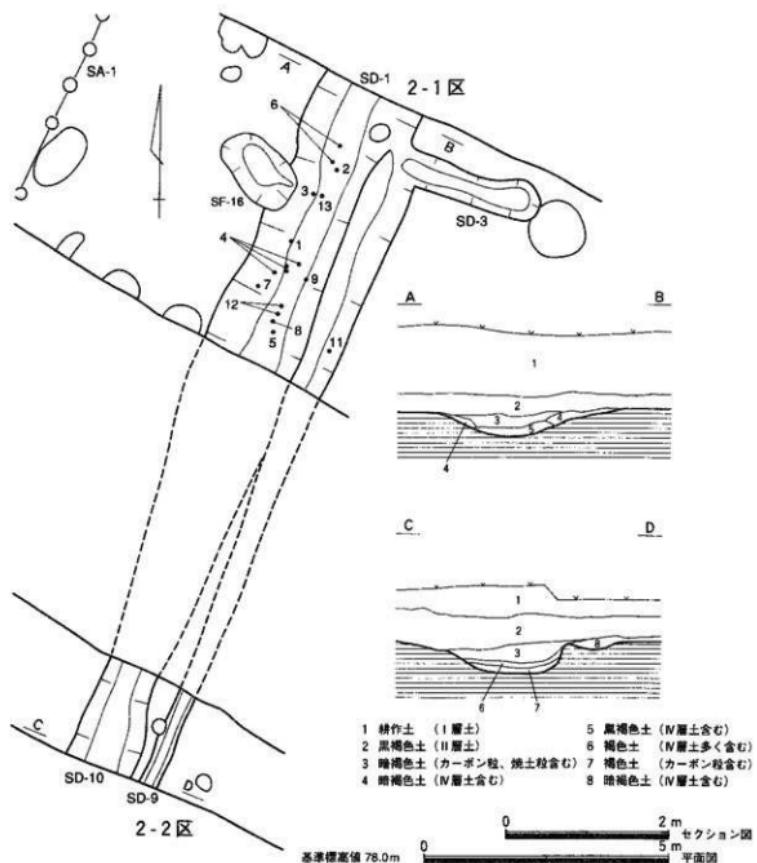


第25図 2-1区SH-4

#### 溝状遺構(SD)

##### SD-1・3(第26図)

SD-1・3は11-A・B7、B8に位置する。SD-1は調査区南壁から北壁にかけてN-23°-Eの方向へ直線的に延びている。この溝状遺構と同一遺構と思われる遺構が2-2区でSD-10として認められる。SD-1は掘削調査直前までは1条の溝状遺構と思われた。しかし掘削の結果、SD-1の掘削以前に同一方向へ延びる溝状遺構が存在し、SD-1に直交するSD-3につながっていたことが明らかになった。この溝状遺構は2-2区ではSD-9として認められ、調査区南壁の土層堆積状況から、その埋没後にSD-3・SD-10が掘削されたことが判明している。SD-1は2-1区北壁付近では深さ約0.3m、2-2区南壁付近では深さ約0.4mをはかる。底面の標高値はそれぞれ76.4m・76.3mをはかり、ほとんど水平に近い。遺物は3層中位から下面に疊と共に出土している。須



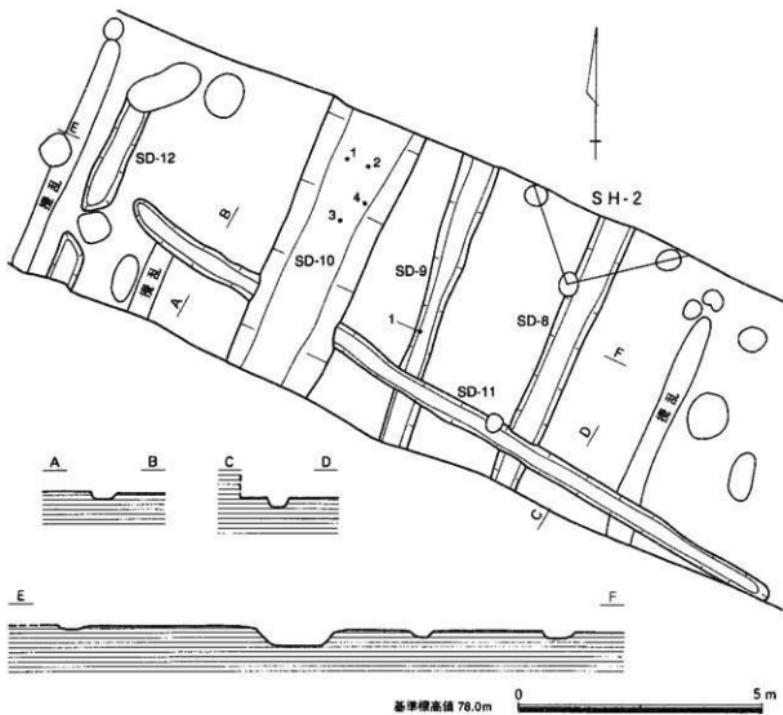
第26図 2-1・2区SD

患器・山茶碗・白磁等が出土し、所属時期は12世紀後葉以降と推定される。

SD-3は調査区北壁付近でSD-1以前の溝状遺構へとつながる。本来は1条の直角に屈曲する溝状遺構であった可能性がある。断面形は浅い台形を呈し、深さは0.1m程度である。この溝状遺構からは遺物は出土していないが、上記の理由によりSD-1より先行して機能したものと思われる。

#### SD-8 (第27図 写真図版17)

SD-8は11-C・D4に位置する。調査区南壁から北壁にかけて、N-22°-Eの方向へ直線的に延びる。溝自体は浅く、深さは約0.1~0.2m、幅は平均約0.7m程度である。覆土は暗褐色土で、カーボン粒を含んでいる。断面形は浅い台形を呈する。底面の標高値は北壁付近で77.3m、南壁付近で

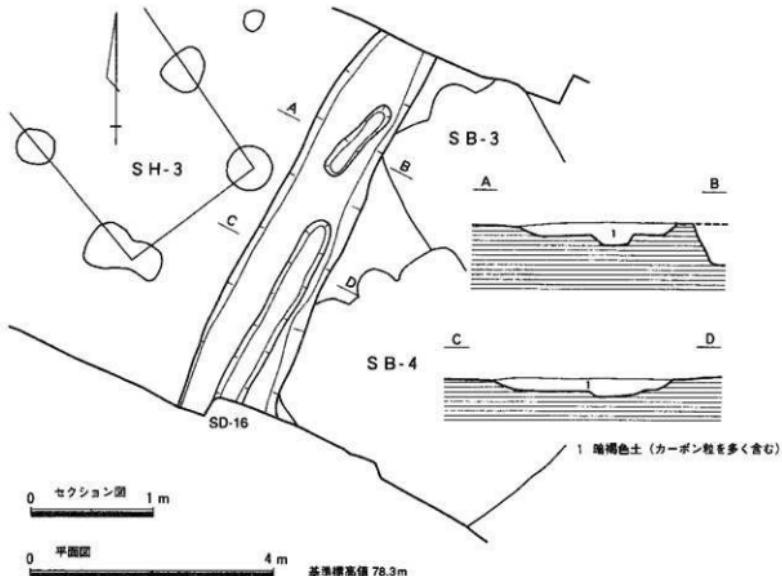


第27図 2-1区SD-8~12

77.4mをはかりほぼ水平である。区间溝と考えられる。後述するSD-9とはほぼ並行に延び、深さも同レベルである。従って同時期に掘削され、同じ性格を有していたことも考えられた。この点からこの2条の溝状造構は道路の側溝の可能性も想起された。しかしSD-8・9の間の領域には踏み固められたような硬化面は検出されておらず、その性格は判然としない。遺物は出土していない。所属時期は12世紀後葉以降と推定される。

#### SD-9 (第27図 写真図版16)

SD-9は11-C 3・4、及びD 4に位置する。SD-8と同様、調査区南壁か北壁まで直線的に延びる。その方向はN-17°-Eである。溝自体は浅く、深さは約0.1~0.2m、幅は0.6~0.7m程度である。覆土は暗褐色土で、カーボン粒を含んでいる。断面形は浅い台形を呈する。床面の標高値は北壁付近で77.3m、南壁付近で77.4mをはかる。この溝状造構はSD-8の項で述べたように、SD-8と共に道路の側溝である可能性がある。遺物は1点、山茶碗の破片が出土している。この点から造構の所属時期は12世紀後半以降と推定される。



第28図 2-1区 SD-16

**SD-10 (第27図 写真図版16)**

SD-10は11-C・D3に位置する。調査区南壁から北壁にかけてN-25°-Eの方向に延びる。溝自体は深さ0.3~0.4m、幅は2m程度である。断面形は台形を呈する。床面の標高は北壁付近で77.2m、南壁付近で77.1mをはかり、ほぼ水平である。先述したSD-8・9とほぼ同一方向に延びるが、このSD-10程度の規模の溝状遺構は、SD-1およびSD-16程度で、付近には見あたらない。SD-8・9と同時期に機能していたかどうかは遺物・遺構の点からは確定出来ない。このSD-10は2-2区の方向に延びており、つながると思われる溝状の落ち込みが認められる。しかしこの遺構付近は茶畠耕作の影響により遺構上部が消失していた。遺物は2-1区から山茶碗・須恵器・近世陶器等が出土している。所属時期は12世紀後葉以降と推定される。

**SD-11 (第27図 写真図版16)**

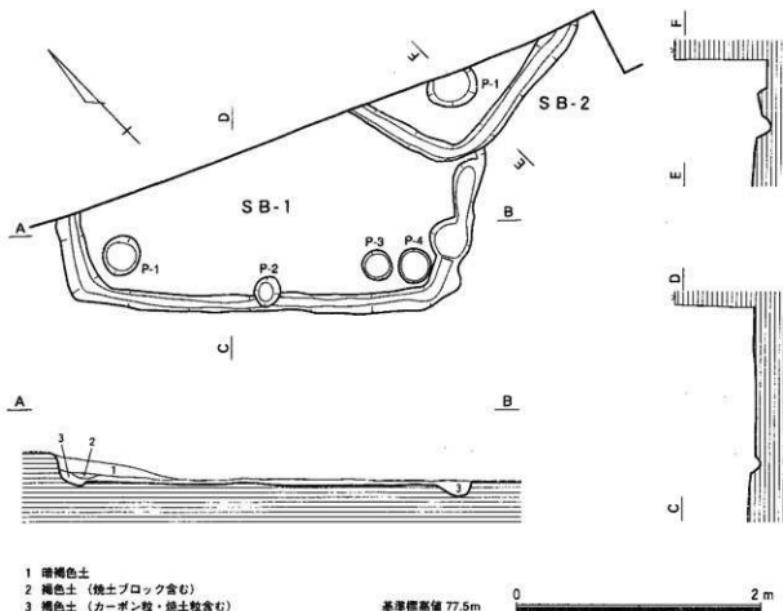
SD-11は11-C3・4、D3に位置する。調査区と同じように南東から北西の方向へ直線的に延びる溝状遺構である。方向はN-59°-Wである。溝自体の深さは0.2mをはかり、断面は台形を呈する。幅は0.5m、長さは15.5mをはかる。床面の標高は北西端で77.5m、南東端で77.2mである。等高線にはほぼ直交して延びる。SD-11はその埋没後にSD-8・9・10が掘削されており、これらの溝状遺構より先行して機能し、その性格は異なるものと思われる。この溝状遺構につながると思われる遺構が2-2区のSD-3である。遺物はこの遺構から山茶碗とおぼしき細片が出土しているのみである。時期は出土土器から12世紀代と推定される。

### SD-12 (第27図 写真図版16)

SD-12は11-E3に位置する。方向はN-22.5°-Eへ延びる。北東端はS F-29により破壊され、S H-4のSP-61付近では溝が一旦途切れる。溝は浅く、深さは0.1m、幅は0.6mである。断面形は浅い台形を呈する。遺物は全く出土していない。SD-8~10と同一方向で延びている点から、この溝も本来は区画溝として機能していた可能性がある。所属時期も同じ12世紀後半以降と思われる。

### SD-16 (第28図)

SD-16は10-E10、11-E1に位置する。調査区南壁から北壁に向かって直線的に延びる。その方向はN-27°-Eである。この溝状遺構は現在の茶烟の区画溝と重複しており、遺構確認面上ではその搅乱が認められた。溝の底面にはさらに溝状の掘り込みが見られた。従って断面形は浅い台形が2段重なっているように認められる。溝の最大幅は2mで、北壁付近は1.3mとすさまる。覆土はSD-8~10と同じ暗褐色土である。覆土上位において近世陶磁器が1点出土しているが、搅乱に伴う可能性もある。東側ではSB-3・4を切っており、SD群とほぼ同一方向で延びている点から、この溝状遺構の所属時期は12世紀後半以降と推定される。



第29図 2-2区SB-1・2

## 2-2区（第17図 写真図版12）

11-C1から19-J8の間に展開した調査区である。調査は平成11年度に実施している。実掘面積は179m<sup>2</sup>をはかる。長さは73.4mで、最大幅3.2mで道路を挟んだ対岸の2-1区と比べても、極めて狭長な調査区である。本調査区は茶畠耕作の影響を全面に受けている。遺物も出土数が極めて少ない。この調査区から南西へ約50mで、平坦な台地面が終焉し、険しい開拓谷へと地形が変化する。しかし本調査区内でも依然と集落域が確認されているので、さらに谷方向へ広がるものと思われる。堅穴住居跡は奈良時代と推定される2基を検出している。溝状遺構の方は、上記のように茶畠耕作の影響を受け、極めて遺存状態は悪い。

### 堅穴住居跡（SB）

#### SB-1（第29図 写真図版17）

SB-1は11-B5に位置する。調査区北壁際で検出したこの住居跡は、平面が方形を呈したと思われるが、北半部は調査区外に延びているため判然としない。建物方向はN-44°-Wと思われる。床面は堅緻ではなく、貼床も検出できなかった。カマドは検出できなかった。床面には住居に伴うと思われるピット（P）を4基確認したが、どれも浅く主柱穴とおぼしきピットは確認出来なかった。壁溝はほぼ全周するものと思われるが、東壁がやや外側へ膨らむ様子を見せ、壁溝の掘り方も変化している。壁溝の断面形はU字状を呈している。遺物は全く出土していない。なお北側でSB-2と重複しているが、この付近全体が茶畠耕作の影響により、面的に攪乱されているため、土層の堆積状況等での遺構の前後関係を確認することは不可能であった。

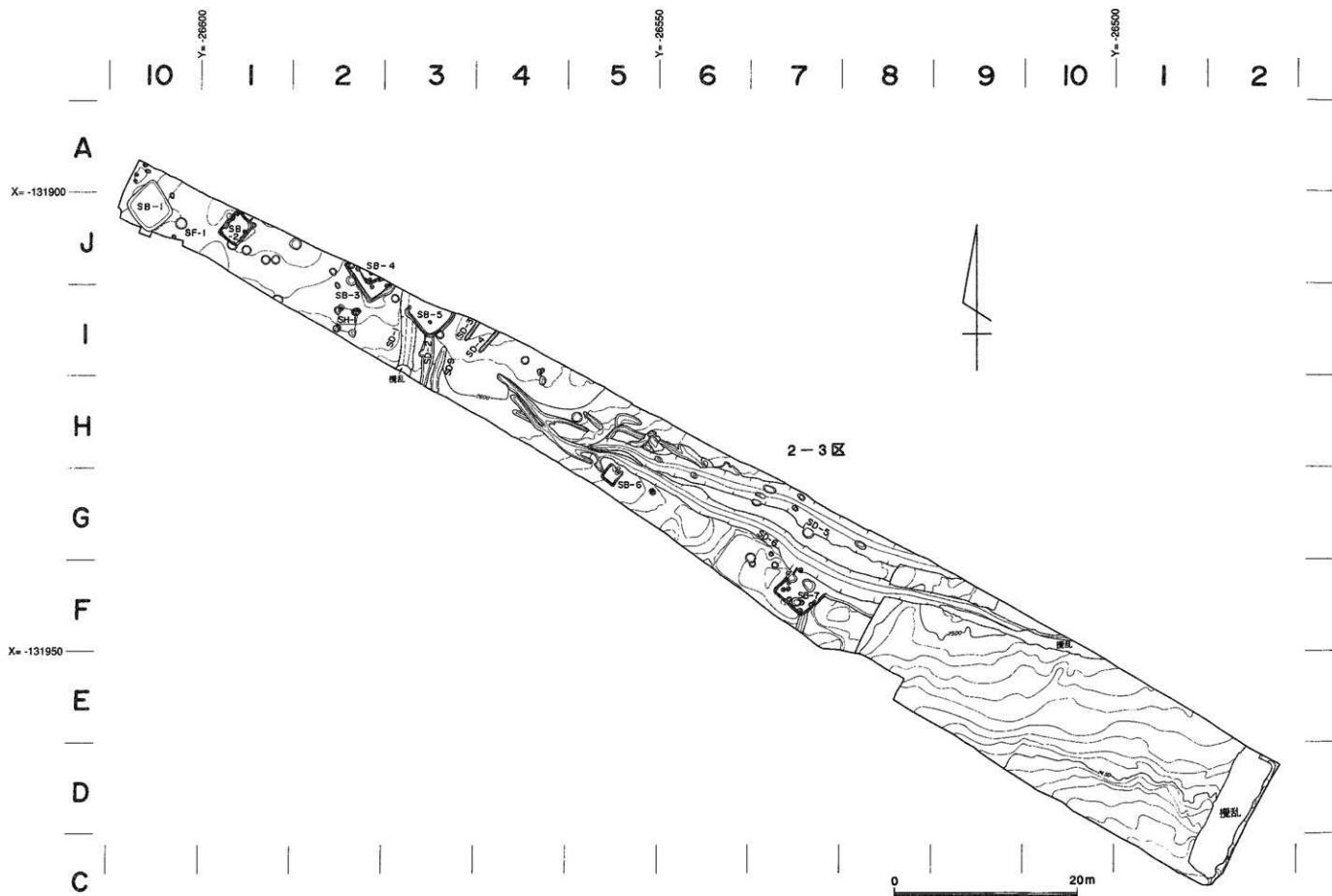
#### SB-2（第29図 写真図版17）

SB-2は11-B5に位置する。調査区北壁際で検出されたこの住居跡は、平面が方形を呈していると思われるが、隅部のみの検出であり、全体像は全く不明である。建物方向はN-12.5°-Wと思われる。床面はSB-1と同様、堅緻ではなく貼床は確認できなかった。床面には柱穴を1基確認したに留まった。壁溝の断面形はU字形を呈している。遺物は全く出土していない。SB-1の頃で触れたように重複の関係は判然としない。

### 溝状遺構（SD）

#### SD-11~12（第17図）

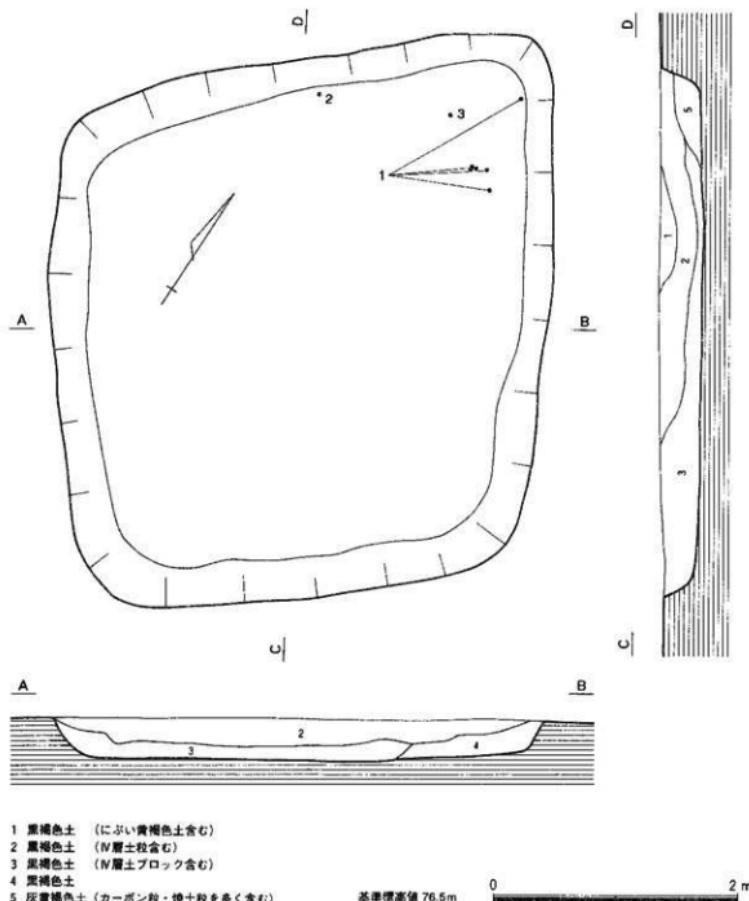
2-2区内から11条もの溝状遺構を検出している。2-1区から延びるSD-6・9・10の他に、北西方向に延びる溝状遺構も存在する。SD-1・2・4は調査区南壁沿いで検出された。底面はやや硬化していた。道路状遺構の可能性がある。SD-2から須恵器破片が出土している。時期は8世紀後葉から鎌倉時代の間と推定される。



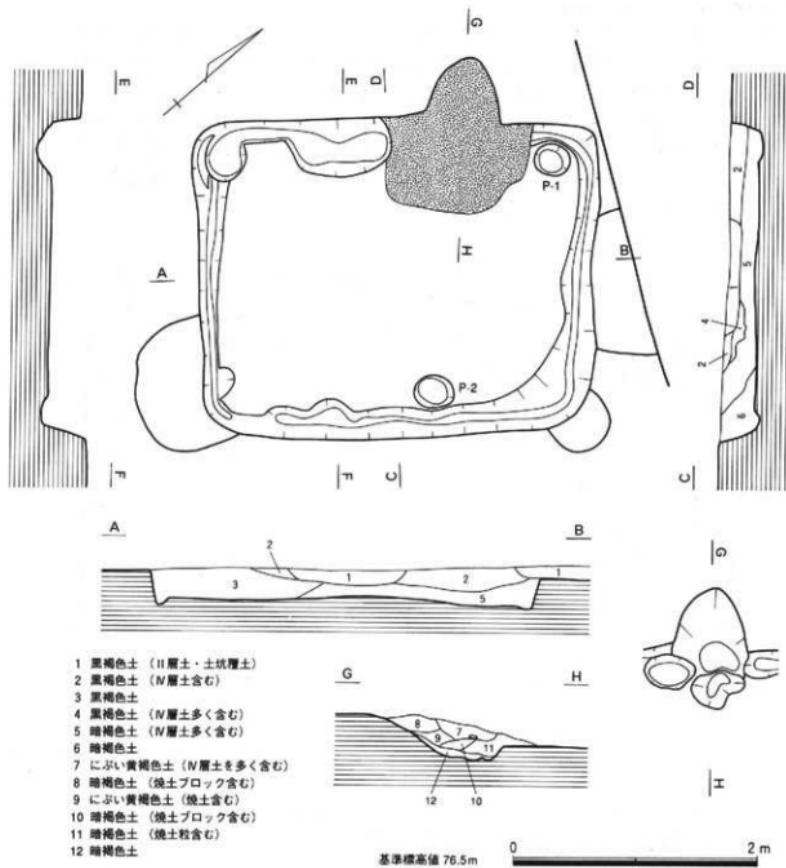
第30図 2-3区平面図

2-3区（第30図 写真図版18）

2-3区は11-A 10から21-C 3の間に展開する調査区である。調査は平成10年度に実施している。実掘面積は1525m<sup>2</sup>をはかる。この2-3区は調査期間中は2区と呼称していたが、本報告書編集時に変更している。調査区の長さは142m、幅は6.5~16mをはかり、長大な調査区の觀を呈する。本調査区は南東端から47m付近まで茶畠の改植・天地返しにより地表面から平均2m深さまで破壊されており、かろうじてSD-5・6の底部が残存していたにすぎない。この調査区では古墳時代から奈良時代の堅穴住跡7基、掘立柱建物跡1棟が検出されている。また区画性を有さない溝状造構も検出されている。主要な遺構についてそれぞれ述べてみる。



第31図 2-3区 SB-1



第32図 2-3区SB-2

### 竪穴住居跡 (SB)

#### SB-1 (第31図 写真図版19)

SB-1は11-A10、19-J10に位置する。平面はゆがんだ方形を呈する。規模は $4.20 \times 4.47\text{m}$ を有する。住居の建物方向はN-39°-Wである。住居一帯は茶烟改植の影響を受けておらず、III層上面で遺構検査している。住居の掘り方は下層のIV層を0.1mほど掘り込んで床面としている。床面はやや堅緻であったが、貼床は確認できなかった。床面積は $12.7\text{m}^2$ を有する。カマドは検出できなかった。北壁中央部付近にカーボン粒・焼土粒を含んだ灰黄褐色土の堆積が認められ、カマドの構築土の可能性があった。しかし北壁面には煙道らしきプランは確認できなかった。床面には柱穴・壁溝も確認出来なかった。遺物は須恵器・土師器・鉄製品が出土している。床面近くから出土した遺物は少なく、大半が覆

土2層中からの出土である。遺物は直径20cm程度の礫と共に出土している。住居の時期は出土した土器から8世紀代と推定される。

#### SB-2 (第32図 写真図版19)

SB-2は20-J1に位置する。平面形は長方形で、規模は3.28×2.64mをはかる。住居の建物方向はN-51°-Wである。住居の周辺は後世の円形土坑が散見され、SB-2も東壁・南西部隅に重複が観察される。床面はやや堅緻で、床面積は5.2m<sup>2</sup>をはかる。カマドは北壁中央部から東よりの位置に、1基検出した。カマドの構築土はIV層を基調とした粘質土を用いていた。カマドは全体的に押し潰れており、袖部・天井部の検出は出来なかった。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)は2基検出したが、いずれも浅い。P-2については南壁中央部からやや東よりの付近に位置し、カマドの正面に当たる。昇降施設に伴うピットであった可能性がある。壁溝はカマド付近で途切れているものの全周する。遺物はほとんど出土していない。時期はSB-1に距離的に近い点から8世紀代と推定される。

#### SB-3 (第33図 写真図版20)

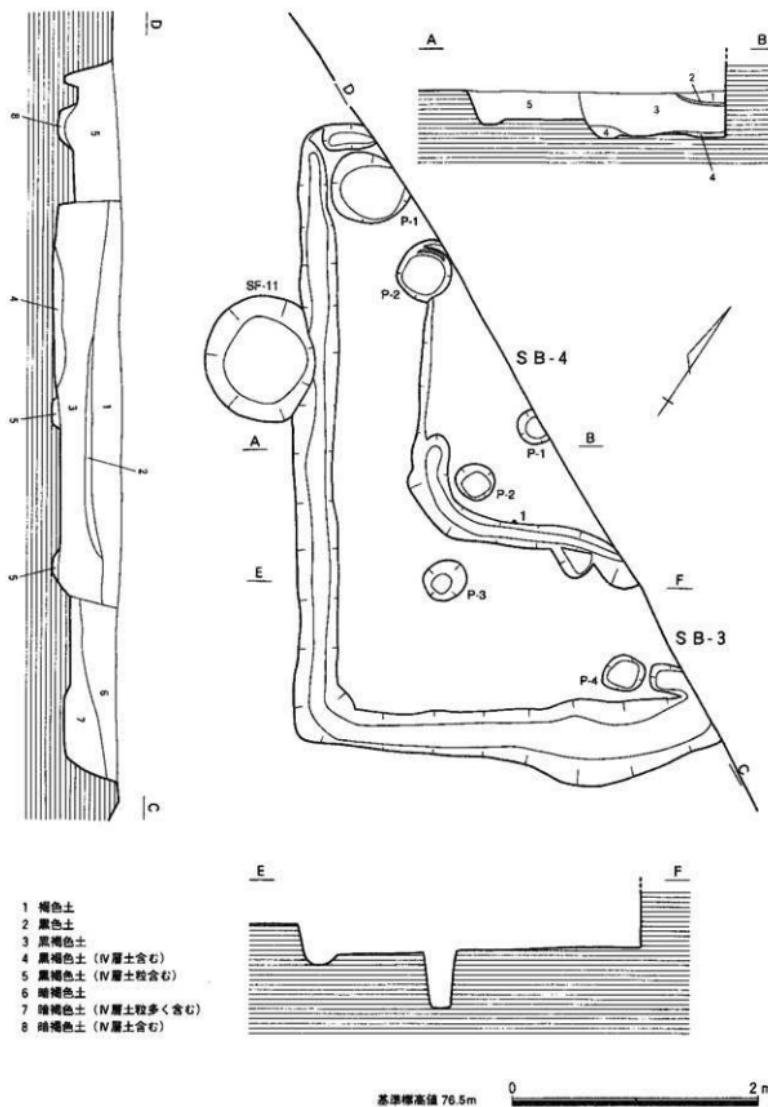
SB-3は20-I・J2、J3に位置する。調査区北壁際で検出され、おそらく面積の1/2以上は調査区外に延びているものと思われる。建物方向はN-32.5°-Wである。平面は方形であるが、東壁中央部が外側に膨らむ様子を見せており、2-1区SB-3と同じ外觀を示す。奥行きは5.13mをはかり、中原遺跡で検出されている竪穴住居跡の中では大きな部類にはいる。SB-3は南壁中央部でSF-11と重複し、また埋没後にSB-4が入れ子状に構築されている。両住居の覆土は黒褐色土を基調とし、IV層土粒の有無で分層している。本住居の床面はやや堅緻である。調査区北壁際にはSB-4により0.15m程掘削されている。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)が4基確認されており、P-3については床面から0.5m掘り込んでいる点から主柱穴と推定される。また住居東壁の膨らみに対応するように浅いP-4が認められることから、昇降施設の存在を伺うことが出来る。壁溝は南西隅部で一旦途切れるものの、全周するものと推定される。断面形はU字形に近い。住居の時期はSB-4に先行する点から7世紀代と推定される。

#### SB-4 (第33図 写真図版20)

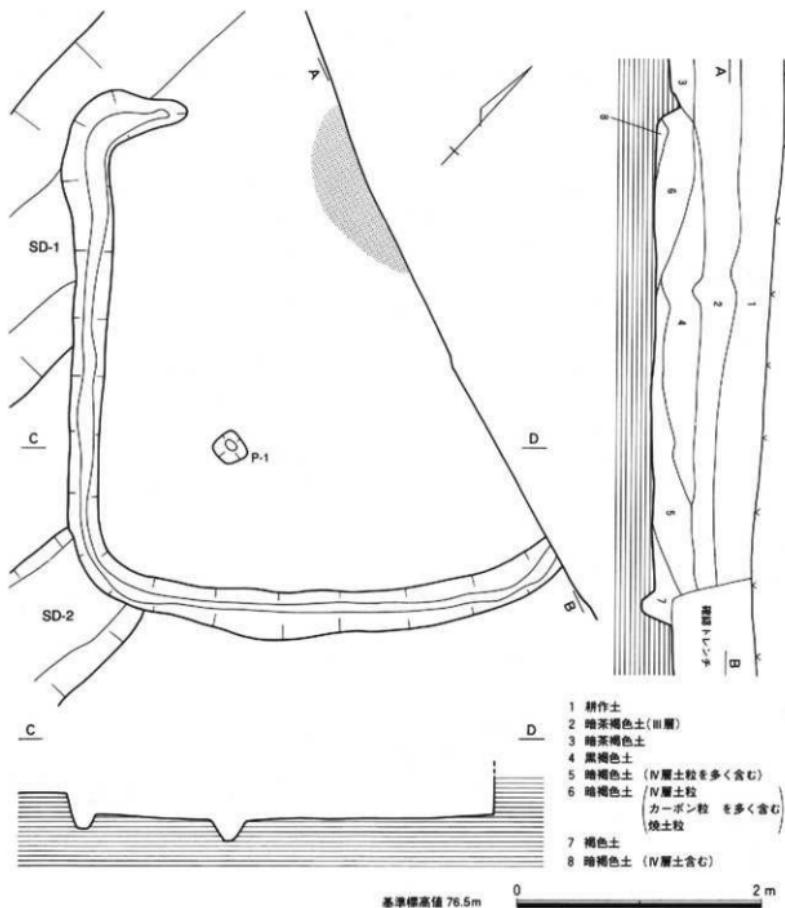
SB-4は20-J2に位置する。SB-3と同様、調査区北壁際で検出され、住居の大部分は調査区外に延びている。建物方向はN-26°-Wで、平面は方形を呈すると考えられる。SB-3の埋没後に掘削・構築された住居である。床面はやや堅緻で、住居に伴うと推定されるピット(P)は2基検出している。壁溝は東壁から南壁の一部にかけて認められる。断面は浅い逆台形を呈する。住居東壁付近の形状がSB-3と似ており、壁溝も外側へ膨らむ様子が観察される。この点から昇降施設の存在が推定される。遺物は須恵器・土師器の細片が出土しているが、覆土中位からの出土で住居に伴うものか判然としない。時期は建物の方向から7世紀代と推定される。

#### SB-5 (第34図 写真図版21)

SB-5は20-I3に位置する。住居の建物方向はN-41.5°-Wである。住居跡は調査区北壁際に位置し、住居北東隅から西壁にかけての部位は調査区外に延びている。また住居の大部分はSD-1・2により削平されており、床面が辛うじて残っていた。住居の奥行きは4.54mで中原遺跡で検出されている竪穴住居跡の中では大きな部類にはいる。床面は堅緻であるが貼床は認められなかった。床面積は13.7m<sup>2</sup>程度と推定される。カマド本体は検出できなかったが、焼上粒・カーボン粒を多く含む暗褐色土



第33図 2-3区 SB-3・4



第34図 2-3区SB-5

の堆積が調査区北壁際で確認され、流出したカマド構築土と推定された。壁溝はSD-1による削平で西壁では見られないが、ほぼ全周するものと思われる。カマド付近では土層堆積状況から壁溝の存在は確かめられない。断面はU字形に近い。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)が1基検出された。遺物は須恵器・土師器の細片が出土している。時期は建物の方向から7世紀代と推定される。

#### S B - 6 (第35図 写真図版21)

S B - 6は20-G・H 5に位置する。建物方向はN-36.5°-Eで、2-3区内で検出された他の竪穴住居跡とは大きくその方向が異なる。住居の規模は1.77×1.90mと極めて小型である。平面形は方形

である。床面は堅緻でなく、床面積は1.9m<sup>2</sup>をはかる。カマドは北壁中央部で検出できた。袖部は褐色上で構築され、カマド内部に焼土粒・カーボン粒を含む暗褐色土が堆積していた。壁溝は北西隅部から東壁中央部まで見られ、断面形はU字形である。床面にはピットは見られなかった。遺物としては須恵器が覆土上層から出土している。時期は7世紀代と推定される。

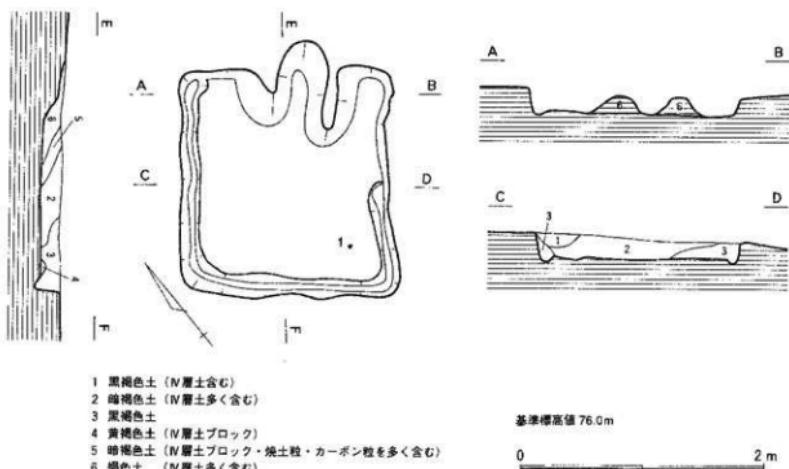
#### SB-7 (第36図 写真図版22)

SB-7は20-F7に位置する。建物方向はN-49°-Wである。北壁側はSD-6により削平されている。住居の奥行きは4.61mをはかる。遺存状況から平面は方形を呈していたと思われる。住居の埋没後にSF-22、SD-12が重複している。床面はやや堅緻で、貼床は認められなかった。本米の床面積は16.3m<sup>2</sup>と推定される。西壁でカマドを1基検出した。IV層土粒が多く含んだ暗褐色土でカマドを構築している。しまりは良好で堅緻な仕上がりである。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)が7基確認された。P-1・3・5等は住居隅部に配置されており、主柱穴の可能性も想起されるが、深さは15cm程度で浅すぎる感がある。南壁中央には壁溝とつながる方形の土坑が、また床面中央部には不定形の土坑が見られる。両者とも住居に伴う遺構で、生活時には埋められていたと思われる。壁溝はカマド付近、東壁中央部で途切れているが、ほぼ全周していたものと思われる。東壁中央はちょうどカマドとは対の位置であり、住居の出入口が想定される。壁溝の断面形は浅い逆台形を呈している。遺物はカマド付近から出土している。住居の時期は出土遺物から7世紀後半と推定される。

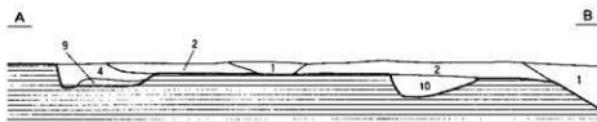
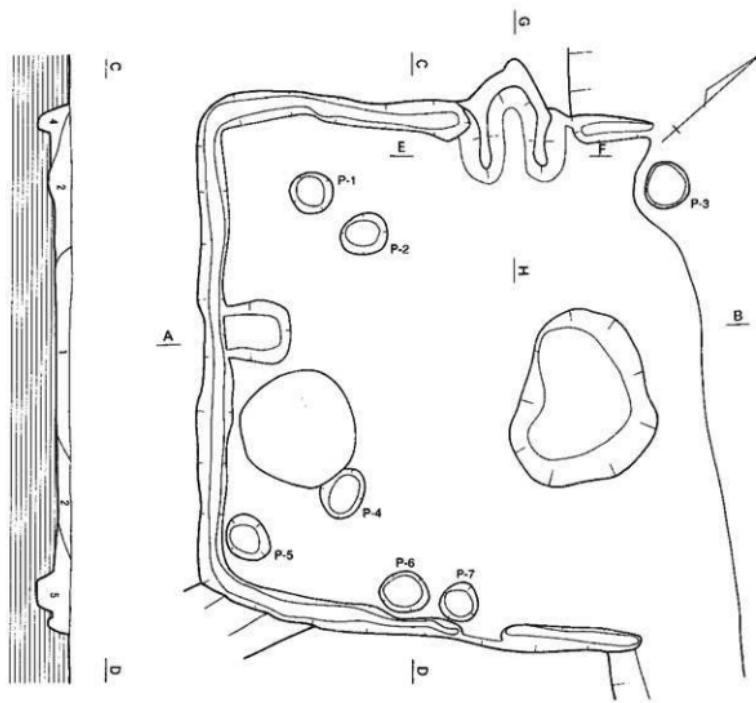
#### 掘立柱建物跡(SH)

##### SH-1 (第37図 写真図版22)

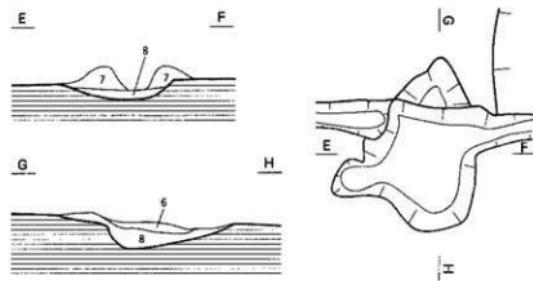
SH-1は20-I2に位置する。建物方向はN-13°-Eである。東西・南北方向共に1間である。東面・西面であるSP-2・3、SP-1・4の各柱間距離は2.4m、北面・南面であるSP-1・3とSP-2・4の柱間距離は2.04mをはかる。前者の数値が広いので桁行かもしれない。とすれば木末



第35図 2-3区SB-6



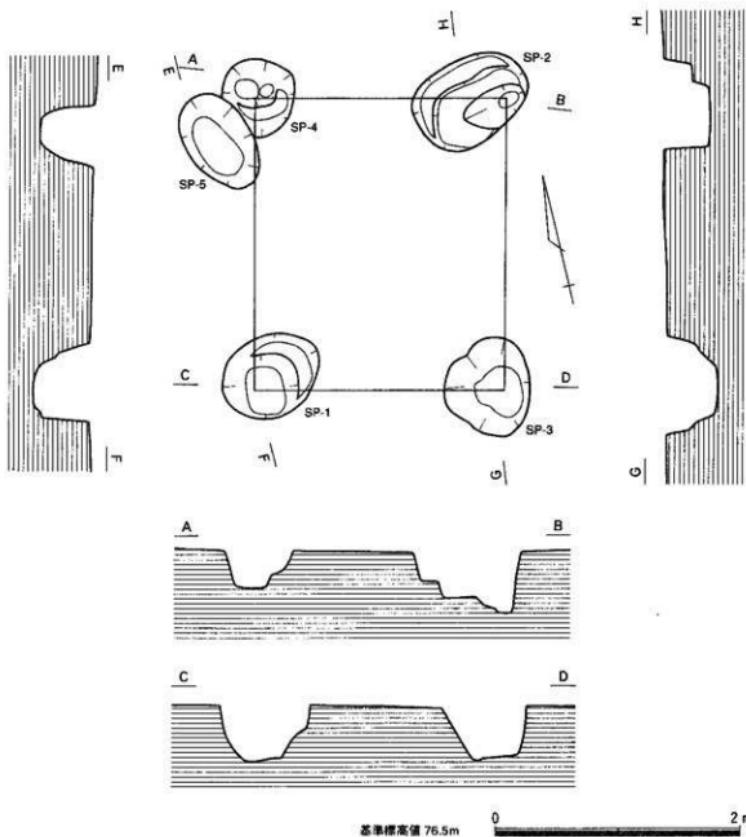
- 1 褐色土 (IV層土含む)  
 2 錫褐色土 (焼土粒を多く含む)  
 3 褐色土 (II + IV層土含む)  
 4 褐色土  
 5 雷電褐色土  
 6 褐色土 (焼土粒を多く含む)  
 7 錫褐色土 (IV層土を多く含む)  
 8 にない褐色土 (焼土粒を多く含む)  
 9 褐色土 (IV層土ブロックを多く含む)  
 10 黄褐色土 (錫褐色土を多く含む)



基準標高値 76.0m

0 2 m

第36図 2-3区SB-7



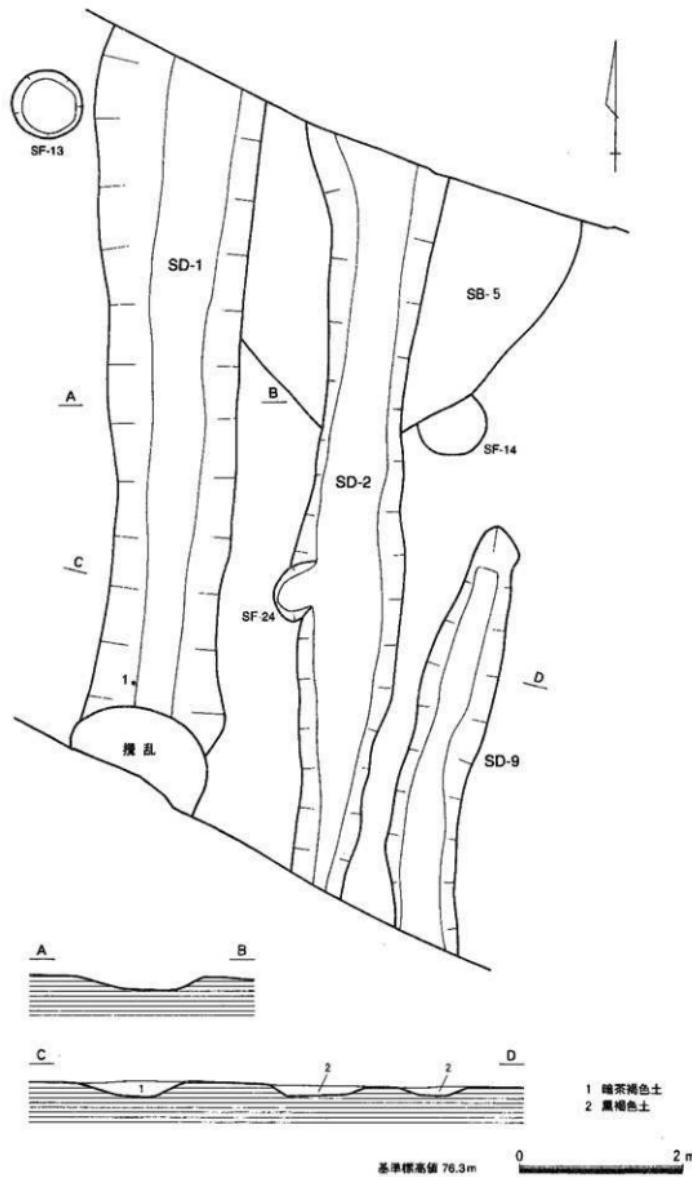
第37図 2-3区 SH-1

の建物方向は北西であろう。柱穴の掘り方の平面形は椭円～不定形を呈する。径は0.7m程度で、深さは0.4～0.5mをはかる。底面標高値は75.9m前後である。SP-4については深さが約0.3mと浅い。重複し、かつ時期的に先行するSP-5の深さはSP-1～3とほぼ同一である。この点から当該掘立柱建物跡は一度建て直しが行われた可能性がある。柱穴の覆土は黒褐色土で、しまりは良くIV層土粒・焼土粒・カーボン粒を含む。遺物はSP-5より古墳時代の合子状坏身の細片が出土している。SH-1の所属時期は、7世紀代と推定される。

#### 溝状遺構(SD)

##### SD-1 (第38図)

SD-1は20-I 3に位置する。調査区南壁から北壁にかけてN-4.5°-Eの方向へ直線的に延び



第38図 2-3区SD-1・2・9

る。この造構は北壁付近で S B - 5 を削平している。南壁付近で擾乱を受けている。また付近は茶畠の地境が存在したことにより、擾乱を受けている。この溝自体の深さは約0.2mをはかり、幅は1.5~2.0mをはかる。覆土は暗茶褐色土で、IV層土粒を少量含む。断面形は浅い逆台形を呈している。床面の標高値は北壁付近で75.96m、南壁付近で75.88mで、やや水平である。この溝状造構の東側約1mの位置には後述する S D - 2 がほぼ同一方向に延びている。その様子から区画溝としての性格が窺える。調査区北壁付近で確認される S B - 5・S D - 1・2 の土層堆積状況では S D - 1・2 の時期的な前後関係は判然としないが、覆土を異にする点においてのみ、各々の溝状造構が別の時期に掘削・埋没した可能性を物語る。遺物は山茶碗等が少量出土しているに過ぎない。所属時期は出土遺物から12世紀後半以降と推定される。

#### S D - 2 (第38図)

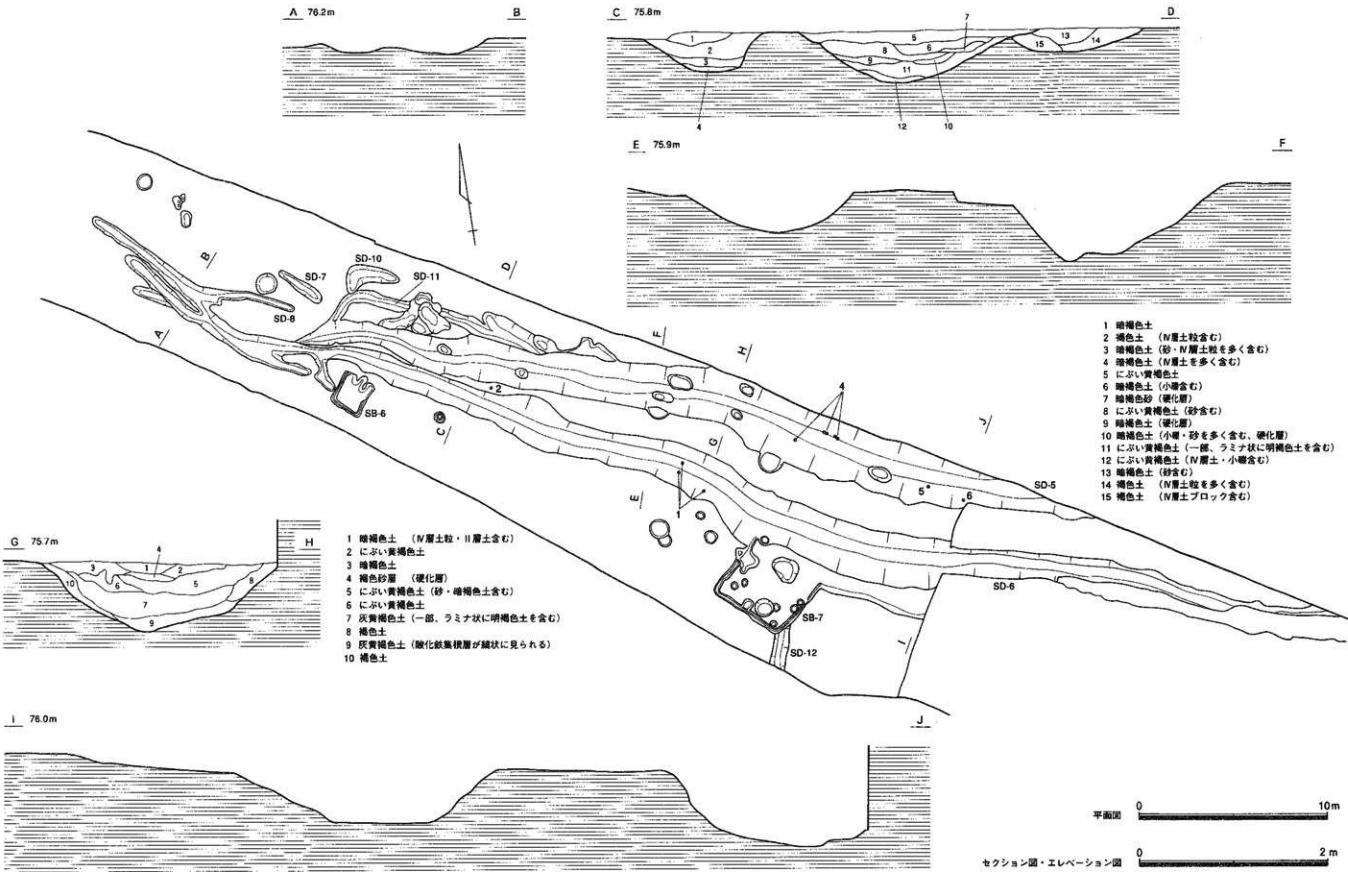
S D - 2 は20-H・I 3 に位置する。調査区南壁から北壁にかけて N - 5.5° - E の方向へ直線的に延びる。この造構は S D - 1 と同様、S B - 5 を調査区北壁付近で削平している。溝の深さは0.2m、幅は0.7~1.7mをはかる。覆土は黒褐色土である。断面形は浅い逆台形を呈している。底面の標高値は北壁付近で76.65m、南壁付近で75.85mをはかる。S D - 1 の項でも触れたように、溝自体が同一方向に掘削されている点や形状の点から、時期差があるものの区画溝として考えられる。遺物は山茶碗の細片が出土している。所属時期は12世紀後半以降と推定される。

#### S D - 5 (第39図 写真図版23・24)

S D - 5 は20-H 5 から20-F 9 に位置する。調査区中央部から E - 18° - S の方向へわずかに蛇行しながら延びる。この溝状造構は20-H 5 付近で S D - 6 と合流し S D - 11 を削平している。この溝状造構の長さは約43m、最大幅は20-G 8 付近で2.9m、底面標高値は合流点付近で75.66m、調査区北壁付近で74.71mをはかる。最大深は20-G 8 付近で0.82mをはかる。断面はほぼ皿状を呈する。覆土は暗褐色～褐色系の粘質土である。覆土中位付近には砂層、もしくは砂を多く含む層が堆積している。覆土上下位層には酸化鉄の集積層が縞状の堆積を示している。これらの層はしまりが極めて良く、加えて溝状造構の床面が踏み固められたような硬化面が観察されたことから、この溝状造構自体が道路として機能していた可能性がある。またこの底面にはこの溝状造構に伴うと推定される土坑状の掘り込みが8基確認される。削平されている S D - 11 の床面も硬化面が確認された。遺物は須恵器・山茶碗等が出土している。機能していた時期は12世紀後半以降と推定される。

#### S D - 6 (第39図 写真図版23・24)

S D - 6 は20-I 4 から21-F 10 に位置する。I 4 から H 4 付近にかけては数条の溝状造構が重複しているが、括して S D - 6 としている。E - 22.5° - S の方向へわずかに蛇行しながら延びる。この溝状造構は S D - 5 とは20-H 5 付近で合流している。長さは約70m、最大幅は20-F 8 付近で2.8m、底面標高値は20-I 4 付近で75.96m、20-F 7 付近で75.40m、調査区北壁付近で74.81mをはかる。最大深は20-F 8 付近で0.58mをはかる。断面は逆台形を呈する。覆土は暗褐色～褐色土で、S D - 5 の覆土と比べ粘性がわずかに劣る。また覆土中位付近に見られた硬化面を有する層位の堆積は確認されていない。しかし溝底面は硬化面が観察されている点から S D - 5 と同様、道路として機能していた可能性がある。また20-I・H 4・H 5 付近で検出されている数条の重複した溝状造構の底面には小縛が踏み固められたような状況で検出されている。よってこれらは S D - 5 の覆土中位で観察された硬化した層位に継続していた可能性もある。とすれば本来これらの溝状造構は S D - 5 とすべきかもしれない



第39図 2-3区SD-5・6

い。遺物は須恵器・山茶碗・青磁が出土している。この遺構が機能していた時期は12世紀後半以降と推定される。

#### SD-9 (第38図)

SD-9は20-H・I 3に位置する。調査区南壁から調査区中央部に向かってN-16°-Eの方向へ延びる。溝自体の深さは0.1m程度で極めて浅く、幅は0.7~0.9mをはかる。覆土は黒褐色上でSD-2と同じである。この溝北端部の床面標高値は75.97m、南壁付近は75.80mで、床面はやや南側へ傾斜する。遺物は全く出土していない。SD-2と覆土が似ている点から近い時期に掘削・埋没した可能性がある。12世紀後半以降と推定される。

#### SD-11 (第39図)

SD-11は20-H 5・6に位置する。SD-5の北側に位置する。溝自体の深さは最大深度0.24mをはかる。溝状遺構内の覆土は暗褐色~褐色系の土である。下層にはIV層土粒・ブロックを含み溝底面にはSD-5同様、踏み固められたような硬化城がわずかながら確認された。道として機能していた可能性がある。土層堆積状況の観察からSD-5よりも古い時期に位置づけられるが、出土遺物が無いために判然としない。しかしながら「道」という機能を重視すれば、さほどSD-5との時期差は考えられない。所属時期は12世紀後半以降と推定される。

### 3区（第40図 写真図版25）

3区は21-C4から30-H1までの間に展開した調査区である。調査は平成10年度に実施している。実施面積は685m<sup>2</sup>をはかる。調査区の長さは88m、幅は15~1.5mをはかる。調査区の平面形は狭長な二等辺三角形を呈する。この調査区は南東方向に行くに従い、幅は狭くなり最終的に調査区南東端付近は幅1.5m程度しかなくなる。その東側には畠縁のファームボンドが位置し、島田市教育委員会による調査の結果、柱穴群が検出されていた地点にあたる。3区西半部は遺構の希薄な区域であるが、南東部では竪穴住居跡が重複して検出され、遺構の濃密な区域となっている。調査区の南側には公道を挟んで4・5区が展開している。この調査区では奈良時代後半の竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡1棟が検出されている。

### 竪穴住居跡（SB）

#### SB-1（第42図 写真図版26）

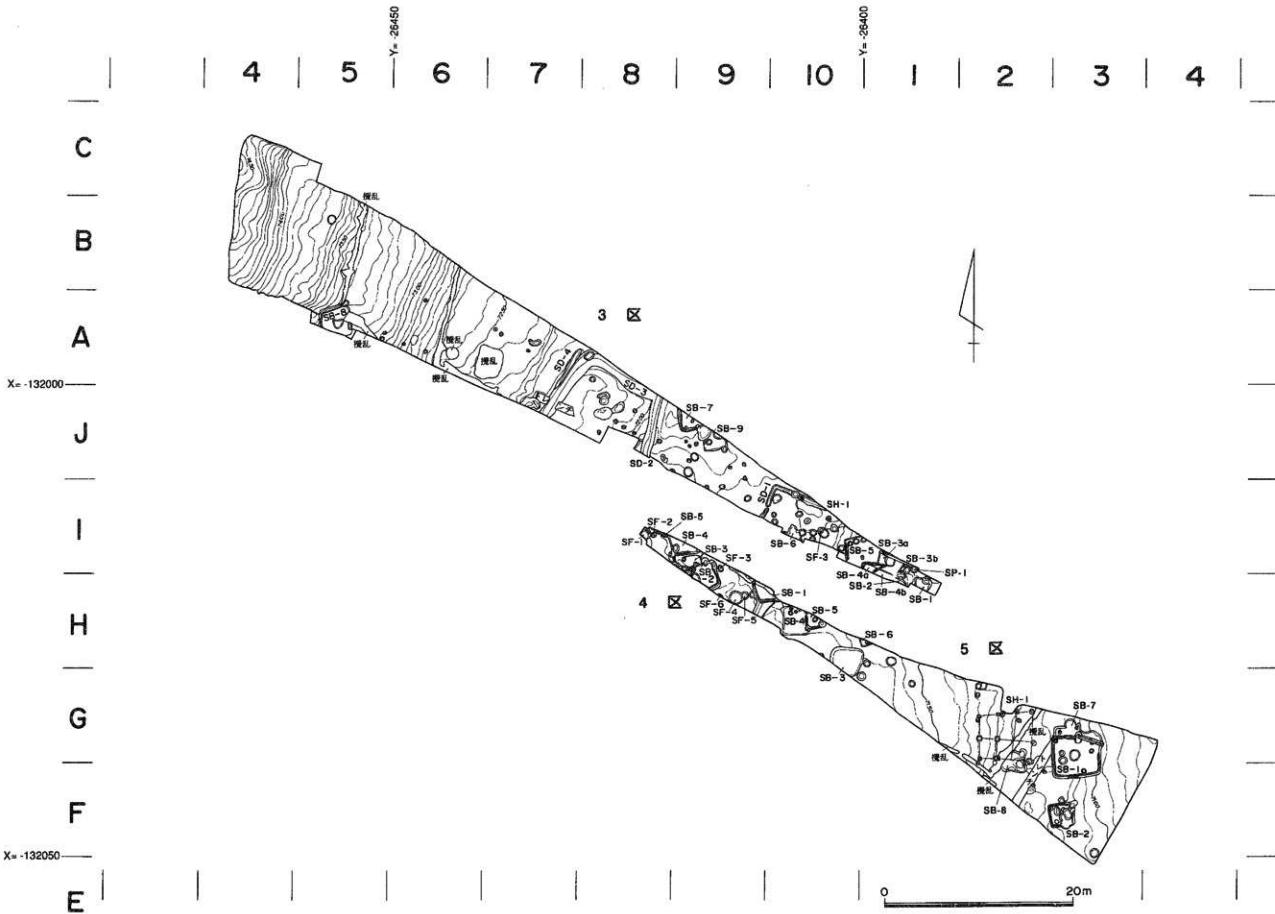
SB-1は30-H1に位置する。平面形はややいびつな方形を呈する。幅は1.81mをはかる。住居の建物方向はN-16°-Eである。SB-1が検出された地点は3区の南東端部で、住居の南壁は調査区外に延びている。床面はあまり堅緻ではなく、貼床も判然としなかった。覆土は暗褐色土でIV層土粒を多く含んでいた。北壁中央部から北東隅部にかけてカマドを検出した。カマド付近には焼上が多く見られたが、袖部の検出は出来なかった。カマドの掘り方も検出している。床面には住居に伴うと思われる柱穴・壁溝ともに検出できなかった。遺物は須恵器・土師器細片が出土している。

#### SB-2~5（第41・42図 写真図版26）

SB-2~5は29-I10・30-II・I1付近で重複して確認された竪穴住居跡群である。掘削調査直前までは4軒と思われた竪穴住居跡も、掘削の結果、調査区南壁・北壁で観察される土層の堆積状況、および確認された壁溝や床面の高低差等から少なくとも6軒程度の竪穴住居跡が重複していたと推定された。またこの区域が極めて狭長なため可能な限り拡張し、SB-4a・bの北西隅部を検出することが出来ている。本項では一連の調査によって得られた各遺構の時期的な前後関係に沿って、遺構の概要を述べてみたい。これらの住居跡からは遺物はほとんど出土していない。他の住居跡の時期や建物の方向から、時期は8世紀代と推定される。

SB-5は29-I10・30-I1に位置する。平面形は方形と思われる。住居の建物方向はN-7.5°-Eである。覆土の16・17層は共に暗褐色土であり、16層にはカーボン粒・焼土粒を多く含んでいた。検出されたのは住居の北壁・西壁の一部であり、東壁・南壁等は当住居が埋没した後に、SB-3a・4aによって破壊されたと思われる。床面は堅緻で、貼床が検出されている。貼床は19層でIV層土を主体としている。壁溝は西壁付近で確認された。北壁付近には確認されていない。断面形はU字形を呈する。床面には住居に伴うと思われるピット(P)が5基検出された。P-5から須恵器壺の破片が出土している。遺物はP-5出土須恵器以外に確認できなかった。住居の時期は出土した土器から8世紀以降と思われる。検出状況からSB-5は、重複した竪穴住居跡群の中で最も早い時期に機能したと推定される。

SB-3aは30-I1に位置する。平面形は方形を呈していたと思われるが判然としない。確認出来るこの住居跡のプランは、SB-5との境界部付近の段差、及び調査区北壁で観察される土層堆積状況のみである。また南壁は検出出来なかつたが、おそらくSB-4aにより破壊されたと思われる。推定される住居のプランから建物方向はN-11.5°-Eと思われる。覆土は14層の黒褐色土である。15層は黒褐色土を多く含む黄褐色土で貼床の可能性がある。壁溝は確認されていない。床面には住居に伴う



第40図 3・4・5区平面図

と思われるピット（P）が1基検出された。また床面中央には住居に伴うと思われる土坑がある。遺物は出土していない。

S B - 4 a は30-H・I 1に位置している。平面形は方形を呈していたと思われるが判然としない。確認できるこの住居跡のプランは調査区南壁から延びる壁溝と、その延長線上に位置するカマドである。カマドの所属については、推定される他の住居跡のプランとカマドとの位置的な関係が自然と思われた点から推定している。前述したように S B - 3 a を破壊している点から時期的に後出と考えられる。壁溝が S B - 4 b の壁溝と接した付近から検出されておらず、また調査区南壁での土層堆積状況の観察の結果、S B - 4 b に時期的に先行するものと推定した。S B - 4 a の建物方向は N - 5.5° - E と推定される。覆土は13層の暗褐色土が堆積している。床面はやや堅緻で、貼床が検出されている。13層の暗褐色土層が貼床層で、IV層土ブロックを多く混ぜている。壁溝の断面はU字形を呈する。床面には住居に伴うと推定される柱穴・土坑は検出できなかった。カマドは S B - 4 a の北東隅部付近にあたる位置で検出された。袖部は遺存していた。袖部内面は被熱のために赤色化していた。カマド内部より土製支脚が1点出土している。遺物は他に出土していない。

S B - 4 b は30-H・I 1に位置している。平面形は方形を呈していたと思われるが判然としない。確認できるこの住居跡のプランは調査区南壁から延びる壁溝のみである。また調査区南壁の上層堆積状況から埋没後に S B - 2 により破壊されているのが観察された。壁溝が調査区南壁付近で屈曲する様子が観察され、またカマドの向きとその位置、遺存状況から S B - 4 b に伴うものでもなかった。S B - 4 a が S B - 4 b に先行する点から、S B - 4 b はカマドを破壊せず、カマドの南東側に東壁を設けていた可能性がある。とすれば S B - 4 b は S B - 1 並の小型の竪穴住居跡であろうか。推定される住居の建物方向は N - 21° - W である。覆土は10層のにぶい黄褐色土でカーボン粒・焼土粒を含んでいる。床面は堅緻で貼床が検出されている。貼床は10層と同じにぶい黄褐色土でIV層土ブロックを含んでいる。壁溝の断面はU字形を呈する。床面には住居に伴うと思われる柱穴・土坑は検出されていない。

S B - 3 b は30-I 1に位置している。調査区北壁の上層堆積状況からその存在が推定される。S B - 3 a の覆土である14・15層を大きく掘り込んでいる。そして貼床層として暗褐色土を含む黄褐色土を充填している。その状況から住居跡北西隅部と推定されるが、判然としない。

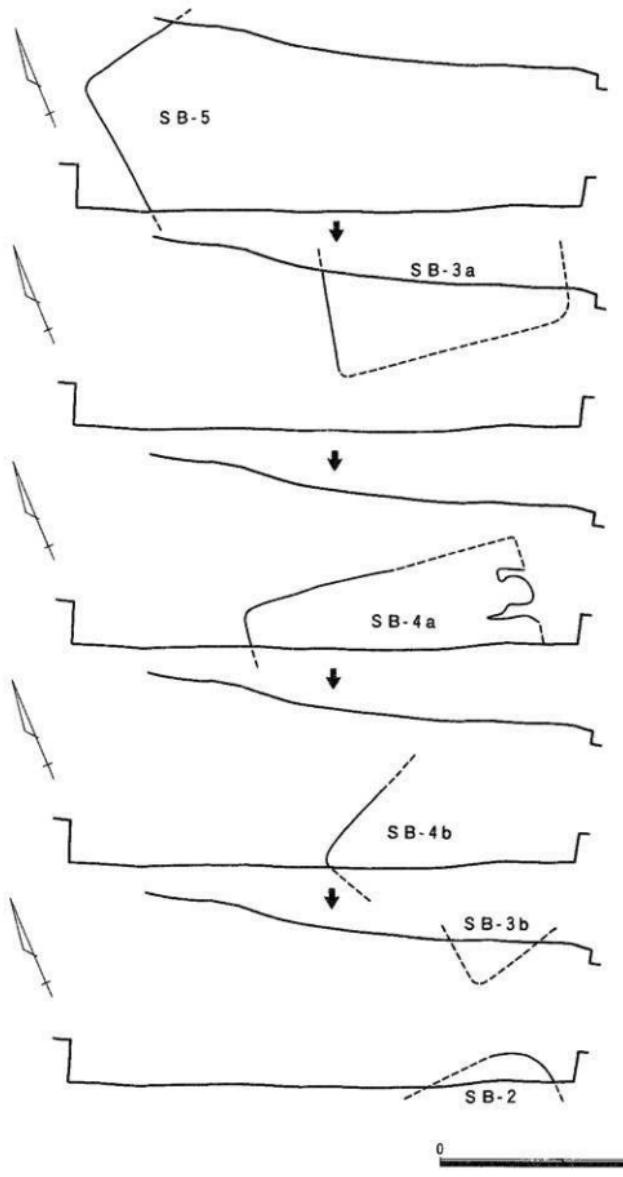
S B - 2 は30-I 1に位置する。平面形は方形を呈すると思われるが判然としない。確認できるこの住居跡のプランは S B - 4 a のカマド付近に見られる北東隅部のプランのみである。カマドの袖部をわずかに削平しており、その延長線上は調査区南壁の土層堆積状況から判断された。覆土は3層の暗褐色土で、IV層土を含む暗褐色土を貼床層としている。

#### S B - 6 (第43図 写真図版27)

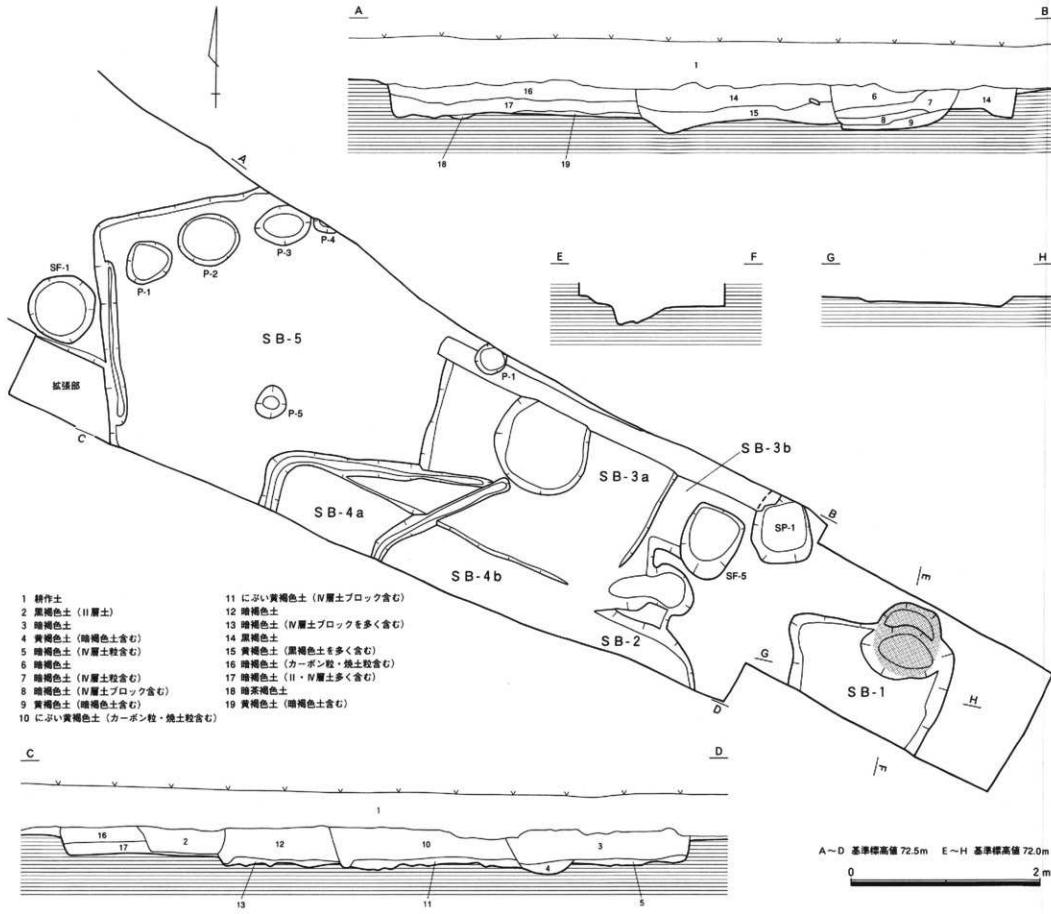
S B - 6 は29-I 10に位置する。平面は方形を呈していたと思われる。遺構平面精査時は調査区南壁際でカマド付近のみ確認した。よって出来る限り調査区を部分的に拡張し、当遺構の状況把握に努めている。この住居の1/2以上は調査区外へ延びている。住居の建物方向は N - 10.5° - W と推定される。覆土は暗褐色土でカーボン粒・焼土粒を含んでいる。床面は堅緻であったが、貼床の存在は判然としなかった。カマドは北壁で確認された。袖部は確認できなかった。カマド焼成部の内壁は被熱のため赤色化していた。カマド内からは上飾器甕がまとめて出土している。住居床面には別個体の土師器甕の破片が見られた。住居の時期は出土した土器から8世紀後葉と推定される。

#### S B - 7 (第44図 写真図版27)

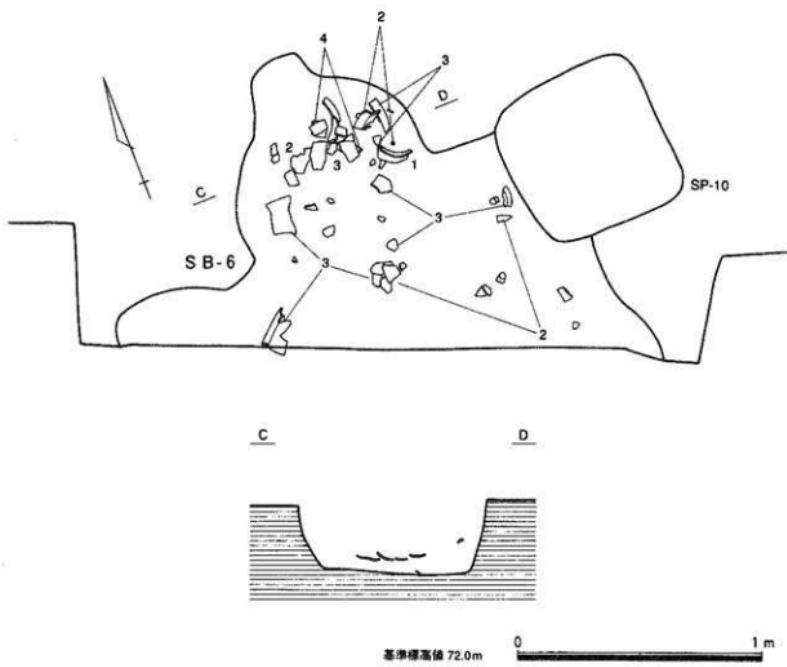
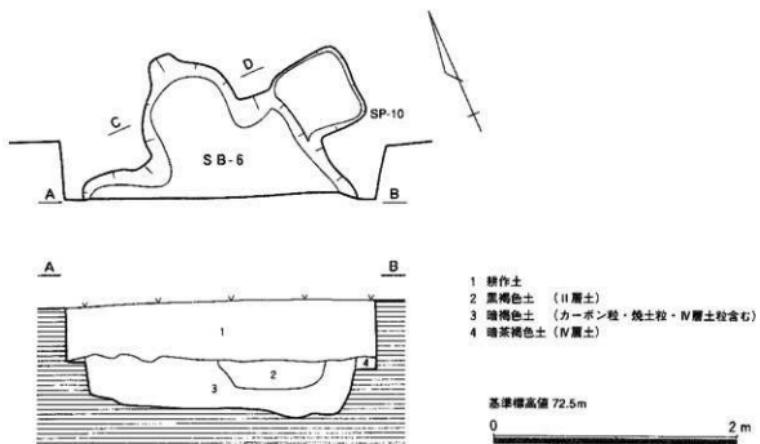
S B - 7 は29-J 9に位置する。平面は方形を呈している。調査区北壁際で検出され、S F - 37の



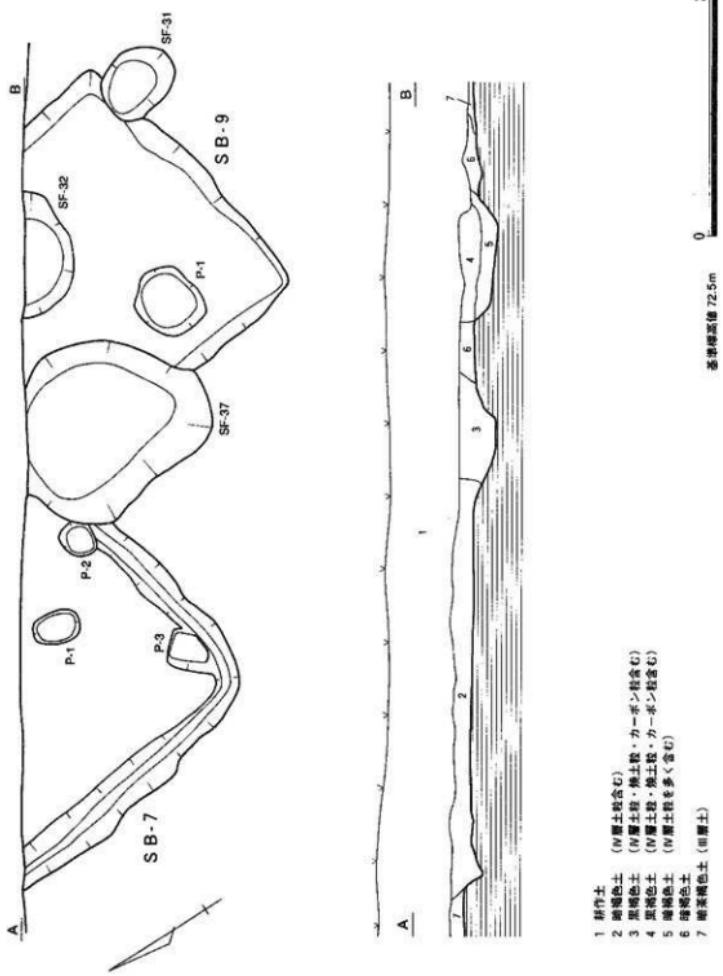
第41図 3区SB-2～5変遷図



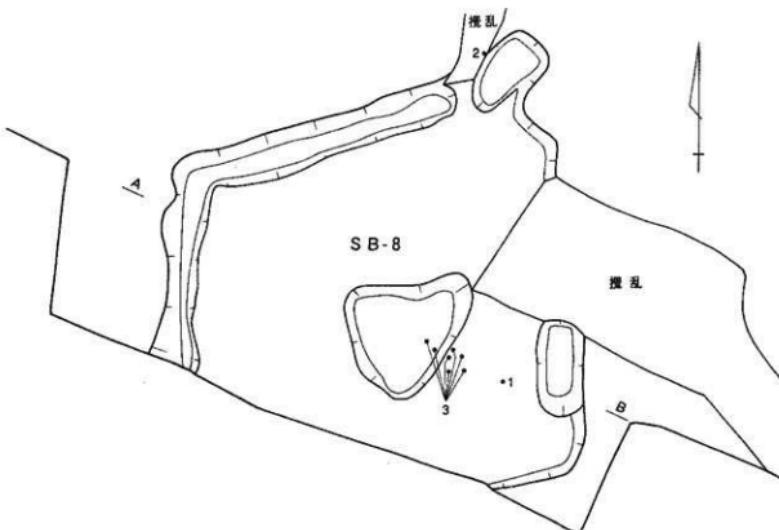
第42図 3区 SB-1～5



第43図 3区SB-6

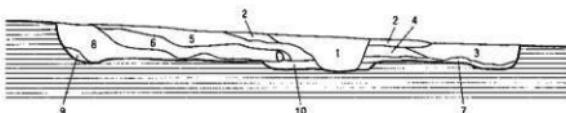


第44図 3区SB-7・9



A

B



- 1 掘乱土
- 2 にぶい黄褐色土 (N層土粒・砂含む)
- 3 暗褐色土 (N層土粒・含む)
- 4 黒褐色土 (IV層土粒・含む)
- 5 にぶい黄褐色土 (N層土粒を多く含む)
- 6 黒褐色土 (II層土)
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土 (砂含む)
- 9 黄褐色土 (N層土)
- 10 暗褐色土 (N層土ブロック含む)

基準標高値 74.0m

0

2 m

第45図 3区SB-8

埋没後に構築された住居である。住居の建物方向はN-7°-Wである。覆土は暗褐色土でIV層土粒を含んでいる。またⅢ層上面からの掘削が調査区北壁の土層堆積状況から観察される。Ⅳ層上面を造構認面としているので、検出した住居の掘り方は全体的に浅い。床面は堅緻ではなく、貼床も確認できなかった。壁構は西壁から南壁にかけて確認している。その断面形はV字形である。床面には住居に伴うと推定されるビット(P)が3基検出された。いずれのビットも浅い。P-2・3については住居南壁沿いの焼溝際に設けられている。遺物は須恵器・土師器等が出土している。時期は8世紀代と推定される。

### S B - 8 (第45図 写真図版28)

S B - 8 は 31-A 5 に位置する。平面は歪んだ方形を呈する。調査区南壁際で検出され、可能な限り調査区を拡張した結果、全体の 4/5 を検出することができた。規模は 2.42 × 3.50 m で、建物方向は N - 12.5° - W である。S B - 8 の周辺は茶畑耕作の影響を受け、わずかな耕作土の下面に IV 層が検出されており、II・III 層は完全に消滅していた。また茶畑地境溝が住居跡を縱断し、別の擾乱が住居中央部、および東壁を破壊しているなど、全体的に住居の遺存状態は良好ではない。住居の床面はあまり堅緻ではない。8 層の暗褐色土層が床面上に部分的に薄く堆積していたが、貼床層とは判断できなかった。床面積は 8.1 m<sup>2</sup> はあったものと推定される。壁溝は北壁と西壁、および東壁の一部で観察された。その断面は浅い絶形を呈し、幅も他の住居跡の壁溝と比較しても広い。カマドは北東隅部に 1 基検出した。前述した茶畑地境溝により擾乱されており遺存状態は不良であった。袖部は検出できなかった。付近には焼土粒を含んだ土の堆積が少し見られた。床面には住居に伴うと推定される土坑を 1 基検出した。覆土は暗褐色土で IV 層土ブロックを含む。掘削後に埋められたと思われる。遺物は須恵器・土師器等が出土している。住居の時期は出土した土器から 8 世紀後葉と推定される。

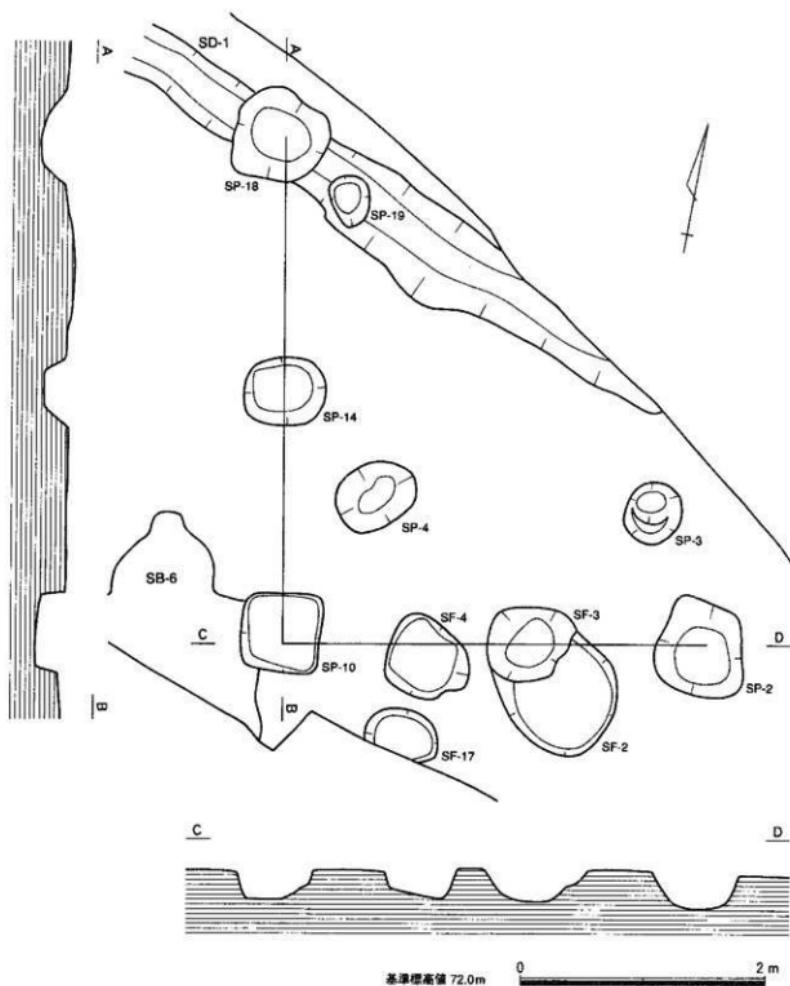
### S B - 9 (第44図 写真図版27)

S B - 9 は 29-J 9 に位置する。平面は方形を呈し、幅は 2.50 m をはかる。S B - 7 と同様、調査区北壁際で検出された。S F - 37 により西壁が大きく破壊され、また S F - 31・37 も重複していた。さらに S B - 9 は III 層上面からの掘削が確認されたが、遺構確認面を IV 層上面としているので、わずかに遺構の掘り方が確認出来たにすぎないので、全体的に遺存状態は良好ではなかった。遺構構築順序は S B - 9・S F - 37・S B - 9 と思われる。住居の建物方向は N - 9.5° - W である。床面はあまり堅緻ではなく、貼床は検出されていない。床面には住居に伴うと推定されるビット (P) が 1 基検出した。遺物は須恵器・土師器が出土している。時期は 8 世紀代と推定される。

### 掘立柱建物跡 (S H)

#### S H - 1 (第46図 写真図版28)

S H - 1 は 29-I 10 に位置する。建物方向は N - 10° - W である。南北方向は 2 間分、東西方向は 1 間分を検出した。この遺構は調査区北壁際で検出されたため、どの程度調査区外へ延びているのか不明である。また S P - 18 は S D - 1 を掘削した時点で確認されたため、時期的に S H - 1 が先行するものと思われる。また S P - 10 は S B - 6 の北東隅部を破壊しており、S B - 6 よりも後出と思われる。西面の S P - 18・14、S P - 14・10 の各柱間距離は 2.1 m、南面の S P - 10・2 の柱間距離は 3.5 m をはかる。柱穴の掘り方の平面は方形～不定形を呈し、径 0.7 m 程度である。深さは 0.2～0.3 m と比較的浅い感がある。底面の標高値は 71.5 m 程度である。遺物は S P - 10 から土師器細片が出土している。S H - 1 の所属時期は、重複する S B - 6 が 8 世紀後葉と推定される点、および建物方向が近似し、ある程度の位置的距離をおく S B - 7・9 の所属時期から勘案して、8 世紀後葉以降と推定される。



第46図 3区SH-1

#### 4区（第40図 写真図版30）

4区は29-I 8から29-II 10の間に展開する調査区である。調査は平成10年度に実施している。実掘面積は46m<sup>2</sup>をはかる。調査区の平面は狭長な長方形を呈し、長さは約17m、幅は1~3m程度で、今回の報告する調査区の中では最も小規模といえる。東側は5区と接し、公道を挟んで北側には3区が展開している。この小規模な調査区内には平安時代の堅穴住居跡5軒、溝状遺構等が検出され、遺構の分布としては濃密と言えるだろう。

#### 堅穴住居跡（SB）

##### SB-1（第47図 写真図版30）

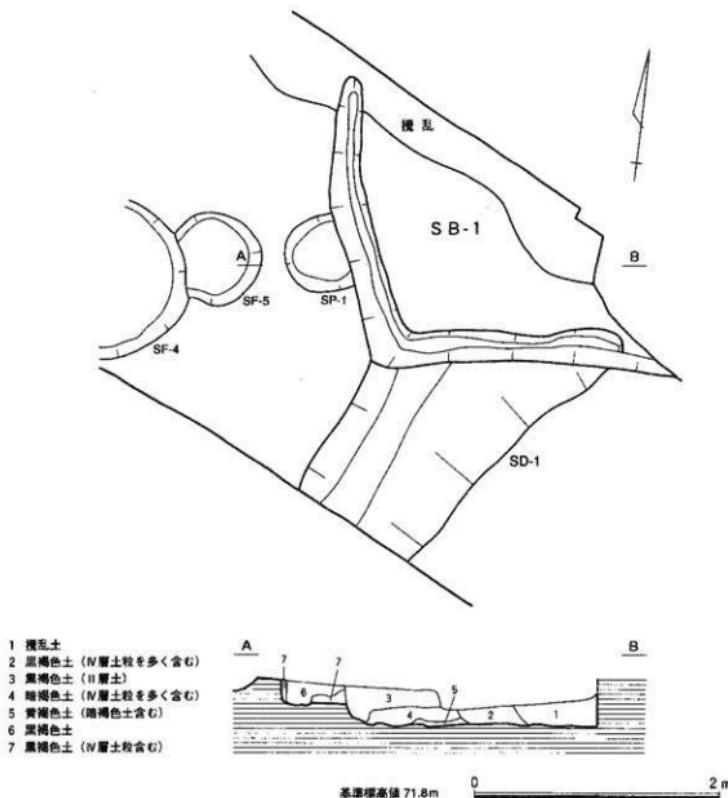
SB-1は29-H 9・10に位置する。平面は方形を呈していたと思われる。この住居跡は調査区北壁際で検出されており、住居跡の東壁・北壁など大半の部位は調査区外に広がっているが、調査区北側に敷設された公道や茶畠の石垣により既に破壊されているものと思われる。住居の埋没後にSD-1により一部破壊されている。遺存状態は良好ではない。住居の建物方向はN-6.5°-Wである。床面は堅緻ではなく、貼床も検出できなかった。壁溝は西壁・南壁沿いに検出されている。その断面はU字形を呈する。西壁にはSP-1を削平している。遺物は灰釉陶器の破片が出上している。住居の時期は出土した土器から9世紀前半と推定される。

##### SB-2（第48図 写真図版31）

SB-2は29-H・I 9に位置する。平面は方形を呈するが、北東隅部は土坑状の掘り込みを有しているため、瘤状の突起が見られる。調査区南壁際で検出されたため、住居跡北西隅部から南西隅部にかけて調査区外へ広がっている。また北側に位置するSB-3を削平している。住居跡の建物方向はN-17.5°-Wで、奥行きは3.12mをはかる。床面はやや堅緻であるが、貼床は判然としなかった。壁溝は北東隅部の土坑から南壁にかけて認められる。断面は浅い箱形を呈する。カマドは北壁に3基確認された。東寄りのカマドは袖部がわずかに残置する。袖部はIV層上粒を多く含んだ暗褐色上で構築され、右袖部には細粒砂岩礫をカマド構築材として使用している。カマド焼成部内面は被熱のため赤色化している。カマド内には土製支脚が出土している。中央部のカマドは切り合ひ関係から東側のカマドよりも古い段階のカマドと推定された。IV層上粒を多く含む墨褐色土を使い、周囲に焼土粒が見られた。カマドはもう1基調査区南壁際で検出された。このカマドはSB-2が埋没後に新しく作られた堅穴住居跡に伴う可能性がある。調査区南壁の上層堆積状況では8・10・11層を土体としたSB-2の覆土が4・5層を覆土とする遺構により切られている。この遺構はSB-2床面に見られる土坑状の掘り込みを形成している。またカマドの付近に見られた6層の褐色土がカマド構築土で、16層がカマド掘り方の充填土であるならば、このカマドはこの遺構に伴う可能性が強い。とすれば4・5層はSB-2よりも新しい時期の堅穴住居跡の覆土と言える。周囲にはSB-2や5区SB-1のようにカマド横、特に北東隅部に土坑状の掘り込みを有し、平面では瘤状の突起を有する住居が見られる。とすれば床面に見られた土坑状の掘り込みは上記の遺構である可能性がある。床面には住居跡に伴うと推定されるビット(P)が1基検出されている。遺物は灰釉陶器細片・土師器壺・壺等が出土している。住居の時期は出土した土器から9世紀前半と推定される。

##### SB-3（第49図 写真図版32）

SB-3は29-I 9に位置する。平面は方形を呈していたと思われる。この住居跡はSB-2により南半部を削平され、また北半部はSB-4により削平されている。また調査区南壁際ではSF-3と

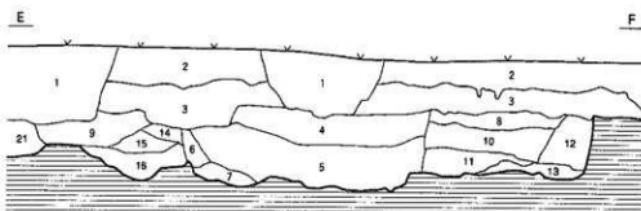
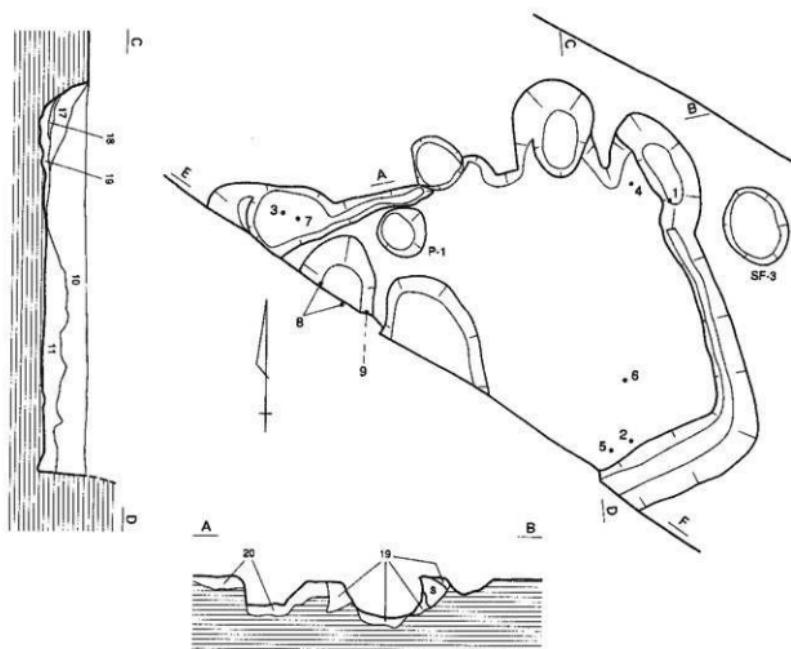


第47図 4区SB-1

重複している。住居跡の建物方向はN-8°-Wと推定される。西壁沿いには豊溝が観察される。遺構の深さは0.1mに満たない。方形状の掘り込みがSB-2・4の間に認められるが、SF-3からSB-4方向に延びる壁溝とは位置的に合うものではない。この方形状の掘り込みは本来SB-3の掘り方であったと思われる。床面には住居に伴うと推定されるビット(P)が認められたが、極めて浅く判然としない。覆土はIV層上粒を含む黒褐色土で、本来は貼床土であった可能性がある。山土遺物は十師器の細片が出土しているに過ぎない。住居の時期はSB-2・4に時期的に先行する点から、8世紀後葉から9世紀にかけてと思われる。

#### SB-4 (第49図 写真図版32)

SB-4は29-I 8・9に位置する。平面は方形を呈していたと思われる。遺構は調査区北壁際で検出され、住居の東壁から北壁にかけて調査区外に広がるが、公道敷設の際に破壊されているものと思われる。住居南東隅部にはSP-3と重複し、住居西壁の調査区北壁際ではSB-5と接している。建物



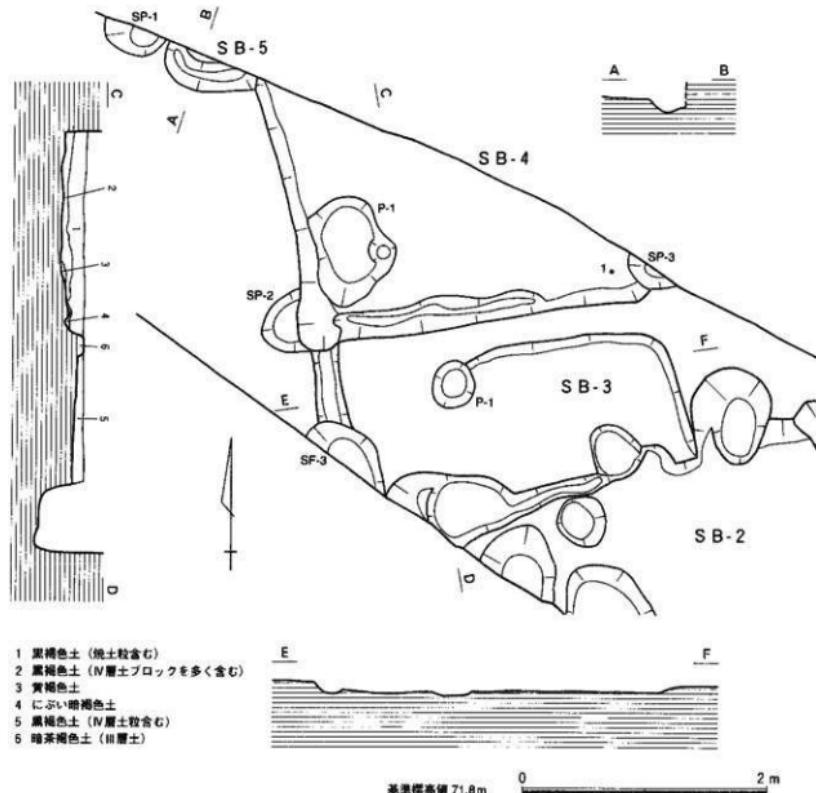
- |                            |                          |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 混乱土                      | 11 路褐色土 (IV層土粒含む)        |
| 2 種作土                      | 12 路褐色土 (IV層土粒を多く含む)     |
| 3 黒色土 (II層土)               | 13 褐色土 (IV層土粒を多く含む)      |
| 4 褐褐色土                     | 14 褐色土 (カーボン粒・焼土粒含む)     |
| 5 路褐色土 (IV層土粒含む)           | 15 にぶい黃褐色土 (カーボン粒・焼土粒含む) |
| 6 黄褐色土                     | 16 路褐色土 (カーボン粒含む)        |
| 7 路褐色土 (カーボン粒・焼土粒・IV層土粒含む) | 17 黒褐色土 (焼土ブロックを多く含む)    |
| 8 路褐色土 (II層土粒・IV層土粒含む)     | 18 路褐色土 (カーボン粒を多く含む)     |
| 9 黑褐色土 (II層土粒・IV層土粒含む)     | 19 路褐色土 (IV層土粒を多く含む)     |
| 10 黑褐色土 (II層土粒含む)          | 20 黒褐色土 (IV層土粒を多く含む)     |
|                            | 21 雨茶褐色土 (III層土)         |

A～D 基準標高値 72.0m

E～F 基準標高値 72.5m



第48図 4区SB-2



第49図 4区SB-3～5

方向はN-10°-Wで、覆土は黒褐色土である。床面はあまり堅緻ではなかったが、貼床と推定されるのが2層の黒褐色土層である。IV層上プロックを多く含んでいる。壁溝は南壁沿いに一部観察できる。その断面はU字形を呈する。遺物は灰釉陶器・須恵器等が出土している。住居の時期は出土した灰釉陶器から9世紀前半と推定される。

#### SB-5 (第49図)

SB-5は29-I-8に位置する。この造構は調査区北壁際で検出された。その検出状況から竪穴住居跡の南西隅部と推定される。東側にはSB-4が位置しており、重複しているものと思われるが、時期的な前後関係は不明である。床面には壁溝が確認される。断面形はU字形を呈する。遺物は灰釉陶器と須恵器の細片が出土している。住居の時期は出土した遺物から9世紀代と推定される。

### 5区（第40図 写真図版33）

5区は29-H10から30-F10までの間に展開した調査区である。調査は平成10年度に実施している。実掘面積は328m<sup>2</sup>をはかる。調査区の長さは42m、幅は2.5~15m程度で、調査区の平面はいびつな二等辺三角形状を呈する。調査区には茶畠耕作の影響は概して少なかった。調査区の公道を挟んで北側には畑縁のファームボンドが位置している。なお調査区東端部は平成12年度に調査を行った6区と重複する。この調査で奈良時代末期から平安時代の堅穴住居跡8基、掘立柱建物跡1棟を検出した。これまでの調査区では山茶碗の出土が散見されたが、この調査区内ではほとんど出土していない。

#### 堅穴住居跡（SB）

##### SB-1（第50・51図 写真図版34・35）

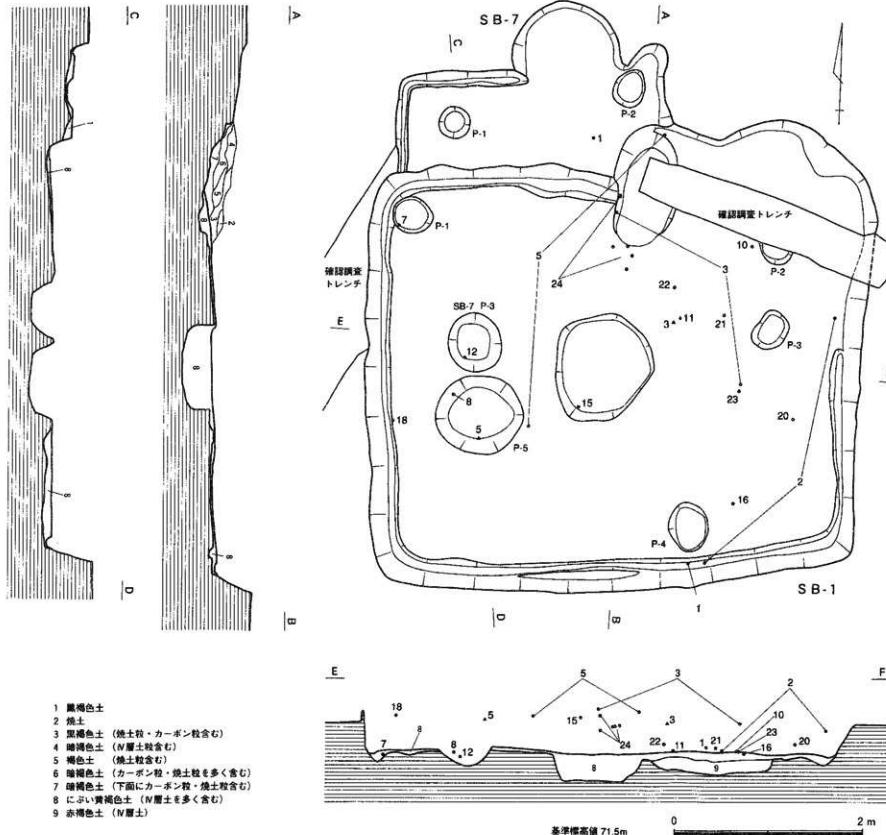
SB-1は30-F・G3に位置する。平面は北東隅部が瘤状に肥大しているため、いびつな方形を呈している。規模は5.28×5.08mをはかる。住居の建物方向はN-1°-Eである。住居は平成9年度のトレンチによる確認調査の際にすでに把握されていた。北壁側にSB-7と重複している。床面は堅緻で、貼床を検出した。床面積は18.95m<sup>2</sup>をはかり、中原遺跡で検出した堅穴住居跡の中で、最も大きな部類に入る。壁溝はカマドと北東隅部以外の壁沿いに認められた。断面は概ねU字形を呈している。カマドは北壁中央部に確認された。袖部は検出できなかった。床面には住居に伴うと推定されるビット（P）が6基検出された。南壁中央部付近に見られるP-4については界障施設に伴う遺構の可能性がある。また住居中央部にある土坑状の掘り込みは、本来住居掘り方中央部にある床下上坑のプランが、浮き出ているものである。この住居では掘り方が明瞭に検出された。住居四隅を低く掘り込み、床面には円形の土坑を穿つ。貼床はIV層土に由来するもので、掘り方を掘削した際の堆土を再度、貼床土として利用している。住居の覆土は暗褐色～黒褐色土で、カーボン粒・焼土粒・IV層土粒を多く含む。また覆土中から灰釉陶器・須恵器・土師器等の細片が大量に出土している。この住居跡は埋められた可能性がある。住居の時期は出土した灰釉陶器から8世紀末以降と推定される。

##### SB-2（第52図 写真図版36）

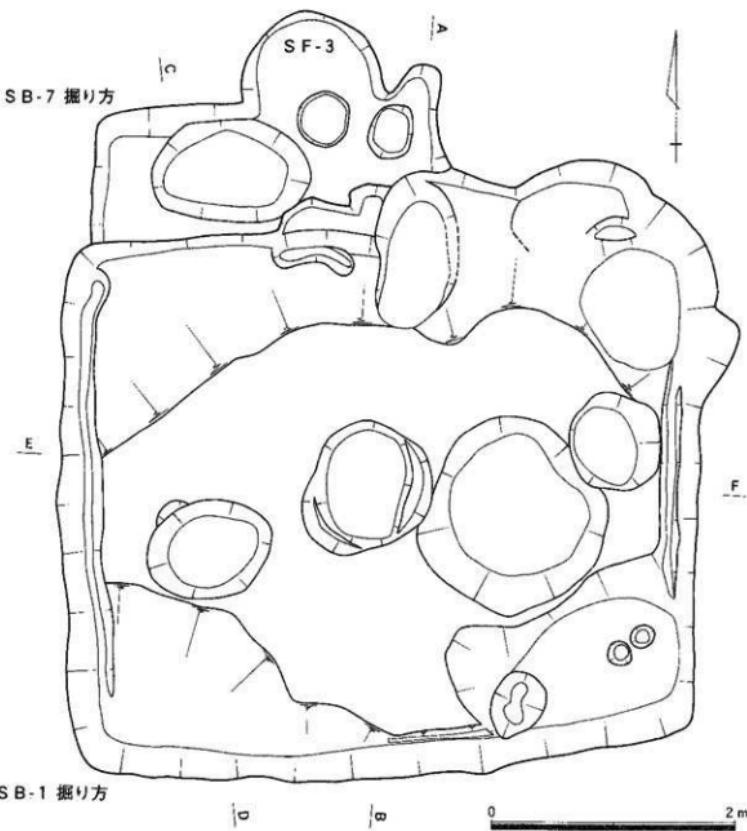
SB-2は30-F3に位置する。平面形は方形を呈する。南壁はSF-9と重複している。一部、カマド付近に攪乱が見られた。規模は2.87×2.55mである。住居の建物方向はN-7.5°-Wである。床面は堅緻ではなく、貼床は住居内の土坑付近に認められたのみである。床面積は4.80m<sup>2</sup>と推定される。カマドは北東隅部に1基、北壁中央部に1基確認した。北壁中央で確認されたカマドの床面は住居床面より高く、他のカマドとは構造的に異なっていたと思われ、北東隅に新たなカマドが設けられた際に埋められている。北東隅部で確認されたカマド付近にカマドの構築土と思われる褐色土の堆積が若干見られる。床面には住居跡に伴うと推定されるビット（P）が3基検出されている。また床下土坑と思われる土坑が狭い床面に3基見られ、どれもIV層土ブロックを含む褐色土系の土を充填されている。壁溝は北東隅部以外は全周していたと思われる。遺物はカマド2付近に上師器窓が出土している。住居跡の時期はSB-1と同じ時期と推定される。

##### SB-3（第53図 写真図版37・38）

SB-3は29-G・H10、30-H1に位置する。平面形はいびつな方形を呈すると思われる。住居跡南西隅部が調査区南壁外へ広がっている。規模は3.46×3.67mである。住居跡の建物方向はN-7°-Eである。床面はあまり堅緻ではない。貼床も判然としなかった。床面積は6.91m<sup>2</sup>と推定される。床面にはビット・カマド・壁溝等は確認出来なかった。住居内の覆土は黒褐色土が主体であるが、覆土



第50図 5区SB-1+7

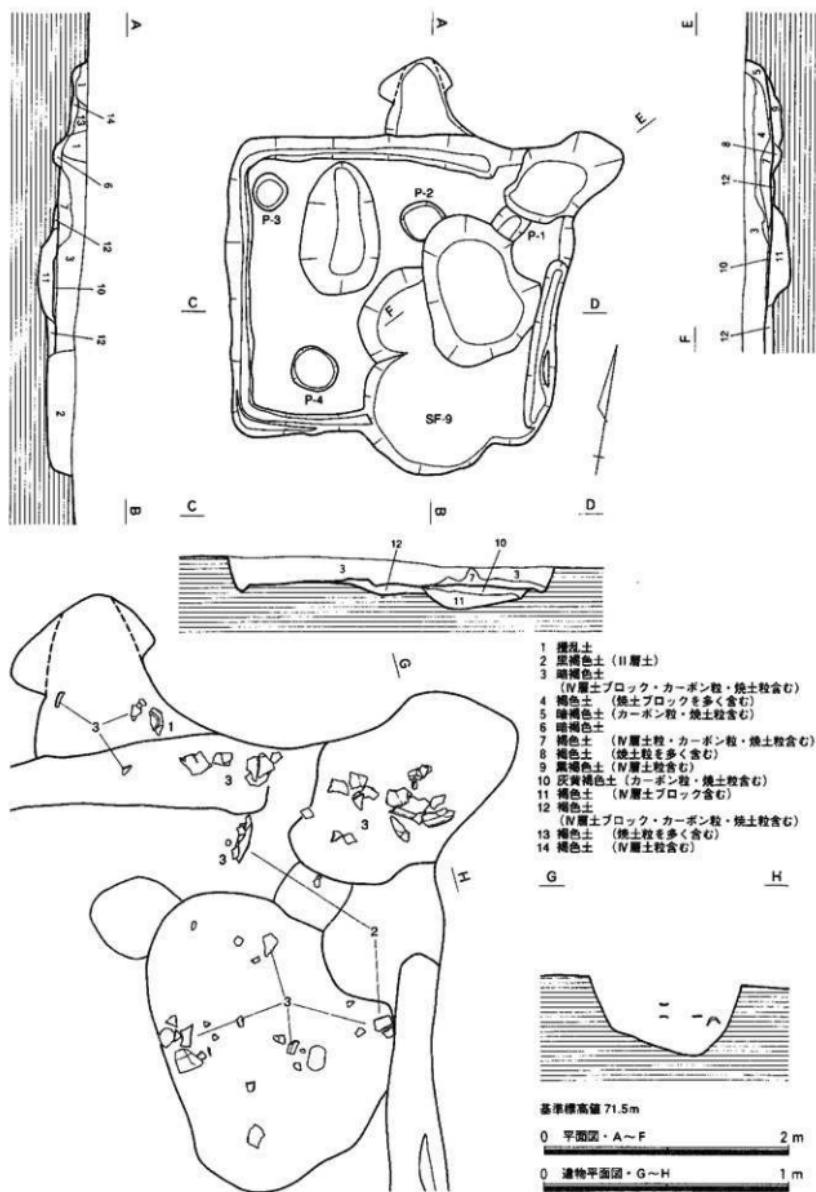


第51図 5区SB-1・7 挖り方

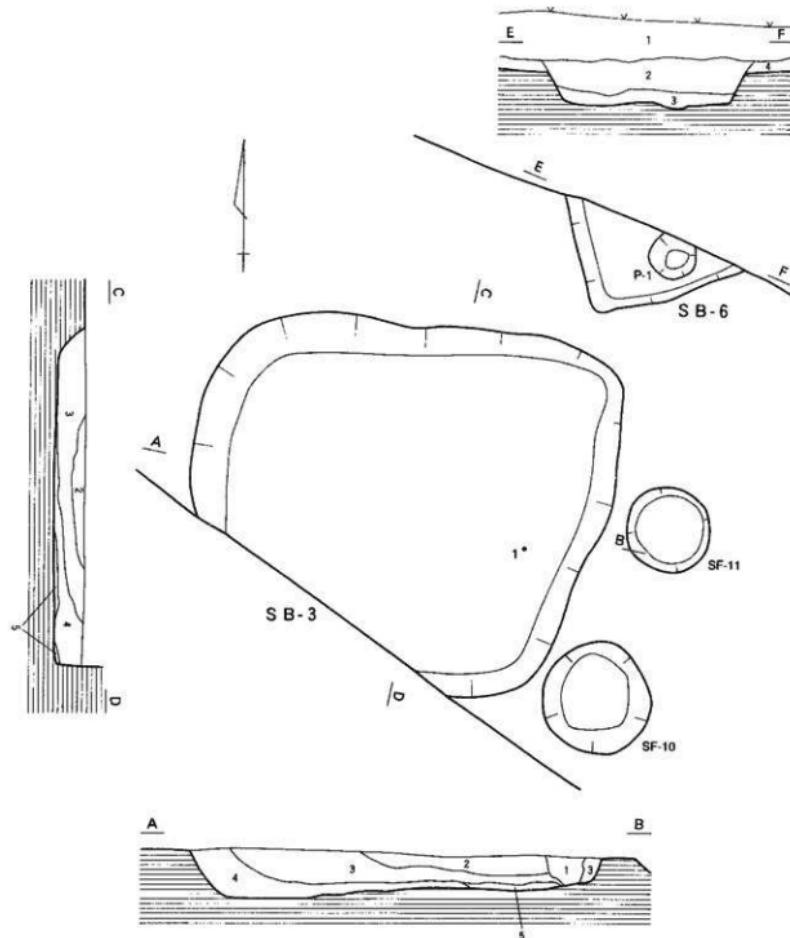
上位の焼上粒等を多く含む2層には土師器細片が多く見られた。時期は9世紀代と推定される。

#### SB-4 (第54図 写真図版37)

SB-4は29-H10に位置する。平面は方形を呈すると想われる。幅は2.09mをはかる。建物方向はN-2°-Wである。この住居跡は調査区北壁際で検出され、北半部は調査区北壁から外へ延びる。また住居跡西壁はSB-5と重複している。遺構確認時では中心部にSF-14が重複していた。床面はあまり堅微ではなく、貼床も検出できなかった。壁溝は南壁沿いに検出された。またSB-5の床面でも西壁沿いに設けられた壁溝と推定される溝状遺構が見られる。断面はU字形を呈する。住居に伴うと推定されるピット(P)は3基確認された。P-2・3については南東隅部・南東隅部に見られる。加えて住居自体が小規模である点も勘案すれば、上屋構造に他の住居との違いがある可能性がある。遺物は土師器・須恵器細片が出上している。住居の時期は他の住居跡の状況から9世紀代と推定される。

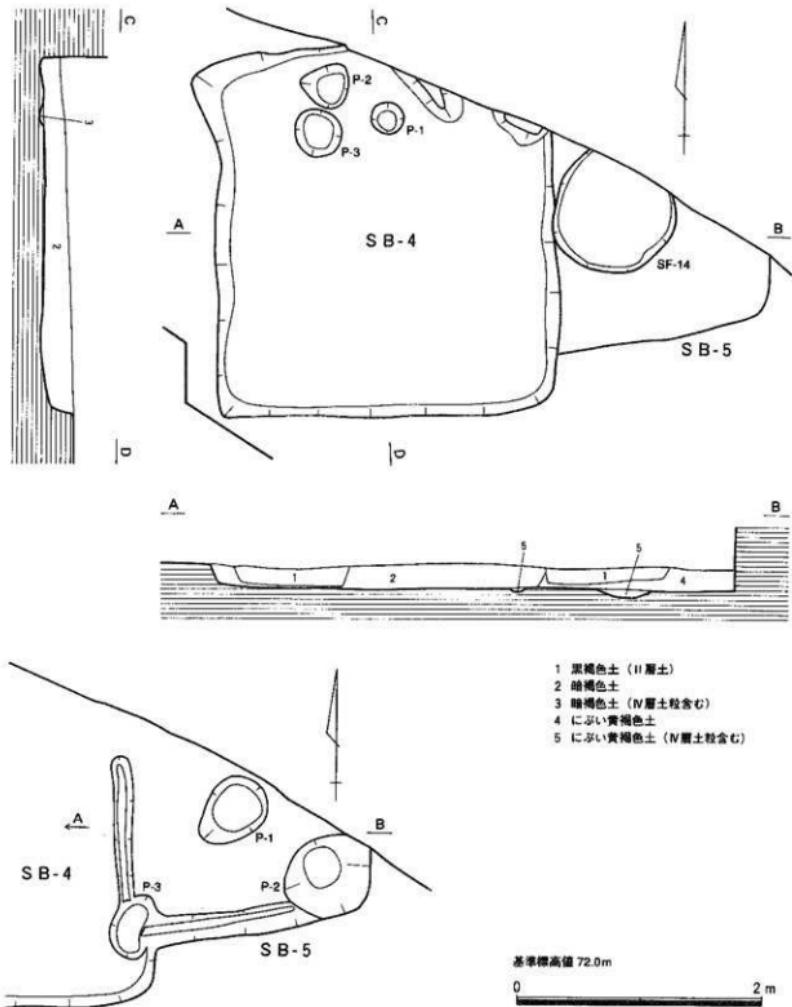


第52図 5区SB-2

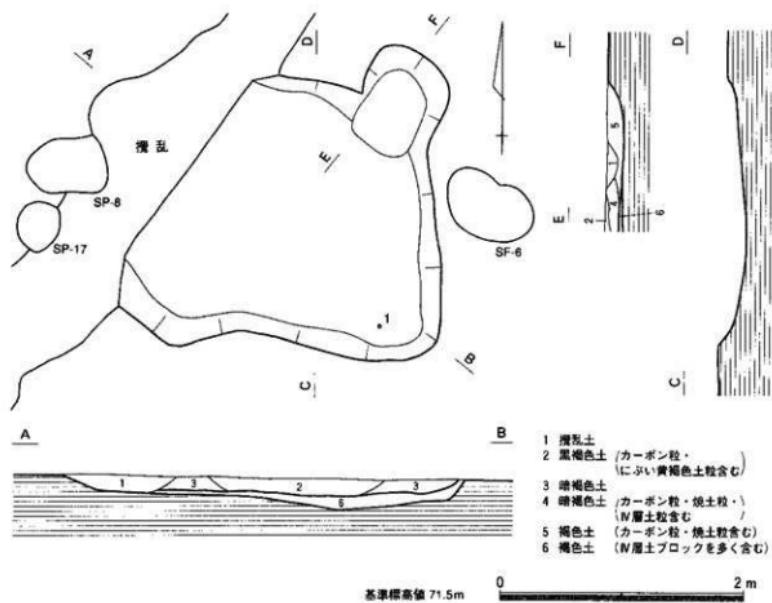


基準標高 71.8m 0 2 m

第53図 5区SB-3・6



第54図 5区SB-4・5



第55図 5区SB-8

#### SB-5 (第54図 写真図版37)

SB-5は29-II 10に位置する。平面は方形を呈すると思われる。規模は $2.98 \times 3.11$ mで、建物方向はN-7°-Wである。住居跡北東隅部が調査区北壁から外に広がる。住居跡東壁はSB-4と重複している。時期的にSB-4よりも古い。床面はあまり堅緻ではなく、貼床も検出できなかった。カマドは北東隅部付近に1基確認しているが、大半は調査区北壁外に広がる。袖部を一部検出している。床面には住居に伴うと思われるピット(P)を3基検出したが、いずれも北半部に集中している。壁溝は確認されていない。覆土は暗褐色土である。遺物は須恵器・土師器細片が出土している。住居の時期は他の住居跡の状況から9世紀代と推定される。

#### SB-6 (第53図 写真図版38)

SB-6は30-H 1に位置する。南西隅部のみの検出で、大半の部分は調査区北壁の外へ広がる。公道敷設の際に破壊されているものと思われる。平面は方形を呈すると思われる。床面はあまり堅緻ではなく、貼床も検出できなかった。壁溝は確認できなかった。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)が1基検出された。住居の覆土は暗褐色土である。遺物は土師器・須恵器の細片が出土している。住居の時期は他の住居跡の状況から9世紀代と推定される。

#### SB-7 (第50・51図 写真図版35)

SB-7は30-F 3に位置する。平面は方形を呈する。南半部はSB-1と重複している。また北壁中央部はSF-3により破壊されている。住居の幅は2.98mをはかる。住居の建物方向はN-3.5°-W

である。床面はあまり堅緻ではない。貼床は一部認められた。北東隅部にカマドが1基確認されたが、袖部等は検出できなかった。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)が2基検出された。壁溝は西壁・北壁に見られる。その断面はU字形を呈する。遺物は覆土中で土師器壺等が出土している。住居跡の時期は8世紀後葉から9世紀代と推定される。

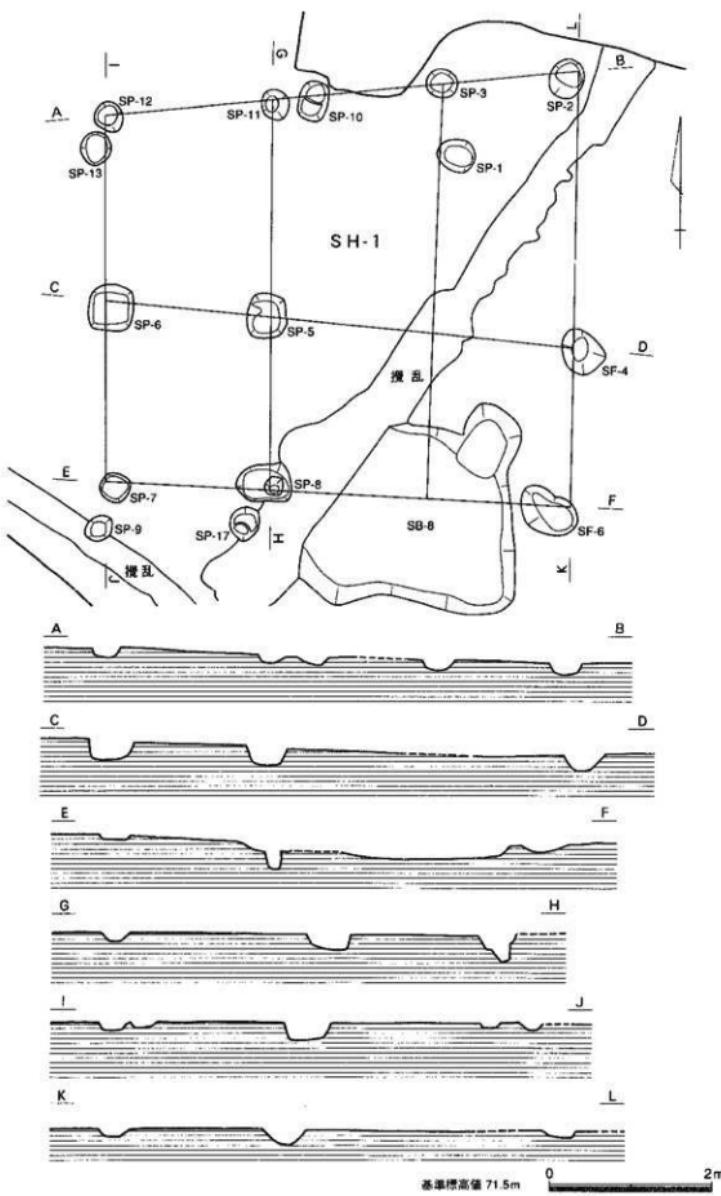
#### S B - 8 (第55図)

S B - 8 は30-F・G 2 に位置する。調査時は堅穴住居跡として認識できず、方形土坑としていた。規模は2.85×2.32mで、建物方向はN-5°-Eである。北西隅部が茶畠の地境溝で破壊されていた。S H - 1との重複関係は判然としない。床面はあまり堅緻ではなかったものの、IV層土ブロックを含んだ褐色土が貼床層と推定される。床面にはピットおよび壁溝は検出できなかった。カマドは北東隅部で1基確認した。袖部は検出できなかった。遺物は須恵器・土師器・内黒土器が出土している。住居の時期は9世紀代と推定される。

#### 掘立柱建物跡 (S H)

##### S H - 1 (第56図)

S H - 1 は30-G 2 に位置する。調査時には掘立柱建物跡として認識できなかった。建物方向はN-1°-Eである。東西・南北方向ともに2間分検出した。この建物跡の北東から南西にかけて茶畠の地境溝が伸び、S B - 8 も建物跡の南半部付近に位置する。S B - 8 との重複関係は判然としない。S H - 1 の各柱間距離はばらつきがあり、建物の平面形状も台形に近い。柱穴の掘り方は円形～不定形を呈し、直徑0.2mから0.4mとばらつきがある。深さは0.1～0.2mで、底面標高値は概ね71.2m程度である。柱穴の覆土は黒褐色土でしまりが良い。遺物はS F - 4・6、S P - 5より土師器細片が出土している。S H - 1 の所属時期は東側に位置するS B - 1 の建物方向が一致している点から9世紀前半と推定される。



第56図 5区SH-1

## 6区（第57図 写真図版39）

6区は30-D4から39-I1までの間に展開した調査区である。調査は平成12年度に実施している。実掘面積は1580m<sup>2</sup>をはかる。調査区の長さは101m、幅は15m程度である。また市道部の調査も併せて実施している。それが30-B1付近で長さは20m、幅は6m程度である。従って調査区の平面は直線的な本線部に市道部が直交するため、狭長な長方形にあたかも楔を打ち込んだかのような感を示す。調査区には茶畠耕作の影響が色濃く、本線部南東半部、および市道部は全面的に破壊されているが、Ⅲ・Ⅳ層面が所々遺存しており、柱穴が確認されている。竪穴住居跡の分布が30-D6を中心とした区域に限定されており、遺物の出土傾向から、調査区南東半部には竪穴住居跡は存在しておらず、もともと遺構の希薄な区域であった可能性があろう。また排上中から山茶碗・貿易陶磁器が少量ながら散見されるが、これらと同時期の遺構は判然としない。30-E4を中心とした区域に柱穴が散見されるが、これらが後期の遺構である可能性がある。多くがⅡ層を基調とした覆土を有しており、並びが判然としない。この調査区からは竪穴住居跡が8軒、溝状遺構、土坑、柱穴が検出された。調査区北東端部で縄文土器が多く出土している。調査区北西半部ではⅢ層は上下2層に分層され、竪穴住居跡が検出されたのはⅢ層上層下面で、それから上位の層はほとんど茶畠耕作のため消失していた。ここでは竪穴住居跡・溝状遺構、及び縄文調査区について触れてみたい。

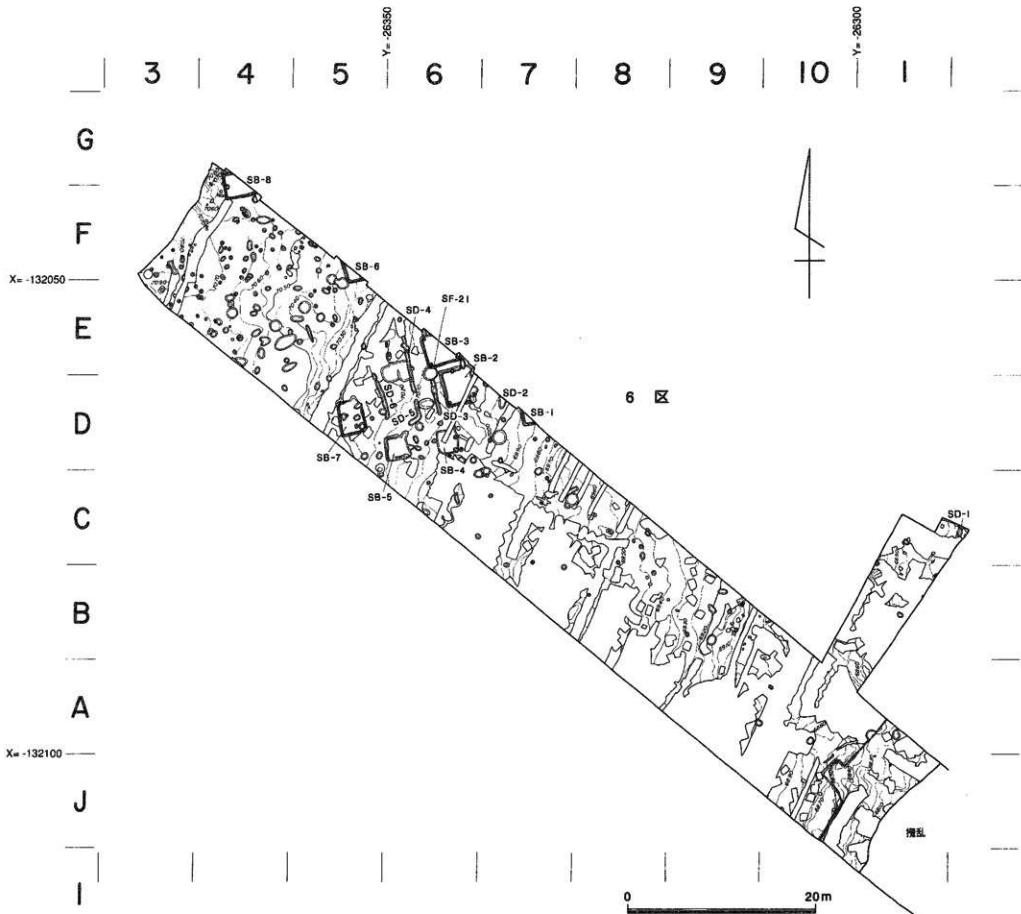
### 竪穴住居跡（SB）

#### SB-1（第59図 写真図版40）

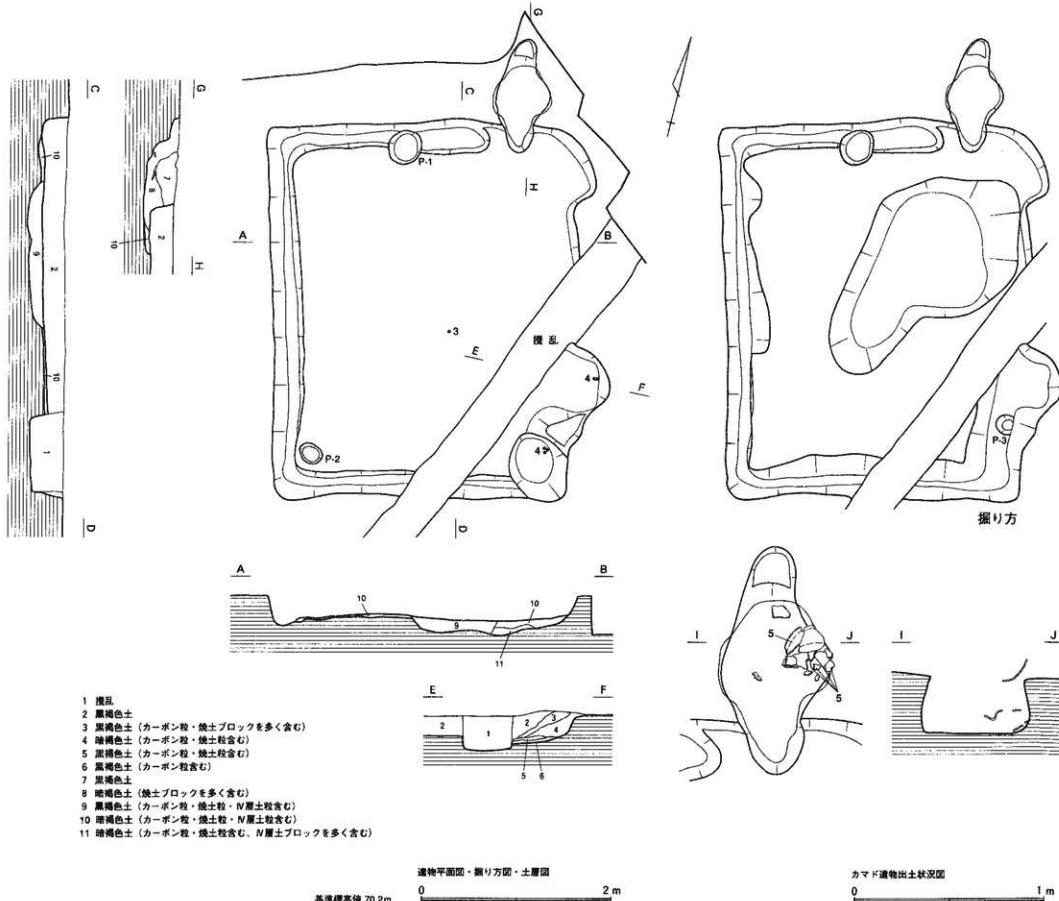
SB-1は30-D7に位置する。調査区北壁際で検出され、おそらく面積の3/4以上は調査区外に延びているものと思われる。住居の建物方向はN-11°-Wである。床面はあまり堅緻ではなく、貼床は判然としなかった。壁溝の断面は概ねU字形を呈している。住居の覆土は黒褐色土で、カーボン粒と小礫を含む。住居跡周辺は茶畠耕作の影響は薄く、Ⅱ・Ⅲ層が遺存していた。住居跡はⅢ層上層上面で検出し、調査区北壁での土層堆積状況からⅡ層上面から竪穴住居跡が掘削されていたが判明している。遺物はほとんど見られなかった。時期は9世紀代と推定される。

#### SB-2（第58図 写真図版41）

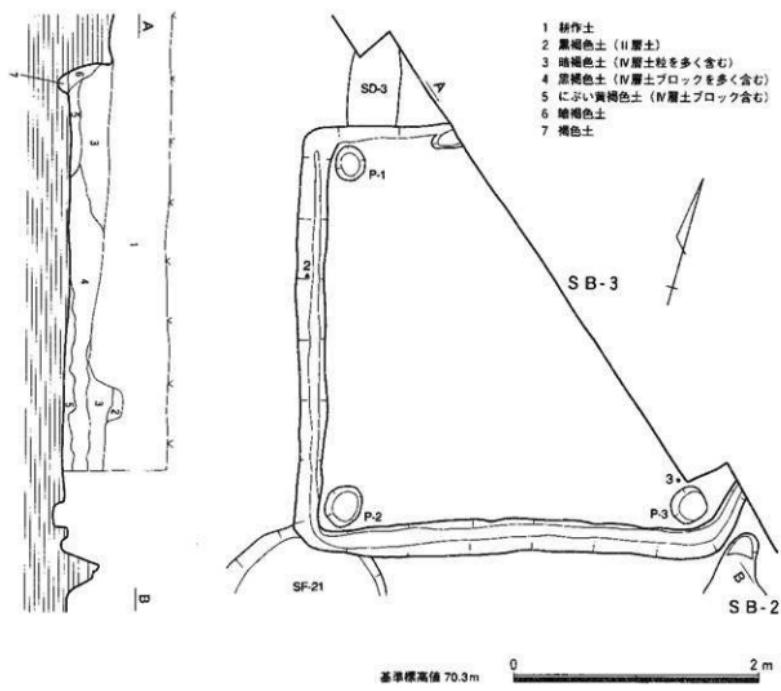
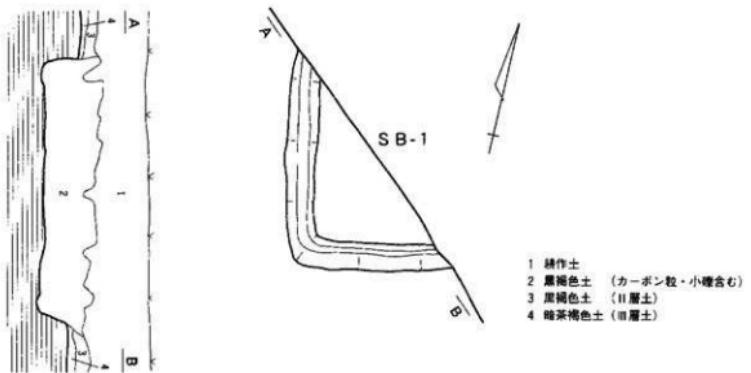
SB-2は30-D・E6に位置する。平面形は概ね方形を呈する。規模は3.28×4.05mである。住居の建物方向はN-14.5°-Wである。住居跡には北東から南西へ切り込むように茶畠に伴う搅乱が見られた。床面は堅緻で、貼床を検出した。床面積は9.5m<sup>2</sup>と推定される。カマドは北壁北東隅部際に1基、東壁南東隅部際に1基確認した。東壁に見られるカマドは搅乱で一部破壊されているが、袖部の基部が残置していた。住居跡南東隅部には上坑状の掘り込みがあり、カマドと隣接している点から、貯藏穴の可能性がある。カマド内覆土には焼土が多く見られ、底部には炭層に由来すると思われる黒褐色土層がわずかに観察された。北壁に見られるカマドは前者と異なる構造を持つ。前者が住居東壁から半円形に突き出るのに対し、平面形が中位付近が膨張した長楕円形に地山を掘削している。北端は段を有している。またカマド中位付近に上師器壺破片がまとめて出土している。このことから土器が散見される付近に窓を安置していた可能性を有する。そのため竪穴住居自体の壁状の構造物が住居跡北壁よりも北側へ0.5m程の位置に設けられた可能性がある。またこのカマドは住居最終機能時には埋められていたようであり、東側のカマドのみ機能していたものと思われる。床面には住居跡に伴うと推定されるピット(P)が2基、貼床層下部に1基検出されている。P-3はカマド構築材の痕跡の可能性がある。床下坑は住居跡床面北東部に見られる。この土坑は最初、IV層土ブロックを含む褐色土系の土を充填された後、掘り直され黒褐色土が充填されている。壁溝は東壁沿い以外は全周していたと思われたが、貼床



第57図 6区平面図



第58図 6区SB-2

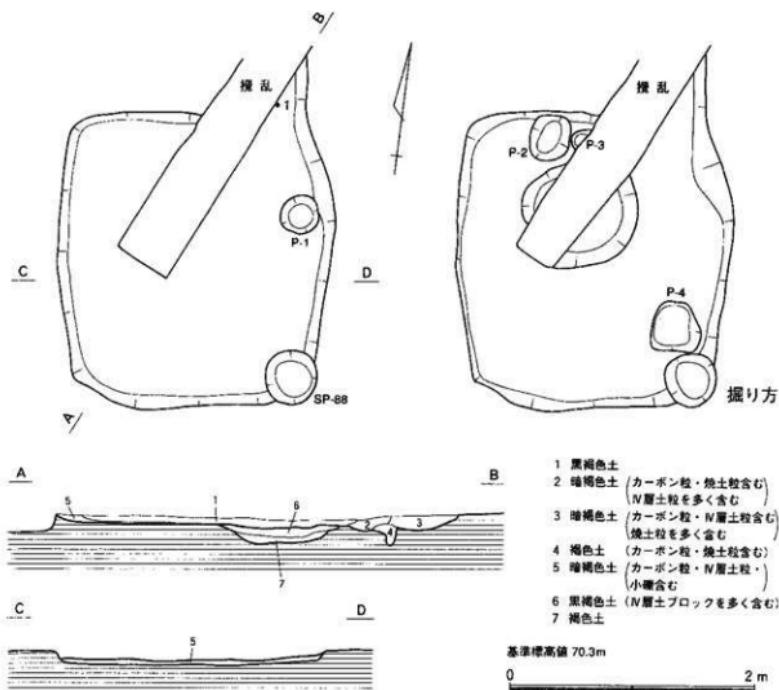


第59図 6区 SB-1(上)・3(下)

除去後に東壁カマド付近に壁溝の痕跡が確認された。よって東壁のカマドはSB-2構築当初は作られていなかったものと思われる。遺物はカマド付近で土師器甕が出土している。住居の時期は9世紀代と推定される。

#### SB-3 (第59図 写真図版42)

SB-3は30-E 6に位置する。調査区北縁際で検出され、住居跡北東隅部を中心に全体の1/3程度が調査区外に延びているものと思われる。平面形は方形を呈すると思われる。規模は3.62×3.54mである。住居跡の建物方向はN-17.5°-Wである。床面はあまり堅緻ではない。貼床も判然としなかった。床面積は10.3m<sup>2</sup>と推定される。壁溝は住居跡北西隅部を除いて全周するものと思われる。断面はU字形を呈する。住居に伴うと推定されるピット(P)は3基確認された。それぞれ住居跡隅部で見られたが、深さは7~8cm程度でやや浅い感がある。住居内の覆土は暗褐色~黒褐色土が主体である。IV層土粒・ブロックが多く含まれていた。この住居跡からは灰釉陶器・土師器・刀子・砥石が出土した。住居の時期は9世紀前半と推定される。ただし隣接するSB-2とはその遺構間距離が狭すぎるため、同時期に営まれた可能性は無いものと思われる。



第60図 6区SB-4

#### S B - 4 (第60図 写真図版42)

S B - 4 は 30-D 6 に位置する。平面は方形を呈すると思われる。住居跡には北東から南西にかけて切り込むように擾乱が見られる。規模は  $2.26 \times 2.45$ m をはかる。建物方向は N - 6° - W である。住居跡南東隅部には S P - 88 が重複している。床面はあまり堅緻ではなかったものの、貼床を検出した。壁溝は検出されていない。住居に伴うと推定されるビット (P) は 4 基確認された。P - 1 は浅く、柱穴として機能していた可能性は薄い。カマドは住居跡北東隅部に痕跡が見られるが、大部分擾乱で破壊されている。床下土坑は 1 基確認され、IV 層土ブロックを多く含む黒褐色土を充填している。遺物としてはカマド付近に土師器甕が出土している。住居の時期は 9 世紀前半と推定される。

#### S B - 5 (第61図 写真図版43)

S B - 5 は 30-D 6 に位置する。平面は方形を呈する。規模は  $2.67 \times 2.70$ m で、建物方向は N - 10.5° - W である。床面は堅緻で、貼床を検出している。床面積は  $4.1\text{m}^2$  をはかる。カマドは住居跡北東隅部に 1 基、東壁中央部に 1 基確認している。東壁中央部で検出したカマドは床面が住居跡床面より高く、他のカマドとは構造的に異なっていたものと思われる。この構造は 5 区 S B - 2 北壁中央部に見られるカマドと似る。覆土は焼上粒を含んでいる。袖部は確認されていない。住居跡北東隅部にあるカマドには土師器甕が出土している。住居に伴うと思われるビット (P) は確認されていない。壁溝は北壁・西壁・南壁に見られる。床下土坑は 1 基確認されている。遺物は灰釉陶器・土師器細片が出土している。住居の時期は 9 世紀前半と推定される。

#### S B - 6 (第62図 写真図版44)

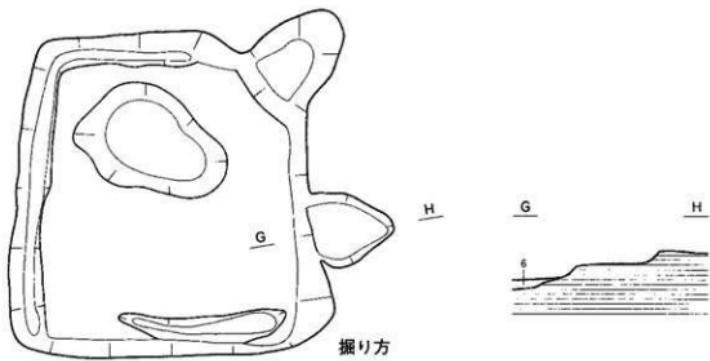
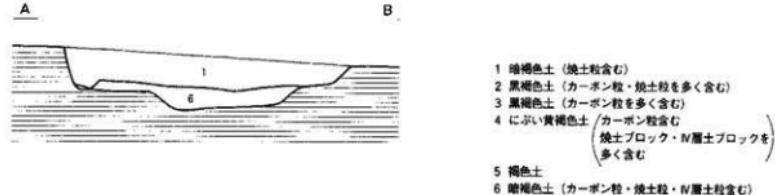
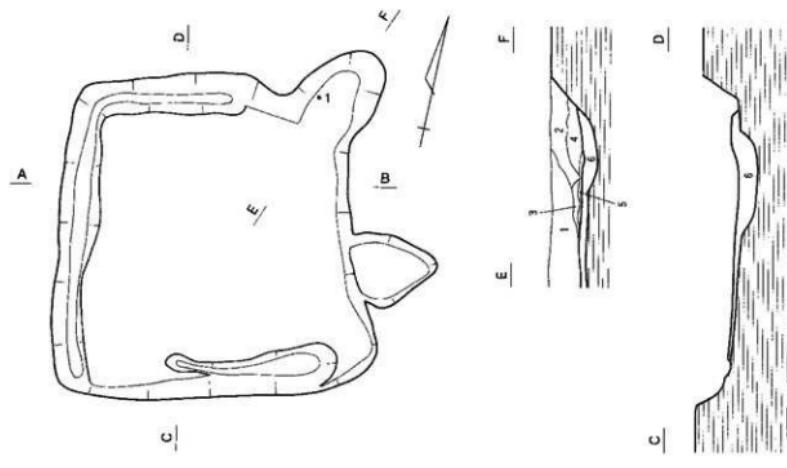
S B - 6 は 30-F 5 に位置する。南西隅部のみの検出で、大半の部分は調査区北壁の外へ広がる。平面は方形を呈すると思われる。建物方向は N - 20° - W である。床面はあまり堅緻ではなく、貼床も検出できなかった。覆土は II 層を基準とした土の流入が認められる。壁溝は確認された。その断面は U 字形を呈する。床面には住居に伴うと推定されるビット (P) は確認されていない。遺物は土師器・須恵器の細片が出土している。住居の時期は 9 世紀代と推定される。

#### S B - 7 (第63図 写真図版45)

S B - 7 は 30-D 5 に位置する。規模は  $2.85 \times 3.7$ m で、建物方向は N - 15° - W である。平面はいびつな長方形である。住居跡周辺は茶畑耕作に由来する擾乱が多く、住居自体の遺存状態も良好ではなく、遺構確認面では住居跡床面がほとんど露出していた。床面はあまり堅緻ではないものの貼床は確認された。カマドは北壁中央部から東寄りの位置に 1 基、東壁でも北東隅部寄りの位置に 1 基確認された。両者共カマド床面のみの検出である。床面には住居に伴うと推定されるビット (P) が 2 基検出された。壁溝はカマド周辺以外の部域の壁沿いに見られ、断面は U 字形を呈する。床下土坑からは内黒土器が出土している。住居の時期は 9 世紀代前半と推定される。

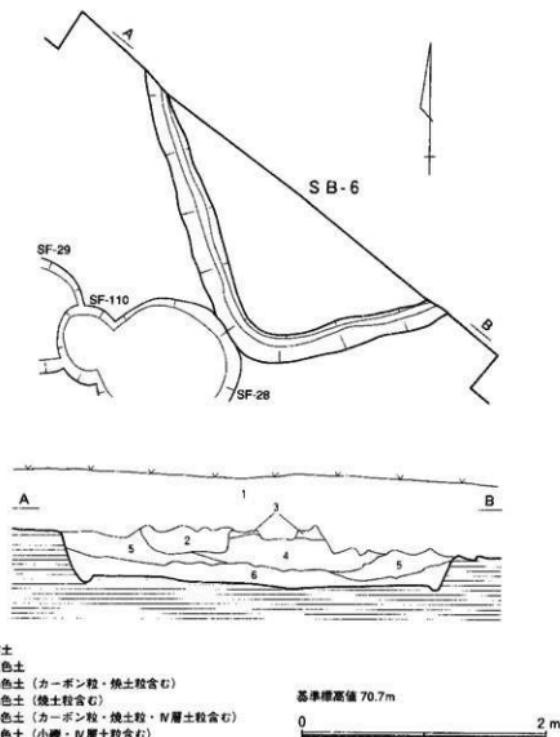
#### S B - 8 (第64図 写真図版46)

S B - 8 は 30-F・G 4 に位置する。調査区北壁際で検出され、おそらく面積の約 1/2 が調査区外へ延びているものと思われる。奥行きは  $2.8$ m をはかる。建物方向は N - 10° - W である。この住居跡は茶畑の地境溝や重機等で擾乱を受けており、遺存状態は良好ではない。北壁中央部付近に S F - 113 を検出しているが、擾乱のため住居跡との時期的な前後関係は判然としない。床面は比較的で堅緻であったが、貼床は判然としなかった。床面には住居に伴うと推定されるビット (P) が 1 基検出している。



基準標高値 70.4m 0 2 m

第61図 6区SB-5



第62図 6区SB-6

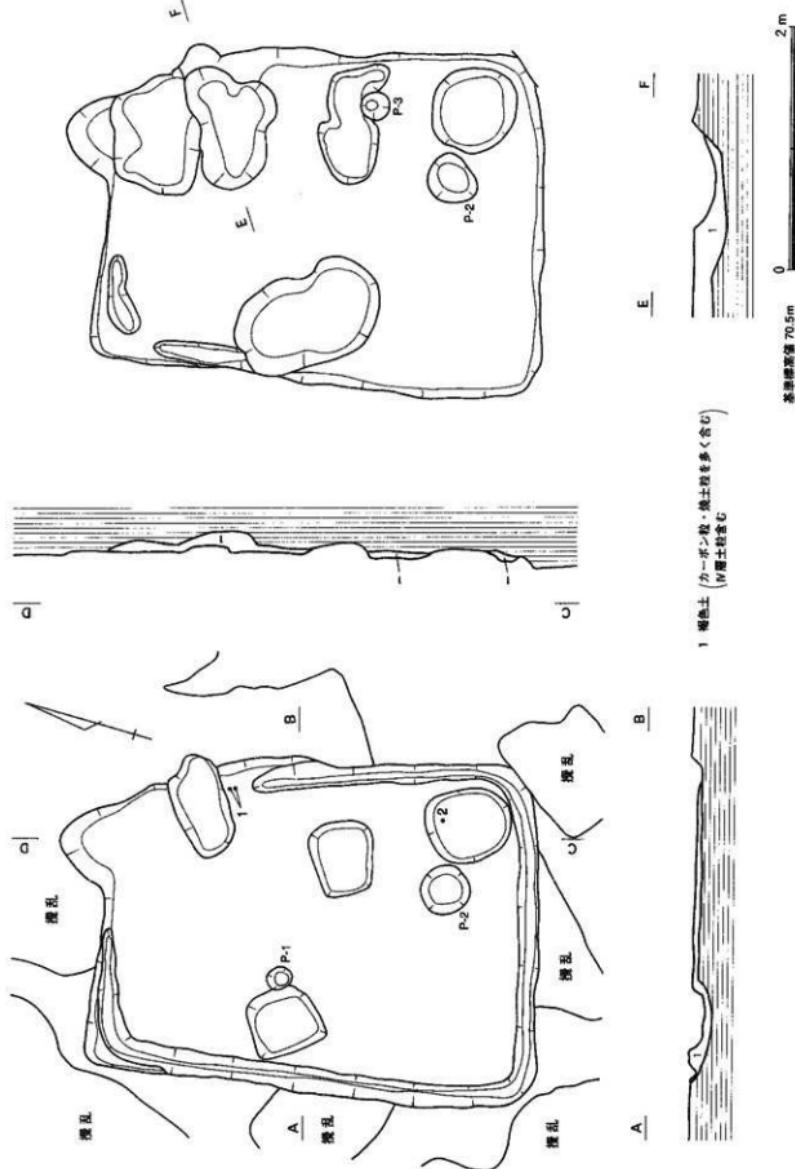
壁溝は全周するものと思われる。断面はU字形を呈する。遺物は須忠器・土師器細片が出上している。住居の時期は5区SB-1との位置も勘案すれば9世紀代と推定される。

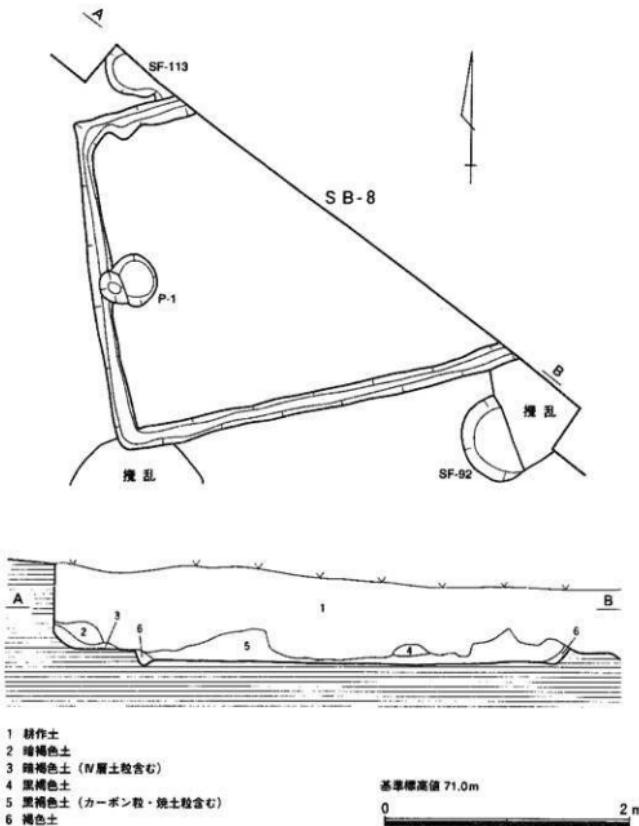
#### 溝状遺構 (SD)

##### SD-3～6 (第65図)

SD-3～6は30-D 5、D・E 6に位置している。SD-3はN-11.5°-Wの方向へ直線的に延びる。調査区北壁付近でSB-3・SF-18と重複する。時期的にSD-3が先行する。SD-3の断面形は皿状を呈する。調査区北壁付近では深さ15cmで、底面標高値は69.99mをはかる。溝状遺構の最南端部では深さ9cm、底面標高値69.96mをはかる。底面はほぼ水平である。幅は最大0.4mである。覆土は暗褐色土でカーボン粒・N層土粒を含む。SD-4・5は本来は同一遺構であったと思われる。SD-3と同様、N-11.5°-Wの方向へ直線的に延びる。SD-4中央部でSF-22・23・34、SP-21・22と重複する。時期的にSD-4が先行する。SD-5はSF-43と重複する。時期的にSD-5が先行する。SD-4の覆土は暗褐色土でカーボン粒を含む。SD-4の断面は逆台形を呈する。幅は最大0.4mである。SD-4北端部では深さ9cm、底面標高値は70.09mをはかる。SD-5北端部

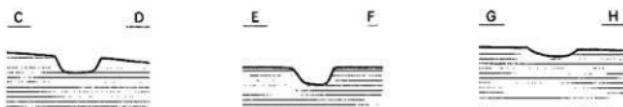
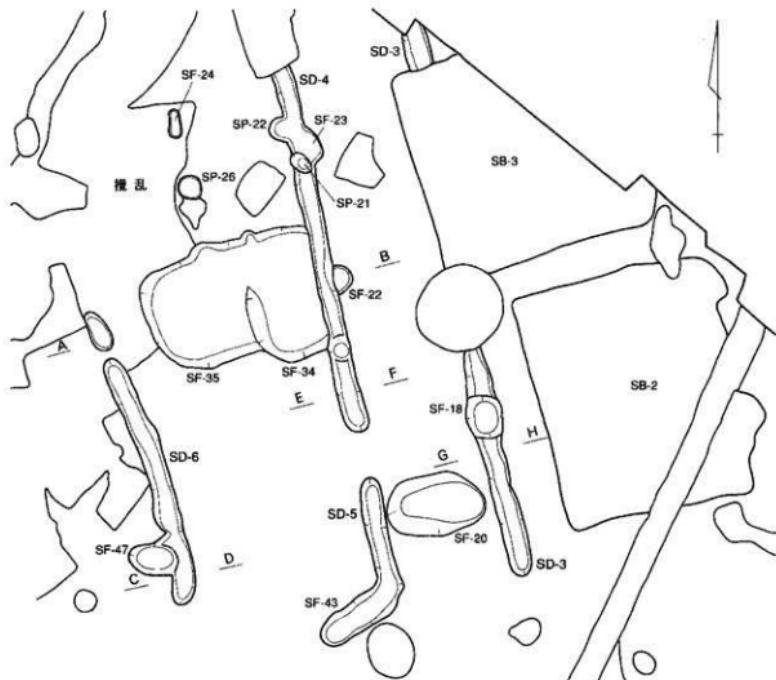
第63図 6区SB-7





第64図 6区SB-8

付近では深さ15cm、底面標高値は69.96mをはかる。底面はやや水平である。SD-6はSD-3～5とは異なり、N-20°-Wの方向へ延びる。南端部付近でSF-47と重複する。時期的にSD-6が先行する。SD-6の断面は逆台形を呈する。SD-6の北端部付近では深さ9cm、底面標高値は70.16mをはかる。南端部付近では深さ3cm、床面標高値70.17mである。幅は最大0.4mである。これらの溝状遺構のうち、SD-3～5については延びる方向が同一で、並行して延びる点からセットとして考えることができる。遺構の性格としてまず想起されるのが道路の側溝であるが、硬化域は全く残っておらず判然としない。遺構の所属時期は遺物が出土しておらず判然としない。しかしSD-3がSB-3により破壊されている点から8世紀代に遡る可能性がある。



基準標高値 70.4m

- 1 黒褐色土（カーボン粒・焼土粒を多く含む）
- 2 黒褐色土（カーボン粒・焼土粒・小礫含む）
- 3 灰褐色土
- 4 灰褐色土

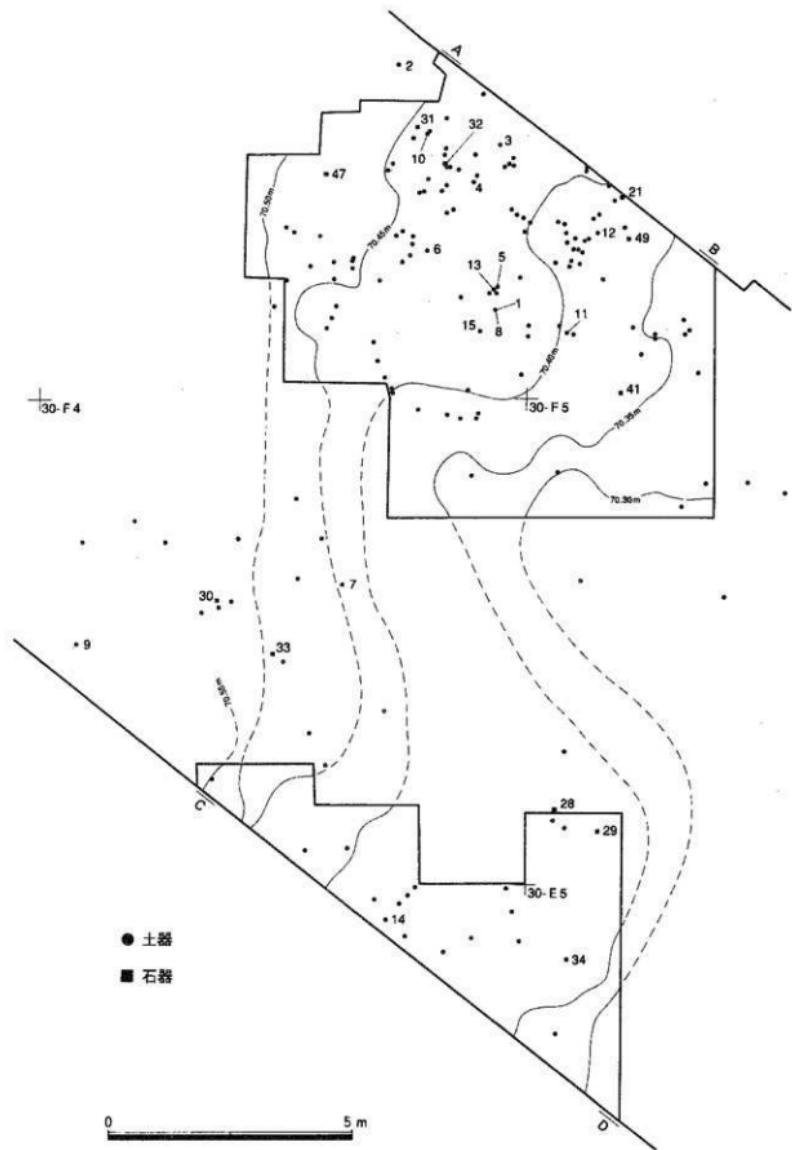
平面図 0 4 m

セクション図・エレベーション図 0 2 m

第65図 6区SD-3~6

#### 縄文面の調査（第66・67図 写真図版44）

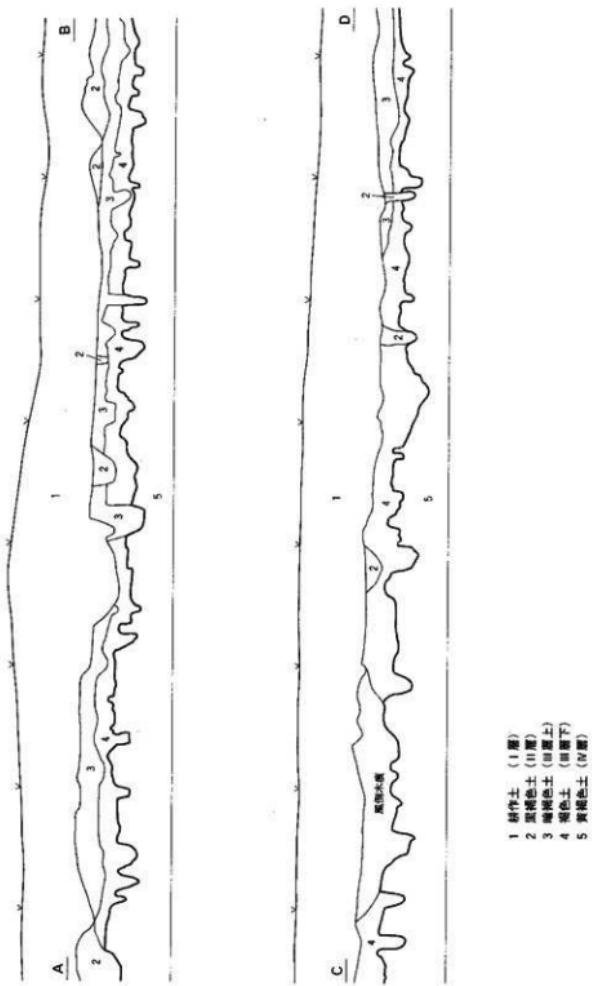
縄文土器が出土したのはグリット杭30-F 5を中心とした区域である。この区域から30-D 7付近にかけては茶畑耕作の影響が比較的少なく、本米消滅しているⅢ層も辛うじて残存し、この層上面でも遺構を確認できる区域であった。6区調査終了間際に遺構面に縄文土器の細片らしき遺物が含まれているのに気付き、急速、4グリットを全面的に掘り下げ調査を行った。その結果、ほぼ全体的に遺物の散布が認められ、特に北側の30-F 5付近と南側の30-E 5南側付近はⅣ層上面付近まで縄文土器細片が出土した。付近は牧ノ原台地上を厚く覆っていた黒ボク土層が僅かであるが残置していた。その下位には暗褐色土層が観察された。基本的にはこの層位に縄文土器が包含されていた可能性はあったが、主に出土したのはさらにⅢ層下位層に分類した褐色土層である。基層となる第Ⅳ層は南東方向に緩やかに傾斜しているが、30-F 5南ではやや谷状に窪むのを確認した。30-E 5付近では標高70.40～70.35m のやや平坦な面がある。両地区的Ⅳ層面では遺構は検出できなかった。土器片は161点、剥片を中心とする石器は13点出土している。土器片は細片がほとんどで、接合できる資料は無かった。その土器の分布は北側においてやや濃い分布を示している。剥片では砂質粘板岩の資料が散見され、その状態から同一個体と推定されたが、特に集積している状況は観察されなかった。石器の中に台石・焼砾が含まれており、付近に居住域が存在したことは明らかであろう。



第66図 6区縄文遺物出土分布図

第67图 6区编文遗物出土地点附近土层图

基座高程 70.6m  
0 2 m



## 7区（第68図 写真図版45）

7区は39-I 3から30-D 9までの間に展開した調査区である。調査は平成12年度に実施している。実掘面積は1123m<sup>2</sup>をはかる。調査区の長さは81.2m、幅は14.8mをはかる。調査区の平面は長方形である。平成11年度に行った確認調査では、ピット・土坑が確認されたことから、調査を実施している。しかし確認調査を行えなかった調査区西半部においては茶畠耕作に伴う天地返しが行われており、造構確認層であるIV層は完全に破壊され、なおかつ下位の礫層であるV層が露出していた。このため東半部の1123m<sup>2</sup>が調査対象となった。この調査できた面も重機の痕跡が多数見られ、本来存在したII層からIV層面はかなり消失しているものと思われる。この調査区から東、牧ノ原礫層面と色尾礫層面の境界部までの区域は、平成9～11年度にかけて実施された確認調査では遺構の検出はできなかった。この調査区では掘立柱建物跡3棟、炭化物が多く見られた土坑（S X）を検出している。遺物はほとんど出土していない。

### 掘立柱建物跡（S H）

#### S H-1（第69図 写真図版46）

S H-1は39-E・F 7に位置する。建物方向はN-8°-Wである。南北方向1間、東西方向は3間分を検出した。この遺構は調査区北壁際で検出されたため、東へどの程度調査区外へ延びるかは不明である。S P-11はS F-6と重複する。S F-6が時期的に先行する。西面S P-10・11の柱間距離は1.85mをはかる。南面のS P-10・9、およびS P-9・8、S P-8・7の柱間距離は1.60m、2.05m、1.85mとばらつきがある。柱穴の掘り方の平面は円形を呈し、径は0.25m程度である。深さはばらつきがあり、約0.1～0.4m、底面標高値は約65.9～65.5mをはかる。遺物は出土していない。なお調査区際で検出されたS P-2は他の柱穴との距離・方向がやや異なることから、S H-1を構成する遺構と認識していない。時期は平安時代以降と推定される。

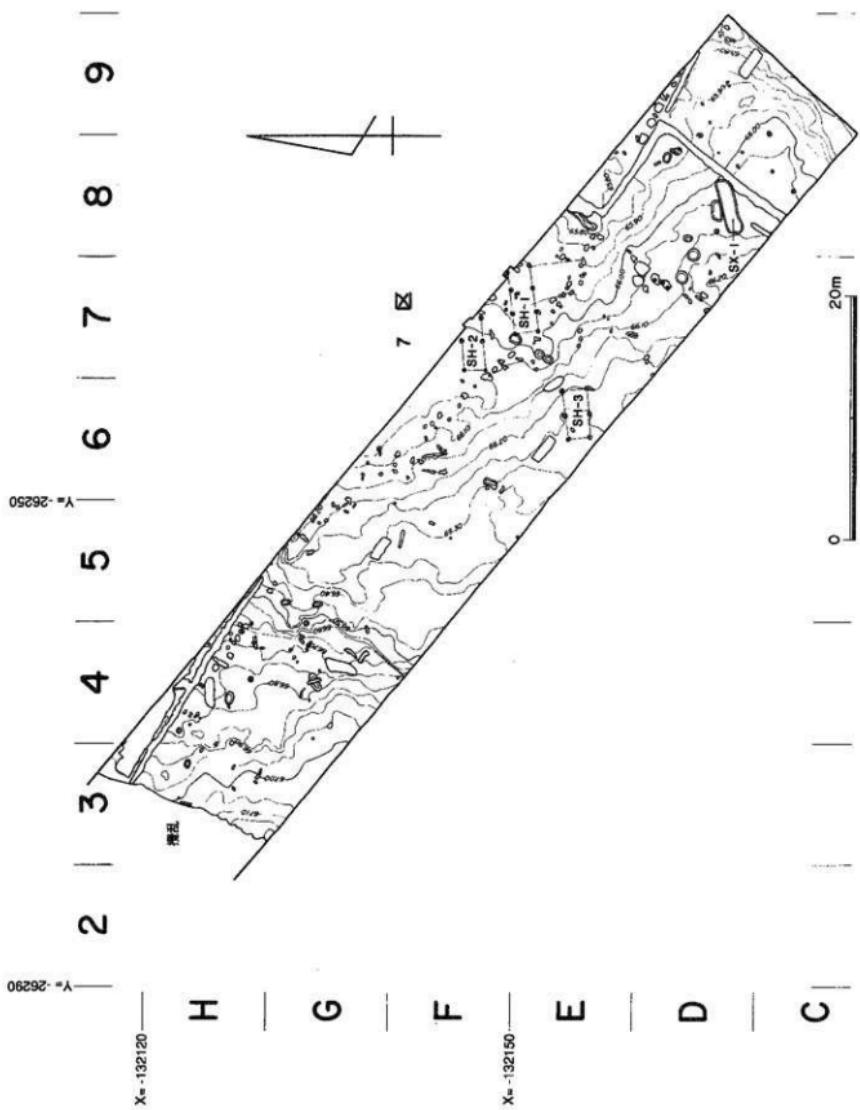
#### S H-2（第70図 写真図版46）

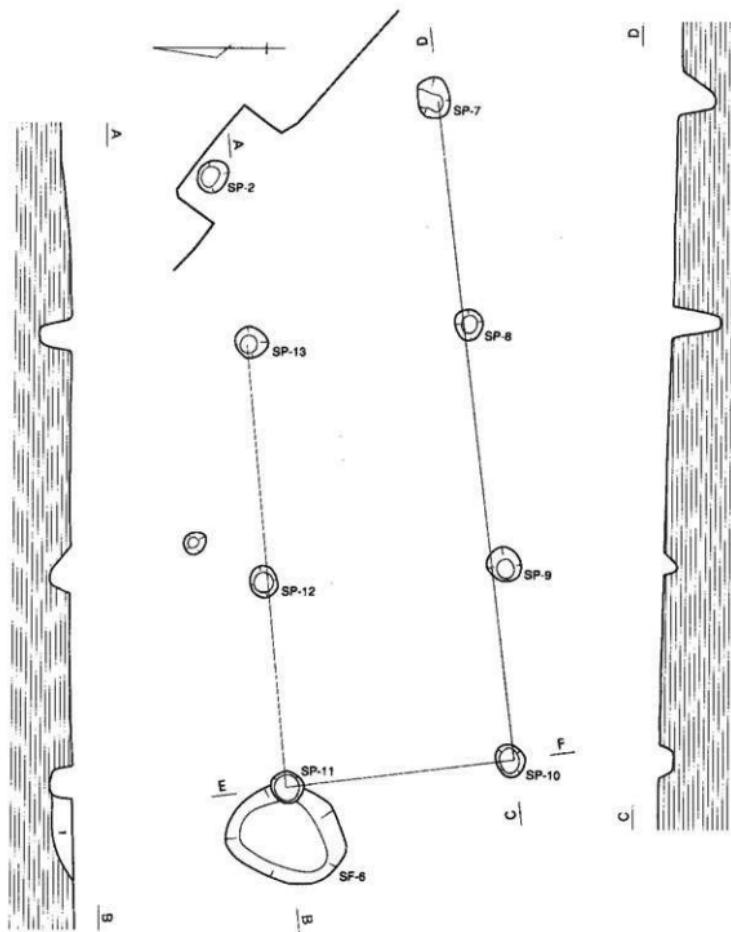
S H-2は39-F 7に位置する。建物方向はN-1°-Eである。南北方向1間、東西方向は2間分を検出した。S H-1の北側に位置する。この遺構は調査区北壁際で検出されたため、東西方向がどの程度調査区外に延びるかは不明である。西面のS P-17・16の柱間距離は1.80mをはかる。南面のS P-16・15、S P-15・14の柱間距離は2.45m、1.85mとばらつきがある。柱穴の掘り方の平面は円形を呈し、径は約0.2～0.3mである。深さは約0.1～0.3m、底面標高値は約65.9～65.7mをはかる。遺物は出土していない。S P-16・17の掘り方が浅いため、本来的にS H-2を構成していた遺構ではなく、S P-14・15・18はS H-1の一部を構成していた可能性も考えたが、S H-1・2の距離がやや広く、柱穴の並びもややずれていたため、S H-2を独立した建物跡とした。S H-2の所属時期は平安時代以降と推定される。

#### S H-3（第71図 写真図版46）

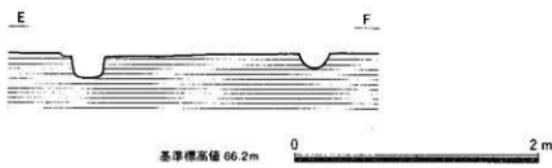
S H-3は39-E 6に位置する。建物方向はN-7°-Wである。南北方向1間、東西方向2間分を検出した。西面S P-22・21、東面S P-24・19の柱間距離は1.85m、2.10mをはかる。南面のS P-21・20、S P-20・19の柱間距離は1.85m、2.15mをはかる。北面のS P-22・23、S P-23・24の柱間距離は1.95m、2.05mである。柱穴の掘り方の平面は円形を呈し、径は約0.25m程度である。深さも約0.2～0.4m、底面標高値は66.1～65.8mとばらつきがある。遺物は出土していない。S H-3の所属時期は判然としない。他のS H-1・2と建物方向が似ているため、これら3棟の掘立柱建物跡

第68図 7区平面図

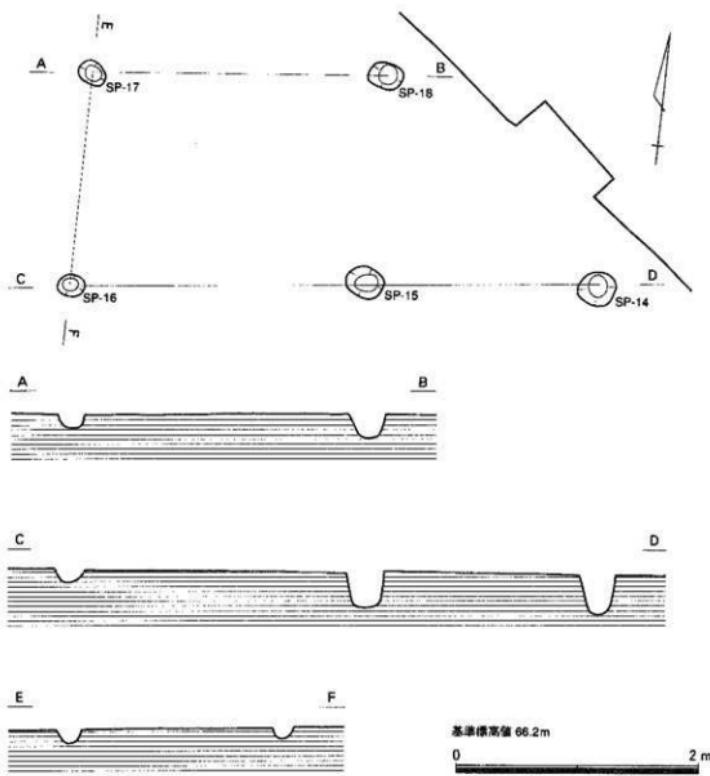




1 にぶい黄褐色土



第69図 7区SH-1



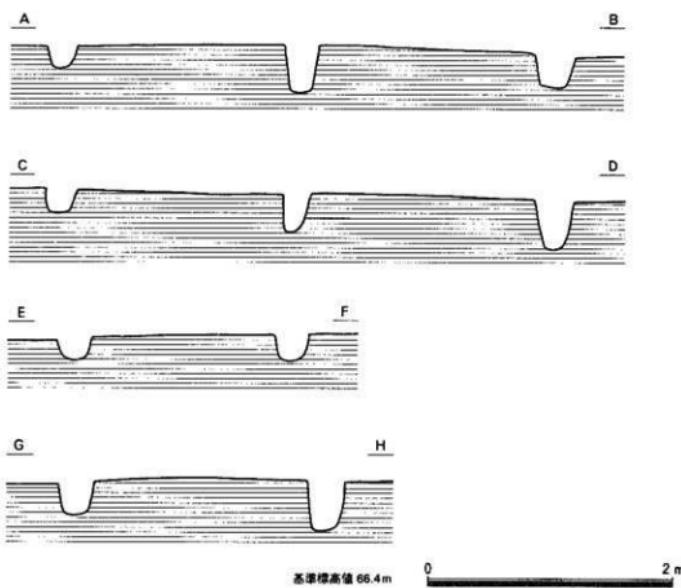
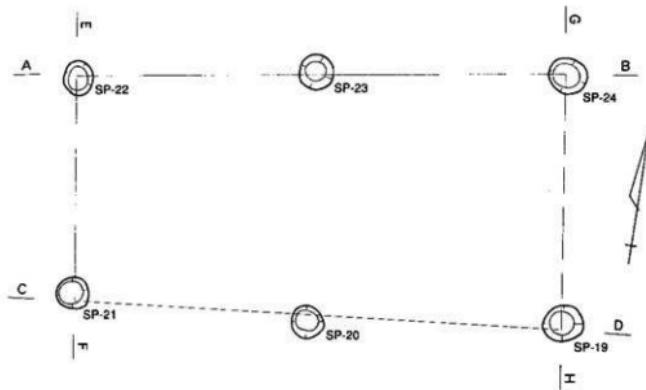
第70図 7区SH-2

は同時期の可能性があり、平安時代以降の建物跡と推定される。

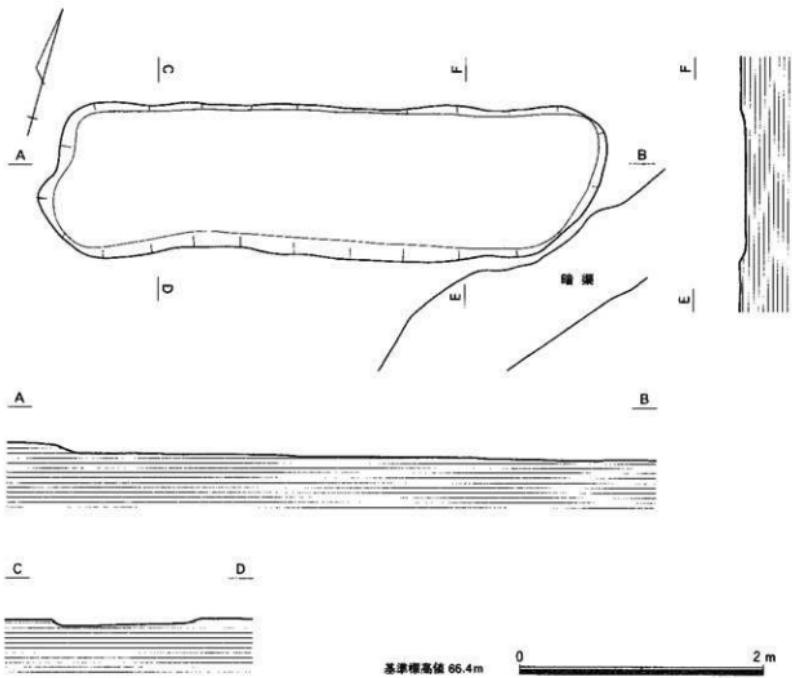
#### 用途不明遺構 (SX)

##### SX-1 (第72図)

SX-1は39-D8に位置する。平面は長楕円形を呈する。長さは4.55m、幅は1.20m、深さは0.05mをはかる。その長軸方向はN-74°-Eである。覆土は暗褐色土を含む炭化物層、わずかに焼土粒が含まれていた。SX-1の床面には特に被熱し、赤色化・硬化した痕跡は見られなかった。遺構は出土していない。本遺構が炭焼き窯である可能性がある。中原跡や青木原跡を含めた牧ノ原台地付近の遺跡ではあまり見られない種の遺構である。またSX-1の長軸方向はSH-1~3の建物方向と似ている。よって建物と同時に機能した可能性があると思われ、平安時代以降の遺構と推定される。



第71図 7区SH-3



第72図 7区S X-1

### 第3節 出土遺物

中原遺跡の1-1区から7区までの調査区の中で、遺物は土器・石器・金属器が出土している。土器の量が多いのは1-1区・5区である。遺物の内容については各調査区、出土遺構毎に記述するが、傾向的に敷溝神社に近づくほど山茶碗・輸入陶磁器の出土量が多いことが看取される。古墳時代後期の遺物は1-1区から2-3区にかけて散見されるものの、2-1区から6区にかけては奈良・平安時代の遺物が多く散見される。内容は灰釉陶器・須恵器・土師器・内黒土器である。4・5区からは良好な土器資料を得られている。また該期の遺構は検出されていないが、縄文時代の遺物は6区で多く出土している。石器は1-1・2区付近及び6区で縄文土器が出土した層位から多く出土している。金属器は主に古墳時代以降の住居跡等から出土している。本節では各調査区・各遺構ごとの出土遺物を土器・土製品・石器・金属器別に記述するものとする。なお輸入陶磁器については国立歴史民俗博物館の小野正敏氏に御教授頂いた。輸入陶磁器の分類は通例太宰府分類を基調とするが、今回は静岡県菊川町の横地域の報告で用いられた分類案を用いている。

#### 1 土器・土製品

##### 1-1区

###### S B-1 出土土器 (第73図 写真図版58)

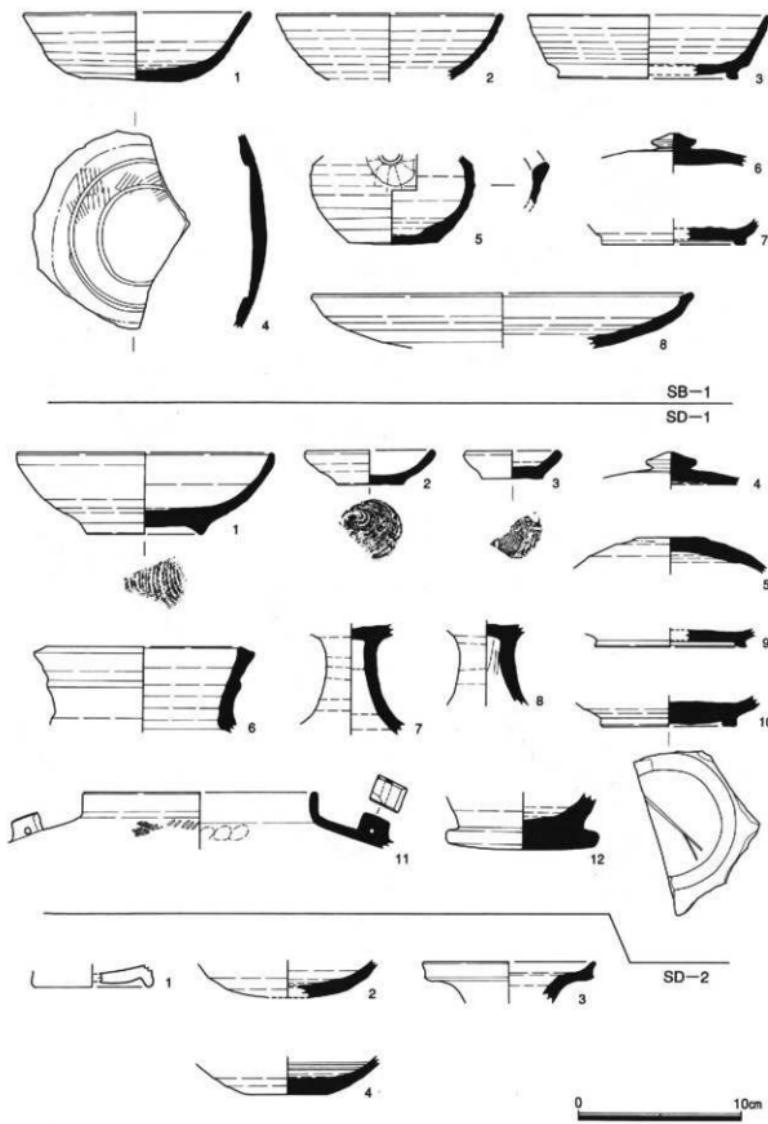
1~5は床面直上 (第74図 写真図版4) で出土した須恵器である。1・2は壺である。2点とも高台は無い種類であろう。1の底部は平底でヘラケズリを施している。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げる。外面には火摺が観察される。2は底部を欠損している。体部を内湾気味に立ち上がらせている。3は高台を有する壺である。体部を直線的に立ち上げ、口唇部を丸く仕上げる。4は横蓋の側面部である。外面には沈線・タタキ痕が観察される。製作時に粘土の円盤で器體を閉塞した部位である。5は縁である。体部のみである。体部下半部・底部はヘラケズリを施している。6~8は覆土中から出土した須恵器である。6は壺蓋である。宝珠形のツマミがつく。外面には自然釉が観察される。7は高台を有する壺である。底部のみの資料である。8は高盤か。体部は直線的に立ち上がるが、口縁部付近で外側へ折り曲げている。口唇部は丸く仕上げ、体部外面下半はヘラケズリを施している。

###### S D-1 出土土器 (第73図 写真図版58)

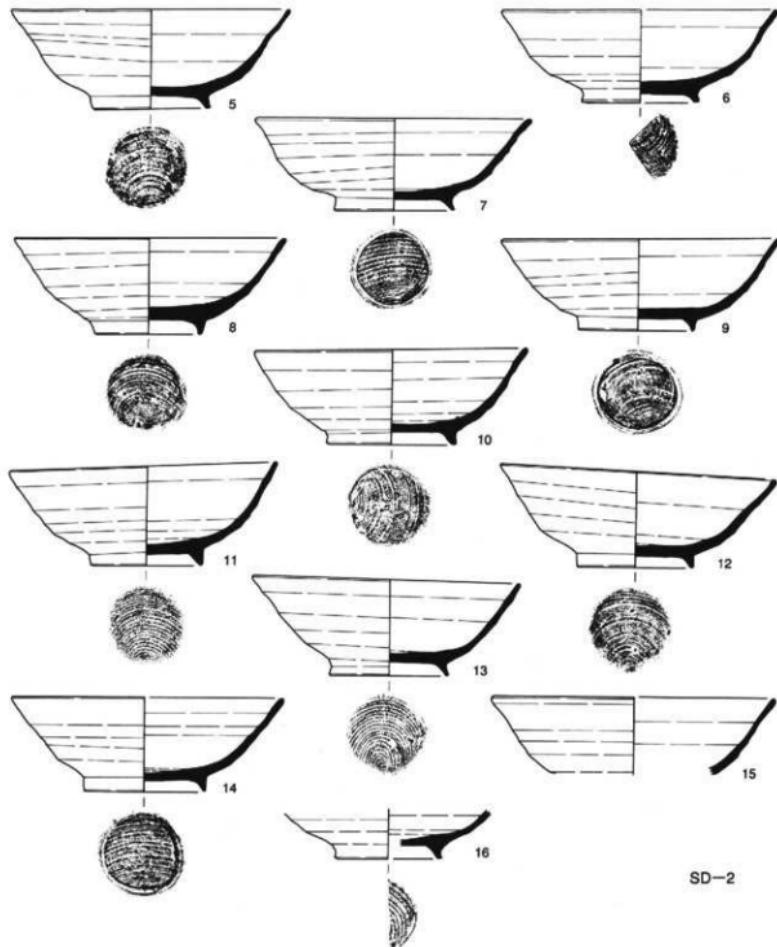
1~3は山茶碗である。1は碗である。高台の断面は三角形を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部はやや尖らせる。高台の臺付には初期痕と思しき痕跡が観察される。2・3は小皿である。2は体部を内湾気味に立ち上がらせる。口唇部にはわずかに平坦面を形成する。3は2と比べ器厚があり、器高も低い。4~12は須恵器である。4・5は壺蓋である。2点共に天井部のみの資料である。4は宝珠形のツマミを有する。5はツマミは無い。6は短頸壺である。内面には釉が観察される。7・8は高壺である。共に脚部のみの資料である。9・10は高台を有する壺である。共に底部のみの資料である。10は底部にヘラ記号が観察される。11は耳を有する短頸壺である。耳付近のみの資料である。12は陶臼である。底部のみの資料である。胎土に白色粒子を多く含み、ざらついた感がある。

###### S D-2 出土土器 (第73・74図 写真図版58・59)

1は土師器の壺である。底部のみの資料である。全体的に摩滅している。2~4は須恵器である。2・4は壺である。2点とも底部のみの資料である。3は長頸壺である。口縁部のみの資料である。内面に自然釉が観察される。5~16は山茶碗である。これらはSD-2内に、同時期に故意に打ち削られ



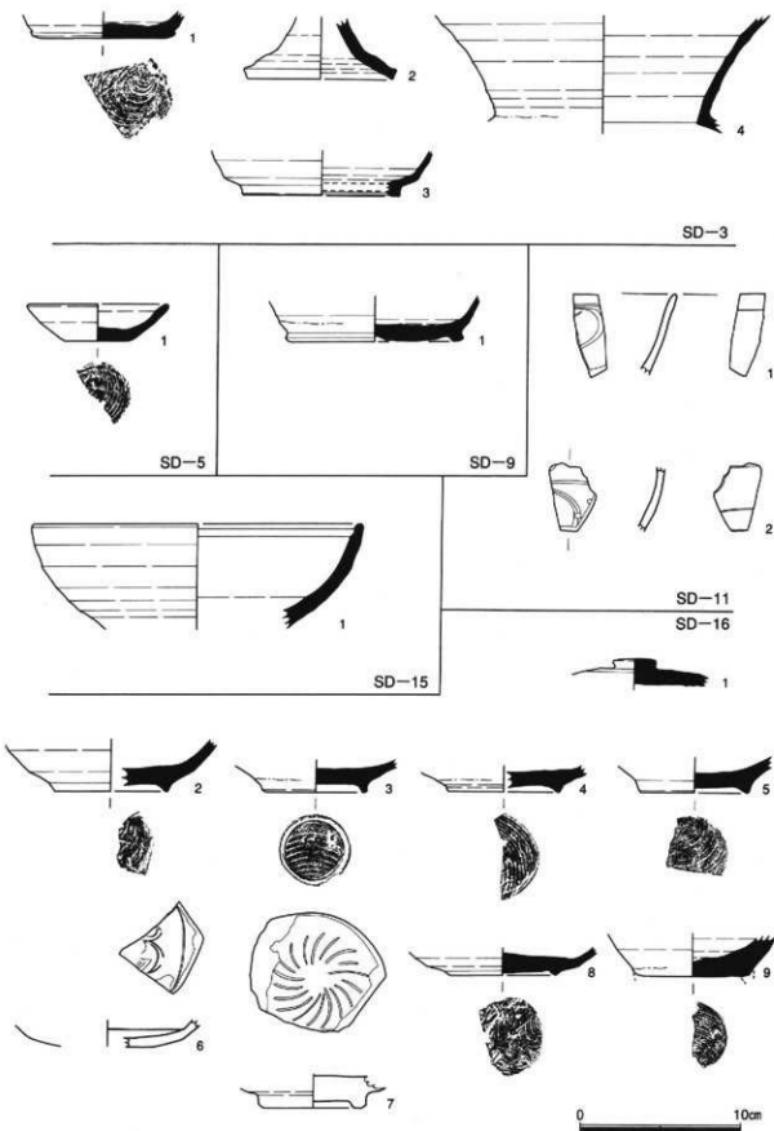
第73図 1-1区出土土器1



SD-2

0 10cm

第74図 1-1区出土土器2



第75図 1-1区出土土器3

投棄されていたものと推定される。全体の形状が分かるのは5~14で、15は口縁部から体部下半にかけて、16は体部下半~底部にかけての資料である。これらの山茶碗は体部下半がやや膨らむものの、口縁部に向かって直線的に立ち上がり、口唇部を丸く仕上げてる。三角高台の疊付にはスノコ痕が、見込みには重ね焼き痕が観察される。胎土は密であるが、砂粒・白色粒子が含まれる。金谷古窯跡で生産されたものと推定される。形態が酷似しているため同じ工人が同時に製作した可能性がある。

#### SD-3出土土器（第75図）

1~4は須恵器である。1は坏である。底部のみの資料である。底部外周には糸切り痕が観察される。胎土中に黒い粒子が多く含まれる。2は高坏である。脚部のみの資料である。3は高台を有する坏である。底部から体部下半にかけての資料である。4は長頸壺である。頸部のみの資料である。SD-3は12世紀後半以降の溝状遺構と推定されるが、該期の遺物は出土していない。

#### SD-5出土土器（第75図）

1は小皿である。直線的に体部が立ち上がり、口唇部を丸く仕上げている。

#### SD-9出土土器（第75図）

1は須恵器で、高台を有する坏である。底部から体部下半にかけての資料である。底部外周はヘラケズリを施し、中央部に凹みをもつ。胎土には白色粒子が含まれ、SD-1出土の12の陶白と似る。

#### SD-11出土土器（第75図 写真図版70・71）

1・2は青磁である。2点とも碗である。1は口縁部から体部にかけて、2は体部中位付近の細片資料である。1の外面口唇部直下に沈線が観察される。2の外面には沈線が観察される。1は龍泉窯系青磁碗A、2は同安窯系青磁碗Bと推定される。

#### SD-15出土土器（第75図）

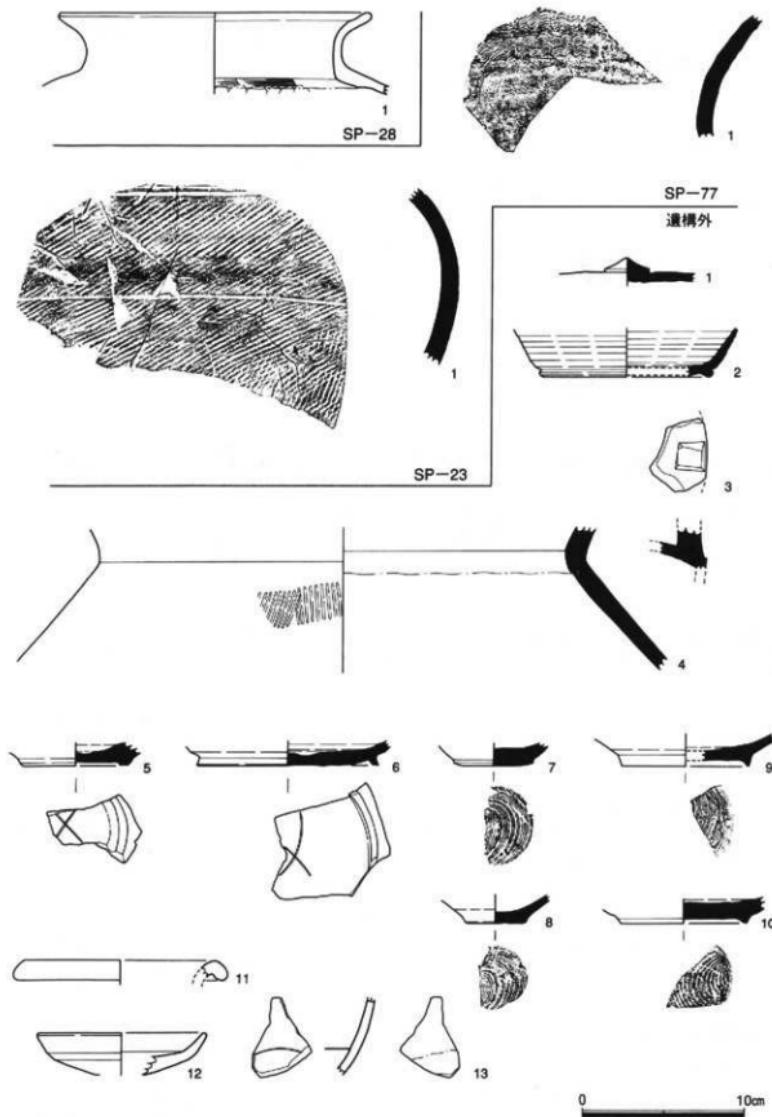
1は須恵器で、高坏と思われる。高坏の坏部のみの資料である。坏部は内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く仕上げている。内面口唇部直下に太い沈線が観察される。

#### SD-16出土土器（第75図 写真図版70・72）

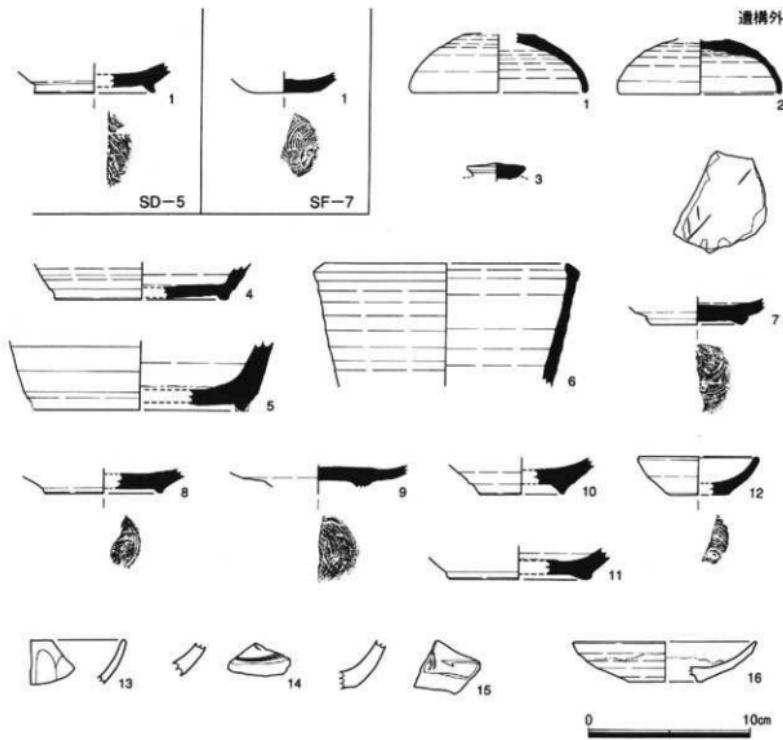
1は須恵器の坏蓋である。天井部のみの資料である。宝珠形のツマミが観察される。口縁部は故意に打ち割られている。2~5・8は山茶碗である。6点とも底部資料である。2・4・5共に三角高台を有する。2の見込みには糸切り痕らしき痕跡が観察される。3は角高台を有する。8は低平な三角高台をもつ。6は白磁の皿である。底部のみの資料である。見込みには圈線と草花文が不鮮明であるが観察される。底部は揉き取られているため、露胎している。皿Ⅶに分類される。7は青磁の碗である。底部のみの資料である。見込みには捺花文が観察される。削り出し高台の内側は露胎である。疊付まで釉薬がおよぶ。龍泉窯系青磁碗Bと推定される。

#### SP-28出土土器（第76図 写真図版59）

1は土師器の甕である。口縁部から肩部にかけての資料である。SP-28の底面に口縁部を下にして出土している（写真図版10）。肩部から直線的に頸部を立ち上げ、口縁部はやや直線的に外傾させ、口唇部は丸く仕上げている。全体的にナデを施しているが、器表面の摩耗・剥脱がひどく判然としない。



第76図 1-1区出土土器4



第77図 1-2区出土土器

**S P - 23出土土器** (第76図 写真図版59)

1は須恵器の壺である。体部の一部である。S P - 23の覆土中から出土している(写真図版10)。外面には一面タタキ痕が観察される。横位の沈線も2条観察される。内面は横位ナデが施されている。

**S P - 77出土土器** (第76図 写真図版59)

1は須恵器の壺である。口縁部のみの資料である。横位のナデの後に櫛状工具を用いて、2段の波状文を施している。

**遺構外出土土器** (第76図 写真図版59)

1~6は須恵器である。1は壺蓋である。天井部のみの資料である。宝珠形のツマミが観察される。2は高台を有する壺である。体部は直線的に立ち上がる。軟質である。3は平瓶である。把手と天井部が接合する部分のみの資料である。4は壺である。頸部から肩部にかけての資料である。外面は自然釉で覆われ、タタキ痕が辛うじて観察されるにすぎない。5・6は高台を有する壺である。2点とも底部のみの資料で、高台内側に「×」とヘラ記号が観察される。7~10は山茶碗である。7・8は小皿で

ある。9・10は碗である。いずれも底部のみの資料である。11～13は輸入陶磁器である。11は白磁の壺である。口縁部のみの資料である。丸く仕上げられた口唇部を大きく曲げている。四耳壺の可能性がある。12は青磁の無文皿である。口縁部から底部直上までの資料である。底部から直線的に伸びた体部は中位付近で屈曲し、さらに直線的に伸びる。口唇部は丸く收めている。龍泉窯系か。13は白磁の碗である。体部中位の細片資料である。内面には團線が1条観察される。外面の体部下半は露胎している。内湾気味に立ち上がる。碗IIに分類される資料と推定される。

## 1-2区

### S D - 5 出土土器 (第77図)

1は山茶碗である。底部のみの資料である。三角高台が観察される。

### S F - 7 出土土器 (第77図)

1は小皿である。底部のみの資料である。

### 遺構外出土土器 (第77図 写真図版59・70・71)

1～6は須恵器である。1～3は壺蓋である。1・2はツマミの無い蓋である。3はツマミのみの資料である。4は壺である。底部から体部下半にかけての資料である。胎土中に白色粒子を多く含む。5は壺である。底部から体部下半にかけての資料である。体部外面には横位のヘラケズリが観察される。6は陶臼と思われる。口縁部から体部中位にかけての資料である。体部は直線的に立ち上げている。口縁部は内側に曲げた後に、強く押圧整形をしている。7～11は山茶碗である。いずれも底部付近の資料である。7は見込みにヘラ状の工具で木葉文らしき記号を施している。遺跡周辺では鳥田市矢崎遺跡で類例がある。11は胎土の点から東遠江系ではない。幅広で低平な高台を有する。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。胎土は密であるが、ざらついた感がある。2～3はSD-1から同様の山茶碗が出土している。12は小皿である。内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く收める。13～15は青磁である。3点とも龍泉窯系青磁である。13は小碗B0と思われる口縁部である。外面に蓮弁文が観察される。14・15は体部下半の資料である。内面には割花文の一部が観察される。14は碗A2か4、15は碗A4と推定される。16は近世陶器である。皿である。口縁部付近に施釉がなされている。

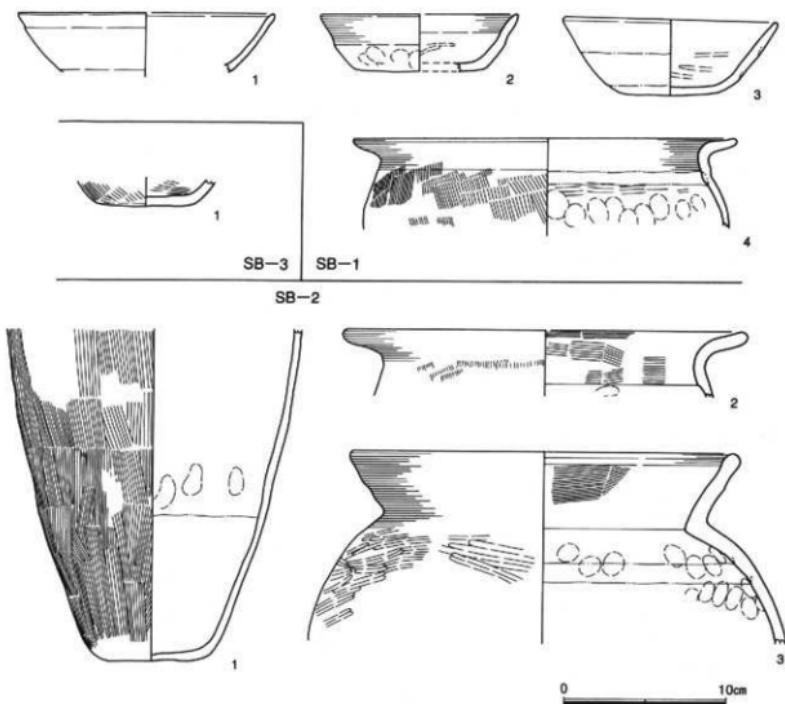
## 2-1区

### S B - 1 出土土器 (第78図 写真図版60)

1は灰釉陶器の碗である。口縁部から体部中位の細片資料である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反させている。内面・外面ともに施釉されている。2～4は土師器である。2・3は壺である。平坦な底部から直線的に体部が立ち上がる。仕上げに口縁部を強く横位のナデ調整を行っているため、体部中位で屈曲する感がある。内・外面ともに赤彩されていた可能性がある。3は体部を直線的に立ち上げている。外面体部中位付近には輪積み痕がわずかに観察される。底径値が口径値に対して少ない。2と比べて器高が高い。4は壺である。口縁部のみの資料である。口縁部は大きく外反し、水平に延びる。

### S B - 2 出土土器 (第78図 写真図版60)

1～3は土師器の壺である。これらは住店内覆土下位から中位にかけて投棄されていた土器である(第18図 写真図版13)。1・2は器厚が薄手に仕上げられた壺である。1は底部から体部上位までの



第78図 2-1区出土土器 1

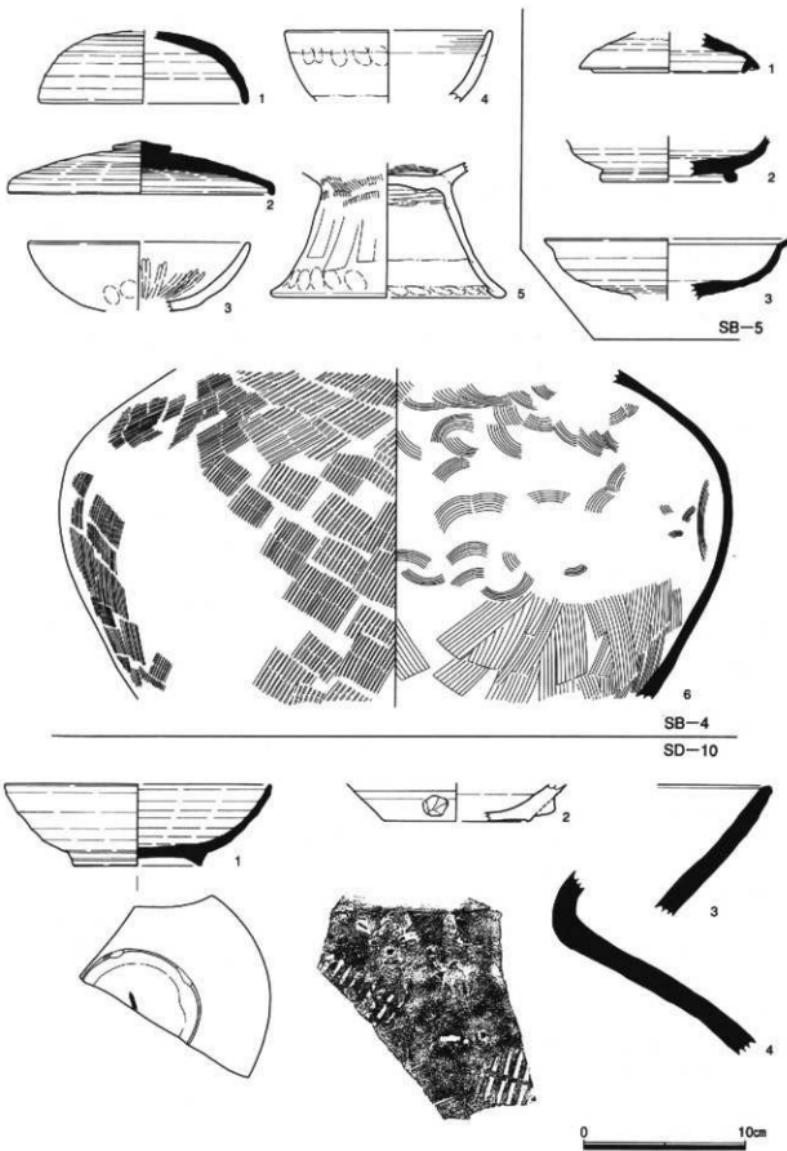
資料である。体部外面はハケ状工具による調整痕が一面に観察される。煤が付着している。2は口縁部である。口縁部は大きく外反しているが、水平ではない。3は器厚が厚く仕上げられた壺である。口縁部から体部中位にかけての資料である。内湾気味に立ち上がり、頸部から口縁部を直線的に立ち上がらせている。口唇部は丸く仕上げている。色調はにぶい赤褐色を呈し、砂粒・白色粒子を多く含む。1・2は「遠江型」の長胴壺であり、3は静岡県東部で見られる球胴壺「駿東壺」であろう。

#### S B - 3 出土土器 (第78図)

1は土師器の壺である。底部のみの資料である。ハケ状工具による調整痕が観察される。

#### S B - 4 出土土器 (第79図 写真図版60)

これらの資料は床面直上から出土した遺物である (第20図 写真図版14)。1・2・6は須恵器である。1・2は壺蓋である。1はツマミの無い蓋である。2はツマミのある蓋である。ほぼ完形である。扁平な宝珠形のツマミのある天井部から、やや直線的に口縁部へ延びる。器厚は厚めである。6は壺である。肩部から体部下半部にかけての資料である。外面にはタタキ痕が観察される。一部、釉が顯著に見られる。内面は當て具の痕跡が観察される。3～5は土師器である。3・4は壺である。3は内湾気



第79図 2-1区出土土器2

味に立ち上がり、口唇部を丸く仕上げている。4は口縁部付近は横位のナデを行っている。輪積み痕が観察される。5は台付壺である。台部のみの資料である。裾部は指頭痕が内・外面共に観察される。縦位のナデを行っている。内面の底部と脚部の接合部に棒状工具によるナデの痕跡が観察される。

#### S B - 5 出土土器 (第79図)

1～3は須恵器である。1は坏蓋である。天井部は欠失している。2は坏である。底部のみの資料である。3は高坏である。坏部のみの資料である。口縁部は強く外折させている。

#### S D - 1 出土土器 (第80図 写真図版61・72)

1～3は須恵器である。1は坏蓋である。天井部のみの資料である。口縁部は故意に打ち欠いている。2は陶臼である。底部のみの資料である。3は壺である。タキを施した部に高台を付け、裾部外面をつまみ出している。4～11は山茶碗である。4は口縁部から体部下半部にかけての資料である。体部は直線的に立ち上げ、口唇部を丸く仕上げている。5～11までは底部を中心とした資料である。6は底部外面に墨書が観察される。時計回りに一気に「○」を書いている。内面には火拂が認められる。12は小皿である。13は白磁である。四耳壺の体部下半の可能性がある。

#### S D - 9 出土土器 (第80図)

1は山茶碗である。底部から体部下半部にかけての資料である。重ね焼きの痕跡が観察される。

#### S D - 10 出土土器 (第79図 写真図版60)

1は山茶碗である。底部から内済気味に立ち上がる。底部外面に墨書の痕跡が観察される。2は近世陶器か。3は鉢である。口縁部の細片資料である。直線的に立ち上げている。胎土に長石・小砾を含む。片口鉢か。4は壺である。肩部の細片資料である。外面に刷毛で釉を塗布した痕跡が観察される。

#### S P - 35 出土土器 (第80図)

1は須恵器の坏蓋である。天井部が欠失している。

#### S P - 45 出土土器 (第80図)

1は須恵器の坏蓋である。天井部のみの資料である。宝珠形のツマミが観察される。

#### 遺構出土土器 (第80図)

1・2は須恵器である。1は坏蓋である。天井部が欠失している。2は壺である。口縁部の細片資料である。3は山茶碗である。底部のみの資料である。4は小皿である。底部のみの資料である。

#### 2-2区

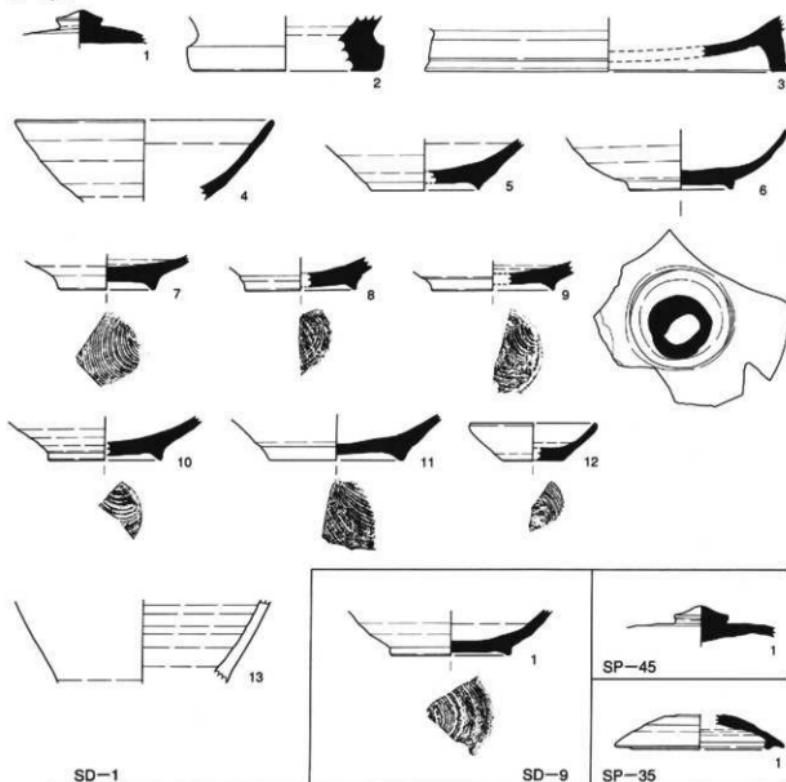
#### S D - 1 出土土器 (第80図 写真図版61)

1は須恵器の坏である。底部の細片資料である。高台は削り出されたものである。

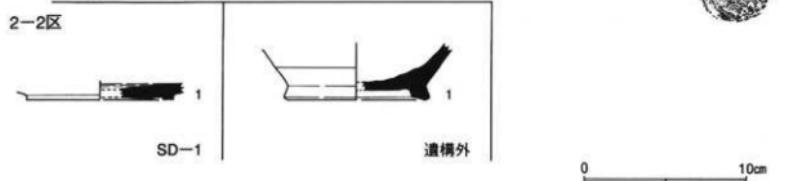
#### 遺構出土土器 (第80図)

1は須恵器の壺である。底部から体部下半部の資料である。高台の費付にはモミ穂痕が観察される。

## 2-1区



## 遺構外



0 10cm

第80図 2-1区出土土器 3、2-2区出土土器

## 2-3区

### S B-1 出土土器 (第81図 写真図版61)

1・2は須恵器である。1は坏蓋である。宝珠形のツマミが欠失している。体部は天井部から直線的に延びている。器厚は厚めである。故意に打ち欠いたものと思われる。2は坏である。高台は認められない。ヘラケズリされた平坦な底部から直線的に体部を立ち上げている。3・4は土師器である。3は坏である。口縁部から体部下半にかけての資料である。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げている。外面に輪積み痕が観察される。内・外面ともに赤彩を施した痕跡が観察される。4は壺である。口縁部の細片資料である。口縁部は大きく外反しているが水平ではない。全面磨滅している。

### S B-4 出土土器 (第81図)

1は須恵器の坏蓋である。口縁部の細片資料である。かえりが認められる。

### S B-6 出土土器 (第81図)

1は須恵器の壺である。底部のみの資料である。底部外面にはヘラで「×」と書かれている。

### S B-7 出土土器 (第81図 写真図版61)

1・2は須恵器である。1は坏蓋である。ツマミは無い。2は坏である。底部外面にヘラ記号が書かれている。

### S F-1 出土土器 (第81図)

1は須恵器の壺である。底部のみの資料である。やや焼成が悪い。

### S D-1 出土土器 (第81図)

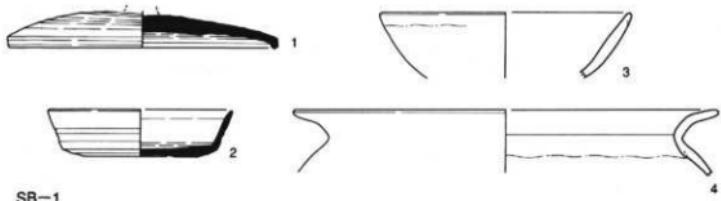
1は山茶碗である。底部のみの資料である。低平な高台を有し、胎上は密であるがざらついた感がある。色調は灰白色を呈する。1-2区遣構外出土器11と同じ產地か。

### S D-5・6 出土土器 (第81図 写真図版70)

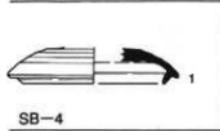
本米は別遣構であるが両遣構から出土した破片が接合した資料があるため、一括して触れてみる。1は灰釉陶器の碗と思われる。軋質で釉も発色していない。なお細片で出土しているため、図上復原している。体部と底部の境界部には高い高台を接着し、体部はやや直線的に立ち上げ、口唇部は丸く仕上げている。底部外面の高台内側はヘラケズリを行っている。S D-6からの出土である。2・4・6は須恵器である。2は坏蓋である。口縁部のみの資料である。4は長頸壺である。細片で出土しており、図上で復原している。S D-5・6から出土している。5も長頸壺である。頸部の細片資料である。S D-5からの出土である。6は横瓶である。側面の細片資料である。タタキ痕が観察される。3は青磁の碗である。体部下半の細片資料である。外面には細目の樹描文が観察される。外面下位は露胎している。同安窯系青磁碗Bと推定される。S D-6からの出土である。

### 遣構外出土土器 (第82図 写真図版61・71)

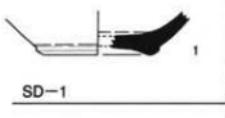
1は須恵器の高坏である。坏部下部の細片資料である。外面は釉が固着している。脚部の折損状況から故意に打ち削られているものと推定される。2・3・5は山茶碗である。底部を中心とした資料である。2は扁平な高台であるが、3・5は三角高台を有する。5の焼成は不良である。4は小皿である。



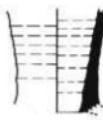
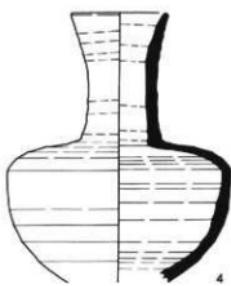
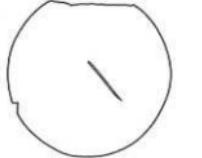
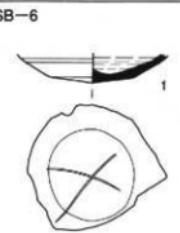
SB-1



SB-4



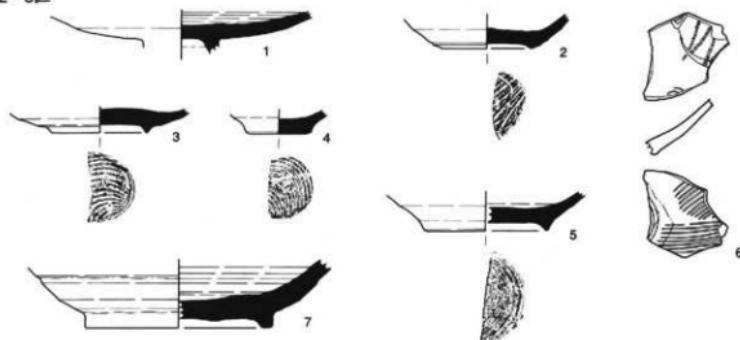
SD-1

SF-1  
SD-5・6

0 10cm

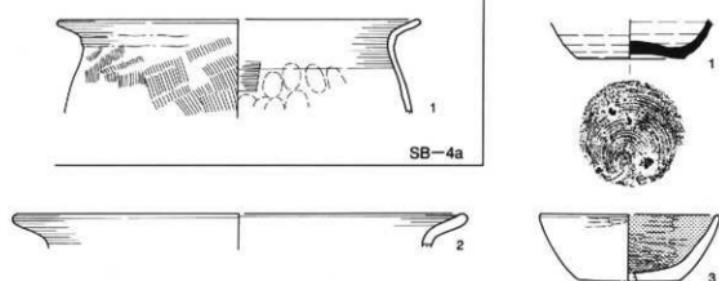
第81図 2-3区出土土器1

## 2-3区



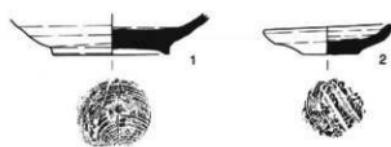
遺構外

## 3 区

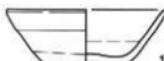


## SB-8

## SD-2



## SP-1



## SF-3



0 10cm

第82図 2-3区出土土器 2、3区出土土器 1

底部のみの資料である。6は青磁の碗である。体部下半の細片資料である。外面には細目の描文、内面には「猫手」の描文が観察される。外面下位は露胎している。同安窯系青磁碗Bと推定される。7は鉢である。底部のみの資料である。高台付は摩滅し光沢を放つ。片口鉢の可能性がある。

### 3区

#### S B-2 出土土器 (第88図 写真図版65)

カマド内から上製支脚が1点出土している。外面は板ナデを施し、頂部を平坦に仕上げている。

#### S B-4 a 出土土器 (第82図)

1は壺である。口縁部から体部上位にかけての細片資料である。口縁部は大きく外折させている。

#### S B-6 出土土器 (第83図 写真図版62)

1～3は土師器の壺である。豊穴住居跡床面からカマド燃焼部床面にかけて散乱した状態(第43図写真図版27)で出土している。1は口縁部から胴部上位にかけて、2は口縁部から胴部中位にかけて、3は口縁部から胴部下位にかけての資料である。3点とも口縁部を横へ寝るように外反させているが、水平ではない。胴部最大径は胴部上位にあり、口縁部径とはほぼ同じか、やや小さい。口唇部はやや肥厚する。4は須恵器の壺である。焼成が悪く軟質で、全体的に摩滅している。平坦な底部を持つため、糸切りの可能性がある。

#### S B-8 出土土器 (第82図 写真図版61)

1は須恵器の壺である。底部から体部下位にかけての資料である。底部外面は糸切り痕が観察される。2は土師器の壺である。口唇部付近の細片資料である。口唇部を肥厚させている。3は内黒土器の壺である。回転ヘラケズリされた平坦な底部から、直線的に体部を立ち上がらせている。口唇部は丸く仕上げる。見込みから体部内面にかけてはヘラミガキの痕跡が観察される。内面は黒色処理されているが、口唇部と底部の外面も一部黒色化(黒斑)が認められる。

#### S D-2 出土土器 (第82図 写真図版62)

1は山茶碗である。底部から体部下位にかけての資料である。胎土はやや砂質である。2は小皿である。内消気味に立ち上がる。見込みには底部と体部との接合痕が観察される。底部外面には糸切り痕の上にスノコ痕が観察される。

#### S P-1 出土土器 (第82図 写真図版62)

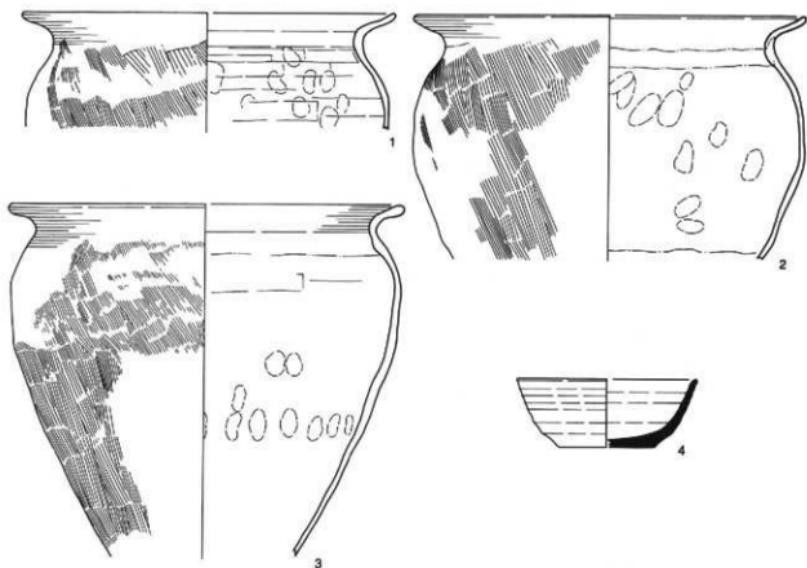
1は土師器の壺である。やや平坦な底部から直線的に体部を立ち上がりさせ、口唇部を丸く仕上げている。全面的に摩滅しており、調整は判然としない。

#### S F-3 出土土器 (第82図)

1は須恵器の壺蓋である。大井部のみの資料である。宝珠形のツマミが観察される。

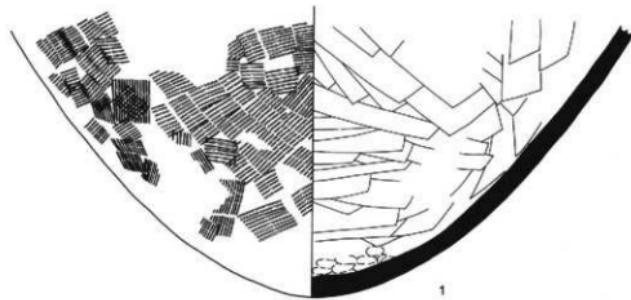
#### 遺構外出土土器 (第83図 写真図版62)

1は須恵器の壺である。胴部中位から底部にかけての資料である。外面はタタキ痕、内面はヘラケズリ、底部は指頭痕が観察される。



SB-6

遺構外



0 10cm

第83図 3区出土土器 2

#### 4区

##### S B - 2 出土土器 (第84・88図 写真図版62・65)

1～3は土師器の坏である。1・2とも口縁部はナデを行い、その下位は指頭痕が観察される。2の内面はナデの痕跡が見られる。1は内・外面、2は内面に赤彩の痕跡を残す。3は外面上にあたかも縄文のような痕跡が観察される。整形時に付いたものか。内面にはナデと指頭痕が観察される。内外面ともに赤彩の痕跡を残す。4～6も土師器である。色調は浅黄色・黄橙色である。形態・技法ともに須恵器と酷似する。4は図上復原した資料である。平坦な底部には辛うじて糸切りの痕跡が観察される。体部は直線的に立ち上がり、口唇部はやや尖らせる。5も直線的に立ち上がり、口唇部を尖らせる。6は底部のみの資料である。摩滅がひどく底部外面の調整痕は判然としない。胎土等が4と酷似しているので、糸切りがなされたものと思われる。7は土師器の皿である。内外面ともにヘラミガキ。赤彩が施されている。8は土師器の小型壺である。口縁部は強いナデを施す。外面には煤の付着が観察される。9は土師器の壺である。口縁部のみの資料である。口縁部は水平に外反させている。土製品ではカマドから上製支脚が出土している。外面は板ナデを施す。頂部は平坦に仕上げている。これらの出土遺物のうち、3・7・8・9は重複する住居の資料の可能性もある。

##### S B - 4 出土土器 (第84図 写真図版62)

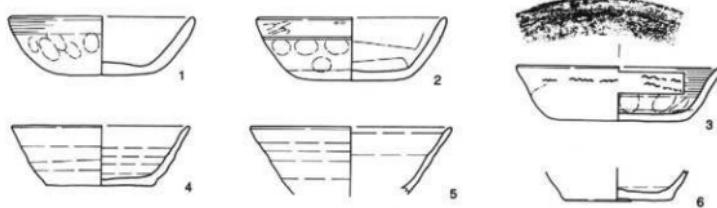
1は灰釉陶器の碗である。S B - 4 覆土上面 (写真図版32) で出土している。高台の断面は方形で、底部高台内側はナデられているが、中央部にはわずかに糸切り痕が残る。見込みには三叉トチンの痕跡が残る。口唇部は強く外反させ、丸く仕上げている。黒錠14号窓式と推定される。

#### 5区

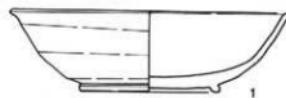
##### S B - 1 出土土器 (第84・85図 写真図版62・63)

1は灰釉陶器の碗である。高台の断面は方形である。口唇部は強く外反させ、丸く仕上げている。黒錠14号窓式であろう。2～7は須恵器である。2・3は坏である。2の底部外面には糸切り痕が残る。体部は直線的に立ち上げ、口唇部を丸く仕上げている。体部外面に重ね焼きの痕跡が見られる。なお1・2は竪穴住居跡床面からまとめて出土している (写真図版35)。3は口縁部のみの資料である。2より器厚がある。体部は直線的に立ち上がり、口唇部はやや丸く仕上げている。4は双耳坏である。図上復原した資料である。ヘラケズリされた底部から直線的に体部を立ち上げさせている。耳部は欠損している。5は短頸壺である。細片資料である。口唇部は平坦に仕上げられている。6・7は長頸壺である。6は頸部のみ、7は口縁部のみの資料である。6・7は別個体であるが胎土が酷似している。なお本住居跡からは他にも坏・壺等の須恵器資料が出土しているが細片のため、固化できなかった。8～13・17～25は土師器である。8～13は坏である。8～11・13は外面に輪積み痕が観察される。8は出土した坏類では口径が最も少ない。9はほぼ完形の状態 (写真図版35) で出土している。9・10に比べ11は器高が低く、器厚も薄い仕上がりであるため、低平な印象を受ける。むしろ11は12・13に形態的には近く、赤彩も内外面ともに観察される。12は口縁部外面にナデ、その下位に指頭痕が観察される。内面にはヘラミガキが施されている。精緻な仕上がりである。13も内外面ともに赤彩が施されている。17～21は小型壺である。いずれも口縁部の仕上げの際に強いナデを施すため、ナデの痕跡が顕著である。内面はナデを施す。口径も14～15cm台でほぼ一定している。20の外面には煤の付着が観察される。22～25は壺である。22・23は口縁部～胴部上位、24は口縁部から底部直上、25は底部のみの資料である。22・23の口縁部に比べ、24は口縁部を水平に外反させており、胴部最大径は口径よりも少なく、新しい時期のものを示す。覆土中位でまとめて出土している (写真図版35)。14～16は内黑

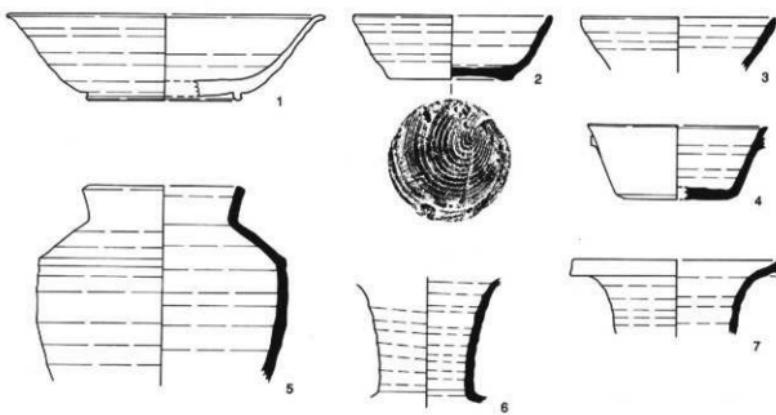
4 区 SB-2



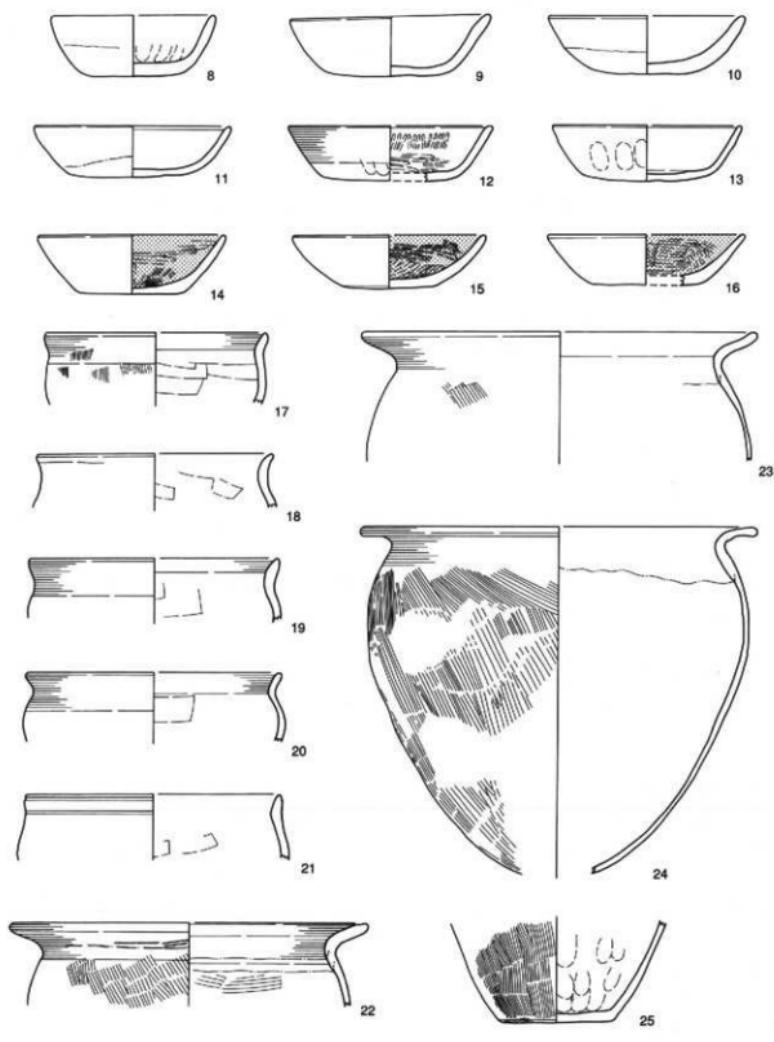
SB-4



5 区 SB-1



第84図 4区出土土器、5区出土土器 1



第85図 5区出土土器 2

上器の坏である。3点とも内面には精緻なヘラミガキを施しているが、外面の調整痕は判然としない。土師器・内黒土器ともに住居内から破片として多く出土しているが、ほとんどが細片のため同化できなかつた。3・5・15・18・24は覆土上位からの出土である。

#### S B-2 出土土器 (第86図 写真図版64)

1~3は土師器である。1は坏の底部と思われる。外面には擦痕が多い。2・3は土師器の壺である。2は口縁部から体部中位、3は口縁部から体部下位にかけての資料である。2・3ともに口縁部を水平に外反させている。2は体部最大径より口径が大きい。3は体部最大径と口径はほぼ同じである。2点とも口唇部を肥厚させている。2・3ともにカマド付近で出土している (写真図版36)。

#### S B-3 出土土器 (第86図 写真図版64)

1は内黒土器である。台付坏、もしくは台付鉢と思われる。体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。内面には精緻なヘラミガキ痕が観察される。覆土上層からの出土である。2は山茶碗の小皿か。底部外面には「×」と墨書きされている。

#### S B-4 出土土器 (第86図 写真図版64)

1は内黒土器である。碗か鉢の体部細片である。内面には精緻なヘラミガキが施されている。

#### S B-7 出土土器 (第86図 写真図版64)

1は土師器の壺である。口縁部から体部下位にかけての資料である。口縁部を下にして、押し潰れた状態 (写真図版35) で出土した。口縁部は寝るように外反し、口唇部を肥厚させる。体部最大径は口径よりも大きい。

#### S B-8 出土土器 (第86図 写真図版64)

1は内黒土器の坏である。内面は精緻なヘラミガキが施されている。外面の調整は判然としない。

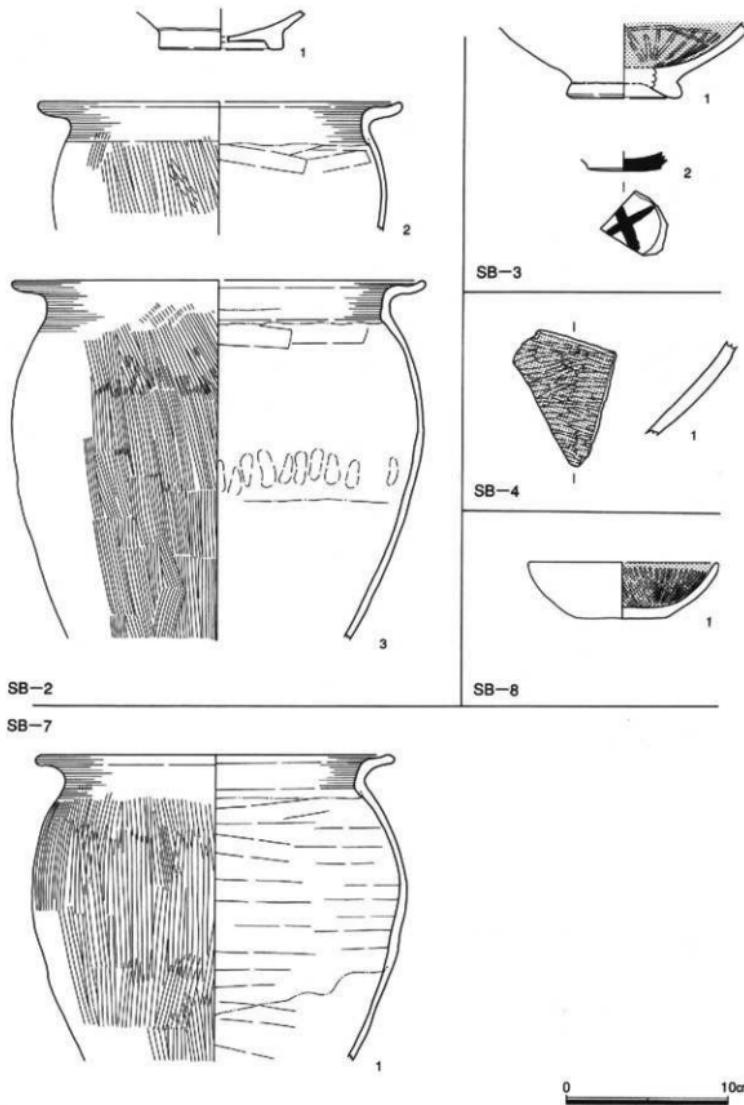
### 6区

#### S B-2 出土土器 (第87図 写真図版65)

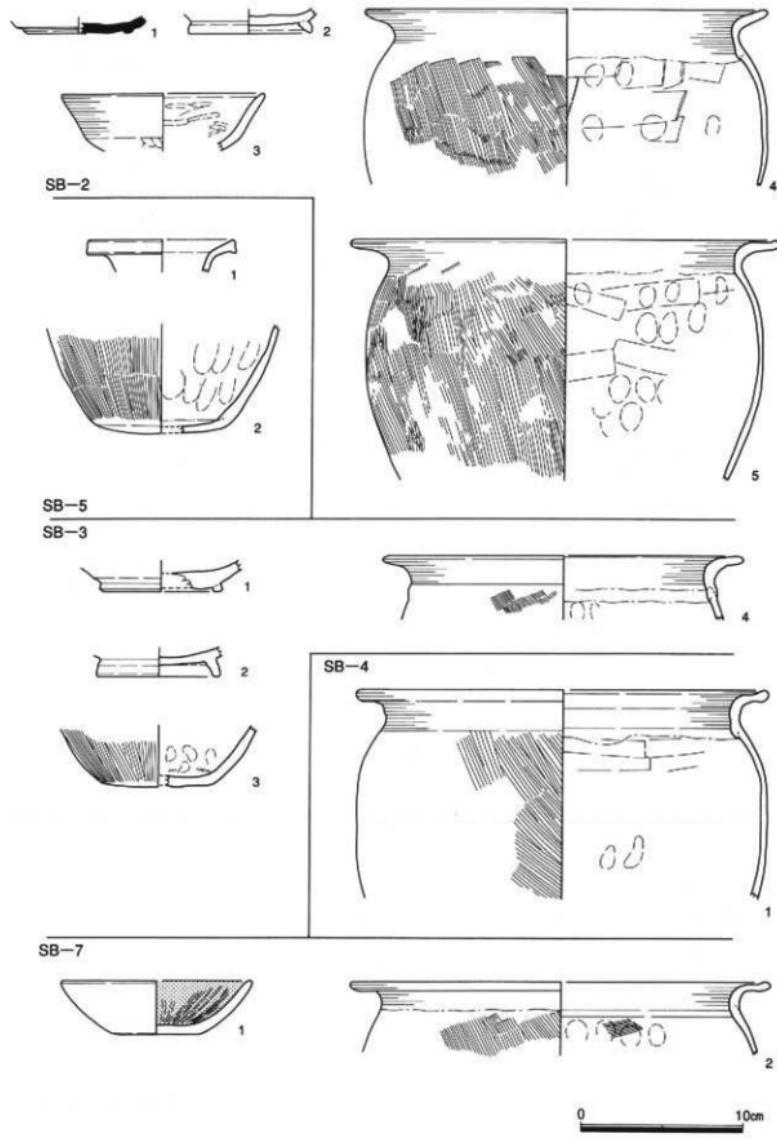
1は須恵器の坏である。底部のみの資料である。削出高台が観察される。2~4は土師器である。2は坏と思われる。底部のみの資料である。高台を有し、仕上がりも堅緻である。3も坏である。口縁部外面にはナデが施されている。4・5は壺である。4は東側のカマド周辺で出土している。口縁部から体部中位にかけての資料である。口縁部を寝るように外反させている。体部最大径と口径の数値はほぼ等しい。5は北側のカマドで出土している。口縁部から体部中位にかけての資料である。口縁部を水平に外反させ、口唇部を肥厚させている。体部最大径よりも口径が大きい。

#### S B-3 出土土器 (第87図)

1・2は灰釉陶器である。1は碗の底部と思われる。釉は発色していない。全体的に摩滅している。2は皿の底部のみの資料である。高い高台を有し、見込みには釉が見られる。3・4は土師器の壺である。3は底部のみ、4は口縁部の資料である。4の口縁部は水平に外反している。



第86図 5区出土土器 3



第87図 6区出土土器 1

#### S B-4 出土土器 (第87図 写真図版65)

1は土師器の壺である。口縁部から体部中位にかけての資料である。口唇部を肥厚させ、口縁部を水平に外反させている。体部最大径と口径の数値はほぼ等しい。

#### S B-5 出土土器・土製品 (第87・88図)

1は灰釉陶器の壺である。口縁部のみの資料である。施釉されている。2は土師器の壺である。底部のみの資料である。カマド付近から4点土錐が出土している。

#### S B-7 出土土器 (第87図 写真図版65)

1は内黒土器の壺である。内面は精緻なヘラミガキが施されている。外面の調整は判然としない。カマド掘り方からの出土である。2は土師器の壺である。口縁部のみの資料である。口唇部を肥厚させ、口縁部を水平に外反させている。

#### S F-21 出土土器 (第88図)

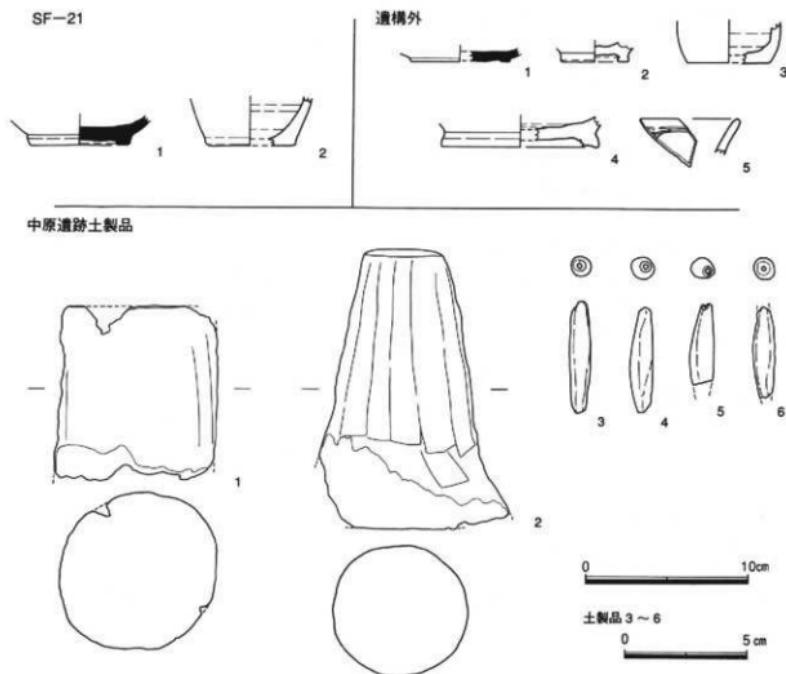
1は須恵器の碗である。底部のみの資料である。軟質で、摩滅している。2は灰釉陶器の小型壺である。底部外面に糸切り痕が辛うじて観察される。体部は直線的に立ち上がる。

#### 遺構外出土土器 (第88図 写真図版70・71)

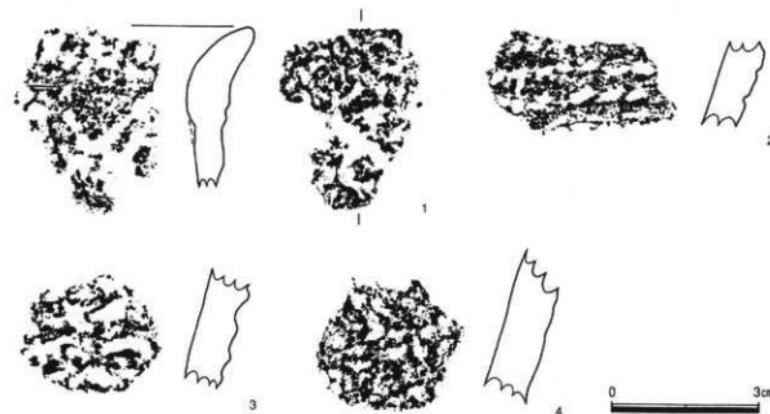
1は須恵器の壺である。底部のみの資料である。削出高台である。2~4は灰釉陶器である。2・3は小型壺と思われる。2点とも底部のみの資料である。2は高台を有し、3は高台は無く、糸切り痕が観察される。体部は内湾気味に立ち上がる。4は底部のみの資料である。5は青磁の碗である。口縁部の細片資料である。龍泉窯系青磁碗A 4と推定される。

#### 縄文土器 (第89・90図 写真図版68・69)

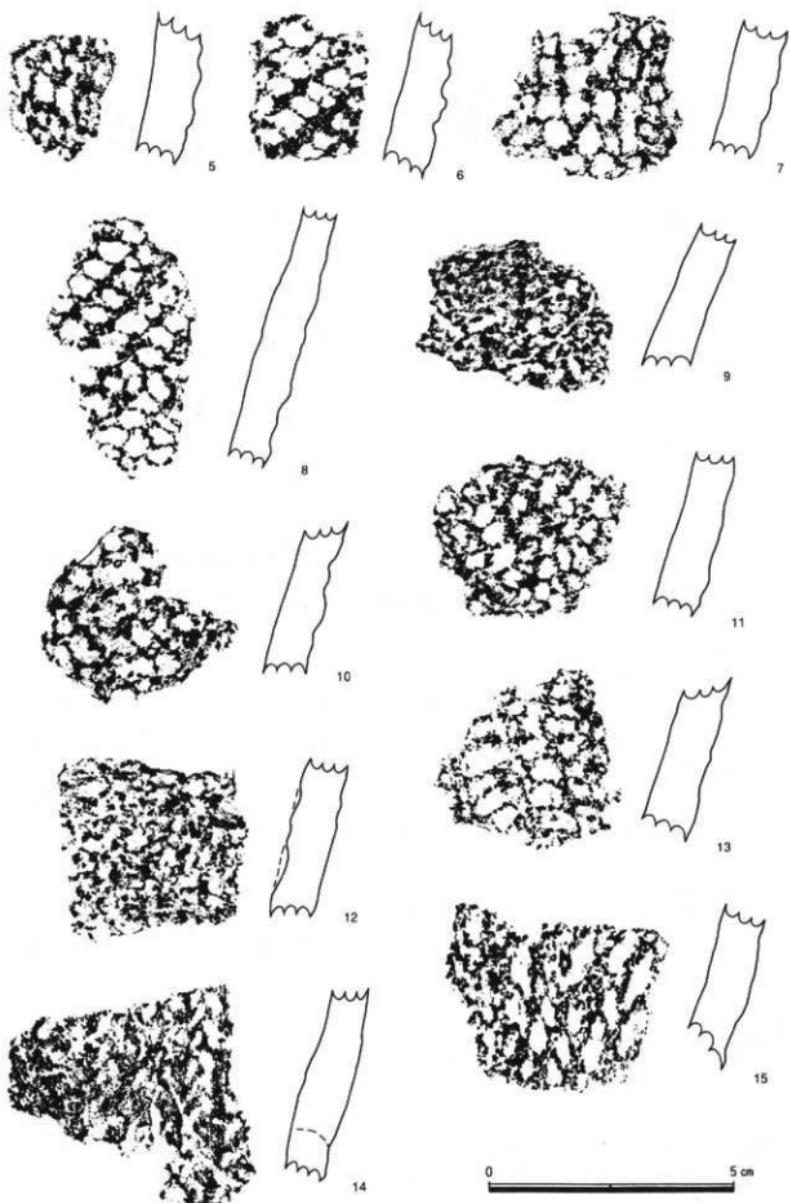
中原遺跡6区において出土した縄文土器は161点を数える。縄文時代草創期の多縄文系土器と思われる。しかしながら殆どの資料は極めて細片で、器面の風化が激しかった。これらの中で紋様が施されていると確認し、報告できるのは15点である。1は口縁部である。口唇部内外面に縄文が施されている。2・14については撚糸、もしくは側面圧痕の可能性がある。他はR Lがほとんどと思われるが、風化が激しく判然としない。これらの縄文土器の胎土中は小礫・白色粒子及び纖維を含んでいる。



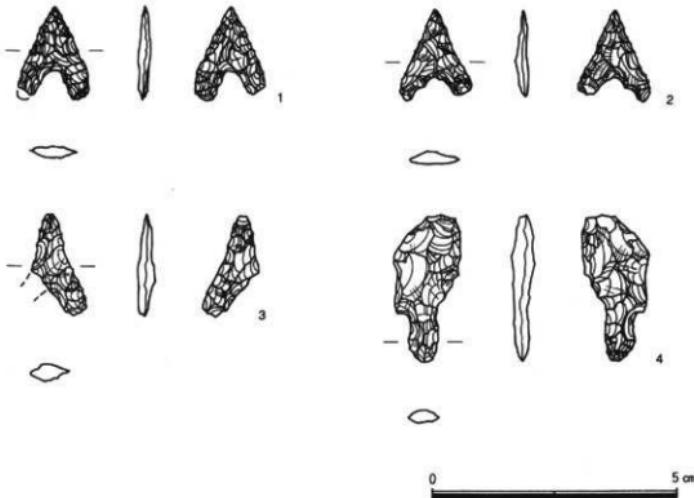
第88図 6区出土土器 2、中原遺跡出土土製品



第89図 6区出土縄文土器 1



第90図 6区出土繩文土器 2



第91図 中原遺跡出土石器 1

## 2 石器

中原遺跡で出土した石器は総点数49点である。石器の種類は打製石錐・石斧の他に、砥石・敲打石や剥片等が挙げられる。数量的に多いのが剥片で27点を数える。これは石器総点数の内の約55%を占める。石器の所属する時期は縄文時代・奈良～鎌倉時代である。遺構から出土している石器もあるが、後世の遺構への流れ込み資料の可能性がある。この節では出土した区・遺構ごとではなく、種類毎に述べてみたい。なお石器の計測値・石材等は第11表に記載した。また剥片は全て図化している。石材鑑定は静岡大学の伊藤通玄氏、当研究所技術員の森鶴富士夫氏に指導を受けた。

### 打製石錐（第91図1～3 写真図版73）

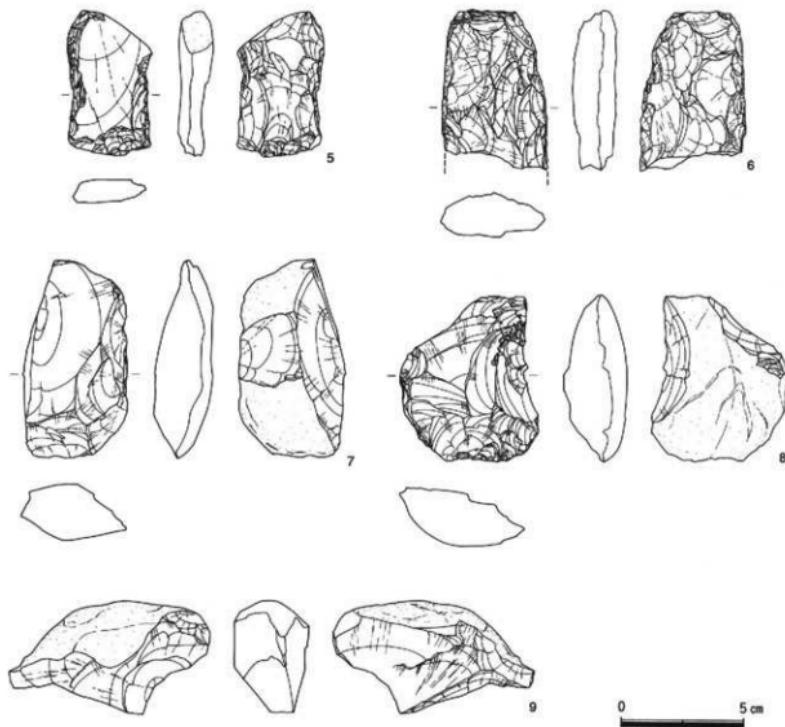
打製石錐は3点出土している。3点とも凹基無茎錐である。1・2は7区、3は1～1区の出土である。1・3は欠損部が認められるが、2は完形である。3点とも装着痕は観察されない。所属時期は縄文時代と推定される。

### 打製石錐（第91図4 写真図版73）

打製石錐は1点出土している。1～2区からの出土である。基部には装着痕等は観察されない。錐部には使用痕は観察されない。所属時期は縄文時代と推定される。

### 打製石斧（第92図5～6 写真図版73）

打製石斧は3点出土している。3点とも包含層中からの出土である。5は基端部に自然面が残していいる。本来はさらに長い石斧で、使用による折損後に刃部の再生を試みた可能性がある。基部中位の両側縁部が外削している。柄との装着部であった可能性があるが、摩耗や緊縛した痕跡は観察されない。



第92図 中原遺跡出土石器2

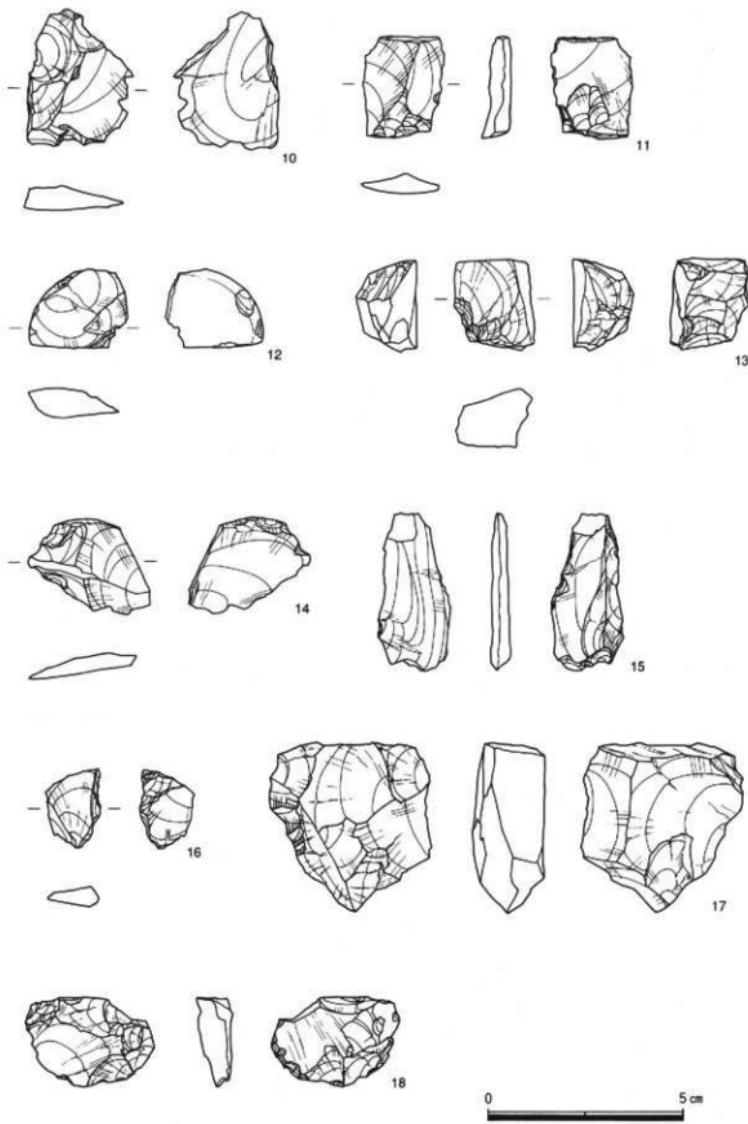
6は基部中位より折損している。摩耗や柄に緊縛された痕跡は観察されない。7は自然面が残置している。基部の一部で未製品の可能性がある。3点とも粘板岩である。所属時期は縄文時代と推定される。

#### 剥片等（第92～95図 8～34 写真図版73）

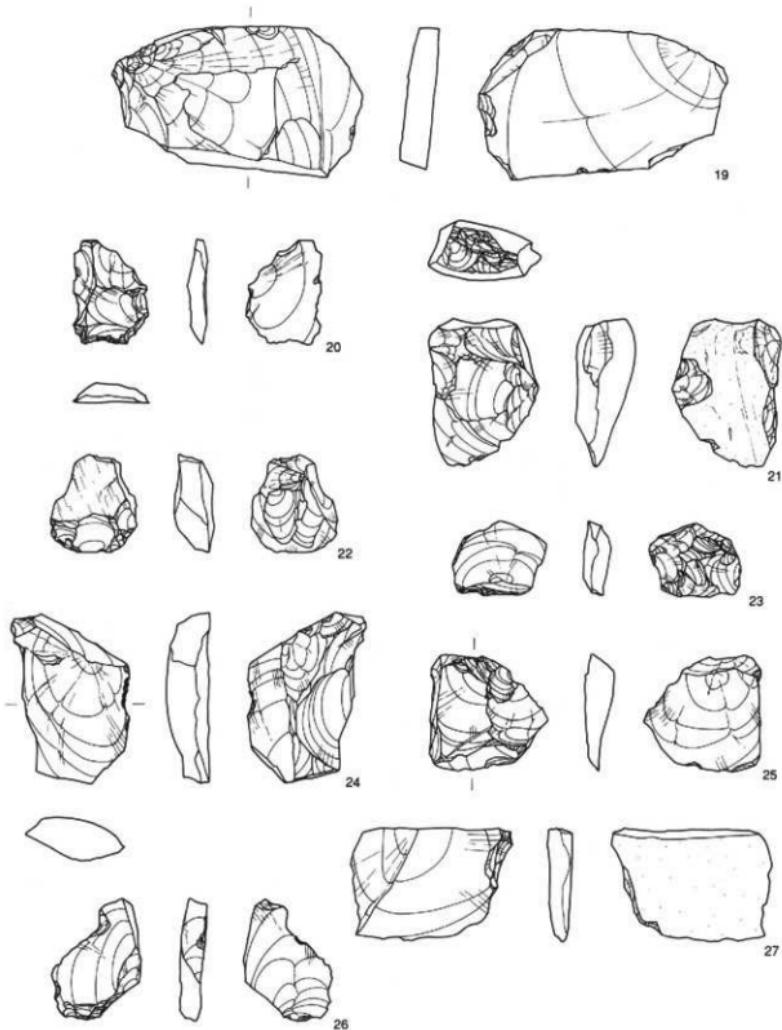
剥片は27点出土している。石材で多いのが頁岩である。出土している地区は1区と6区に集中する。6区出土の資料については、当該調査区で縄文時代草創期の土器が出土しており、その出土層位から発見されている点から、土器と同時期であろう。また1区で出土している剥片については、土器の出土がないため、その外観的特徴から縄文時代の資料と推定される。これらの剥片の中には側縁部に微細な剥離痕が見られることから打製刃器としての機能を有していた資料もあるが、剥片として一括した。

#### 砥石（第96・97図35～39・42・44 写真図版73・74）

砥石は7点出土している。35～37の石材は粗面岩質凝灰岩で、36・37が2-1区SD-10から出土している。所属時期は鎌倉時代と推定される。39は6区SB-3から出土している。この豊穴住居跡からは刀子も出土しており、セットで使用されたのであろう。石材は凝灰岩質粘板岩で先述の3点とは

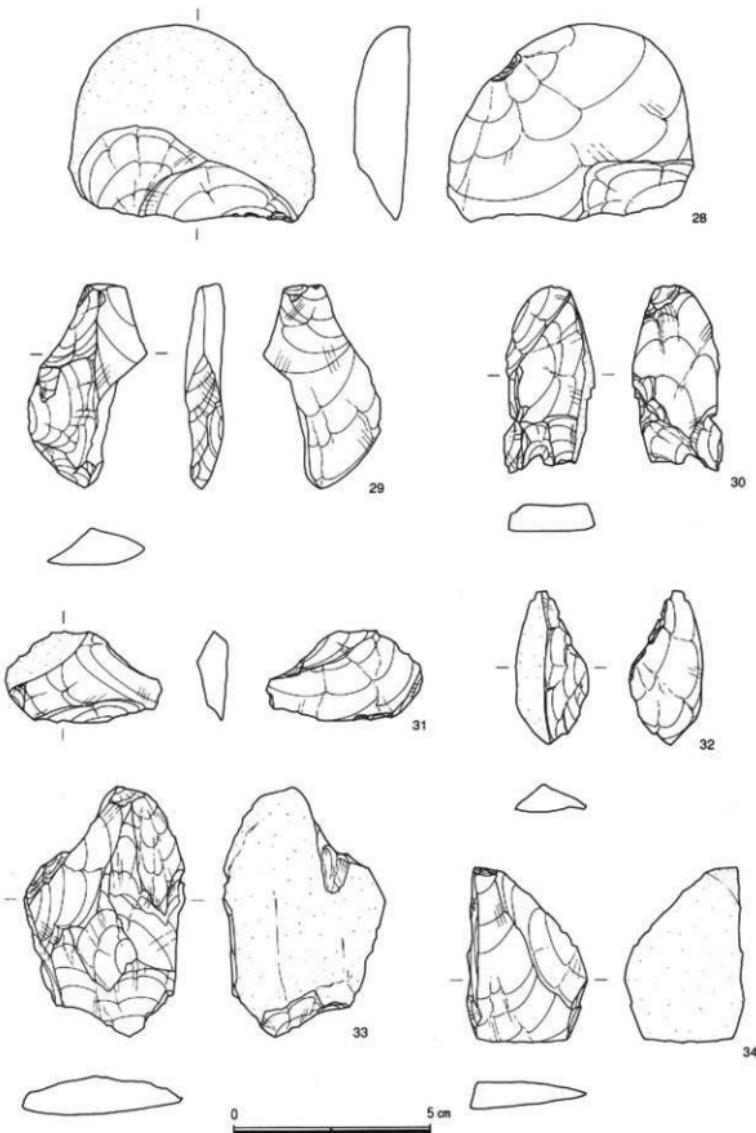


第93図 中原遺跡出土石器 3

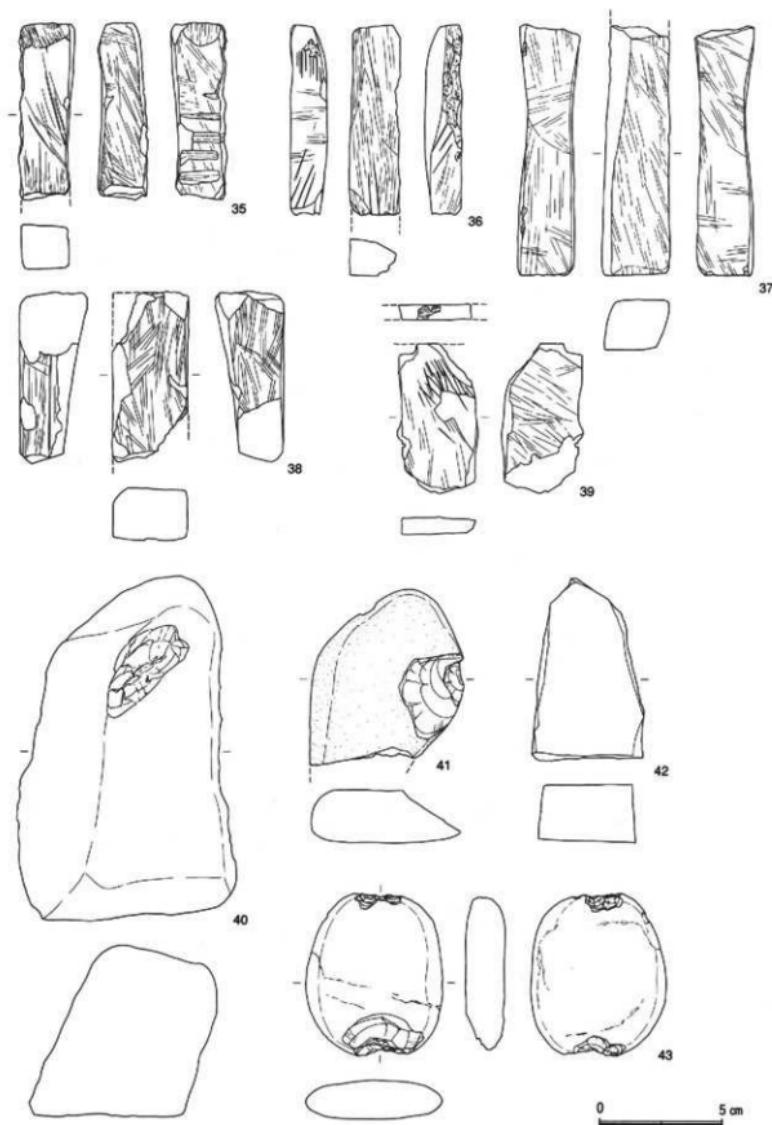


0 5 cm

第94図 中原遺跡出土石器 4



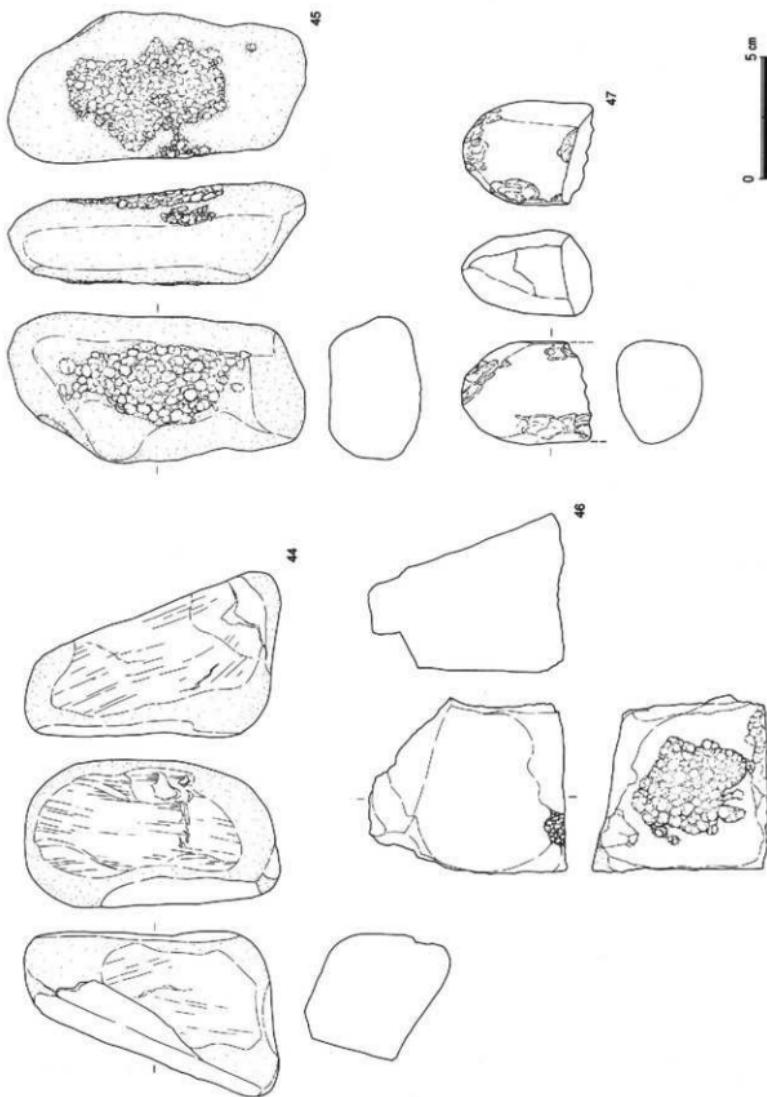
第95図 中原遺跡出土石器 5



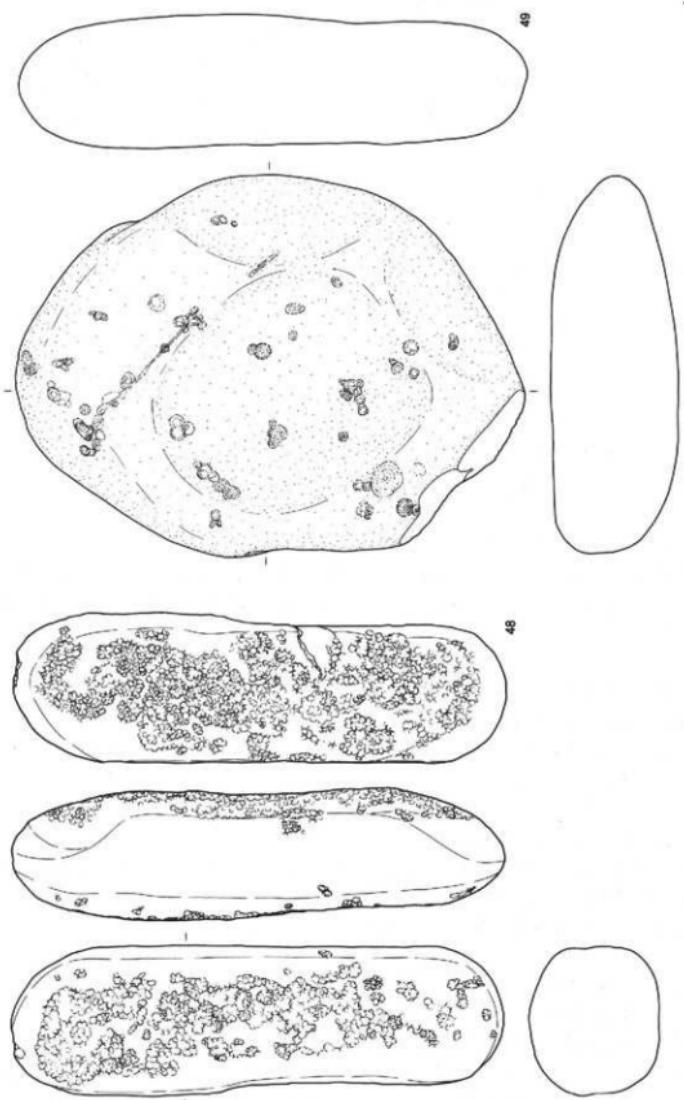
第96図 中原遺跡出土石器 6

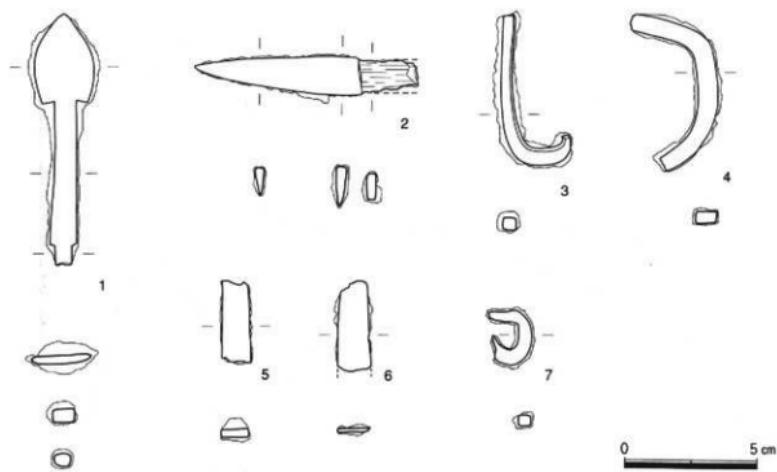
第97圖 中原遺跡出土石器 7

5 cm  
0



第98圖 中原遺跡出土石器 8





第99図 中原遺跡出土鉄製品

異なる。42は中粒砂岩で比重も重い。所属時期は判然としない。44は2-3区SB-1からの出土で、自然礫を使用している。表面は風化しており、牧ノ原礫層に由来するものと思われる。

#### 敲打石（第97・98図45~48 写真図版74）

敲打石は4点出土している。45・46・48は5区からの出土で全て9世紀前後の堅穴住居跡から出土している。いずれも比重の比較的重い石材を使用している。47は6区の縄文時代の土器が出土した層位から出土している。

#### 台石（第98図49 写真図版74）

台石は1点出土している。6区で縄文時代の土器が出土した層位から出土している。表面に僅かに敲打痕が観察される。磨面等は判然としないが、平坦な面が形成されているため、食物等を磨り潰す作業を行っていたものと推定される。

#### その他（第96図 40・41・43 写真図版73）

40は2-1区SB-4から出土したカマドの支脚である。表面が風化しており、牧ノ原礫層に由来する自然礫と推定される。41は焼穢である。6区で縄文時代の土器が出土した層位から出土している。43は打欠石錘である。表面が風化しており、牧ノ原礫層に由来する自然礫と推定される。

#### 3 金属製品（第99図 写真図版75）

中原遺跡で出土した金属製品は全て鉄製品である。次の7点である。1は2-3区SB-1から出土した鉄鎌である。鎌身部は長三角形を呈し、関部は逆刺と思われる。頭部の関部は角関で茎部が辛うじて残存している。茎部の断面形は長方形である。2は6区SB-3から出土した刀子である。身部の断面形は楔形を呈する。茎部には木質が残存している。3~7までは用途が不明である。3・5~7は5区SB-1からの出土である。4は5区SF-3からの出土である。

# 第5章 宮裏遺跡

## 第1節 概 要

宮裏遺跡は静岡県島田市阪本字宮裏・高畠・称宣カイドに位置する。設定した調査区は1～3区までである。この付近は高根森古墳群の一角を占め、南側の天王神社境内には9号墳が残る。今回、報告するのは平成10・11年度に調査できた区域である。本線部分を占める1・3区は北西端から南東端まで約120m、最大幅は約12mをはかる。未調査域が残置しているため、幅が3mと狭い箇所がある。遺構確認面の標高は3区北西端付近で約44.3m、1区南東端付近で約41.8mをはかり、比高差は約2.5mである。南東に向かって緩やかに傾斜している。2区は本線へと直結する市道部分をさす。調査区は南北に2分割され、長さは約39m、幅は1～3m程度であり、極めて狭長である。この両調査区ではIV層面で遺構の検出を行っている。遺跡が占地している「色尾疊層」は成立年代が新しく、中原遺跡のIV層上の質と若干異なる。一帯は茶畑の改植の際に、重機を投入しているためIV層面には重機のバケット痕が多く見られた。よって確認面までの層位は擾乱層が多く、標準的な土層は判然としなかった。遺構は概して3区の西半部に多く見られ、奈良時代から鎌倉時代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡がある。その他、近世以降の溝状遺構や所蔵時期の判然としない円形土坑が多数検出されている。高根森古墳群に隣接する点から古墳時代の遺構・遺物の存在が想定されたが、検出していない。また3区東半部には近代の溝状遺構が3条めぐり、近世～近代の遺物が出土している。この溝状遺構は地元の古老人の記憶にあるというので今回は掲載扱いとしている。グリットは宮裏遺跡を中心に設定・使用している（第100図）。

## 第2節 検出遺構

### 1区（第101図 写真図版47）

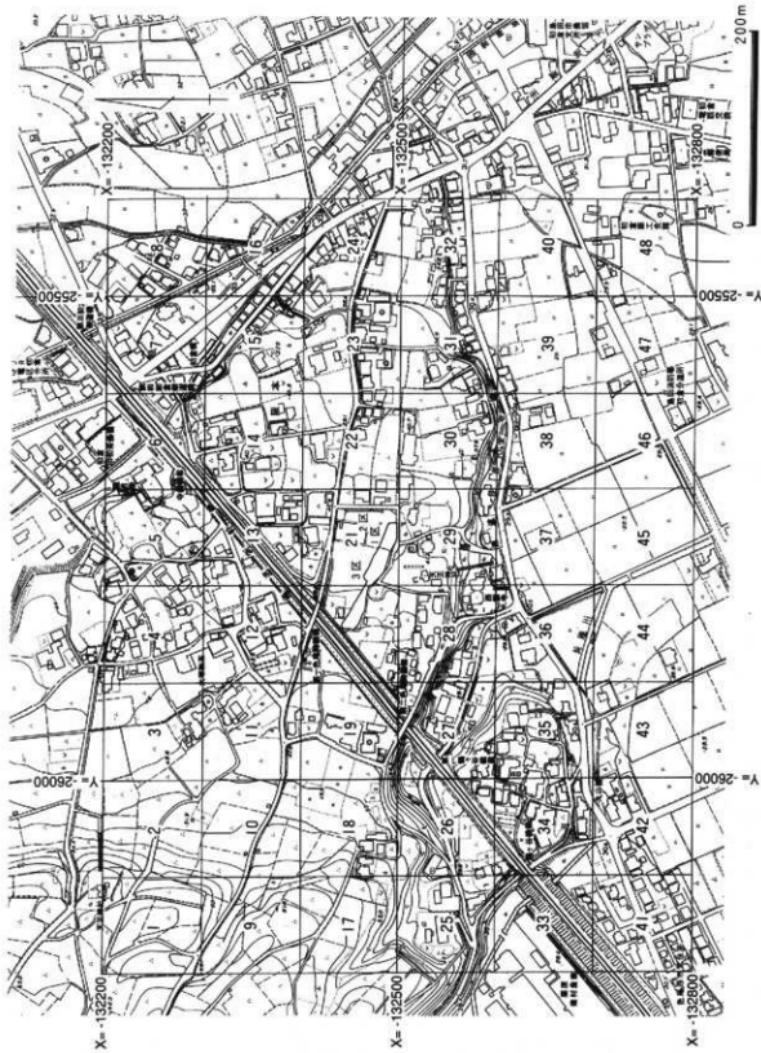
1区は21-C4から21-A4の間に展開する調査区である。調査は平成10年度に実施している。実地面積は338m<sup>2</sup>をはかる。調査区の長さは29m、幅は13mをはかる。調査区は公道沿いにあったことから南辺が屈曲している。本調査区は茶畑耕作の影響が濃く、ほぼ一面重機による破壊を受けていた。調査区西半部では遺構の分布が薄く、南東付近に遺構が集中していた。この調査区では奈良時代から平安時代にかけての堅穴住居跡4軒が検出されている。

#### 堅穴住居跡（SB）

##### SB-1（第102図 写真図版48・49）

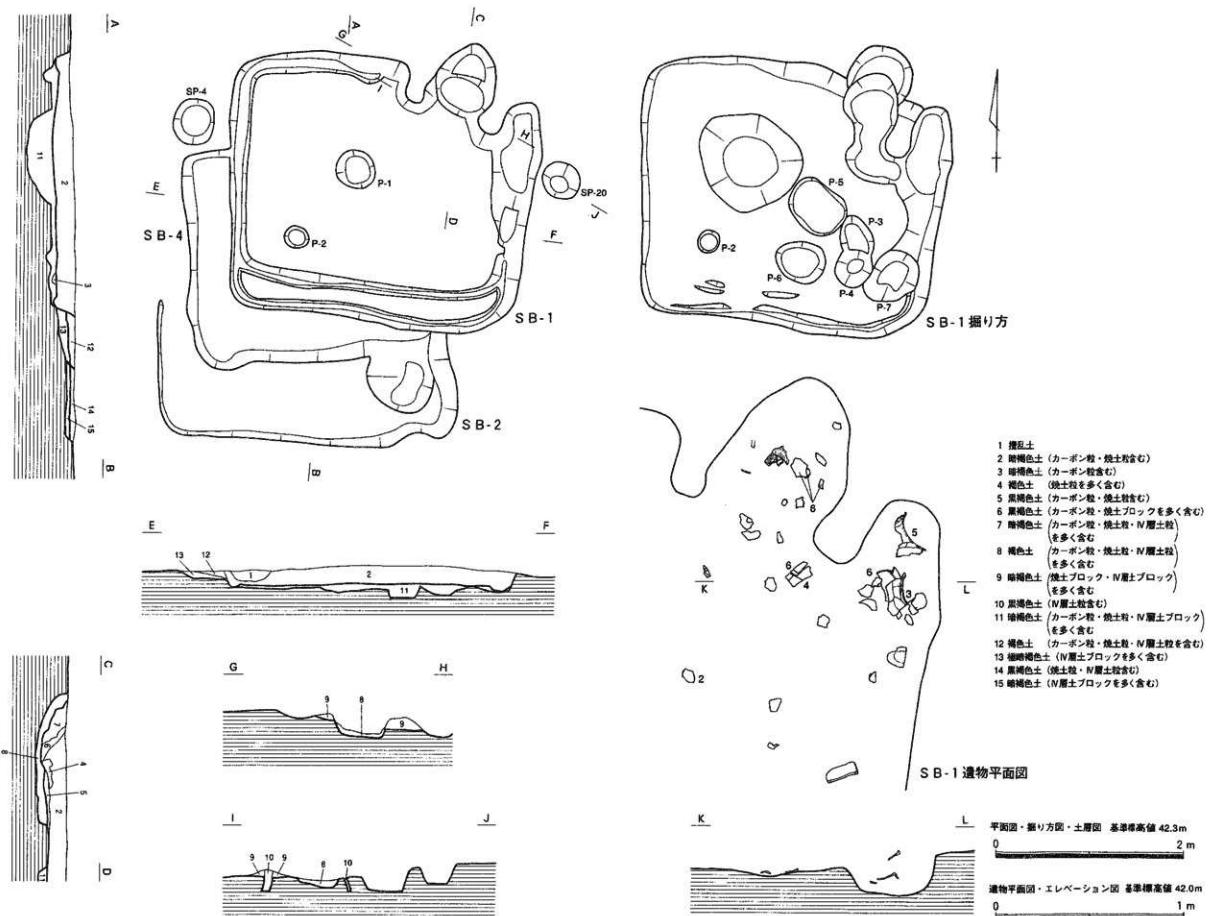
SB-1は21-A6・7に位置する。平面形はややいびつな方形を呈する。規模は3.31×2.91mをはかる。住居の建物方向はN-4°-Eである。SB-1が検出されたのは1区でも南東部に位置し、周囲は重機による擾乱を受けており、遺存状態は決して良好ではなかった。このSB-1は南側にSB-2・4と重複している。時期はこれらの住居よりも新しい。床面は堅鐵で、貼床を確認している。覆土は暗褐色土で焼上粒等を含んでいる。住居北壁の中央部からやや北東隅よりの位置に、カマドを1基確認、袖部が検出された。焼土ブロック・IV層上ブロックを多く含んだ暗褐色土をカマド構築土としている。また両袖部には構築材の痕跡が見られた。木材を袖の芯材として利用していた可能性がある。また右袖には蝶が1点見られ、これも構築材の可能性がある。床面には住居に伴うと推定されるビット（P）が床面上に2基、掘り方に新たに5基検出された。掘り方のほぼ中央部には床下土坑が見られた。

第100図 宮廻遺跡調査区・アリッド位置

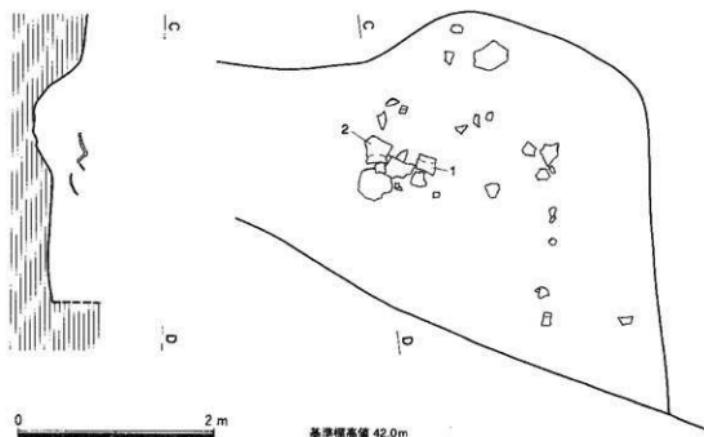
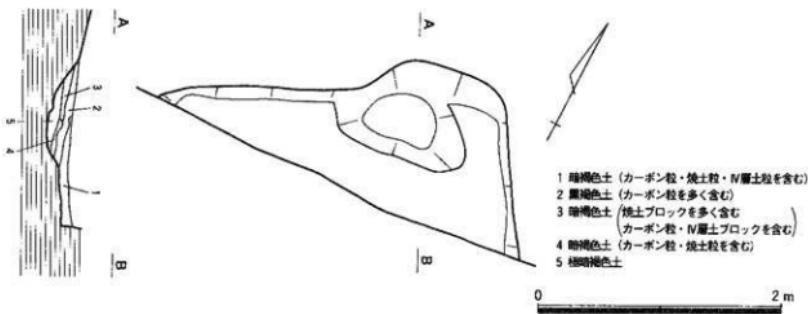




第101図 宮崎遺跡 1～3区平面図



第102図 1区SB-1・2・4



第103図 1区SB-3

またカマド脇の住居跡北東隅部には土坑が設けられ、貯蔵穴である可能性もある。壁溝は東壁・カマド周辺を除いた塀沿いに見られた。また南壁沿いにはSB-1が南壁側を拡張する前の壁溝を検出した。遺物はカマド周辺で上師器壺の破片が多く出土している。住居の時期は9世紀以降と推定される。

#### SB-2 (第102図 写真図版48)

SB-2は21-A 6に位置する。平面は方形であったと思われる。北半部をSB-1・4により削平されている。これらの3軒の竪穴住居跡の中ではSB-2が最も古い住居である。幅は3.2mをはかり、建物方向はN-1°-Eである。床面はあまり堅硬ではなかった。IV層上ブロックを多く含む暗褐色土が貼床層の可能性がある。床面には住居に伴うと推定されるビット(P)や壁溝は確認できなかつた。住居南東隅部には土坑が確認された。遺物は土師器等が出土している。住居の時期は9世紀以降と推定される。

### S B - 3 (第103図 写真図版49)

S B - 3 は 21-A 6・7 に位置している。住居跡は調査区南壁際で検出され、大部分は調査区外へと広がる。検出できたのは住居北壁と東壁の一部である。平面は方形を呈していたと思われる。住居の建物方向は N-30°-W である。床面は堅綴ではない。貼床の存在を確認できなかった。床面には住居に伴うと推定されるビット (P) や壁溝は確認できなかった。北壁にカマドを 1 基確認した。袖部は確認できなかった。カーボン粒・焼土粒・IV 層上ブロックを含む土の堆積が確認される。カマド周辺では覆土上位から上師器壺の破片が出土している。住居の時期は出土した土器から 8 世紀代と推定される。

### S B - 4 (第102図 写真図版48)

S B - 4 は 21-A 6 に位置している。平面は方形を呈していたと思われる。S B - 4 は南側で S B - 2 を削平し、北側で S B - 1 により削平されている。遺存状態は良好ではない。奥行きは 2.3m をはかる。住居の建物方向は N-2.5°-W である。床面はあまり堅綴ではなかったが、IV 層上ブロックを多く含む極暗褐色土が貼床層と推定される。床面には住居に伴うと推定されるビット (P) や壁溝は確認できなかった。住居の時期は 9 世紀以降と推定される。

### 2 区 (第101図 写真図版50)

2 区は 21-F 8 から B 8 までの間に展開した調査区である。調査は平成10年度に実施している。実掘面積は 71m<sup>2</sup> をはかる。調査区は南北に二分割されている。長さは 39m、幅は 1~3 m 程度で極めて小さな調査区である。遺構は北側の調査区に多く、堅穴住居跡、土坑、柱穴等を検出しているが、南側には土坑を 1 基確認したにすぎない。検出した奈良時代の堅穴住居跡 3 基について述べてみたい。

### 堅穴住居跡 (S B)

#### S B - 1 (第104図 写真図版50)

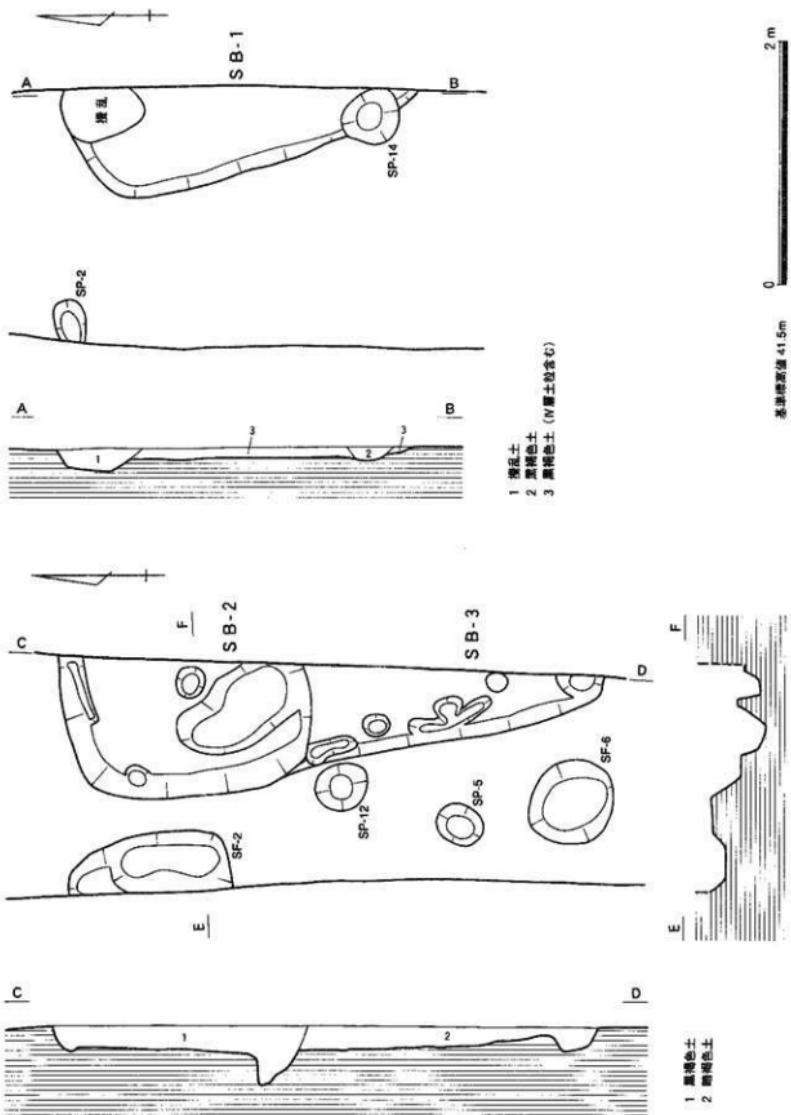
S B - 1 は 21-E・F 8 に位置する。調査区東壁際に位置し、検出されたのは西壁と北壁の一部である。住居北壁には搅乱が見られ、また西壁には S P - 14 と重複する。S B - 1 が時期的に先行する。床面はやや堅綴であったが、貼床は判然としなかった。床面には住居に伴うと推定されるビット (P) や壁溝は確認できなかった。住居の時期は 8 世紀代と推定される。

#### S B - 2 (第104図 写真図版50)

S B - 2 は 21-E 8 に位置する。調査区東壁際に位置し、検出されたのは西半部で、大部分は調査区外へ広がる。南側で S B - 3 と重複し、S B - 2 が新しい。奥行きは 2.2m をはかる。建物方向は N-12°-W である。床面はあまり堅綴ではない。貼床は判然としない。床面には住居に伴うと推定されるビット (P) が 2 基検出された。また平面がいびつな楕円形を呈する土坑が見られる。覆土は黒褐色土である。壁溝は北壁に一部見られる。断面は U 字形である。住居の時期は 8 世紀代と推定される。

#### S B - 3 (第104図 写真図版50)

S B - 3 は 21-E 8 に位置する。調査区東壁際に位置し、検出されたのは西壁一部で、北側を S B - 2 により削平されている。S B - 3 の建物方向は N-13°-W である。床面はあまり堅綴ではない。貼床は判然としない。床面には住居に伴うと推定されるビット (P) が 2 基確認される。1 基は住居跡南西隅部に位置する。西壁に見られる掘り込みは壁溝に由来するものかどうかは判然としない。覆土は暗褐色土である。須恵器が出土している。住居の時期は 8 世紀代と推定される。



### 3区（第101図 写真図版51）

3区は20-F 6から21-A 4の間に展開した調査区である。調査は平成11年度に実施している。実掘面積は1088m<sup>2</sup>をはかる。調査区の長さは91m、幅は3.5~16mをはかる。調査区中央部南壁20-C 10付近は未調査区域である。このため調査区は縦む形を呈する。西壁側には東海道新幹線が通る。調査区南側には天王神社・桜神社の境内がある。境内でも調査区寄りの21-A・B 1付近には高根森古墳群の9号墳がいまだに墳丘を残している。調査前には埋没した古墳の存在も想起されたが、調査の結果、古墳群と関連性を窺わせる遺構の存在は認められていない。また7世紀以前の土器等の遺物も確認出来なかった。今回の調査区は周知の古墳群の北辺に設定されているが、可能性としてこの9号墳が高根森古墳群の北限として考えて良いのかもしれない。この調査区では堅穴住居跡13軒、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構・土坑等が検出されている。堅穴住居跡の時期は奈良時代と推定している。掘立柱建物跡は鎌倉時代と思われる。なお第1節で触れたように21-C・D 1付近、および21-B 3付近には溝状遺構が検出され、近世~近代の遺物が出土している。本報告ではこれらの遺構を擾乱として扱う。宮裏遺跡の1区以東については今後、継続して調査を行う予定であり、その結果を見てこの遺跡の実相についてより積極的に考えることが出来よう。

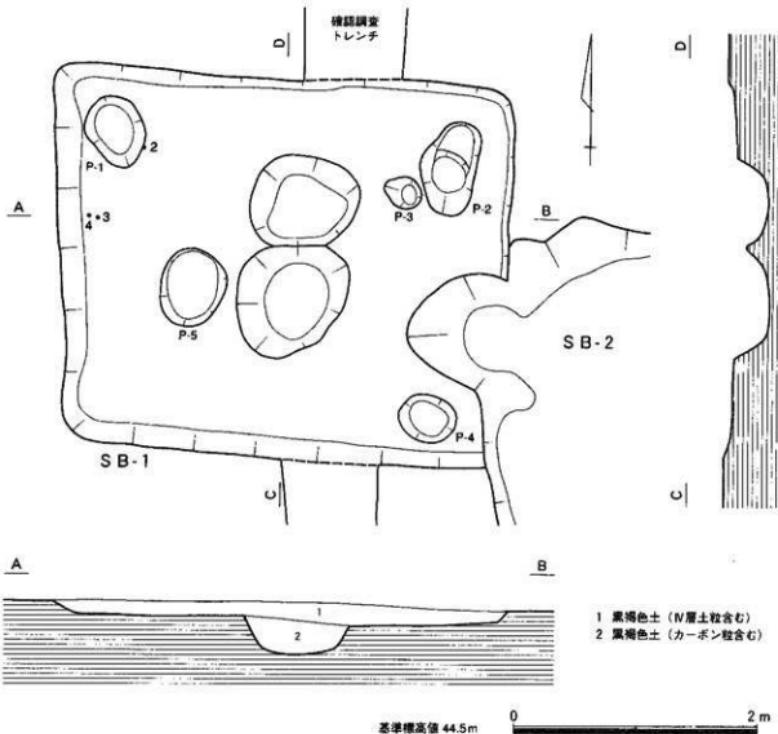
### 堅穴住居跡（SB）

#### SB-1（第105図 写真図版52）

SB-1は20-F 6に位置する。平面は方形を呈する。規模は3.83×3.15mをはかる。住居の建物方向はN-3°-Eである。SB-1が検出された地点は調査区でも北西端付近に位置する。この付近は茶畠耕作の影響が少なかったため、遺構はⅢ層下面で検出することができた。住居東壁付近はSB-2と重複しており、時期的にはSB-1が先行する。床面はやや堅緻であったが貼床は判然としなかった。床面には住居に伴うと推定されるビット（P）を5基検出している。P-1・2・4はそれぞれ、住居跡北西・北東・南東隅部に位置し、主柱穴の可能性がある。また住居跡床面中央部には住居に伴うと推定される土坑が2基確認された。カーボン粒を含む黒褐色土が充填され、住居の床下土坑の可能性がある。床面積は9.9m<sup>2</sup>と推定される。住居内の覆土はⅣ層土粒を含む黒褐色土である。カマド・壁溝は検出されていない。遺物は須恵器・土師器が出土している。住居の時期は出土した土器から8世紀後半と推定される。

#### SB-2（第106図 写真図版52）

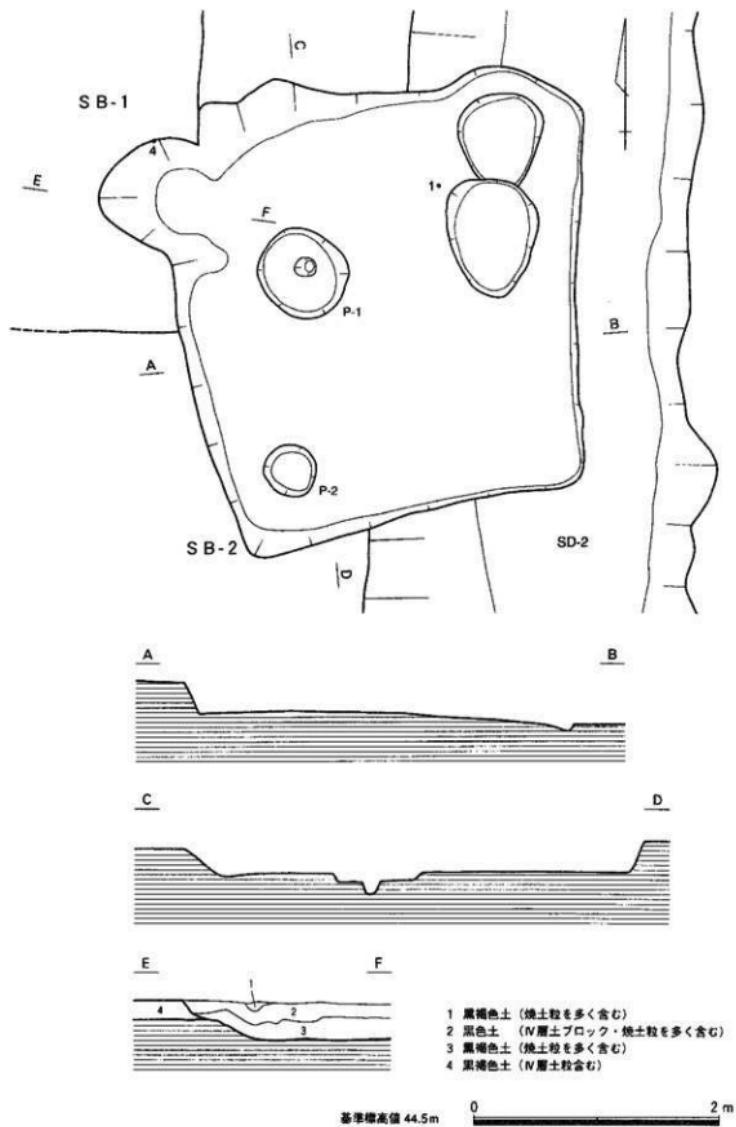
SB-2は20-F 6・7に位置する。平面は方形を呈する。規模は3.55×3.84mをはかる。住居の建物方向はN-11.5°-Wである。SB-2は東半部はSD-2によりかなり削平されていたが、床面は辛うじて残置していた。西壁の一部はSB-1と重複しており、SB-1より時期的に新しい。床面はやや堅緻であったが、貼床は判然としなかった。床面には住居に伴うと推定されるビット（P）が2基確認される。住居中央部からやや西よりの位置で検出されたP-1は、平面が円形を呈する。径0.7m、深さ0.1mをはかる。底面にはさらに径0.2m、深さ0.1m程度の小穴を穿つ。性格は不明である。住居北東隅部には、平面がいびつな橢円形を呈する土坑状の掘り込みが2基重複している。住居に伴うと思われる。住居の覆土は黒褐色土である。カマドは西壁でも住居北西隅部寄りの位置で1基確認した。地中であるⅣ層を袖状に掘り残して、袖部の基礎としていた可能性がある。カマド付近には焼土粒またはブロックを含んだ黒色~黒褐色土系の覆土が堆積していたが、カマド構築土とは判断できなかった。床面積は9.6m<sup>2</sup>をはかる。壁溝は確認されていない。遺物は須恵器・土師器細片が出土している。住居の時期は8世紀後半と推定される。



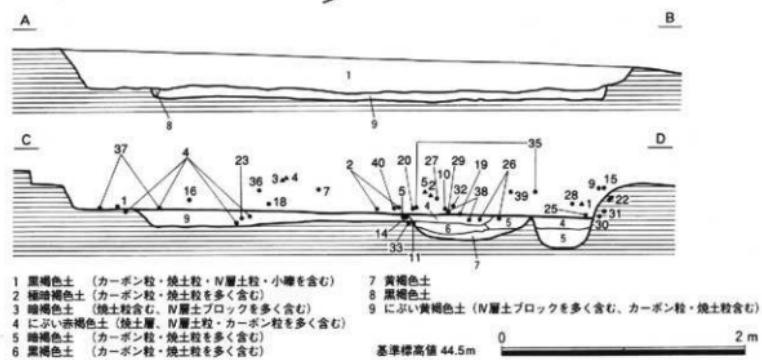
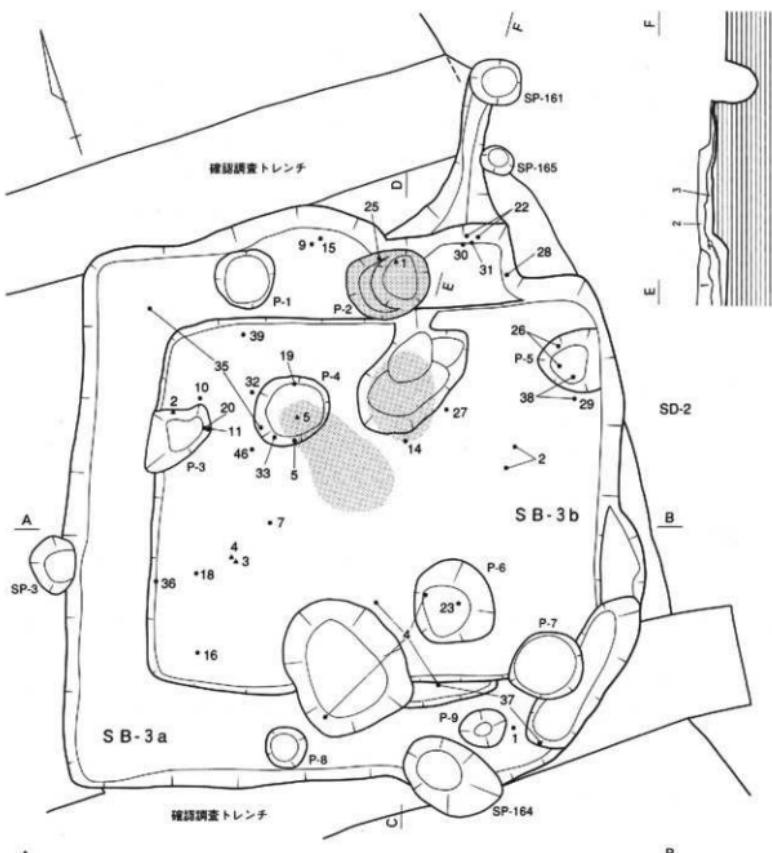
SB-3 a・b (第107図 写真図版53)

SB-3 a・bは20-E 6・7に位置する。掘削直前まではSB-3として1軒の堅穴住居跡と判断していたが、掘削調査の結果、ほぼ同一標高の床面を有した2軒の堅穴住居跡が存在したことが判明した。大きい住居跡をSB-3 a、掘削調査の結果、明らかになった規模の小さい住居跡をSB-3 bとして報告する。

SB-3 aの平面はいびつな方形を呈している。住居跡南東隅部には土坑が掘られ、瘤状に肥大している。規模は4.54×4.82mをはかる。建物方向はN-18°-Eを呈する。住居北東隅部はSD-2により削平されている。SB-3 bよりも新しい堅穴住居跡と思われる。住居跡はSP-3・161・164・165と重複しているが、これらの柱穴は住居跡より新しい時期のものと推定される。床面はやや堅緻であったが、貼床は確認できなかった。床面積は17.8m<sup>2</sup>をはかる。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)が9基確認されたが、P-3~6については所属するのがSB-3 aなのかSB-3 bであるのか判然としない。P-2の覆土上層は焼土層であった。また住居跡床面中央部から南側の位置に平面が瘤円形を呈する土坑を検出している。長軸1.1m、短軸0.92m、深さは0.22mをはかる。床下土坑の可能性がある。カマドは住居北壁に1基見られる。袖部は検出できなかつものの、煙道らしき溝状遺構がある。



第106図 3区SB-2



第107図 3区SB-3 a + b

構を検出した。長さ1.3m、深さ0.1mをはかる、カマド本体との接続部は幅約1.0mをはかるが、次第に0.22m程度まで細くなる。先端はSB-161により破壊されている。底面はほぼ平坦で、標高値44.1m前後であるが、カマドの燃焼部とは約0.18m程度の段差が存在する。これまで検出されたカマド遺構とは異なる構造である。P-2の焼土とカマドとの関連は不明である。壁溝は確認できなかった。住居内の覆土は黒褐色土で、須恵器・土師器の細片が大量に出上している。覆土はカーボン粒・焼土粒等を含み埋められた可能性も持つ。住居の時期は出土している土器から8世紀後半と推定される。

SB-3bの平面は方形を呈している。規模は3.75×3.1mをはかる。建物方向はN-11°-Eである。住居跡東壁はSB-3aと共に共有している。この住居跡は廃絶後にSB-3aとして全く別の住居、もしくは拡張として建て替えられたと推定される。床面は堅敏で貼床が認められた。貼床層はIV層土とほぼ同じ土質であり、若干カーボン粒・焼土粒を含む。またSB-3a床面検出時には僅かであるがSB-3bの壁溝らしき黒褐色土の落ち込みが見られた。断面はU字形を呈していた。住居跡床面には住居に伴うと推定されるビット(P)が4基確認されたが、SB-3aに所属していた可能性もある。また床面には焼上の分布が2箇所確認された。P-4についてはその所属は不明であるが、もう1箇所はSB-3bのカマドに伴う焼土の可能性がある。カマドはSB-3b北壁中央部付近に焼上を作った上坑状の掘り方を残すのみである。住居の時期は8世紀後半と推定される。

#### SB-4 (第108図 写真図版54)

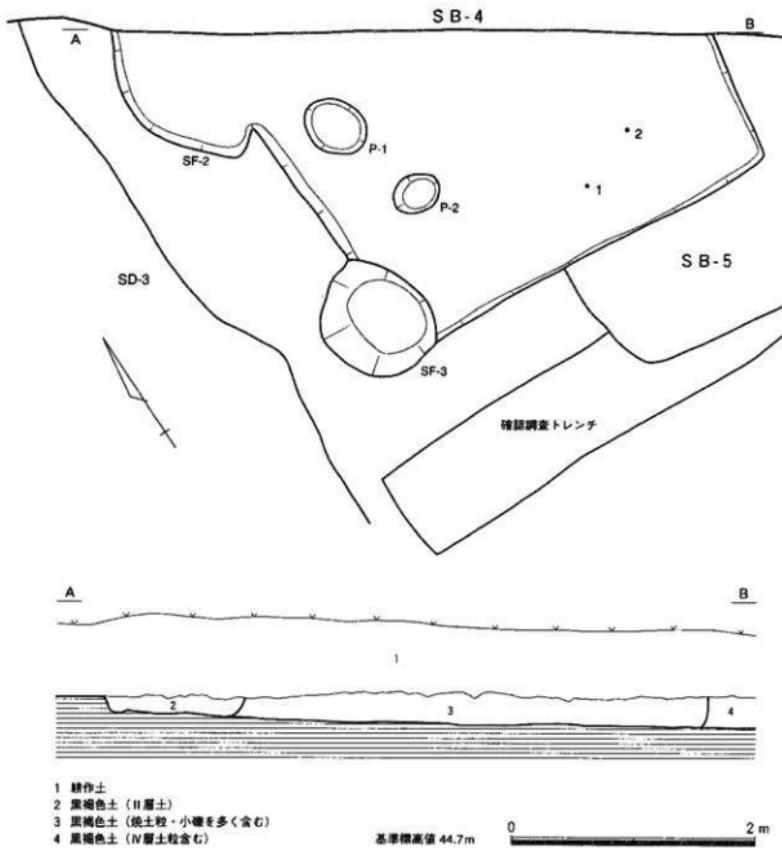
SB-4は20-F7・8、E7・8に位置する。平面は方形を呈している。この遺構は調査区北壁際で検出され、住居跡北半部は調査区外にさらに北へ広がる。また住居跡西壁にはSF-2が、南東隅部にはSF-3が重複している。SF-2・3の方が時期的に新しい。SB-4はSB-5とも重複しているがSB-4の方が時期的に新しい。住居跡の幅は3.67mをはかる。建物方向はN-4°-Eである。床面はあまり堅敏ではなく、貼床も検出されなかった。床面には住居に伴うと推定されるビット(P)が2基検出された。壁溝・カマドともに検出されていない。覆土は焼土粒・小礫を含んだ黒褐色土である。遺物は須恵器・土師器細片が出土している。住居の時期は8世紀以降と推定される。

#### SB-5 (第109図 写真図版54)

SB-5は20-E・F8に位置している。平面は方形を呈している。この遺構は調査区北壁際で検出され、住居跡北半部は調査区外にさらに北へ広がる。この遺構はSB-4と重複し、時期的にSB-5が先行する。また埋没後にSB-6と重複する。床面はあまり堅敏ではなく、貼床も検出されていない。床面には住居に伴うと推定されるビット(P)が3基検出された。いずれも住居跡南壁に沿って間隔を置いている。深さはP-1~3まで、それぞれ0.1、0.12、0.2mをはかる。深いP-3については他の2基とは異なる性格を有していたのかもしれない。壁溝・カマドは検出されていない。遺物はほとんど出土していない。住居の時期は8世紀以降と推定される。

#### SB-6 (第109図 写真図版54)

SB-6は20-E8に位置する。平面は方形を呈している。この遺構は調査区北壁付近で検出され、住居跡北半部は調査区外へ広がる。この遺構は西壁付近でSB-5と重複している。時期的にSB-5より新しい。また住居跡南東隅部はSF-26により削平されている。SB-6の幅は2.96mをはかる。建物方向はN-5.5°-Eである。床面には住居に伴うと推定されるビット(P)が2基検出されている。P-2についてはその位置と深さから柱穴であろう。P-1については柱穴として扱っているが、検出された位置と住居の規模から勘案して床下上坑の可能性もある。壁溝・カマドは検出できなかった。

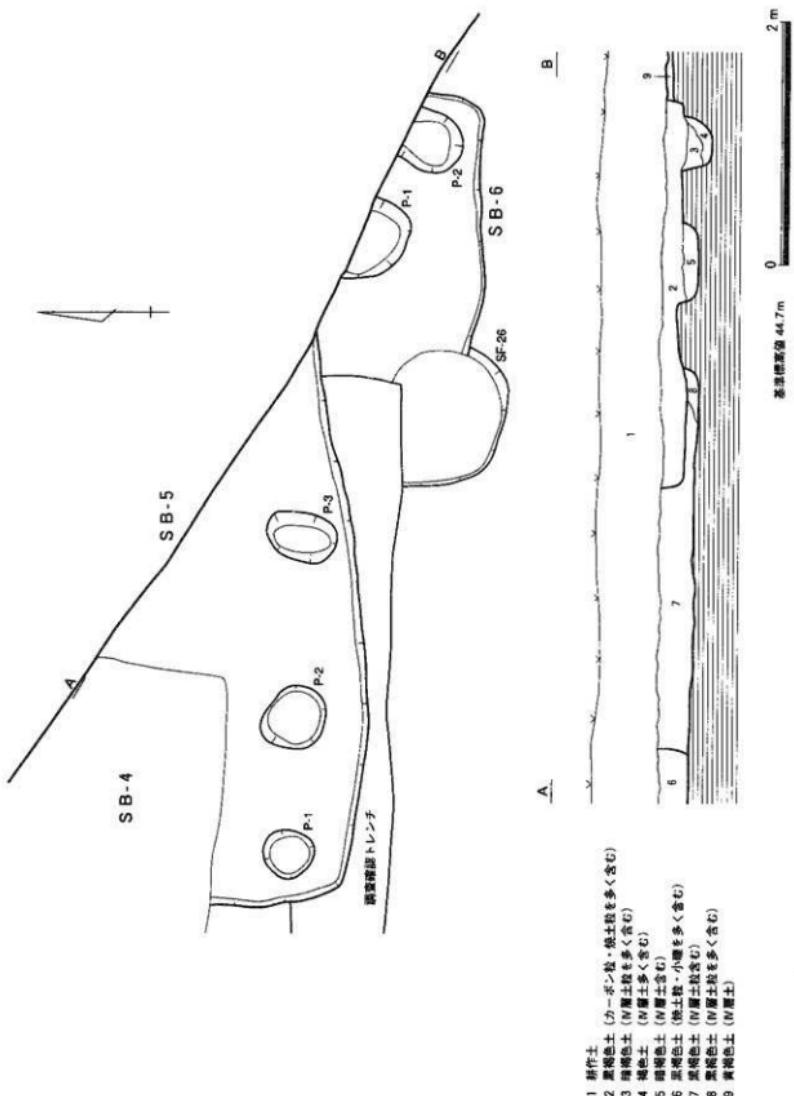


第108図 3区SB-4

覆土はカーボン粒・焼土粒を多く含む黒褐色土である。遺物はほとんど出土していない。住居の時期は8世紀以降と推定される。

**SB-7** (第110図 写真図版55)

SB-7は20-E8に位置する。平面は方形を呈している。規模は2.5×2.43mをはかる。建物方向はN-5°-Eである。SB-7の北東隅部にはSF-4が重複しており、時期的に土坑の方が新しい。床面はあまり堅硬ではない。貼床は検出されなかった。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)が2基検出された。P-2より土師器細片が出土している。隙溝・カマド共に検出していない。住居の時期は8世紀以降と推定される。



第109図 3区SB-5・6

#### S B-8 (第110図 写真図版54)

S B-8は20-D・E 8に位置している。平面は方形を呈している。規模は $2.74 \times 2.62$ mをはかる。この堅穴住居跡の建物方向はE-3°-Sで、他の堅穴住居跡の建物方向とはかなり異なる。カマドの一部をS F-11・18と、また住居内部でS P-16と重複しており、土坑群の方が時期的に新しい。遺構確認面から床面までの高低差は5cmもなく、北壁の輪郭は辛うじて検出できた。床面は堅緻であったが、貼床は検出できなかった。住居跡南西隅に深さが5cm程度の掘り込みを確認したが、性格は判然としない。カマドは東壁中央部で1基確認した。袖部は検出できた。灰黄褐色土を構築土としている。住居跡北壁を半球状に外側に掘り込み、構築土を充填している。カマド付近で焼土粒と共に上師器細片が出土している。遺物は上師器壺や線刻土器が出土している。住居の時期は9世紀以降と推定される。

#### S B-9 (第111図 写真図版55)

S B-9は20-D 10に位置している。平面は方形を呈していると思われる。この遺構は調査区北壁際で検出され、住居跡北半部は調査区外へ広がる。搅乱を一部受けているが、概して遺存状態は良好である。付近はIV層上面を遺構確認面としているが、調査区北壁の上層堆積状況から、III層上面から住居跡が構築されているのが確認された。住居跡の幅は2.15mをはかる。建物方向はN-0.5°-Wである。床面はあまり堅緻ではなかった。貼床は判然としない。床面には住居跡に伴うと推定されるピット(P)を1基検出した。住居跡南西隅部に位置し、深さも0.45mと深く、主柱穴の可能性がある。壁溝は確認できなかった。遺物はほとんど出土していない。住居の時期は8世紀以降と推定される。

#### S B-10 (第111図 写真図版55)

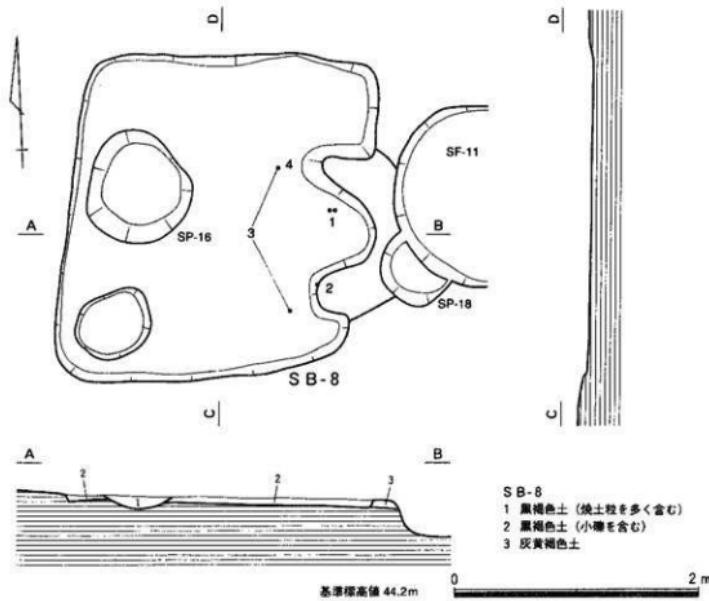
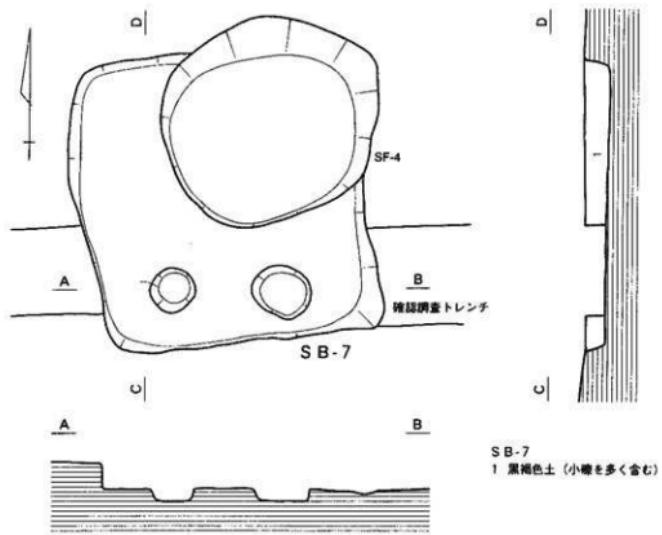
S B-10は20-D 9・10に位置する。平面は方形を呈していると思われる。この遺構は調査区南壁際で検出され、住居跡南半部は未調査区域へと広がる。遺存状態は良好である。住居跡の幅は4.2mをはかる。建物方向はN-4°-Eである。床面は堅緻であった。貼床が存在したと思われる。床面には住居に伴うと推定されるピット(P)が3基確認された。P-1・3がそれぞれ住居跡北西隅、北東隅部に位置する。深さは0.27m、0.14mである。住居跡床面中央部で調査区南壁際に見られるのは床下土坑と思われる。カマドは焼土粒・ブロックを多く含む極暗褐色土の堆積が見られる付近に存在した可能性がある。遺物はほとんど出土していない。住居の時期は8世紀以降と推定される。

#### S B-11 (第112図 写真図版56)

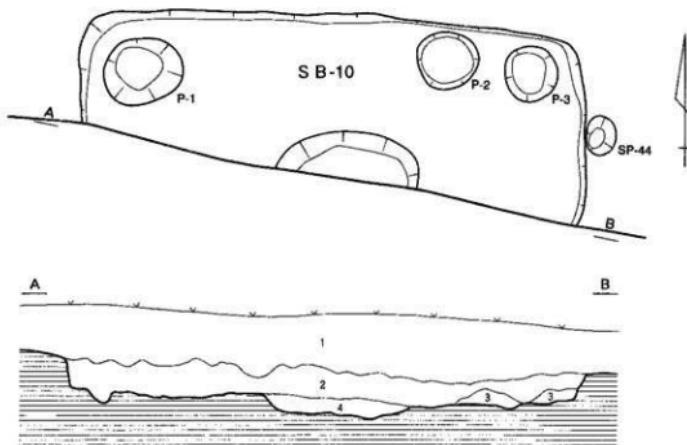
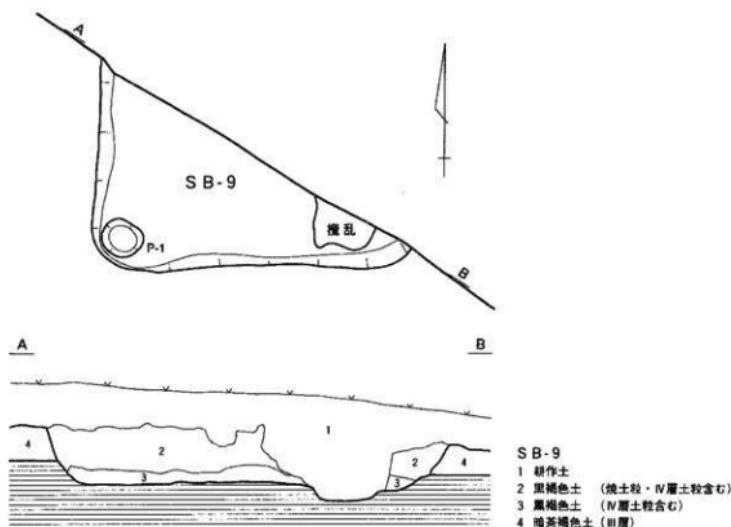
S B-11は21-C 3に位置する。平面は方形を呈していると思われる。この遺構は調査区北壁際で検出され、住居跡北半部は調査区外へと広がる。住居跡西壁ではS P-112が重複している。S B-11が時期的に先行する。遺存状態は良好で、住居跡の幅は2.40mをはかる。建物方向はN-3°-Eである。床面はあまり堅緻ではない。貼床は判然としない。床面には住居跡に伴うと推定されるピット(P)が1基検出されている。深さは0.35mをはかる。壁溝は確認できなかった。住居跡の覆土は黒褐色土でIV層土粒を含む。遺物は土師器細片が出土している。住居の時期は8世紀以降と推定される。

#### S B-12 (第112図 写真図版56)

S B-12は21-C 3に位置する。平面は方形を呈していると思われる。この遺構は調査区北壁際で検出され、住居跡北半部は調査区外へと広がる。遺存状態は良好である。住居跡の幅は3.37mをはかる。建物方向はN-8°-Wである。床面はあまり堅緻ではない。貼床は判然としない。床面には住居跡に伴うと推定されるピット(P)が4基確認された。いずれのピットも0.1m程度で浅い。P-4について



第110図 3区SB-7・8



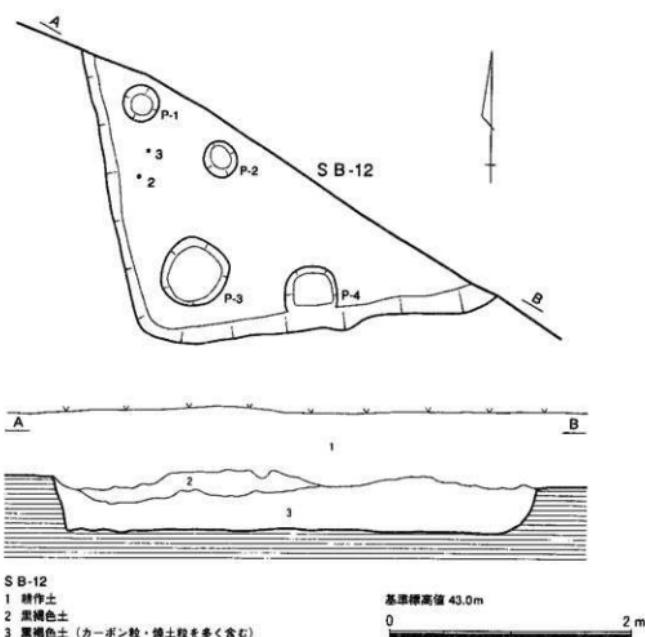
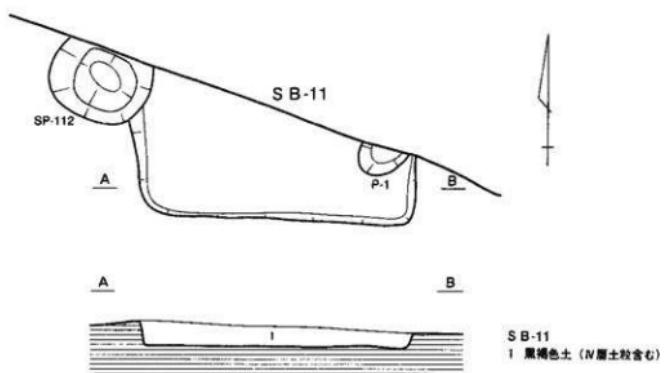
**SB-10**

1 耕作土  
2 黒褐色土 (焼土粒を多く含む)  
3 極赤褐色土 (焼土ブロック・カーボン粒を多く含む)  
4 黒褐色土 (カーボン粒・焼土粒含む)

基準標高値 44.2m

0 2 m

第111図 3区SB-9・10



第112図 3区SB-11・12

ては南壁中央部付近に位置していることから住居への昇降施設の痕跡の可能性がある。住居跡の覆土は黒褐色土である。遺物は覆土中より若干土器等が出土している。住居の時期は出土土器から8世紀後半と推定される。

#### 掘立柱建物跡（SH）

##### SH-1（第113図 写真図版57）

SH-1は21-C2に位置している。建物方向はN-6°-Eである。東西・南北方向共に3間の純柱建物跡と推定される。SH-1が位置する区域は柱穴が散見され、複数の建物跡の存在が想定されるが、柱穴の並びが明瞭に観察されたのはSH-1のみである。SH-1の南側にはSD-9が位置し、建物を構成する柱穴の1基であるSP-162と重複している。SD-9が時期的に新しいと思われるが、溝からは遺物がほとんど出土しておらず、所属時期がわからない。少なくともSH-1とは全く関係がないと思われる。西面のSP-162・82、およびSP-82・75、SP-75・66の柱間距離は2.17m、2.30m、2.0mをはかる。南面のSP-162・90、およびSP-90・91、SP-91・108の柱間距離は2.24m、2.12m、2.26mをはかる。柱穴の掘り方の平面は円～楕円形を呈し、径は0.2～0.43m、深さは0.2～0.4m、底面標高値は42.5m～42.7mでばらつきがある。G-Hライン、すなわちSP-162・90・91・108、およびE-Fライン、すなわちSP-82・84・92・102は掘り方の径が0.2m程度で、深さもほぼ一定で、各柱穴の並びも整然としている。掘立柱建物跡の北東隅に位置するSF-47には検出時に礫が充填されていた。掘立柱建物跡との関係は不明である。遺物はSP-82より青磁碗が出土している。SH-1の所属時期は出土遺物から12世紀後半以降と推定される。

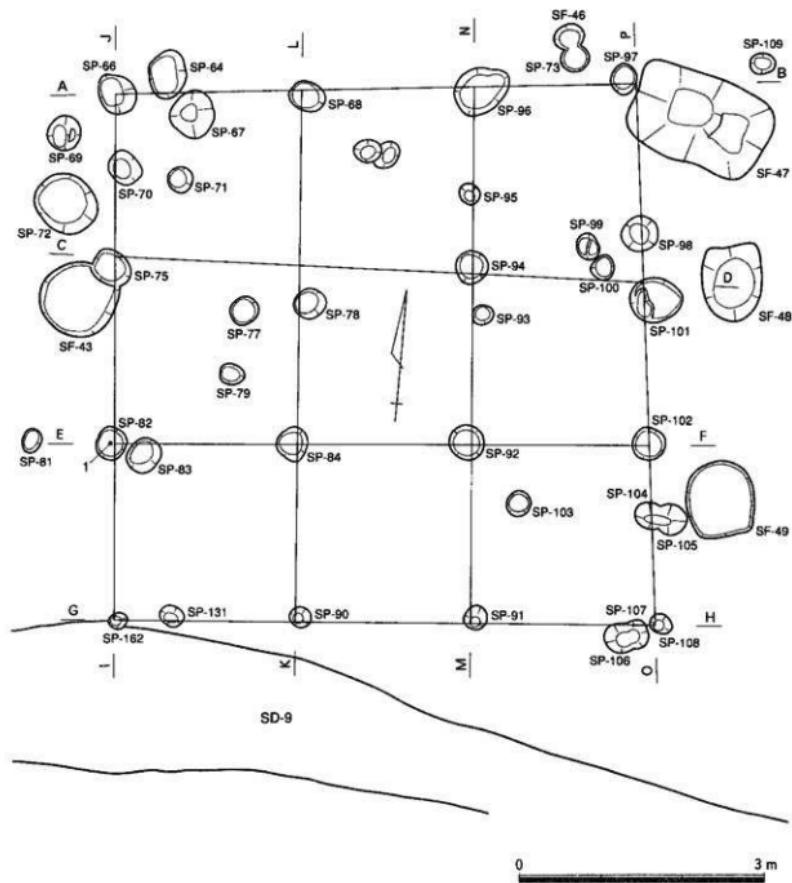
#### 溝状遺構（SD）

##### SD-2（第115図 写真図版56）

SD-2は20-D・E・F7に位置する。調査区南壁から北壁にかけて、ほぼ真北の方向にやや直線的に延びる。東側にSD-3も並行して延びるが、SD-2の東側上場を一部削平している。時期的にはSD-2が先行する。溝自体の深さは平均0.24m、幅は約2.2m程度をはかる。覆土は黒褐色土で小礫を多く含む。断面は浅い凸形状を呈する。底面の標高値は調査区北壁際で43.88m、南壁際で43.92mをはかる。ほぼ平坦な底面を有する。遺物は山茶碗・近世陶器が出土している。所属時期は江戸時代と推定される。

##### SD-3（第115図 写真図版56）

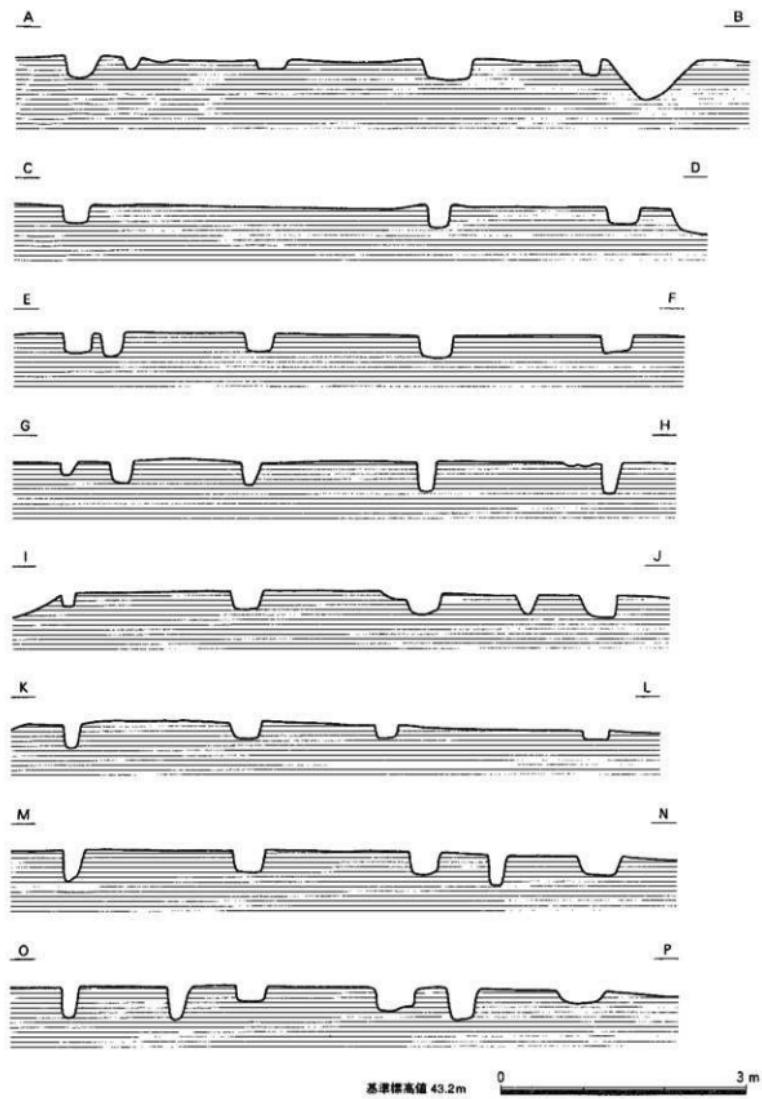
SD-3は20-D・E・F7に位置する。調査区南壁から北壁にかけて、ほぼ真北の方向にやや直線的に延びる。西側にSD-2も直線的に並行して延び、SD-3の東側上場を一部削平されている。時期的にSD-3はSD-2より新しい。またSD-3東側にはテラス状の平坦部が検出され、SD-10としている。SD-3の深さは平均0.44mをはかり、幅は平均約3mをはかる。覆土は暗褐色土で、調査区南壁付近では砂層等がラミナ状に堆積していた。小礫を多く含む。特に調査区南壁付近はよどみ状に深くなり、その堆積傾向が顕著である。断面は台形～皿形を呈する。20-F7付近で西側壁面にテラス状の平坦部を有している。底面の標高値は調査区北壁付近で43.30m、南壁付近で43.72mをはかる。全体的に平坦な底面を有する。遺物は山茶碗・近世陶器が出土している。所属時期は江戸時代と推定される。



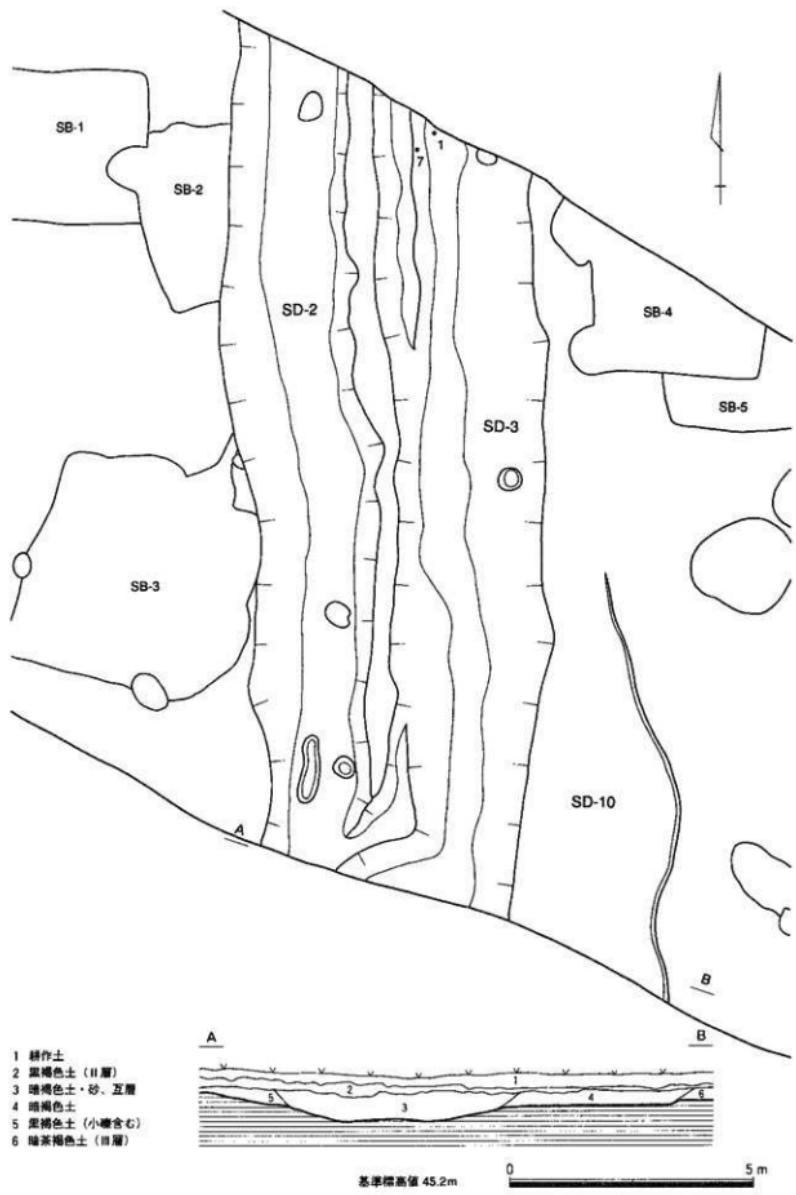
第113図 3区SH-1平面図

**SD-10 (第115図)**

SD-10は20-D・E・Fに位置する。調査区南壁から北壁にかけて、ほぼ真北の方向に延びる。土壙堆積状況からわかるようにSD-10が時期的に先行して機能し、埋没後にSD-3が掘削・機能したものと思われる。SD-2との関係は不明である。Ⅲ層上からの掘削が確認される。基本的にSD-2・3と同じ性格を有すると思われる。時期はSD-2・3と同じ江戸時代と推定される。



第114図 3区SH-1エレベーション図



第115図 3区SD-2+3

### 第3節 出土遺物

宮裏遺跡の1～3区までの調査区で出土した遺物は、土器・石器・金属器が挙げられる。上器の出土量が多いのは3区である。土器の内容については各調査区・出土遺構毎に記述するが、傾向的には奈良時代後半の土器群が中心で、灰釉陶器等の平安期の遺物は少ない。奈良時代の土器は須恵器・内黒土器である。隣接する高根森古墳群との関連する古墳時代後期の遺物はない。山茶碗類は包含層や溝状造構から出土しており、また青磁も少量出土している。3区中央部では攪乱中より近世陶器が出土している。石器ではナイフ形石器が1点、調査直前に表採されている。

#### 1 土器

##### 1区

###### SB-1 出土土器 (第116図 写真図版66)

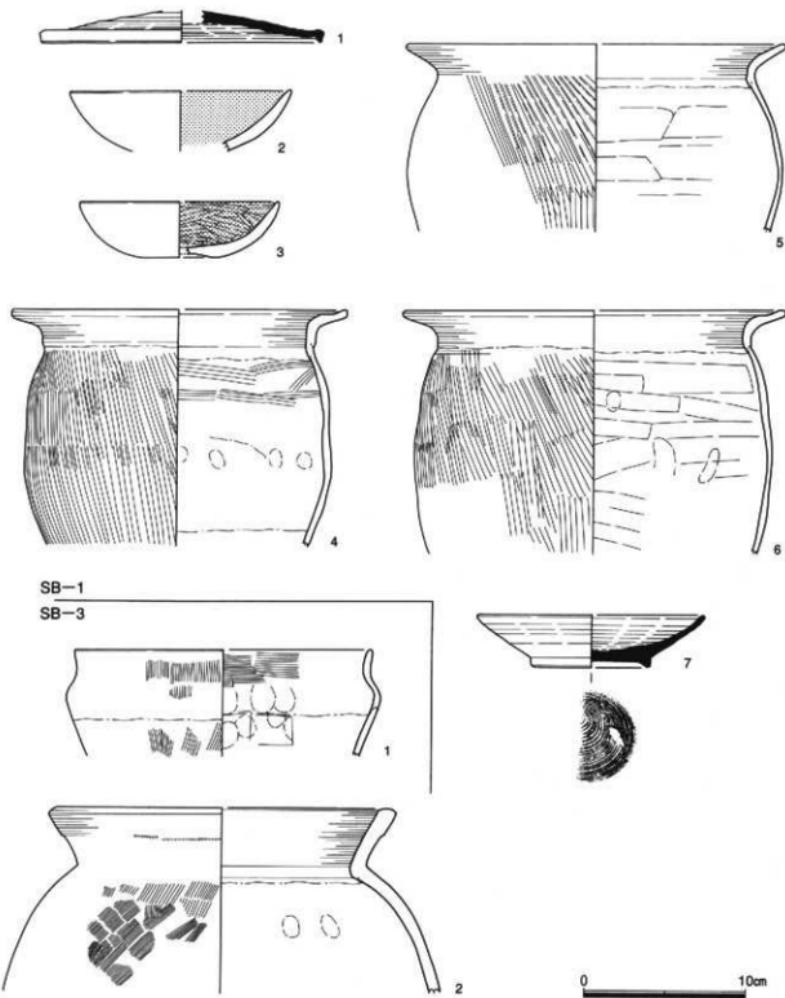
1は須恵器の蓋である。口縁部から火井部にかけての資料である。ツマミ付近は欠損している。2～6はカマド付近 (第102図 写真図版49) で出土した土器である。2・3は内黒土器である。2点とも壊である。2は口縁部から体部下半にかけての細片資料である。体部は直線的に立ち上がり、口唇部はやや尖らせる。3も体部を直線的に立ち上げているが、口唇部は丸く仕上げている。内面はヘラミガキが施されている。4～6は土師器の壺である。3点とも口縁部から体部中位にかけての資料である。4・6の胎土は同一で、色調は灰白色系、含まれる粒子等が酷似している。遺存状態は悪い。2点とも資料は口縁部を完全に水平に寝かせており、口唇部を肥厚させている。体部は中位から上位にかけてやや膨らむ程度である。体部最大径は口径よりも少ない。5の胎土も灰白色系であり、4・6に近い。遺存状態は良好である。口縁部は寝るように外反させており、体部は4・6とよりもやや球胴化させ、口径と体部最大径はほぼ等しい。7は覆土上の擾乱から出土した土器である。底部には糸切り痕が明瞭に残る。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げている。焼成は良好で、胎土中には小礫等も含まれない。精緻な仕上がりである。

###### SB-3 出土土器 (第116図)

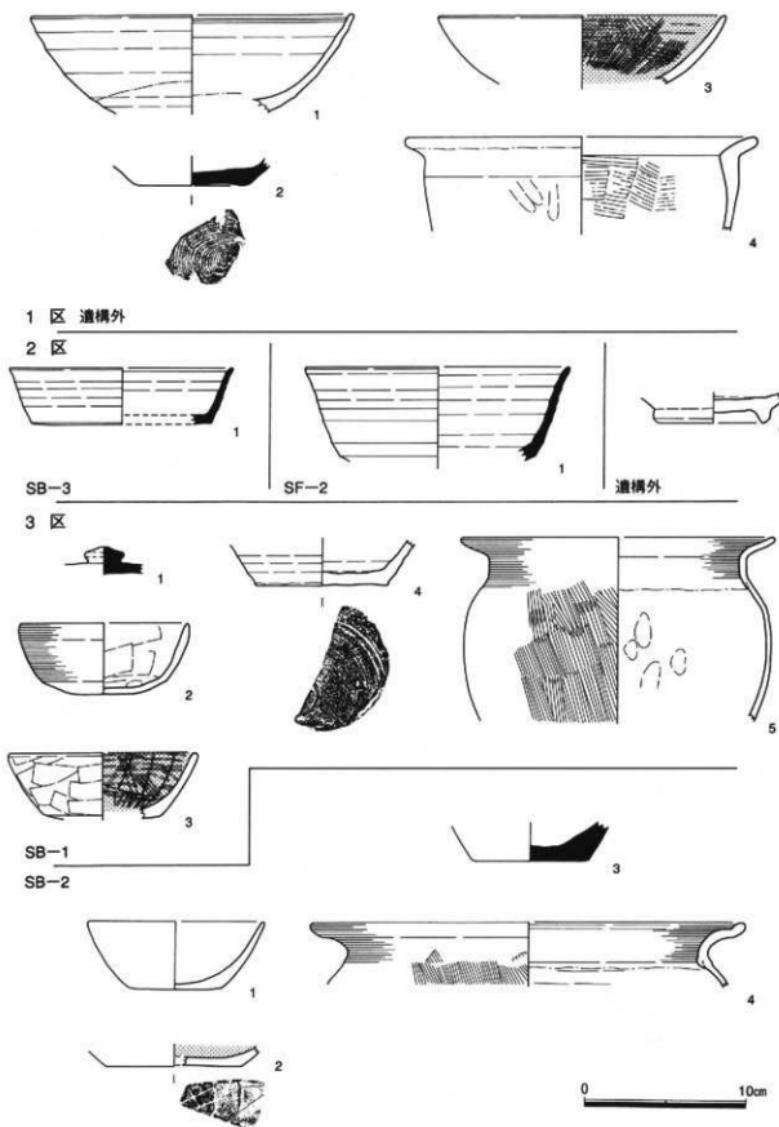
1・2はカマド付近 (第103図 写真図版49) で出土した土器である。2点とも土師器である。1は小型壺である。口縁部から体部上位にかけての資料である。外面に縦線、口縁部内面には横位のハケ調整が施されている。2は壺である。器厚を厚く仕上げられている。口縁部から体部中位にかけての細片資料である。体部は球胴形と思われる。内湾気味に立ち上がり、頸部から口縁部を直線的に立ち上がらせている。口唇部はやや平坦に仕上げられている。色調はにぶい赤褐色を呈し、砂粒・赤褐色粒子等を多く含む。2は所謂「駿東壺」であろう。中原遺跡2-1区SB-2で同じ「駿東壺」が出土しているが、ほぼ同時期と推定される。

###### 遺構外出土土器 (第117図)

1は灰釉陶器の碗である。口縁部から体部下位にかけての細片資料である。体部はわずかに内湾気味に立ち上がる。口唇部は丸く仕上げている。釉は濁け掛けか。2は須恵器の壺か。底部のみの資料である。高台は無い。底部外周に糸切り痕が明瞭に観察される。3は内黒土器の碗である。口縁部から体部下位にかけての細片資料である。わずかに内湾気味に立ち上がり、口唇部はやや丸く仕上げている。本資料は今回報告する中原遺跡・宮裏遺跡で口径値が最も大きいと思われる碗である。4は土師器の壺である。口縁部から体部上位にかけての細片資料である。ほぼ垂直に立ち上がった体部から「く」の字状

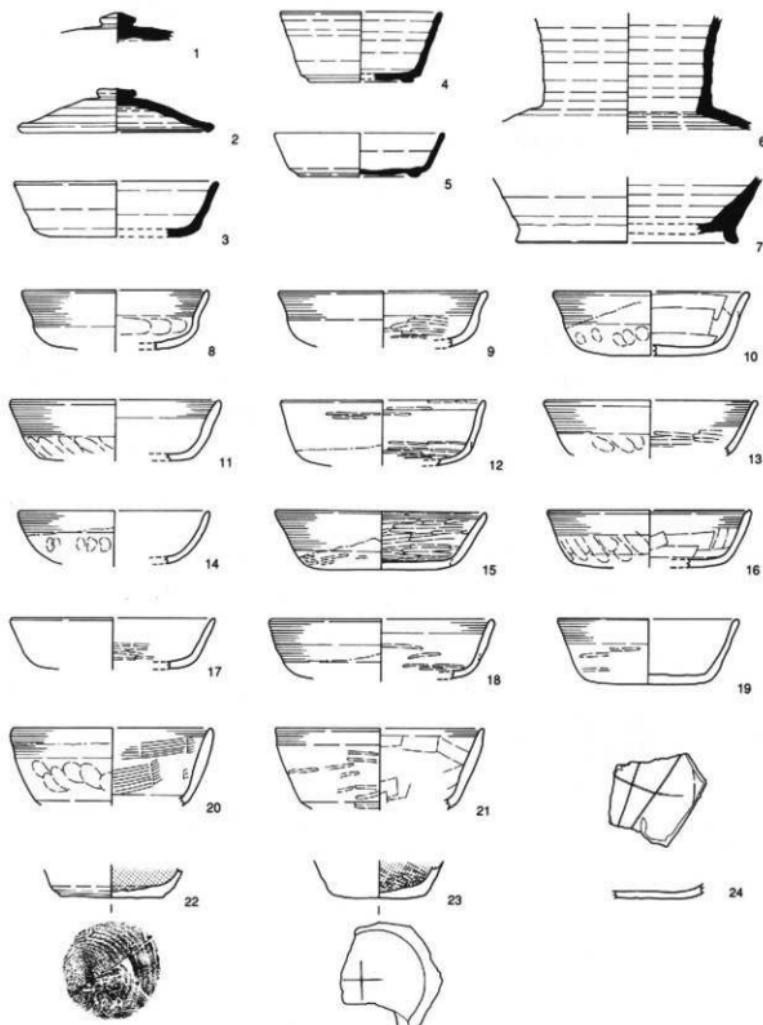


第116図 1区出土土器 1

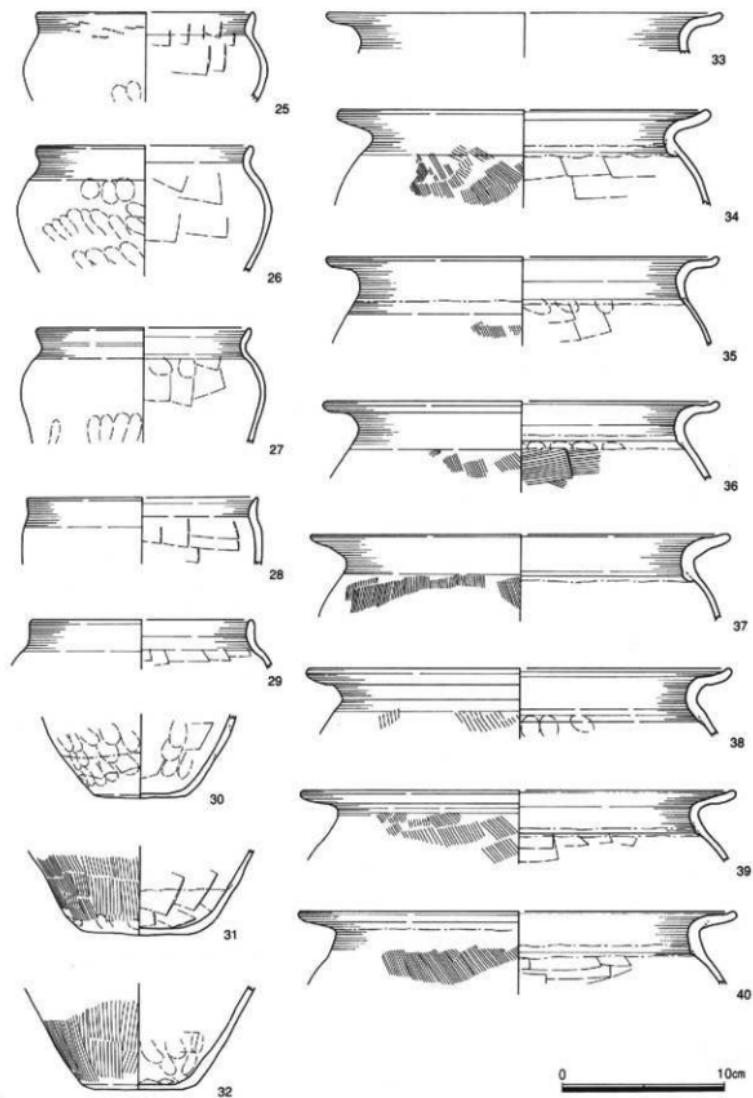


第117図 1区出土土器 2、2区出土土器、3区出土土器1

SB-3



第118図 3区出土土器2



第119図 3区出土土器 3

に口縁部を屈折させる。体部屈折部は肥厚している。体部内面はハケ調整か。

## 2区

### S B-3 出土土器 (第117図)

1は須恵器の坏である。口縁部から底部にかけての細片資料である。ヘラケズリされた平坦な底部から体部を直線的に立ち上げている。口唇部は尖らせるように仕上げている。

### S F-2 出土土器 (第117図)

1は須恵器の坏である。口縁部から底部直上部にかけての細片資料である。体部は直線的に立ち上げているが、口縁部はわずかに外反させている。口唇部は丸く仕上げている。外面体部中位付近までヘラケズリを施している。

## 遺構外出土土器 (第117図)

1は灰釉陶器の碗である。底部のみの資料である。底部外面はヘラケズリされ、幅広な高台が付けられている。見込みには重ね焼き痕が見られ、わずかに釉の付着が観察される。

## 3区

### S B-1 出土土器 (第117図 写真図版66)

1は須恵器の蓋である。ツマミのみである。宝珠型のツマミで、やや軟質である。2は土師器の坏である。やや丸底気味の底部から直線的に体部を立ち上げている。器厚は体部上位付近で肥厚させ、口唇部はやや尖らせている。3は内黒土器の坏である。平坦な底部から体部を直線的に立ち上げ、口唇部を丸く仕上げている。体部外面には調整痕が観察される。内面はヘラミガキが施されている。今回報告する中原遺跡・宮裏遺跡の内黒土器で外面調整が観察される資料は本資料のみである。4は土師器の坏である。体部下位から底部にかけての細片資料である。体部外面はナデ調整でロクロを使用したものと思われる。底部外面には糸切り痕が観察される。胎上は微砂粒・白色粒子を含み、色調は明黄褐色を呈する。このような土器は中原遺跡4区S B-2等でも出土しているが、この資料の方が古い。5は土師器の壺である。口縁部から体部中位にかけての資料である。口縁部は瘦るように外反させている。体部最大径は口径より少ない。

### S B-2 出土土器 (第117図 写真図版66)

1・2は土師器の坏である。1は平坦な底部から体部を直線的に立ち上げ、口唇部はやや丸く仕上げている。被熱した資料か、2は内黒土器の坏である。内面は黒色処理され、精緻なミガキが施されている。底部外面には線刻が施されている。3は須恵器の壺である。底部のみの資料である。底部外面はヘラケズリがなされている。4は土師器の壺である。口縁部のみの細片資料である。口縁部は外反し、口唇部を肥厚させている。

### S B-3 a・b 出土土器 (第118・119図 写真図版66・67)

当該竪穴住居跡からは覆土中位及び床面付近から土器片が多く出土している(第107図 写真図版53)。最も多いのが土師器の壺の破片で、接合・復原できない資料が多い。本報告では図化可能な口縁部・底部を中心に抽出した。次に多いのが土師器の坏で、これも極力図化できる資料を抽出している。須恵器・内黒土器の細片も多く出土している。その状況から投棄された可能性を有する。

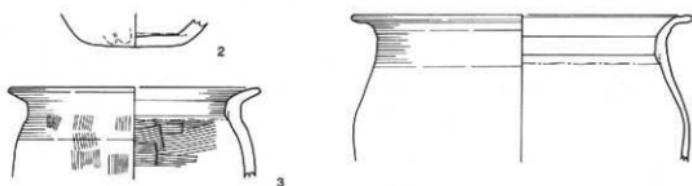
1~7は須恵器である。1・2は壺蓋である。1はツマミと天井部付近のみの資料である。ツマミは宝珠形を呈し、天井部外面はヘラケズリを施している。2は軟質で、扁平化した宝珠型のツマミを有する。口唇部はわずかに折り曲げている。3~5は壺である。3は高台は無い。底部はヘラケズリされ、体部を直線的に立ち上げている。口唇部は丸く仕上げている。4・5は高台を有する。4は口縁部と底部の細片資料で、図上復原した資料である。底部に見られる高台は削出高台である。体部は底部から直線的に立ち上げられている。5は軟質で、色調も浅黄橙色である。焼成不良か。6・7は壺である。6は肩部から頸部にかけて、7は体部下位から底部にかけての細片資料である。8~21・24・25~40は土師器である。8~21・24は上師器の杯である。8~11は口縁部を強くナデ調整を行い、体部中位から口縁部にかけてやや外反させた資料である。10・11には体部下位外面に指頭痕が観察される。10には輪積み痕が外面に観察される。内面調整は8のように下位に指頭による調整痕が、9にはヘラミガキ、10には板ナデ調整痕が観察される。底部外面の調整はいずれの資料も判然としない。12~21は体部を直線的に立ち上げさせている。12はこれらの中でも、体部の立ち上がりが最も垂直に近い。口縁部をわずかに外反させ、内外面ともにヘラミガキを施している。13~19は12と比べ、体部の立ち上がりがやや傾斜気味である。口縁部はナデ調整を行っている。体部下位外面には13~16のように指頭痕が観察される資料の他に、19のようなヘラミガキを施す資料もある。また内面はヘラミガキや板ナデを施す資料がある。19は底部外面はヘラケズリを施している。12・14~16・18の外面には輪積み痕が観察される。20・21は他の壺類と比較して器高が高い。21は見込みに線刻がなされている。焼成後に行われたものである。これらの土師器の壺の中で11~13・15~18・20・21は内外面ともに赤彩されていたと思われる。14は外面のみ赤彩されている。25~29は小型壺である。25~28は口縁部から体部にかけての資料で、29のみ口縁部付近の資料である。ほとんどの資料が口縁部外面にナデ調整を施し、体部外面に指頭痕、内面に板ナデの痕跡を観察することができる。25~28は口縁部を外反させているが、28・29は口縁部を直立させている。30~40は壺である。30~32は底部、33~40は口縁部の細片資料である。口縁部は水平(35・36)、もしくはそれに近い位置まで外反させている。口唇部は肥厚させる資料も散見される。底部資料では外面に指頭痕が多く観察される資料(30)と縦位のハケ調整が観察される資料(31・32)がある。底部外面には調整痕等は観察されなかった。22・23は内黒土器である。2点とも壺の底部と思われる。22は底部外面に糸切り痕が観察される。23は底部外面に線刻されている。内面はヘラミガキが施されている。これらの資料には、覆土上位に見られる資料と床面直上で出土した資料、またSB-3bに伴うと推定される資料の以上3種が混在しているが、すべての土器群の時期は8世紀後半と推定される。

#### S B-4 出土土器 (第120図 写真図版67)

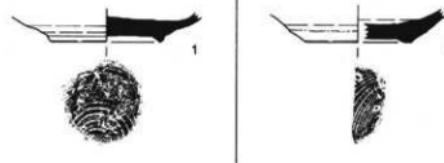
1・2は土師器である。1は皿である。底部は平坦で、調整痕等は観察されない。体部は下位付近で屈折させ、直線的に立ち上げている。口唇部は尖らせようとしている。覆土上層での出土であり、時期的に新しいものか。2は小型壺である。口縁部付近の細片資料である。口縁部を直立させ、内外面ともにナデ調整を施している。

#### S B-8 出土土器 (第120図 写真図版67)

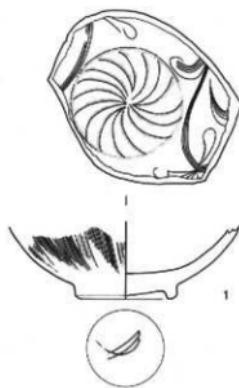
1~4は上師器である。1・2は壺である。1は底部から体部にかけての細片資料である。体部に棒状工具で焼成前に線刻している。2は底部のみの資料である。3・4は壺である。3は口縁部から体部上位にかけての細片資料である。口縁部を「く」の字状に折り曲げている。内外面ともにハケ調整が施されている。4は口縁部から体部中位にかけての資料である。口縁部は完全に水平に外反し、口唇部を



SF-21 SF-71



SP-82



0 10cm

第120図 3区出土土器 4

わずかに肥厚させる。体部最大径は口徑よりも少ない。

#### S B-12出土土器 (第120図)

1～3は土師器である。1は壺である。口縁部から体部下位にかけての細片資料である。体部中位から口縁部にかけてわずかに外反させる。口縁部はナデ調整を施している。外面には輪積み痕が観察される。内外面ともに赤彩されている。2は小型壺である。口縁部のみの細片資料である。口縁部外面に指頭振らしき痕跡が観察される。3は壺である。口縁部のみの細片資料である。口縁部をやや水平に外反させ、口唇部を肥厚させている。

#### S D-2出土土器 (第121図)

1は山茶碗の小皿である。底部のみの資料である。2は壺である。口縁部細片である。口縁部は大きく外反させ、口唇部を下へ引き出している。常滑産か。3～6は近世陶器である。3は卸し皿である。体部を直線的に立ち上げ、口唇部には沈線が見られる。4・5は天目茶碗である。底部のみの資料である。4は内面のみ、5は内外面ともに鉄釉が施されている。6は底部から体部上位にかけての資料である。浅黄色の釉が丁寧に施されている。

#### S D-3出土土器 (第121図)

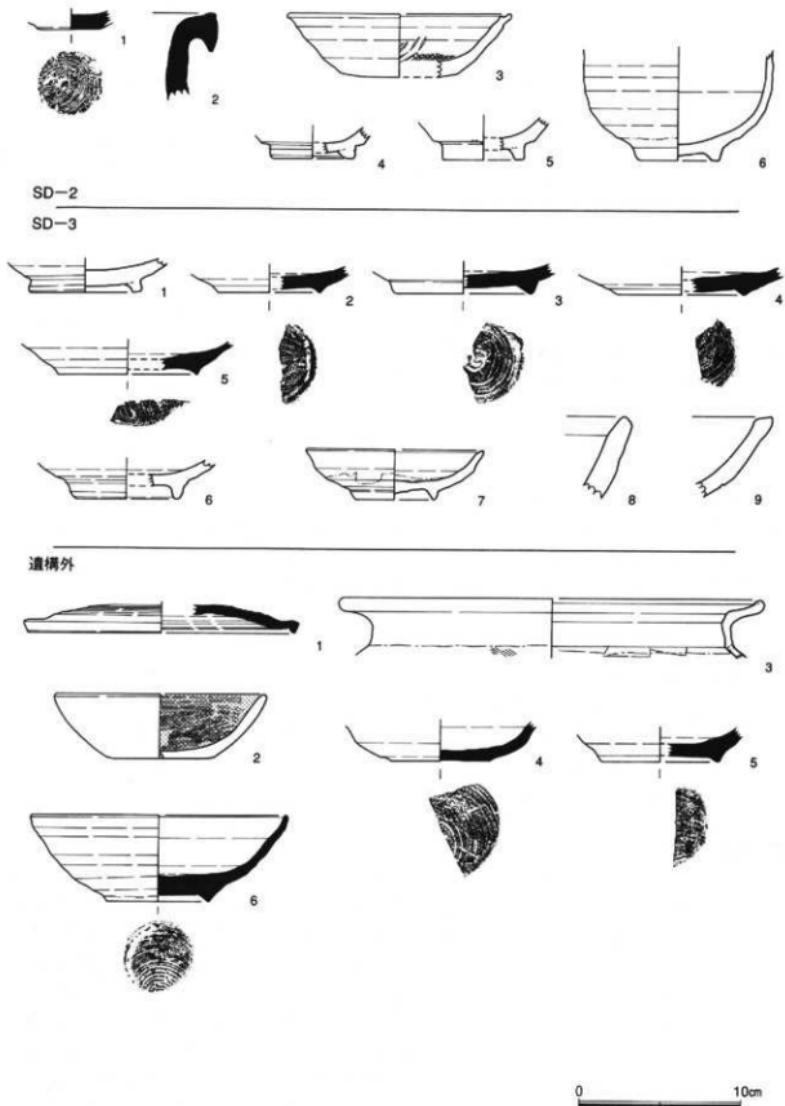
1は灰釉陶器の碗である。底部のみの資料である。底部外面の高台内にはヘラケズリが施される。見込みには重ね焼き痕が観察される。2～5は山茶碗の碗である。いずれも底部のみの資料である。4・5の見込みには重ね焼き痕が観察される。6～9は近世陶器である。6は茶碗の底部のみの資料である。施釉されていたと思われるが、露胎している。7は皿である。口縁部から体部下位にかけて施釉している。8・9は鉢の細片資料である。

#### S P-82出土土器 (第120図 写真図版72)

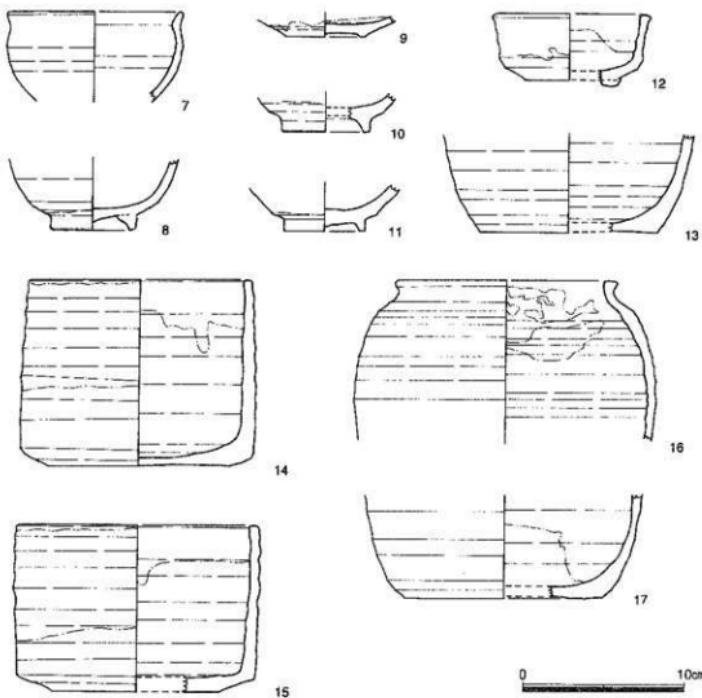
1は青磁碗である。底部から体部中位にかけての資料である。柱穴内部から見込みを上にして出土している(写真図版57)。底部の器厚は厚く、高台は削り出している。体部はわずかに内湾しながら立ち上げている。体部外面には脈入蓮弁文、内面には割花文が描かれている。見込みは捺花文である。高台の豊付きまで施釉されている。龍泉窯系青磁碗A 6と推定される。時期は12世紀後葉と思われる。

#### 遺構外出土遺物 (第121図 写真図版67)

1は須恵器の蓋である。やや弓張り状を呈し、口縁部を下方へ引き出している。焼成は不良で、軟質である。2は内黒土器の壺である。平坦な底部からほほ直線的に立ち上がり、口唇部をやや丸く仕上げている。内面は丁寧なヘラミガキが施されている。3は土師器の壺である。口縁部のみの資料である。口縁部をほほ水平に外反させ、口唇部を肥厚させている。4は須恵器の壺と思われる。底部から体部下位にかけての資料である。高台を貼り付けず、底部外面には糸切り痕が観察される。5・6は山茶碗の碗である。5は底部のみの資料である。低平で断面が三角形を呈する高台が付けられている。6は低平で断面が三角形を呈する高台を付けている。体部は直線的に立ち上げ、口縁部付近はわずかに内湾させている。口唇部は丸く仕上げている。7～17は近世陶器である。7・8・10・11は天目茶碗である。7は口縁部から体部下位、8は底部から体部中位、10・11は底部付近の資料である。7の体部は内湾して立ち上がり、口縁部は軽く「S」字状に外反させている。これらの資料は内外面ともに鉄釉を厚く施している。体部下位から高台にかけては施釉は認められない。9は皿である。底部付近の資料である。



第121図 3区出土土器 5

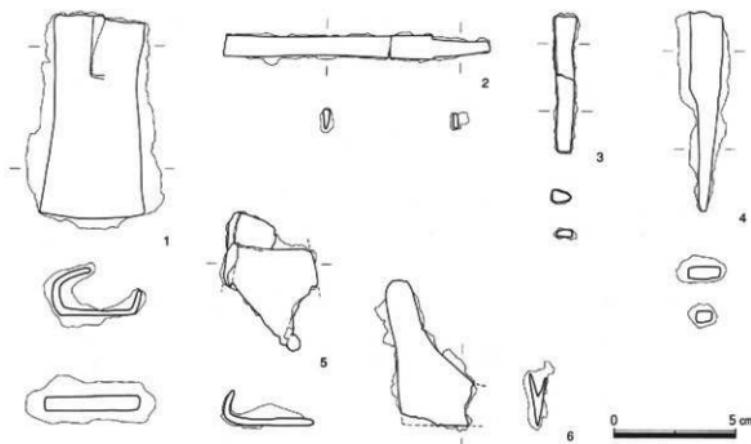


第122図 3区出土土器 6

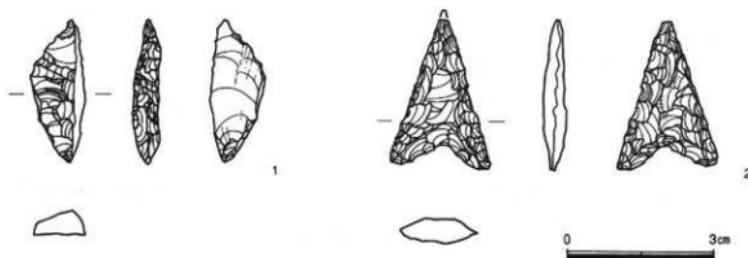
低い高台は削り出されたものである。鉄軸が施されている。12は香炉か。細片資料である。脚部が認められる。体部は直線的に立ち上がる。口唇部を軽く外へ引き出しているため、平坦に仕上げられている。施釉は内面には口縁部、外面には口縁部から体部中位にかけて認められる。14・15はヘラケズリされた底部から体部は垂直に立ち上がり、口唇部は平坦に仕上げている。体部下位はヘラケズリを施している。施釉は内面は口縁部、外面には口縁部から体部中位にかけて認められる。16・17は壺である。同一個体の可能性がある。ヘラケズリされた底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反させ、口唇部を外へ引き出しているため、平坦に仕上げられている。施釉は見込み・底部外面を除いて、ほぼ全域に認められる。

## 2 金属製品（第123図 写真図版75）

1～5は3区SB～3から出土した鉄製品である。1は袋状鉄斧である。ほぼ完形である。2は刀子か。3・4は刀子と思われたが、刃部が観察できなかった。5は鉄斧である。1とは別個体である。6は1区SF～14から出土した鉄鍔の刃部である。中川以降の資料であろう。



第123図 宮裏遺跡出土鉄製品



第124図 宮裏遺跡出土石器

3 石器（第124図 写真図版74）

1はナイフ形石器である。1区で表採された資料で、石材はチャートである。旧石器時代の資料か。2は打製石鎌である。凹基無茎鎌である。3区からの出土で、石材は砂質頁岩である。縄文時代の遺物であろう。

## 第6章 まとめ

### 第1節 旧石器時代～縄文時代

宮裏遺跡で表採したナイフ形石器は「切出ナイフ」とも呼称され、幅の広い剥片を利用し、器軸に対し刃部が傾斜しているタイプである。後期旧石器時代の所産であり、高根森古墳群周辺地区で報告された初めての資料である。宮裏遺跡・高根森古墳群が位置する牧ノ原台地色尾礫層が成立したのは、牧ノ原礫層よりも新しい時期であり、数万年前と推定されている。従ってこの資料は色尾丘陵における人々の活動を窺わせる最も古いものと思われる。

中原遺跡6区で出土した一群の縄文土器の文様は主に縄文で構成されており、縄文時代草創期末の「多縄文系上器」の可能性がある。縄文時代草創期の土器は「隆起線文系」から「爪形文系」へと移行するのが大勢であるという。この「多縄文系」は「爪形文系」と共存する時期があるものの、「爪形文系」より長く命脈を保つようである。その後、「燃糸文系」「押型文系」が出現している。中原遺跡周辺で草創期の資料が得られているのは主に2遺跡あげられる。島田市旗指遺跡第1地点では隆起線文土器・微隆起線文土器・爪形文土器・多縄文系土器等の縄文時代草創期の資料が得られている。菊川町三沢西原遺跡では多縄文土器・燃糸文土器・押型文土器が出土している。中原遺跡出土の多縄文系土器は、三沢西原例のような原体に細長い楕円形や菱形を彫り残すネガティブな押型文土器は伴う様子が見られないため、三沢西原遺跡の資料より古く、島田市旗指例よりも新しい様相を示している。本報告では精緻な分析を行うことが出来なかったが、今後の研究の進展に期待するところである。

### 第2節 古墳時代～平安時代

今回、報告した中原遺跡・宮裏遺跡では古墳時代後期から平安時代にかけての堅穴住居跡が計68軒分検出された。この軒数は今まで当該地域で検出された堅穴住居跡に匹敵する数をほこる。しかし緩やかな起伏を示す牧ノ原台地上で、調査面積の割には検出量も少なく感じる所である。既に各調査区の岡に見られる如く、堅穴住居跡が密集して建てられていた区域は少なく、散発的に数軒単位で営まれていたのがわかる。歴史的背景から推定できるように古代遠江国駿原郡に属し、驛家郷の範疇に入る可能性がある当地域の様相が判明した訳である。しかし驛家の存在を積極的に示す資料は得ることは出来なかつた。島田市教育委員会による当地域における従前の調査では、宮上遺跡での「驛」墨書き土器の出土、青木原遺跡での円面鏡の出土が報告されている。これにより中原遺跡を含む牧ノ原台地北東部を含めた初倉一帯に、初倉驛家もしくは関連集落が存在する可能性がある。さらに宮上遺跡での蝶形の出土による仏堂の存在、式内社敬満神社の存在からも、有力者層の居住した集落が存在した可能性がある。仮に敬満神社付近が「驛家郷」の中心地とすれば、中原遺跡1-1区がその縁辺部に位置する可能性（第125図）がある。1-1区から南東方向へ展開する7区までの各調査区で検出されている堅穴住居跡群の中でも、敬満神社に近い調査区は7～8世紀代と古い様相を見せる。しかし3～6区のやや離れた調査区では灰釉陶器等の9世紀代の遺物が散見され、新しい様相を見る事ができる。各遺構では積極的に所属時期を示す遺物の出土が認められなかった場合もあって、全ての堅穴住居跡を分析することは困難であり、狭長な調査区の成果のみで広大な台地に広がる集落の様相を想像するのは無理がある。しかし時期の異なる住居の分布は、単に牧ノ原台地上の開発の進展という点だけではなく、驛路である古代東海道の動向が大きく左右していることも想起されなければならない。また奈良～平安時代の堅穴住居



第125図 敬満神社周辺図

跡群が検出された宮裏遺跡の方も、高根森古墳群や竹林寺廃寺跡等藤原都の有力者層の存在を裏付ける資料が豊富な湯日川流域に近く、重要な地域の中に位置する。本節ではまず周辺地区で検出例の少ない8世紀後半～9世紀前半の時期の中原遺跡・宮裏遺跡の土器群について、次に中原遺跡の検出構造群を概観してみたいと思う。

## 1 土器

### 灰釉陶器・須恵器

この土器群は数量的に土師器よりも少なく、中原・宮裏両遺跡における供膳形態は土師器・内削土器が主体であったと思われる。中原遺跡では古墳時代・すなわち7世紀代の須恵器資料が認められる。かえりの付いた壺蓋・壺身の他に、横瓶、甕等の8世紀前半には消滅していく器種も散見される。これら古墳時代から奈良時代前半の須恵器群の分布は1-1区から2-3区まで広がりを見せるが、3区から宮裏遺跡にかけては見られず、主体は8世紀後半以降の須恵器群が主体となる。4区SB-4と5区SB-1の灰釉陶器の碗に代表される黒笠14号窯式段階、すなわち8世紀末以降の資料が多い。5区SB-1の資料は須恵器と共伴する。混入の可能性もある覆土上位出土を除き、灰釉陶器と共伴した須恵器はまず壺(2)があげられる。逆載頭円錐形を呈し、底部外面には糸切り痕が観察される。形態的に似る須恵器壺は中原3区SB-6で1点(4)、SB-8で1点(1)出土している。SB-6の資料は8世紀後葉で、時期的に先行する。6区SB-2では灰釉陶器(2)と須恵器(1)が共伴する。須恵器は削出し高台を持つ。この種の壺は藤枝市助宗窯跡群で生産されている。6区では灰釉陶器の小型

壺の細片資料が散見される。これら中原遺跡の灰釉陶器は黒笠14号窯式以降の資料が大勢を占める。一方、宮裏遺跡では灰釉陶器・須恵器が共併した遺構は無い。1区遺構外出土の1は釉を漬け掛けしていると思われ、また底部資料で2区遺構外と3区SB-3で出土した灰釉陶器は重ね焼き痕がある点から中原遺跡の資料より新しい様相を見る。須恵器は3区SB-3でまとまった資料が見られる。3は所謂「箱坏」で、器高も低平化している。4は削出し高台を有する坏である。8世紀後葉、すなわち灰釉陶器出現直前期の土器群である。

### 土師器

比較的土師器類がまとまって出土しているのは中原遺跡5区SB-1と宮裏遺跡3区SB-3であり、この住居跡出土資料を中心に観察してみる。この両遺構共に小型住居と重複しているため、その資料が混在する可能性があり、また住居跡床面直上から得られた資料ではなく、覆土中で出土した資料も含まれる点から、床面資料と覆土中の資料とに時期的差が存在する可能性がある。中原5区SB-1の場合は主に上層・下層に遺物が分かれしており、SB-7の遺物である可能性は否定出来ない。また宮裏3区SB-3は上師器甕35の接合関係からも明らかのように、SB-3aがSB-3bよりも時期的に新しいと推定され、これらの資料は積極的に同時期の資料と断じ得ない。よって以下の分類は今後の大井川西岸地区における土器様相探求へのたたき台として利用されたい。まず出土している8世紀から9世紀にかけての土師器群を板に分類してみる。

坏I（高台が無い）A：口径9～10cm程度で、体部を内湾させ、全体的に丸みを帯びる。

B：口径11～13cm程度で、口縁部をやや外反させる。

C：口径11～13cm程度で、体部は直線的に立ち上げる。

D：口径11～13cm程度で、底部と体部の境界は明瞭で、直線的に立ち上げる。

E：口径11～13cm程度で、体部は直線的に立ち上がり、Dよりも器高が高い。

F：口径9～12cm程度で、底部に糸切り痕が残り、体部は直線的に立ち上げる。

\*なおA～Eまではナデ・ヘラミガキ・指頭痕・輪積み痕・赤彩等が確認されるが、Fは横ナデのみで、回転台（ロクロカ）を使用している可能性がある。

坏II（高台が有る）※灰釉陶器を模倣したものか。

皿

壺I（遠江型）※口縁部を寝るように外反させるタイプと水平に外反させるタイプに細分できる。

壺II（台付壺）

壺III（駿東壺）

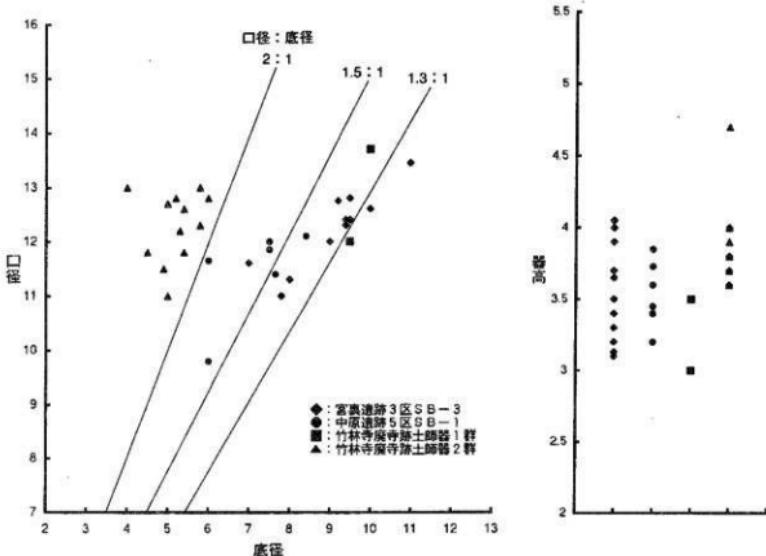
壺IV（その他）

小型壺

まず坏Iを概観してみたい。黒笠14号窯式の灰釉陶器を作った中原5区SB-1の土師器坏8～13のうち、8以外は口径が11～13cm、器高が3cm台をはかる。底径は6～8.4cmとばらつきがある。坏IC群である9～13は形態的には比較的平坦な底部からやや外傾気味であるが、直線的に体部を立ち上げ、口唇部は丸く仕上げている。小振りな8は口径が9.8cm、底径が6.0cmをはかり、坏IAとした。器高は3.7cmあり、他の坏類に比べて低平ではない。灰釉陶器を伴わない宮裏遺跡3区SB-3の土師器坏8～21・24はその形態からいくつかの種類に分類される。坏IBである8～11は強く口縁部にナデを施しているため、口縁部が外反している。口径11～12.8cm、底径は8.0～10cm、器高は3cm台である。坏

I Cの12~18は中原例と同じように平坦な底部から直線的に体部を立ち上げ、口唇部を丸く仕上げた資料である。ただし体部の立ち上がりは中原例と比べ、傾斜角が少ない。口径は11.6~13.45cm、底径は7~11cmである。器高は3~4cm台である。坏I Dに分類した19は口径値・底径値共に少ない。須恵器の坏を模倣したものか。底部外縁はヘラケズリされている。坏I Eである20・21は口径12.1~12.6cmとやや数値が少ないが、器高が他の坏と比較しても高い。両資料共に細片資料のため、判然としない。これらの中原・宮裏の坏資料、及び比較資料として鳥田市竹林寺廃寺跡出土の坏資料の計測値をまとめ、形態の変化を数値で追跡したのが第126図の計測値分布図である。竹林寺廃寺跡出土の土師器の坏資料は、地理的に中原・宮裏遺跡付近で良好な土師器資料に恵まれているため採用した。報告によれば土師器は1群・2群に分類されている。1群は伽藍焼失前の奈良時代、2群は再建以降の平安時代中期に位置づけられている。これら中原・宮裏両遺跡の坏I A~Eの器高値は概ね3~4cm台であり、平安時代中期とされる竹林寺廃寺跡2群でも同傾向である。口径・底径の数値分布を観察すると、奈良時代に位置づけられる宮裏遺跡3区SB-3と竹林寺廃寺跡1群、灰釉陶器が出現する中原遺跡5区SB-1、そして平安時代中期に位置づけられている竹林寺廃寺跡2群の数値が分散する。口径値では各時期において11~13cmに集中するが、底径が奈良時代の資料群では11~8cm台と口径と底径の比率が1.3:1付近に、中原遺跡5区SB-1では9~6cm台で比率は1.5:1に、竹林寺2群では6cm台未満で比率は2:1以下である。このように時期が下るに従い土師器群は底径値が減少している様相が観察される。これは体部の傾斜角の変化を伴い、外観でも観察される。中原遺跡2-1区SB-1の3は竹林寺廃寺跡2群と同種類か。

前述した無高台の坏以外の土師器で、調整は横ナデを基準とし、おそらく回転台（ロクロカ）を使用したと思われる土師器類も数点見られる。これを坏I Fと分類した。中原遺跡4区SB-2の4~6、宮



第126図 土師器坏計測値分布図

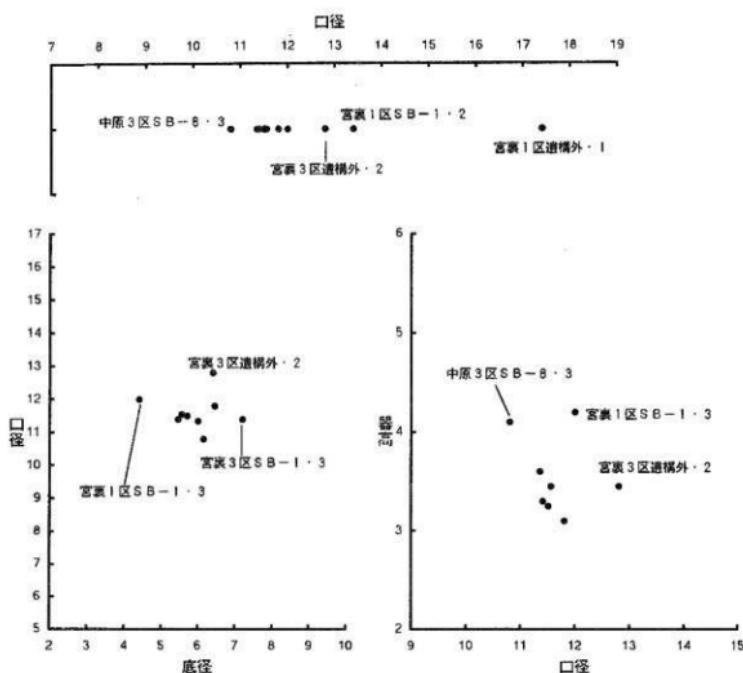
裏遺跡3区SB-1の4がそれに該当する。これらは底部外間に糸切り痕があり、体部の立ち上がりは直線的である。いずれも遺存状態は不良で、出土点数も少量であるが、周辺の遺跡でこれまで未確認であったタイプの資料であるため、一応触れておく。須恵器の製作技法に酷似するこれらの資料の類例としては、掛川市梅橋北遺跡・藤枝市御了ヶ谷遺跡に見られる。時期的には中原4区SB-2例では9世紀前半、宮裏3区SB-1例は8世紀後半と思われる。

高台を有する土師器の坏IIの様相は判然としない。中原遺跡5区SB-2で1点底部と推定される資料があるのみである。竹林寺廃寺跡では2群に伴って出土している。浜松市(旧可美村)城山遺跡では坏第II類に分類され、第5群上器(9世紀前葉～中葉)に位置づけられている。9世紀代になって灰釉陶器を模倣し出現するものと思われる。

土師器の壺では、壺Iとした「遠江型」として分類・呼称される長胴壺が卓越している。前述した城山遺跡、磐田市御殿・二之宮遺跡では良好な資料を得られており、口縁部の外反の具合等で編年案が組まれている。宮裏遺跡3区SB-3出土の壺のうち、口縁部を水平に外反させていない34・38～40、水平に外反させた35、時期的にも先行するSB-3bには水平に外反させた口縁部を有する36がある。遠江における編年觀では8世紀後葉と位置づけられている一群である。一方、中原遺跡5区SB-1出土の壺24はL字縁部を完全に水平に外反させている。SB-1と重複しているSB-7出土の壺の口縁部は、水平に外反させておらず、体部上位が膨張し、口径値と近い数値を示している。従来の編年觀では8世紀末から9世紀初頭の特徴が認められる。中原・宮裏両住居跡の資料群はこの従来の編年觀をほぼ認証するものである。壺の全体像を把握できる資料が無いため想像の域を出ないが、SB-3a・bには御殿・二之宮分類でいう壺III類～IV類が混在しているように思われる。壺については隣接する青木原遺跡でも出土している。また駿東壺は壺IIIと仮に分類しておく。

## 内黒土器

次に内黒土器について観察してみる。内黒土器は内面に黒色処理を行った土器を示し、土師器の範疇に入れることができるものである。内面に炭素を吸着させる土器群は既に占墳時代に出現していることが知られる。両遺跡周辺では竹林寺廃寺跡や尼沢遺跡等で出土が知られる程度であったが、今回まとまった資料を得ることが出来た。胎土から在地産と考えるよりも他地域からの搬入品として考えた方が良いのかもしれない。中原・宮裏両遺跡で出土した内黒土器の殆どは無高台の坏である。しかし中原遺跡5区SB-3では台を有する鉢、SB-4では鉢の細片資料を得ており、また浜松市城山遺跡では高台を有する坏第II類に内黒土器が存在している。本来的には複数の器種が流通していたのかもしれないが、今回の成果では無高台の坏が卓越している。中原遺跡5区SB-1で見られるように、黒笠14号窯式の灰釉陶器と内黒土器の無高台坏14～16は同時期に存在したものと思われる。口径は11cm台で、器高は14のみ3.6cmで残り2点が3.1・3.25cmとやや低い。底径は5.7～6.45cmを有する。いずれの坏も底部の調整が判然としないが、平坦に仕上げられている。底部から体部は直線的に立ち上げられ、口唇部は丸く仕上げられている。覆土上位で出土した15と床面直上で出土した16は形態的にも計測値的にも酷似している。この資料と同時期と思われる内黒土器は中原遺跡5区SB-8、6区SB-7で出土している。中原遺跡3区SB-8の内黒土器3は時期的に先行すると思われる。奈良時代に位置づけられる宮裏遺跡3区SB-3で出土した内黒土器は残念ながら底部資料のみで器種の特定は難しい。22の糸切り痕を明瞭に残す資料があり注意を要する。周囲からは1区SB-1で2点、3区SB-1で1点出土している。体部が内湾して立ち上がる前者と直線的に立ち上がる後者と器形の差が見られる。後者は中原遺跡3区SB-8の3と形態的に酷似する。時期は8世紀後葉と推定される。遺跡周辺で前者と同形態を示す資料は前述の竹林寺廃寺跡2群、島田市尼沢遺跡出土資料に該当する。今報告できた内黒土器の



第127図 内黒土器計測値分布図

坏は14点になる。その計測値をまとめたのが第127図である。口径値では宮裏1区造構外の資料が17.4cmをはかり、他の資料は11~13cm台の範疇に入る。多くの資料の底径は5~6cm台で口径:底径の比率が2:1に近い。器高は4cm台をはかる資料も散見されるが、ほとんどの資料が3cm台をはかるのがわかる。しかし8世紀後葉に位置づけられる宮裏3区SB-1と中原5区SB-1出土資料を比較すると差が生じており、灰釉陶器流通時には、奈良期よりも器高が低平化したものと思われる。

#### 土器の様相

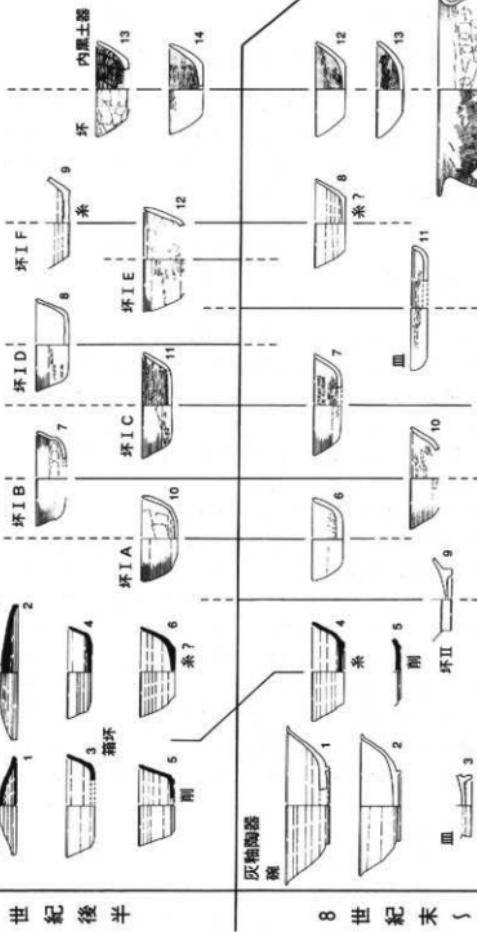
第128図で示しているのは灰釉陶器出現前後の時期のものである。須恵器は8世紀後葉には船坏や削出し高台を有する坏、糸切り痕を残す坏等様々な種類の坏が見られ、同時にこれらを模倣した形態を探る土師器の坏が見られる。これらの上師器の坏は灰釉陶器が出現する8世紀末以降も継続して現れている。竹林寺廃寺土師器1群は坏I Cと同系列上にあり、1群が時期的に先行するものと思われる。同じく8世紀後半以前からの系譜を持つ坏I A・Bも使用し続けられている。口径:底径比率が2:1付近をはかる竹林寺廃寺2群タイプの坏は輪積み痕や赤彩等が認められることから、基本的に坏I Cの系譜を引く可能性がある。5~6区の出土状況を見ると9世紀代には出現していないようであり、10世纪に近い時期以降になって主流となる。内黒土器も様々な器種をもつものと思われるが、器形を確認しうる資料は無台坏のみである。灰釉陶器の流通期には器高を低平化させている。土師器坏IIや皿類は点数が少ないため判然としない。要Iは口縁部の変化が時間の経過と共に進えると思う。口縁部の変化で

1·3·5·7·8·11·12·15~17:中原3区SB-3 2·4:中原2-3区SB-1  
6·18:中原3区SB-6 9·10·13:中原3区SB-1 14:中原3区SB-8

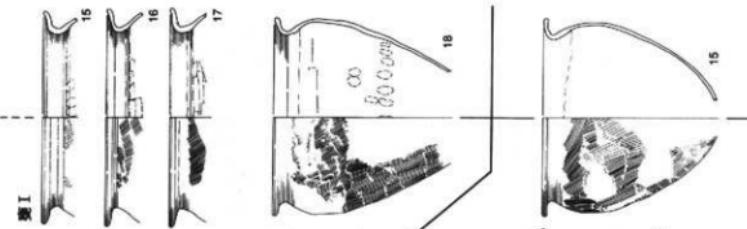
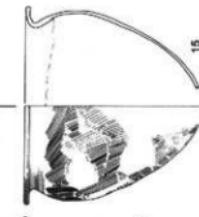
須恵器  
蓋 1  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
世紀後半

箱環  
箱 2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
世紀後半

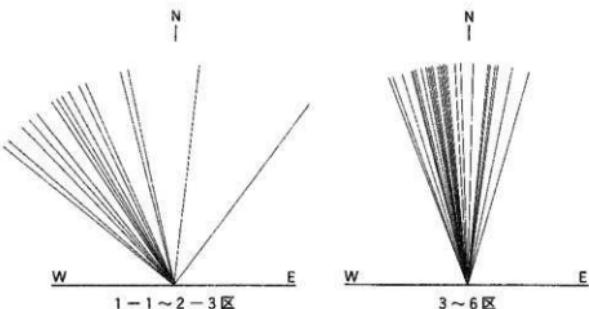
灰輪陶器  
蓋 1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
世紀末



1·4·6·7·12·13·15:中原5区SB-1 2:中原4区SB-4  
3:中原6区SB-3 5·10·14:中原6区SB-2  
8·11:中原4区SB-2 9:中原5区SB-2



第128図 中原・宮窯遺跡土器変遷図

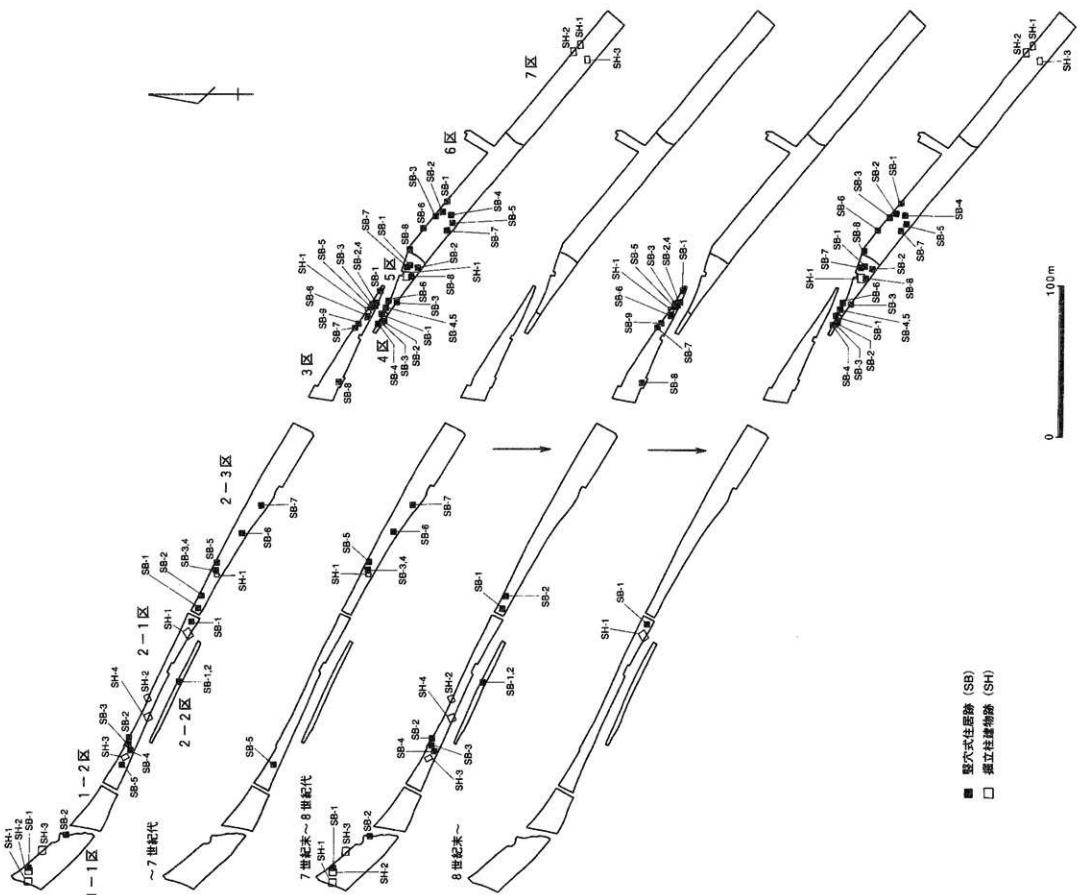


第129図 中原遺跡竪穴住居跡方位分布図

細分類は可能である。中原遺跡で出土している壇II・IIIは基本的に8世紀後半に位置づけており、この図には残念ながら掲載していない。いずれにしても壇IIIの駿東壇は8世紀中葉で消滅する傾向にあり、中原遺跡・宮裏遺跡で出土した駿東壇はその最終末期のものであろう。小型壇は図に掲載していないが、灰釉陶器出現前後では形態的変化が追えず判然としない。

## 2 遺構群

前述してきた土器群の年代観を踏まえ、中原遺跡で検出された遺構群について概観してみたい。中原遺跡で検出された竪穴住居跡は48軒、掘立柱建物跡を13棟検出している。宮裏遺跡では竪穴住居跡が20軒、掘立柱建物跡が1棟検出されており、掘立柱建物跡については出土した青磁から12世紀後半と推定される。古墳時代から平安時代における集落の推移を見るうえで、各時期の遺構の変遷を概観してみる。なお宮裏遺跡は調査が継続する予定であり、調査が終了した中原遺跡のみを対象としてみたい。第130図は中原遺跡1-1区から7区までの調査区内に検出された竪穴住居跡・掘立柱建物跡の位置を示した図である。概ね3時期に分け、出土遺物が無い例や時期決定が困難と判断された遺構については示していない。7世紀代には2-3区を中心に集落が形成されているが、出土遺物が極めて少ない。2-3区SH-1については該期の遺構かと推定される。1-2区には7世紀代の須恵器坏蓋が含まれている。2-1区SB-5については土器から7世紀後葉に位置づけられる。次に7世紀末から8世紀代、すなわち奈良時代の遺構を概観してみる。1-1区SB-1は8世紀に特有の高台を有する坏に、高台の無い趣が伴う点から8世紀前半と思われる。従って本遺構と重複するSH-2は8世紀前葉以前の遺構となる。2-1区SB-4はSB-3と重複し、時期的に新しい。SB-3は8世紀前葉以前の遺構か。南東方向にSH-2・4が位置するが関連性は不明である。2-3区SB-1は8世紀後葉に位置づけた。3区SB-6・8も8世紀後葉に位置づけられる。3区SB-1~5については土器がほとんど出土していないので不明であるが、周囲の状況から8世紀後葉から9世紀前葉に位置づけることは一応、可能である。灰釉陶器が出現する8世紀末以降の集落については、概ね2グループに分けられる。1つのグループは2-1区SB-1で灰釉陶器が伴う。2-2区で削出し高台を有する須恵器の坏が出土している点や8世紀後葉に位置づけられる2-3区SB-1が付近に位置する点から、この小規模なグループは8世紀後葉から継続している可能性がある。2-1区SH-1はこのグループに含まれよう。もう1つのグループは4・5・6区で灰釉陶器を伴う竪穴住居跡群である。遺物として8世紀中葉以前に位置づけられる資料が見られないため、8世紀後葉から9世紀代にかけて営まれたと思われる。集落内ではその分布から竪穴住居跡約5軒分が1つの単位を形成しているように見える。「郷」を構



第130図 中唐墓地遺跡分布圖

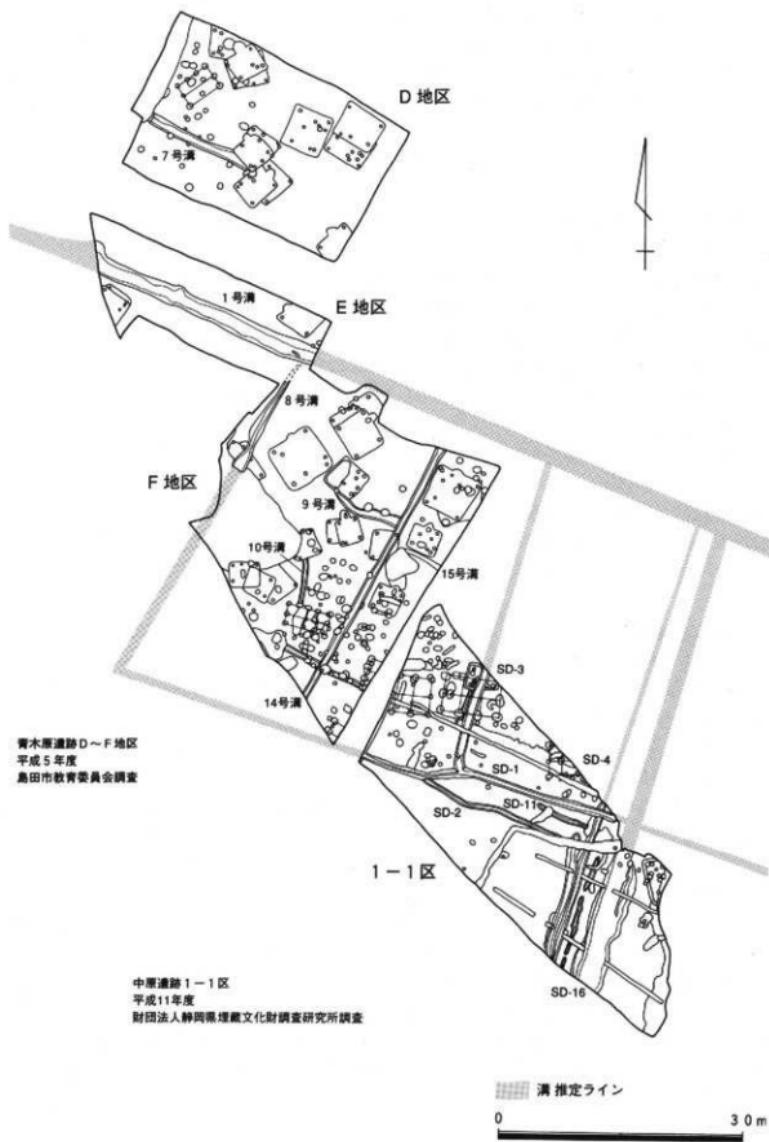
成する「戸」の姿を思わせる。第129図は竪穴住居跡の建物方向を比較した図である。7～8世紀代に進出した1～1～2～3区の竪穴住居跡群は、概ね北西を基軸とするも、8～9世紀代の3～6区の住居群では主に北を指向する傾向にある。時期的に前者が7世紀～8世紀代、後者が8～9世紀代の遺構群である。立地条件・時期・集団に建物方向が規制されうるので、今後検討が必要である。

## 第2節 平安時代～鎌倉時代

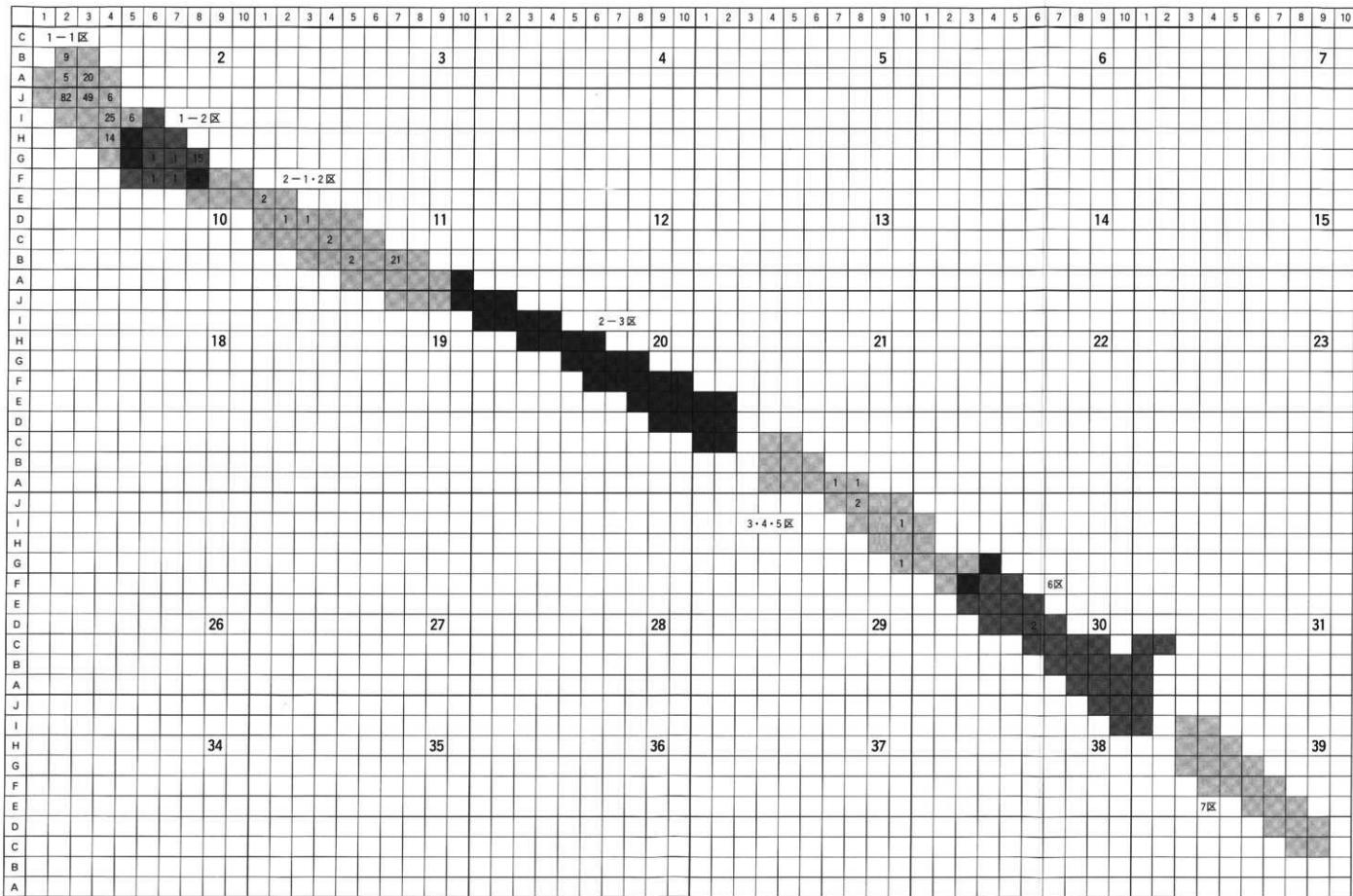
中原遺跡・宮裏遺跡における12世紀後半から13世紀代にかけての遺物として山茶碗・山皿・輸入陶器（青磁・白磁）が挙げられる。今回の調査ではこれらの遺物を伴う遺構として掘立柱建物跡・溝状遺構等を検出している。これらの資料はかねてから指摘されている賀呂莊との関連性がまず想起された。しかしながら結論として、賀呂莊との積極的な関わりを示す資料は検出することは出来なかった。本節では遺物・遺構を概観し、文献に残る本地域の記録を頼りに中原遺跡を中心とした区域の歴史を考えみたい。本節ではまず山茶碗等の出土点数を数え、その密度を看取して見ることとした。中原遺跡では前述した該期の遺構は少なく、また遺物が出土しなかったため時期を特定出来なかつた柱穴も多い。従って土器破片の数量という具体的なデータを示すことにより、より客観的に該期の活動基盤を検索することを試みたい。そこで調査の終了した中原遺跡を対象とし、出土遺物は破片数を全てカウントした。数点が接合し1個体として実測できた資料もあるが、その資料も破片数で数えている。数量調査については既に鳥田市矢崎遺跡等で報告されている精緻な仕様があるので参照して頂きたい。また須恵器と該期の山茶碗の色調・胎土等が酷似している例があり、細片資料である場合は区別が困難であった。従つて報告する数値は必ずしも精緻な分析による数値ではなく、傾向を示すものに他ならない。

### 1 土器の出土傾向

第132図に各調査区・グリットごとの山茶碗・小皿の出土点数を示した。出土遺構・グリットが明白な資料を採用した。また第15・16表には輸入陶器の点数も含めた数値を示した。1～1区は出土点数が異常に多いのがわかる。これはSD-2で投棄された状態で出土した山茶碗（第13図）の破片数によるものが大きい。また区画溝の可能性があるSD-1・3や、SD-4・16等道路の側溝とも考えられる溝状遺構からも多く出土していることも由来する。今回の調査区が南東方向へ展開するに従い、山茶碗を初めとする中世土器の出土点数は減少する傾向がこの図から読みとれる。2～1区11-B7の21点はSD-1出土遺物によるものである。これらの状況から1～1区が最も居住域に近い調査区として考えられる。6区では該期の遺構は検出されていないものの、北半部で検出されている柱穴群に伴い存在した可能性がある。従つて6区に小規模ながら何らかの活動を行っていた可能性がある。山茶碗は1～1区SD-2で一括出土した山茶碗群がおそらく12世紀後半と、中原遺跡でも古手の山茶碗類に位置づけられ、2～1区SD-1・10等で出土している山茶碗群は概ね13世紀前葉と思われる。これらの山茶碗には小碗・輪花碗は伴っていない。また高台が扁平化した13世紀後半代の資料もわずかに含むが、高台が消滅した時刻の山茶碗類は出土していない。山茶碗は出土している中世土器の中でも77.5%を占めている（第15表）。輸入陶器では龍泉窯系が多く、12世紀後半に流通を開始する青磁割花文碗や13世紀の青磁蓮弁文碗が主体である（第9・10・15・16表）。12世紀後半の同安窯系と思われる資料も含む。貯蔵形態である甕は2～1区SD-10で1点、調理形態である鉢は2～1区SD-10で1点、2～3区遺構外で1点出土しているのみで、かわらけ・伊勢鍋等は1点も出土していない。



第131図 青木原遺跡・中原遺跡調査区推定図



第132図 中原遺跡グリッド別土器出土図

■ 調査区  
■ 調査区が重複するグリッド

## 2 溝状遺構

第131図は中原遺跡1-1区と島田市教育委員会が調査を行った青木原遺跡の調査区を重ねたものである。ここで該期の溝状遺構は中原遺跡では1-1区のSD-1~4、9~12、14~17が該当する。また青木原遺跡ではE地区1号溝、F地区8号溝が該当する。他にも溝状遺構は検出されているが、該当する時期では無い例や遺物が出土しなかったため所属時期を判断できない例もある。これら17条の溝状遺構の中でも、直線的に延びる区画性を持つものと推定される溝状遺構を中心に考えてみたい。

島田市教育委員会が調査を行った青木原遺跡E地区1号溝はE-23.5°-Sの方向へ直線的に延びる。断面はU字形を呈し、深さは40cm程度という。西側で川原石が密集して検出されている。覆土は暗茶褐色土を主体とすると報告されている。F地区8号溝はN-29°-Eの方向へ直線的に延びる。断面はU字形を呈し、覆土は暗赤灰色土・灰褐色土等である。これも河原石が投げ込まれた状態で出土したという。またF地区8号溝はE地区1号溝へ向かう状況で検出されている。中原遺跡1-1区では北からやや東に振れる方向へと延びる溝状遺構が確認されている。再度その方向について記述してみる。SD-3・9はN-16°-E、SD-4はN-17°-E、SD-12はN-13.5°-E、SD-14・15・17(同一遺構か?)はN-15~22°-E、SD-16はN-21°-Eである。これらの溝状遺構の内でSD-11へと接続する可能性があるSD-14・15・17、SD-2と接続する可能性があるSD-12は除外しても、いずれの溝状遺構は青木原遺跡E地区1号溝の延長線上へとほぼ直交する方向へ延びる。したがって中原遺跡1-1区、及び青木原遺跡F地区を中心に方形に区画しようとする意図があったと思われる。中原遺跡1-1区SD-3と青木原遺跡F地区8号溝は共に東西を区画する溝として、またE地区1号溝と1-1区SD-1・2が南北を区画する溝として考えるならば、東西約33~43m、南北約44m程度の台形に近い区画が認められる。この区画の中央部にあたる青木原遺跡F地区には柱穴が散見され、中原遺跡1-1区SD-2以前には柱穴がほとんど無い状況から、集落内を区画する溝であることが理解される。

## 3 遺跡の性格

該期の中原遺跡・青木原遺跡を中心とした初倉については第2章の歴史的環境で述べている。本項ではいくつか12世紀後半から13世紀代の初倉に関係あると思われる記事を引用する。

- ①『源平盛衰記卷第二十一』「…八日、同国懸川の宿に着く。九日、同国波津藏に着く。…」
- ②『海道記』「…菊河ノ宿ニ泊ヌ…妙井渡ト云処ノ野原ヲスク。…播豆藏宿ヲ遇テ大井川ヲ渡ル…」
- ③『東閑紀行』「…菊川をわたりて、いくほどなく一村の里あり。こまばとぞいふなる。この里の東はてに、すこし打登るやうなる奥より大井川を見渡したれば、はるばると広き河原の中に、一筋ならず流れ分れたる川瀬ども…」

①の資料は治承4(1180)年1月9日、富士川の合戦で敗走することとなる平維盛が軍勢を率いて「波津藏」に到着したことを記している。『源平盛衰記』は14世紀後半に成立した戦記文学として著名であるが、到着の記事が史実かどうか判然としない。しかしながら「波津藏」が存在する事は次の文献で立証される。②・③は紀行文である。②の資料は貞応2(1223)年4月13日に作者が朝、菊河ノ宿を出立し、妙井渡(しみづのわたり)、播豆藏宿を経て大井川を渡った事を記している。この『海道記』の作者については諸説あり確定していないが、源光行説や藤原行長説が有力である。③は仁治3(1242)年八月に菊川を通過した作者は「こまば」という里に着く。その里の東はてで機筋にも流れが分かれた大井川を眺めている。この『東閑紀行』の作者ははっきりしないという。これら3つの文献のうち、②・③については「紀行文」という性格上、東国への街道事情を明確に記している。②の妙井渡は現在地名が残っておらずはっきりしない。島田市沼伏の鶴ヶ谷池付近、大楠神社脇の湧水地、金谷町西の宮

以上の3つの説があるという。「…野原ヲ過グ…」という記述から狭隘な場所ではなく開けた場所を想起させるが、牧ノ原台地上の平坦な土地を示しているとは断定できない。③で見られる「こまば」は島田市と榛原郡金谷町との境にある「二軒屋原」に比定する説が有力である。作者はその里の「東はて」から分流する大井川を眺めている。その大井川は島田市道悅付近から広大な扇状地を形成しており、牧ノ原台地の最北東に位置する谷口原古墳群や中原遺跡・青木原遺跡が位置する付近からの眺望することができる。従って③の作者は「こまば」から牧ノ原台地上を東進、遺跡周辺まで進んで大井川を眺望・渡河したものと思われる。しかし③の作者は遺跡周辺では特に記録を残してはおらず、全く何も無かつたのか、記憶に留め置く必要が無いと判断したのか判然としない。

3つの文献の要旨をまとめてみる。②では1242年には大井川を渡る手前に「播豆藏宿」があり、①の記述を参考にすると、その「宿」は12世紀後葉には存在していた可能性がある。そして懸川（掛川）一菊河（金谷町付近）一播豆藏を結ぶ道は遺跡周辺を通過していたものと思われる。③の記述ではその宿の所在は判然としない。大井川の流路の変化により渡河点、船着き場所等の施設の移動も考えるならば、道自体の変化も当然起きた可能性がある。増水等で渡河が不能になり、水が引くのを宿で待つことも当然あったであろう。したがって③の記述には見られない「宿」も道の変遷に伴って場所を移動しただけであり、完全な消滅はしていなかったと想像される。

ここで青木原遺跡・中原遺跡で検出された区画性を有する溝状造構群の性格が問題となる。青木原遺跡E地区1号溝が延びる方向はこの台地の傾斜方向に沿っており、土地を意識したものと思われる。また大井川や駿河國を遠望できるこの地に通過する「道」が存在したとすれば、その「道」を軸に土地区画がされ、一連の溝状造構がその区画に対応する可能性がある。出土している土器類の組成を第15表で示した内容は、集落の縁辺部である今回の調査区での組成であり、集落域自体の組成を示したものではない。威信財たる白磁の壺類が認められたものの、先述した「宿」に結びつけるのは全く不可能である。ただ遺跡一帯を含めた初倉の地に東海道が通過し、「宿」が存在したのは明らかである。今後それらとの関連性を含めた上で、検出した区画溝を作った集落の性格を検討すべきであろう。

## 参考・引用文献

- 岩波書店 1990『中世日記行集』
- 可美村教育委員会「城山遺跡」
- 菊川町教育委員会 1999『横地域跡－総合調査報告書－』
- 建設省中部地方建設局 1981『大井川治水史』
- 御殿・二之宮遺跡調査会 1995『御殿・二之宮遺跡－第6次発掘調査報告書－』
- 佐野五十五 1996『遠・駿・豆における古代の煮沸具』
- 『鍋と壺－そのデザイン－』 東海考古学フォーラム
- 静岡県教育委員会 1989『静岡県の窯業遺跡』
- 1994『静岡県歴史の道 東海道』
- 静岡県考古学会 1979『須恵器－古代陶質土器－の編年』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998『水掛土古墳群C群（静岡空港C地点）』
- 2001『矢崎遺跡II』
- 溝谷昌彦 1986『仲道A遺跡出土草創期土器における縄文回転押捺方向の研究』
- 『丘陵』12 甲斐丘陵考古学研究会
- 溝谷昌彦・坂巻隆一 1987『旗指遺跡第1地点出土の草創期土器』
- 『静岡県考古学研究』20 静岡県考古学会
- 島田市企画調整部 1983『しまだの自然環境』
- 島田市教育委員会 1980『竹林寺廃寺跡』
- 1990『宮上遺跡・尼沢遺跡』
- 1992『原ノ平遺跡』
- 1992『屋敷原遺跡・御小屋原遺跡』
- 1992『島田宿と大井川』
- 1996『青木原遺跡』
- 1996『島山風土記－ふるさと初倉－』
- 1998『御小屋原I遺跡・中原遺跡』
- 1999『宮上遺跡』
- 2000『青木原遺跡』
- 2001『中原遺跡・宮上遺跡』
- 新人物往来社 1989『新定 源平盛衰記』
- 新潮社 1984『日本靈異記』
- 辰巳 均・佐野五十五 1992『土師器の編年』『静岡県史』資料編3 静岡県
- 東海土器研究会 2000『須恵器生産の出現から消滅』
- 中村 浩 1995『静岡県島田市阪本町所在高根森古墳出土須恵器について  
－東京国立博物館品の検討－』『MUSEUM』535 東京国立博物館
- 賛 元洋 1997『古代遠江の食膳具』『静岡県考古学研究』29 静岡県考古学会
- 初倉村誌編纂委員会 1965『初倉村誌』
- 原秀三郎 1986『遠江国賀佐莊に関する二、三の問題－関係文書の調査と立莊をめぐって－』
- 『静岡県史研究』創刊号 静岡県
- 藤枝市教育委員会 1981『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財調査報告書III－奈良・平安時代編－』
- 松井一明 1993『遠江における山茶碗生産について』『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会

第3表 中原遺跡土器一覧表1

実測 区域	区	出土 土器 番号	写 真 版	登 録 番 号	種 類	基 性	色 調	特 徴	残 存 率
73	I - 3	SB - I - 1	58	600-1	須山型	灰	10Y7/1灰白色	やや軽薄、吸水不良有り	白陶器灰火焼
		SB - I - 2	651	須山型	灰	N800灰白色			白陶器灰火焼
		SB - I - 3	656-2	須山型	灰	7.5Y7/1灰白色			白陶器
		SB - I - 4	659	須山型	灰	N700灰白色	粘土内壁で閉鎖した部位		須山型片
		SB - I - 5	58	659	須山型	灰	5.5Y7/1灰白色		圓錐～底部残存
		SB - I - 6	543	須山型	灰	5.5Y7/1灰白色			天井部吸水有り
		SB - I - 7	528	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色			底部14残存
		SB - I - 8	539-1	須山型	高臺型	灰	N700灰白色	口縁記述ナシ、底部下部へタケズリ	11縁～全体周辺残存
73	I - 1	SD - 1 - 1	58	601	山田型	灰	5Y6/1灰白色	斜鉢足？、先端破損有り	白陶器灰火焼
		SD - 1 - 2	58	109	山田型	小灰	5Y7/1灰白色		底部内側残存
		SD - 1 - 3	105-2	山田型	小灰	5.5Y6/1灰白色			底部12残存
		SD - 1 - 4	90	須山型	灰	5.5Y7/1灰白色			人形埴輪
		SD - 1 - 5	388	須山型	灰	N700灰白色	内腹天津川に通じる瓶や壺から見られる		天津川14残存
		SD - 1 - 6	615	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色	内腹に輪付有り		口縁細断片
		SD - 1 - 7	900	須山型	灰	N700灰白色			脚部のみ
		SD - 1 - 8	609	須山型	灰	5Y6/1灰白色			脚部のみ
		SD - 1 - 9	67	須山型	灰	5.5Y7/1灰白色			底部12残存
		SD - 1 - 10	622	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色	底部外縁にヘツ記号		底部15残存
73	I - 2	SD - 1 - 11	58	96	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色	片脚印有り	11縁～全体周辺細片
		SD - 1 - 12	58	112	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色	白色粒子多量に含む	底部のみ
		SD - 2 - 1	391	山田型	灰	7.5Y7/1灰白色	裏面半径		底部14残存
73	I - 2	SD - 2 - 2	58	109	山田型	灰	10Y7/1灰白色	スノコ底有り	底部14残存
		SD - 2 - 3	338	須山型	灰	7.5Y7/1灰白色			底部15残存
		SD - 2 - 4	364	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色	外縁に輪付有り		口縁細断片
		SD - 2 - 5	905	須山型	灰	N700灰白色			底部15残存
74	I - 1	SD - 2 - 6	58	122-2	山田型	灰	10Y7/1灰白色		口縫部2次欠損
		SD - 2 - 6	58	327	山田型	灰	N500灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部14残存
		SD - 2 - 7	58	373-1	山田型	灰	5B6/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部～全体周辺欠損
		SD - 2 - 8	58	406-1	山田型	灰	2.5Y7/1灰白色	口縫部2次欠損	口縫部14次欠損
		SD - 2 - 9	58	418-2	山田型	灰	5B5/1青灰色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部～全体周辺欠損
		SD - 2 - 10	59	242-2	山田型	灰	5.5B6/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	二輪部12次欠損
		SD - 2 - 11	59	352-2	山田型	灰	10B5/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部14次欠損
		SD - 2 - 12	59	352-4	山田型	灰	N500灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部～全体周辺
		SD - 2 - 13	59	583	山田型	灰	7.5Y7/1灰白色	スノコ底・重ね縫合底有り	口縫部～全体周辺
		SD - 2 - 14	59	522-1	山田型	灰	N500灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部14次欠損
75	I - 2	SD - 2 - 15	59	522-2	山田型	灰	5.5Y7/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部14次欠損
		SD - 2 - 16	59	522-3	山田型	灰	5.5Y7/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部14次欠損
		SD - 2 - 17	59	522-4	山田型	灰	5.5Y7/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部14次欠損
		SD - 2 - 18	59	522-5	山田型	灰	5.5Y7/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部14次欠損
		SD - 2 - 19	59	522-6	山田型	灰	5.5Y7/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部14次欠損
		SD - 2 - 20	59	522-7	山田型	灰	5.5Y7/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り	口縫部14次欠損
76	I - 1	SD - 3 - 1	273	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色			底部12残存
		SD - 3 - 2	310	須山型	灰	9Y6/1灰白色			脚部細片
		SD - 3 - 3	369	須山型	灰	5Y7/1灰白色			底部細片
		SD - 3 - 4	394	須山型	灰	2.5Y6/1灰白色	内縁内側に管		底部15残存
75	I - 1	SD - 5 - 1	206	山田型	小灰	2.5Y6/1灰白色	底ねじき底有り		底部12残存
		SD - 5 - 2	259	須山型	灰	7.5Y7/1灰白色			底部14残存
75	I - 1	SD - 9 - 1	259	須山型	灰	N200灰白色			口縫部14次欠損
		SD - 11 - 1	70	75	須山型	灰	7.5Y6/1灰オリーブ色の縫		口縫部14次欠損
75	I - 1	SD - 11 - 2	70	74	須山型	灰	7.5Y7/1灰白色	5Y6/1灰オリーブ色の縫、員人あり	伝伏繩片
		SD - 11 - 2	155-2	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色	口縫～全体周辺		口縫部～全体周辺
75	I - 1	SD - 16 - 1	24	乳頭型	白	10Y7/1灰白色	ツマミ部近辺へヘツ記号		大穴部残存
		SD - 16 - 2	29	山田型	灰	5B5/1灰白色	スノコ底・手ねじき底有り		底部15残存
		SD - 16 - 3	26	山田型	灰	10Y7/1灰白色	スノコ底有り		底部のみ
		SD - 16 - 4	23	山田型	灰	10Y7/1灰白色			底部15残存
		SD - 16 - 5	39	丘北型	灰	N400灰白色	スノコ底・自然物有り		近底12残存
		SD - 16 - 6	20	30	須山型	灰	N400灰白色	5G7/1灰白色の縫	底部15残存
		SD - 16 - 7	72	26	吉野型	灰	10Y7/1灰白色	7.5Y7/1灰オリーブ色の縫、毛糸文	底部のみ
		SD - 16 - 8	27	山田型	灰	2.5Y7/1灰白色	スノコ底・重ね縫合底有り		底部のみ
		SD - 16 - 9	35-3	山田型	灰	10Y7/1灰白色	2.5Y7/1灰白色		底部15残存
		SD - 28 - 1	39	624	十輪型	灰	10Y7/1灰白色	表面剥離、内縁に板ナシ、指擦れ有り	口縫部のみ
76	I - 1	SD - 77 - 1	59	626	須山型	灰	2.5Y7/2灰白色	伊ナと表状沈縫、内縁は傳ナ	底部15残存
		SD - 23 - 1	59	162	須山型	灰	7.5Y7/1灰白色	傳伏繩片、内縁はアフ	底部細片
76	I - 1	須山外 - 1	3-6	須山型	瓦片	2.5Y7/1灰白色	ツマミ部近辺へヘツ記号		瓦片基のみ
		須山外 - 2	3-4	須山型	灰	N400灰白色	底張、傳ナ		禮器
		須山外 - 3	59	1-1	須山型	瓦片	7.5Y7/1灰白色	ハラケヅリ	
		須山外 - 4	3-8	須山型	瓦	2.5Y7/1灰白色	表面にB21と灰色の白斑跡		須山細片
		須山外 - 5	3-7	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色	底部外縁へヘツ記号		須山15残存
		須山外 - 6	9-2	須山型	灰	2.5Y7/1灰白色	底部外縁へヘツ記号		蓋部のみ
		須山外 - 7	3-1	山田型	小灰	5B6/1灰白色	重ね縫合底有り		底部15残存

第4表 中原遺跡土器一覧表2

実測図版	区	出土品番号	寄	縦	横	器種	器種	色調	特徴	残存率
76	1-1	遺跡外・8	151	山茶碗	小皿	2.5Y7/1灰白色			灰ねじき痕有り	高部34残存
		遺跡外・9	9-1	山茶碗	碗	5Y7/0灰白色			灰ねじき痕有り	底部~両側14残存
		遺跡外・10	131-2	山茶碗	碗	5Y7/0灰白色			スノコ底、灰ねじき痕有り	底部16残存
		遺跡外・11	70	1-11	白磁	盤	2.5Y7/0灰白色	5G7/0灰白色の輪、見え有り		口縁部破片
		遺跡外・12	72	1-3	青磁	盤	3Y7/0灰白色	7.5Y6/0灰白色		口縁~底部17残存
		遺跡外・13	70	1-9	白磁	碗	2.5Y7/0灰白色	10.5Y6/0灰白色の輪		底部10残存
77	1-2	SD-5-1	58-1	山茶碗	碗	3Y7/0灰白色			スノコ底?、灰ねじき痕有り	底部16残存
77	1-2	S-7-1	49	山茶碗	小皿	5Y7/0灰白色			灰ねじき痕有り	底部15残存
77	1-2	遺跡外・1	85	粗陶器	壺	7.5Y7/0灰白色				口縁~天井部山根有
		遺跡外・2	89	粗陶器	壺	N7/0灰白色				口縁部55残存
		遺跡外・3	83	粗陶器	壺	2.5Y6/0灰白色				グリーンの糸
		遺跡外・4	90-1	粗陶器	壺	10Y7/0灰白色				底部16残存
		遺跡外・5	37	粗陶器	壺?	7.5Y7/0灰白色				底部16残存
		遺跡外・6	86-1	粗陶器	壺	5Y6/0灰白色				口縁部断片
		遺跡外・7	16-1	山茶碗	碗	2.5Y7/0灰白色			見込みへり記号?	底部16残存
		遺跡外・8	25	山茶碗	碗	2.5Y7/0灰白色			底部16残存	
		遺跡外・9	42	山茶碗	碗	N7/0灰白色			底部16残存	
		遺跡外・10	62	白磁	盤	KG6/0灰白色			底部16残存	
		遺跡外・11	33	山茶碗	碗	2.5Y7/0灰白色			底部16残存	
		遺跡外・12	9-1	山茶碗	小皿	N7/0灰白色			底部16残存	
		遺跡外・13	70	31	青磁	碗	2.5Y7/0灰白色	2.5G7/0灰白色の輪、灰色の點		口縁部55残存
		遺跡外・14	70	4	青磁	碗	2.5Y7/0灰白色	7.5Y6/0灰白色の輪		底部16残存
		遺跡外・15	70	9	青磁	碗	2.5Y7/0灰白色	10.5Y6/0灰白色の輪、被然?		底部16残存
		遺跡外・16	65	粗陶器	壺	7.5Y7/0灰白色			5Y6/0灰白色の輪	口縫~底部16残存
78	2-1	SB-1-1	60	81号	瓦陶器	壺	5Y6/0灰白色	5Y6/0灰白色の輪		口縁部断片
		SB-1-2	111	土器	壺	10Y7/0灰白色	10Y7/0灰白色			口縁~底部16残存
		SB-1-3	65	113号	土器	壺	7.5Y7/0灰白色	火痕跡、被然有		底部16残存
		SB-1-4	80	90号	土器	壺	10Y7/0灰白色	法要		口縁部16残存
78	2-1	SB-3-1	225-1	土器	壺	10Y7/0灰白色				底部16残存
78	2-1	SB-2-1	60	229	土器	壺	10Y7/0灰白色	淮江葉・外葉に波打有		底部下平先
		SB-2-2	250	1.16号	壺	2.5Y7/0灰白色				口縁部断片
		SB-2-3	60	238号	土器	2.5Y7/0灰白色				口縁部16残存
79	2-1	SB-4-1	205-15	粗陶器	壺	KG6/0灰白色				口縁部16残存
		SB-4-2	60	232号	瓦陶器	壺	5Y7/0灰白色			日本記述
		SB-4-3	202	土器	壺	2.5Y7/0灰白色				口縁部断片
		SB-4-4	240	上林器	壺	10Y7/0灰白色				口縁~底部16残存
		SB-4-5	60	243号	土器	10Y7/0灰白色				内縁のみ
		SB-4-6	60	251号	粗陶器	壺	5Y7/0灰白色			粗陶部16残存
79	2-1	SB-5-1	201-2	瓦陶器	壺	N6/0灰白色				人面~口縁部断片
		SB-5-2	207-1	粗陶器	壺	3Y6/0灰白色				底部16残存
		SB-5-3	207-1	粗陶器	壺	2.5Y7/0灰白色				底部16残存
79	2-1	SD-10-1	60	137	山茶碗	碗	7.5Y7/0灰白色	底部外側に墨書き?スノコ底、灰ねじき痕有り		口縁部16残存
		SD-10-2	134	逆手陶器	壺?	5Y6/0灰白色				底部断片
		SD-10-3	132	中津陶器	碗	2.5Y7/0灰白色				口縁部断片
		SD-10-4	60	211号	瓦陶器	碗	2.5Y7/0灰白色	タクキ口、外葉に波打で巻面白?		底部断片
80	2-1	SD-1-1	61	26	瓦陶器	壺	5Y7/0灰白色			丸足溝のみ
		SD-1-2	27	粗陶器	壺	2.5Y6/0灰白色				底部断片
		SD-1-3	61	31	粗陶器	壺	3Y7/0灰白色	底部外側にタクキ口が找毛		底部断片
		SD-1-4	19号	山茶碗	碗	N7/0灰白色				口縁部断片
		SD-1-5	28	山茶碗	碗	2.5Y7/0灰白色	灰ねじき痕有り		底部16残存	
		SD-1-6	61	18号	山茶碗	碗	KG6/0灰白色	底部外側に墨書き、口縁火焼、灰ねじき痕有り		底部16残存
		SD-1-7	29	山茶碗	碗	2.5Y7/0灰白色	スノコ底有り		底部16残存	
		SD-1-8	43	山茶碗	碗	10.5G7/0灰白色	灰ねじき痕有り		底部16残存	
		SD-1-9	37	山茶碗	碗	5Y7/0灰白色	スノコ底有り		底部16残存	
		SD-1-10	7-3	山茶碗	碗	2.5Y7/0灰白色	スノコ底、底ねじき痕有り		底部16残存	
		SD-1-11	40	山茶碗	碗	5.5G7/0灰白色	底ねじき痕有り		底部16残存	
		SD-1-12	23号	山茶碗	小皿	N7/0灰白色				底~底部16残存
		SD-1-13	72	15	白磁	壺?	N8/0灰白色	2.5G7/0灰白色の輪		腰~底部16残存
80	2-1	SD-9-1	125	山茶碗	碗	5Y7/0灰白色	スノコ底、底ねじき痕有り		底部16残存	
80	2-1	SP-15-1	61	117	粗陶器	平瓶	5Y7/0灰白色			ツサミ形のみ
80	2-1	SP-35-1	5	山茶碗	碗	5Y6/0灰白色				縦目背筋
80	2-1	書標外・1	1-1	粗陶器	壺	2.5Y7/0灰白色				口縁部断片
		書標外・2	222-3	粗陶器	壺	2.5Y7/0灰白色				口縁部断片
		書標外・3	119-1	山茶碗	碗	5Y7/0灰白色	並ね縦き痕有り		口縁部16残存	

第5表 中原遺跡土器一覧表3

測定 回数	区	出土遺物番号	写真版	被 留 品 番 号	種類	器 形	色 調	特 徴	保 存 率	
80	2 - 1	老松井 - 4		10-2	山茶器	小瓶	7.5YR 8/6灰白色		底部のみ	
80	2 - 2	SD - 1 - 1	61	2-2	須恵器	环	5Y7/16灰白色	削出高台	底部14残存	
80	2 - 2	遺構井 - 1		2-2	須恵器	盆	N70灰白色	系切り縁あり	底部1/3残存	
81	2 - 3	SH - 1 - 1	61	42壺	須恵器	环	2.5Y7/16灰白色		ツマ・矢頭	
	SB - 1 - 2			54	須恵器	环	5Y7/16灰白色	底部ハラケズリ	底部1/4残存	
	SH - 1 - 3			94-1	土器	环	10YR 8/6灰白色	内彩・外彩共に赤彩	口縁から唇部1周存	
	SB - 1 - 4			120壺	土器	盆	5Y7/6灰白色	透江型・表面磨耗	口縁部1周残存	
81	2 - 3	SH - 1 - 1		136	須恵器	环	5Y6/1青灰色		山根地質片	
81	2 - 3	SB - 6 - 1		296	須恵器	盆	5Y7/16灰白色	底部外側にヘラ跡	底部のみ	
81	2 - 3	SB - 7 - 1		342	須恵器	环	5Y7/6灰白色		山根地質片	
	SB - 7 - 2	61	361壺	須恵器	环	N800灰白色	底部剥落にヘラ跡	山根地質1周欠損		
A1	2 - 3	SD - 1 - 1		162	須恵器	瓶	10YR 8/6に赤い斑状	湖西系か? 色ぬき模様有り	湖西1周存	
M1	2 - 3	SP - 1 - 1		38	須恵器	盆	5Y7/6灰白色		底部14残存	
81	2 - 3	SD - 5 - 6 - 1		258壺	須恵器	盆	N800灰白色	圓上深腹・輪文変化せず	1周・休馬1周残存	
	SD - 5 - 6 - 2			228	須恵器	环	2.5Y7/6灰白色	外側に自然触れ有	山根地質片	
	SD - 5 - 6 - 3	70	351	須恵器	瓶	N600灰白色	7.5Y6/1灰褐色の帯	休馬1周半残存		
	SD - 5 - 6 - 4			352壺	須恵器	盆	5Y7/6灰白色	圓上深腹	山根・紫陽花1周	
	SD - 5 - 6 - 5			316	須恵器	盆	2.5Y7/6灰白色	外側は10YR 3/3黒褐色を呈する	須加1周残存	
	SD - 5 - 6 - 6			296	須恵器	瓶	2.5Y7/6灰白色	開口部ではない	須加地質片	
82	2 - 3	波瀬井 - 1		13-1	須恵器	环	2.5Y7/6灰黄色	外側に自然触れ有	波瀬井半のみ残存	
	波瀬井 - 2			28-1	山茶器	瓶	N400灰色		底部12残存	
	波瀬井 - 3			13-2	山茶器	瓶	2.5Y7/6灰青色	スノコ底・取ぬき模様有り	波瀬井1周残存	
	波瀬井 - 4			3-1	山茶器	小瓶	5Y7/6灰白色		底部16周残存	
	波瀬井 - 5			36	山茶器	瓶	7.5YR 8/6灰白色		波瀬井9周存	
	波瀬井 - 6			71	8-1	須恵器	盆	2.5Y7/6灰白色	3Y6/60オリーブ色の縞	休馬地質片
	波瀬井 - ?	61	61	61	須恵器	盆	7.5Y7/16灰白色	片口跡か?	底部13残存	
82	3	SD - 1 - 1 - 1		270	土器	瓶	10YR 8/6に赤い斑状	底部有	口縁部1周残存	
82	3	SB - 8 - 1		258	須恵器	环	10YR 8/6灰白色		底部のみ	
	SB - 8 - 2			91-1	土器	瓶	10YR 7/6に赤い斑状	外側に縦付着	山根地質片	
	SB - 8 - 3	61	194壺	内附土器	环	10YR 7/6に赤い斑状	内側は赤褐色調、底部はハラケズリ	底部12周残存		
82	3	SD - 2 - 1		93	山茶器	瓶	5Y7/6灰白色	横窓有・底部模様有り	底部4周残存	
	SD - 2 - 2	62	90	90	山茶器	小瓶	5Y6/1灰青色	スノコ底有り	ZO残存	
	SP - 1 - 1	62	32	土器	瓶	10YR 8/6に赤い斑状	衣鉢摩拭	ほび地質		
82	3	SP - 3 - 1		11	須恵器	瓶	2.5Y7/6灰白色		ツマと底のあ	
83	3	SH - 6 - 1		231	土器	瓶	10YR 8/6灰青色	底部型	山根・休馬1周残存	
	SB - 6 - 2			46	土器	瓶	10YR 8/6灰青色	底部型	口縁・休馬1周残存	
	SB - 6 - 3	62	31壺	土器	瓶	10YR 8/6灰青色	透江型・外側に縦付着	10残存		
	SB - 6 - 4	62	249	須恵器	环	2.5Y7/6灰白色	載承・底部不直か?	12周残存		
83	5	遺構井 - 1		92	須恵器	瓶	7.5Y7/6灰白色	外側タキシ・内面ハラケズリと斜面凹	底部5周残存	
81	4	SB - 2 - 1		38	七輪器	环	10YR 7/6に赤い斑状	内側に赤彩・外側に輪縁み底	2GJ・1周	
	SB - 2 - 2	62	49	土器	环	7.5YR 8/6に赤い斑状	内側に赤彩・外側に輪縁み底	1/2周残存		
	SB - 2 - 3	62	77壺	土器	环	7.5YR 8/6灰青色	内側面に赤彩・外側に輪縁み底	1/2周残存		
	SB - 2 - 4		21	大和器	环	2.5Y7/6灰青色	昭和器(コクリ?)を使用	昭和・青料・土器地質片		
	SB - 2 - 5		54	土器	环	10YR 7/6に赤い斑状	昭和器(コクリ?)を使用	山根部1周残存		
	SB - 2 - 6	46壺	10-1	土器	环	2.5Y7/6灰青色	昭和器(コクリ?)を使用	此ののみ		
	SB - 2 - 7		72	土器	瓶	5Y8/6灰白色	内側面に赤彩	扇形袋持		
	SB - 2 - 8		31壺	土器	小瓶	7.5YR 8/6灰青色	山根部内面から外側に縦付着	山口・休馬1周残存		
	SB - 2 - 9		37	土器	瓶	2.5Y7/6灰青色	底部型	口縫地質・青料		
84	4	SB - 1 - 1	62	2	須恵器	瓶	N800灰白色	底部外側にヘラ跡	山根部1周欠損	
84	5	SB - 1 - 1	62	250	須恵器	瓶	5Y7/2灰白色		底部15周残存	
	SB - 1 - 2	63	256	須恵器	环	5Y7/16灰白色		10周残存		
	SB - 1 - 3	63	17壺	須恵器	环	5Y6/1灰白		山根地質1周残存		
	SB - 1 - 4	63	167壺	須恵器	瓶	7.5YR 6/6灰青色	輪縁片	昭和・輪縁み底		
	SB - 1 - 5	61壺	須恵器	环	7.5Y7/6灰白色	前蓋に当赤動付着	過片			
	SB - 1 - 6	73	73	須恵器	瓶	5Y7/6灰白色		脚部34周残存		
	SB - 1 - 7	250	須恵器	瓶	2.5Y7/6灰白色		口縫地質・青料			
85	9	SB - 1 - 8	63	214	土器	环	10YR 7/6に赤い斑状	内面に赤彩・外側に輪縁み底	山根・休馬5周欠	
	SB - 1 - 9	63	204	土器	环	7.5YR 8/6灰青色	底部外側に木葉模?	口縫地質5周欠		
	SB - 1 - 10	63	267	土器	环	7.5YR 6/6に赤い斑状	山根・休馬5周欠	山根・休馬5周欠		
	SB - 1 - 11	63	302	土器	环	7.5YR 7/6に赤い斑状	内側動付着・外側に輪縁み底	山根・休馬5周欠		
	SB - 1 - 12	63	282	土器	环	5Y7/6灰白色	内側外共に赤彩	14周残存		
	SB - 1 - 13	63	269	土器	环	2.5Y7/6灰白色	内側外共に赤彩	1/2周残存		

第6表 中原遺跡土器一覧表4

測量	区	出土遺構名	寄	基	登録番号	場	種	色	調	特	記	説
85	5	SB-1-14	63	縄文19	内周土器	环	10YR7/6に赤褐色	内面は墨色地	11時前後欠損			
		SB-1-15	63	内周土器	101	内周土器	环	10YR7/6に赤褐色	内面は墨色地	14時左		
		SB-1-16	244	内周土器	244	内周土器	环	10YR7/6に赤褐色	内面は墨色地	14時左		
		SB-1-17	105	土器	小口	5YR6/6灰白色	内壁は墨色地	11時前後11時後	11時前後11時後			
		SB-1-18	135個	土器	小口	5YR6/6灰白色	内壁は墨色地	11時前後11時後	11時前後11時後			
		SB-1-19	219	土器	小口	5YR6/6灰白色	内壁は墨色地	11時前後11時後	11時前後11時後			
		SB-1-20	240	土器	小口	5YR6/6灰白色	内壁は墨色地	11時前後11時後	11時前後11時後			
		SB-1-21	224	土器	小口	5YR6/6灰白色	内壁は墨色地	11時前後11時後	11時前後11時後			
		SB-1-22	222	土器	小口	5YR6/6灰白色	内壁は墨色地	11時前後11時後	11時前後11時後			
		SB-1-23	237	土器	小口	5YR6/6灰白色	内壁は墨色地	11時前後11時後	11時前後11時後			
		SB-1-24	133個	土器	小口	5YR6/6灰白色	内壁は墨色地	11時前後11時後	11時前後11時後			
		SB-1-25	383	土器	小口	5YR6/6灰白色	内壁は墨色地	11時前後11時後	11時前後11時後			
86	5	SB-2-1	345	土器	直	2.5YR6/6灰白色	内面は墨色地	底11時残				
		SB-2-2	64	土器	直	2.5YR6/6灰白色	内面は墨色地	底11時残	体11時残			
		SB-2-3	61	土器	直	2.5YR6/6灰白色	内面は墨色地	底11時残	体11時残			
86	5	SB-3-1	64	内周土器	261個	内周土器	环	7.5YR7/6に赤褐色	内面は墨色地	底11時残		
		SB-3-2	64	内周土器	273	内周土器	环	7.5YR7/6に赤褐色	内面は墨色地	底11時残		
86	5	SB-4-1	357	内周土器	357	内周土器	环	2.5YR6/6灰白色	内面は墨色地	底11時残		
86	5	SB-7-1	64	土器	直	2.5YR6/6灰白色	内面は墨色地	底11時残	体11時残			
86	5	SB-8-1	64	内周土器	160	内周土器	平	2.5YR6/6灰白色	内面は墨色地	底11時残	体11時残	
87	6	SB-2-1	281	土器	环	2.5YR6/6灰白色	内面は墨色地	11時前後	體11時残			
		SB-2-2	32	土器	直	2.5YR6/6灰白色	内面は墨色地	11時前後	底11時残			
		SB-2-3	52	土器	直	10YR6/6灰白色	外側に墨色地	11時前後	底11時残			
		SB-2-4	65	土器	直	10YR6/6灰白色	外側に墨色地	11時前後	底11時残			
		SB-2-5	65	土器	直	2.5YR6/6灰白色	内面は墨色地	11時前後	底11時残			
87	6	SB-3-1	33-1	灰陶陶器	33-1	灰陶陶器	环	2.5YR6/6灰白色	重ね墨色地	11時前後		
		SB-3-2	34-2	灰陶陶器	34-2	灰陶陶器	环	10YR6/6灰白色	5YR6/6灰白色	11時前後		
		SB-3-3	57	灰陶陶器	57	灰陶陶器	环	2.5YR5/4に赤褐色	泥江型	11時前後		
		SB-3-4	34-1	灰陶陶器	34-1	灰陶陶器	环	10YR6/6灰白色	泥江型	11時前後		
87	6	SB-4-1	65	土器	直	10YR6/6灰白色	泥江型	11時前後	底11時残			
87	6	SB-5-1	87	灰陶陶器	87	灰陶陶器	环	10YR6/6灰白色	5YR6/6灰白色	11時前後	底11時残	
87	6	SB-5-2	144	土器	直	10YR6/6灰白色	泥江型	11時前後	底11時残			
87	6	SB-7-1	65	土器	直	2.5YR6/6灰白色	泥江型	11時前後	底11時残			
87	6	SB-7-2	93	土器	直	10YR6/6灰白色	泥江型	11時前後	底11時残			
88	6	SP-21-1	37-1	灰陶陶器	37-1	灰陶陶器	环	2.5YR5/4灰白色	泥江型	11時前後	底11時残	
88	6	SP-21-2	37-2	灰陶陶器	37-2	灰陶陶器	环	5YR5/4灰白色	泥江型	11時前後	底11時残	
88	6	遺構外出土-1	27	土器	环	5YR5/4灰白色	朝日高台		體11時残			
		遺構外出土-2	20	灰陶陶器	20	灰陶陶器	小口	2.5YR6/6灰白色	スノコ底？	11時前後	底11時残	
		遺構外出土-3	11	灰陶陶器	11	灰陶陶器	小口	2.5YR6/6灰白色	泥江型	11時前後	底11時残	
		遺構外出土-4	5	灰陶陶器	5	灰陶陶器	环	2.5YR6/6灰白色	見込みに刻印		體11時残	
		遺構外出土-5	70	青陶	70	青陶	环	10YR6/6灰白色	7.5G7/6泥江型灰色の輪		底11時残	
88	3	SB-2-1	65	1	土器	直	2.5YR6/6灰白色		11時前後			
88	4	SB-2-2	65	1	土器	直	2.5YR6/6灰白色		11時前後			
88	6	SB-5-3	3	土器	直	10YR6/6灰白色		11時前後				
88	6	SB-5-4	4	土器	直	10YR6/6灰白色		11時前後				
88	6	SB-5-5	5	土器	直	10YR6/6灰白色		11時前後				
88	6	SB-5-6	6	土器	直	10YR6/6灰白色		11時前後				
89	6	匂合器-1	68-69	187.1	縄文土器	糸	3YR5/6明赤褐色	11時前後、衣裳模文、筋上に墨跡	11時前後、衣裳模文、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-2	68-69	133	縄文土器	糸	7.5YR5/4に赤褐色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-3	68-69	295	縄文土器	糸	7.5YR5/4に赤褐色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-4	68-69	134	縄文土器	糸	5YR6/6灰色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
90	6	匂合器-5	68-69	138	縄文土器	糸	5YR6/6灰色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		S-78-6	68-69	120	縄文土器	糸	5YR6/6灰色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-7	68-69	196	縄文土器	糸	5YR6/6灰色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-8	68-69	147-2	縄文土器	糸	3YR5/6明赤褐色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-9	68-69	197	縄文土器	糸	3YR5/6明赤褐色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-10	68-69	290	縄文土器	糸	3YR5/6明赤褐色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-11	68-69	123	縄文土器	糸	5YR6/6灰色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-12	68-69	366	縄文土器	糸	7.5YR6/6灰色	筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-13	68-69	140	縄文土器	糸	7.5YR6/6灰色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-14	68-69	328	縄文土器	糸	5YR6/6灰色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		
		匂合器-15	68-69	121	縄文土器	糸	5YR6/6灰色	11時前後、筋上に墨跡	11時前後、筋上に墨跡	體11時残		

第7表 宮裏遺跡土器一覧表

測量 遺跡	区	出土遺物 土器番号	等級 真版	背番号	種類	器種	色 調	特 徴	探 査
116	1	SB-1-1	87	直筒器	直	3Y7/1灰白色			断片資料
		SB-1-2	102	平底土器	环	7.5Y7/5Gに近い黄褐色	内腹を白地施す	口縁・休部14枚	
		SB-1-3	143	円底土器	直	10YR7/4Gに近い黄褐色	内腹を白地施す	1枚有	
		SB-1-4	170	上部器	直	10YR7/4Gに近い黄褐色	通江型	口縁・休部15枚	
		SB-1-5	66	下部器	直	10YR7/4Gに近い黄褐色	通江型	体部15枚	
		SB-1-6	66	111瓶	直	10YR7/4Gに近い黄褐色	通江型	口縁・休部16枚	
		SB-1-7	63	口部器	直	3Y7/1灰白色	スコソ底・爪ね渡き有り	2枚有	
116	2	SH-3-1	122	上部器	小型直	10YR7/4Gに近い黄褐色			断片資料
		SB-3-2	166	下部器	直	5Y7/5Gに近い黄褐色	破壊型		断片資料
117	1	通江外-1	206	折角底器	直	3Y7/1灰白色	10YR7/2Gオーブル灰色の釉		断片資料
		通江外-2	59	直筒器	环	5Y7/1灰白色			底部5枚
		通江外-3	3	直筒器	直	10YR7/4Gに近い黄褐色	内腹を白地施す	口縁・休部1枚	
		通江外-4	1	下部器	直	5Y7/4Gに近い黄褐色			断片資料
117	2	SB-3-1	117	直筒器	直	2.5Y7/1灰白色			断片資料
		2	SF-2-1	5	直筒器	环	N50灰		断片資料
117	2	通江外-1	3	直筒器	直	5Y7/1灰白色	毛ね渡き有り		底部14枚
		SB-1-1	131	直筒器	直	2.5Y7/1灰白色			ツヤのみ
117	3	SB-1-2	44	土胚器	环	2.5YR6/5G青褐色	泥出外輪に木葉模様?	2枚有	
		SB-1-3	66	内里土器	环	10YR7/4Gに近い黄褐色	内腹を白地施す	口縁・休部15枚	
		SB-1-4	38	土瓶器	直	10YR7/6G青褐色	破損(ノック?)を被用	底部12枚	
		SB-1-5	131	上部器	直	10YR6/4Gに近い青褐色	泥出外輪・外縁に木葉模	口縁・休部5枚	
		SB-2-1	59	上部器	环	5YR7/6G明黄色	柄手は内側に施乳	1枚有	
117	3	SH-2-2	66	内五節器	直	10YR6/4Gに近い青褐色	内腹を茶色地盤・底部削り紙刺		断片資料
		SB-2-3	32	直筒器	直	10YR7/6G灰白色			底部5枚
		SB-2-4	183	下部器	直	10YR7/4Gに近い青褐色	底部削り紙		口縫部14枚
		SH-3-1	48	直筒器	直	2.5Y7/1灰白色			ツヤのみ
118	3	SB-3-2	66	直筒器	直	K50灰			1枚有
		SB-3-3	112	直筒器	直	K50灰			1枚有
		SB-3-4	338	直筒器	环	2.5Y7/1灰白色			断片資料
		SB-3-5	66	直筒器	直	5Y7/1灰白色	回天復原・側面背台	1枚有	
		SB-3-6	130	直筒器	直	2.5Y7/1灰白色	吸水不良		1枚有
		SB-3-7	88	直筒器	直	5Y7/1灰白色	S11-3-7と同一個体の可能性有り		断片14枚
		SB-3-8	66	125瓶	直	2.5Y7/6明黄色	SB-3-6と同 烧体の可能性有り		断片資料
		SB-3-9	82	土瓶器	直	5YR7/6Gに近い青褐色			ツヤのみ
		SB-3-10	66	上部器	环	2.5Y7/2G灰白色	外縁に輪状模様	2枚有	
		SB-3-11	66	上部器	直	2.5Y7/2G灰白色	内外表面に小切		断片資料
		SB-3-12	66	上部器	直	2.5Y7/5G明黄色	内外表面に小切		口縁・休部15枚
		SB-3-13	12	上部器	直	2.5Y7/6G灰白色	内表面に小切		断片資料
		SB-3-14	610	中筒器	直	10YR7/6G明黄色	外縁に擦痕・外縁に輪状模様	1枚有	
		SB-3-15	66	上部器	直	2.5Y7/6G灰白色	内外表面に小切		口縁部10枚
119	3	SB-3-23	67	上部器	直	2.5Y7/6G灰白色	内外表面に小切・外縁に輪状模様	口縁部10枚	
		SB-3-24	66	上部器	直	2.5Y7/6G灰白色	内表面に小切・外縁に輪状模様	1枚有	
		SB-3-25	23	上部器	直	10YR7/6G灰白色	内表面に小切		口縁・休部14枚
		SB-3-26	222	上部器	直	10YR7/6G灰白色	内表面に小切		底部のみ
		SB-3-27	67	内上部器	环	10YR7/6G灰白色	内面は黑色地盤		底部のみ
		SB-3-28	67	内上部器	直	10YR7/6G灰白色	内面は黑色地盤・底部削り紙刺		底部4枚
		SB-3-29	67	上部器	直	2.5Y7/6G灰白色			断片資料
		SB-3-30	328	二輪器	直	7.5YR6/4Gに近い青褐色	底江底・外縁に輪状模		断片14枚
		SB-3-31	220	上部器	直	2.5Y7/6Gに近い青褐色	底江型		底部20枚
		SB-3-32	287	上部器	直	2.5Y7/6G灰白色	底江型		底部10枚
		SB-3-33	534	上部器	直	10YR7/4Gに近い青褐色			断片資料
		SB-3-34	130	上部器	直	5Y7/1灰白色	底江型・内外面ともに窓有り		口縫部15枚
		SB-3-35	67	上部器	直	5Y7/4Gに近い青褐色	底江型・内外面ともに窓有り		口縫部14枚
		SB-3-36	958	上部器	直	7.5YR6/4Gに近い青褐色	底江型		口縫部14枚
		SB-3-37	67	上部器	直	5Y7/4Gに近い青褐色	底江型		口縫部14枚
		SB-3-38	463	上部器	直	2.5Y7/6G灰白色	底江型		口縫部14枚
		SB-3-39	303	上部器	直	10YR7/4Gに近い青褐色	底江型		口縫部14枚
		SB-3-40	105	上部器	直	10YR7/4Gに近い青褐色	底江型		口縫部14枚

第8表 宮裏遺跡土器一覧表2

測量 区画	区	出土 遺 跡 名	寄 出 真 面 版	登 録 番 号	種 類	新 種	色 調	特 徴	残 存 率
120	3	S B - 4 - 1	67	241	土師器	瓶	7.5 YR 7/6灰褐色	白練部1周残存	
		S B - 4 - 2		252	土師器	小形器	7.5 YR 5/4灰褐色	体部外側に黒い付着物	
120	3	S B - 8 - 1	67	377	土師器	环状	10 YR 7/4にぶい黄褐色	体部上に黒い付着物	環片資料
		S B - 8 - 2		372	土師器	甕	10 YR 7/6にぶい黄褐色		底部のみ
		S B - 8 - 3		370	土師器	甕	10 YR 7/6にぶい黄褐色		口縁部1周残存
		S B - 8 - 4	67	370	土師器	甕	7.5 YR 5/3灰褐色		口縁・体部1周残存
120	3	S B - 12 - 1		365	土師器	甕	7.5 YR 7/6にぶい黄褐色	内外全面に金莎	環片資料
		S B - 12 - 2		401	土師器	小形器	8 YR 5/4にぶい黄褐色		環片資料
120	3	S B - 12 - 3		396	土師器	甕	7.5 YR 4/4灰褐色		上縁部1周残存
120	3	S F - 21 - 1		631	山系器	瓶	3 YR 7/6灰褐色	ソノ痕・重ね焼き痕有り	底部1周残存
120	3	S P - 82 - 1	72	407	青磁	瓶	5 YR 7/6灰褐色	7.5 YR 5/6オリーブ色の輪・割文有り	体部1周残存
121	3	S D - 2 - 1		31	山系器	小瓶	N 7/6灰褐色		底部のみ
		S D - 2 - 2		56	山系器	甕	5 YR 4/2灰褐色		環片資料
		S D - 2 - 3		136	近世陶器	鉢	5 YR 7/6灰褐色	見込みに黒い目	10残存
		S D - 2 - 4		186	近世陶器	天口茶碗	10 YR 5/6にぶい黄褐色	10 YR 5/6灰褐色の縁	底部1周残存
		S D - 2 - 5		184	近世陶器	天口茶碗	2.5 YR 4/4にぶい黄褐色	下部灰褐色の輪	底部1周残存
		S D - 2 - 6		156	近世陶器	茶碗	5 YR 6/2灰褐色	7.5 YR 7/6灰褐色の輪	1.5残存
121	3	S D - 3 - 1		140	灰陶器	瓶	2.5 YR 6/2灰褐色	重ね焼き板有り	底部のみ
		S D - 3 - 2		134-1	山系器	瓶	10 YR 7/4にぶい黄褐色	重ね焼き板有り	底部1周残存
		S D - 3 - 3		134-3	山系器	瓶	5 YR 7/6灰褐色	ソノ痕有り	底部1周残存
		S D - 3 - 4		136-2	山系器	瓶	6 B 5/6青灰色	ソノ痕・重ね焼き板有り	底部1周残存
		S D - 3 - 5		134-1	山系器	瓶	5 B 5/6青灰色	ソノ痕・重ね焼き板有り	環片資料
		S D - 3 - 6		188	近世陶器	小瓶	5 YR 5/4にぶい赤褐色		底部1周残存
		S D - 3 - 7		141	近世陶器	小瓶	5 YR 4/4にぶい赤褐色	5 YR 4/2灰褐色の輪	2.5残存
		S D - 3 - 8		134	近世陶器	甕	2.5 YR 5/6灰褐色		環片資料
		S D - 3 - 9		458	近世陶器	鉢	2.5 YR 7/6青黄色		環片資料
121	3	遺構外 - 1		46	加彩器	甕	5 YR 6/2灰褐色		1.5残存
		遺構外 - 2	67	25	内墨上器	甕	10 YR 7/3にぶい黄褐色	内面を黑色遮蔽・底部外側に本墨痕?	10残存
		遺構外 - 3		48	十脚器	甕	7.5 YR 7/6にぶい灰褐色	丸皿型・外面に複数	環片資料
		遺構外 - 4		206	山系器	甕	5 YR 6/1灰褐色		底部2周残存
		遺構外 - 5		194	山系器	甕	2.5 G Y 6/2オリーブ灰褐色		底部1周残存
		遺構外 - 6		22	山系器	甕	7.5 YR 6/1灰褐色	ソノ痕・重ね焼き板有り	1.0残存
122	3	遺構外 - 7		434-3	近世陶器	人目茶碗	7.5 YR 6/1灰褐色	N 6/1暗灰色の輪	1.0周・体部1周残存
		遺構外 - 8		456	近世陶器	天口茶碗	10 YR 5/6にぶい黄褐色	10 YR 5/6オリーブ灰色の輪	底部のみ
		遺構外 - 9		458-2	近世陶器	小瓶	7.5 YR 6/4にぶい褐色		底部3周残存
		遺構外 - 10		350	近世陶器	天口茶碗	7.5 YR 6/5にぶい褐色	7.5 YR 3/1黒褐色の輪	環片資料
		遺構外 - 11		339	近世陶器	人目茶碗	10 YR 5/6にぶい黄褐色	10 YR 3/1黒褐色の輪	底部2周残存
		遺構外 - 12		180	近世陶器	香炉	10 YR 5/6灰褐色		環片資料
		遺構外 - 13		434-4	古世陶器	甕	7.5 YR 4/2灰褐色	5 YR 4/6にぶい赤褐色の輪	底部1周残存
		遺構外 - 14		458	近世陶器	香炉	5 YR 5/6にぶい褐色	10 YR 3/2黒褐色の輪	1.4残存
		遺構外 - 15		458	近世陶器	香炉	7.5 YR 5/6灰褐色	7.5 YR 2/1黑色の輪	1.4残存
		遺構外 - 16		458-1	近世陶器	甕	5 YR 5/4にぶい褐色	7.5 YR 4/2赤褐色の輪	山腹部1周残存
		遺構外 - 17		458-2	古世陶器	甕	5 YR 6/6にぶい灰褐色	7.5 YR 4/2赤褐色の輪	底部2周残存

第9表 中原遺跡輸入陶磁器等一覧表

No.	調査区	グリット等	登錄No.	実測尺度	可通部	種類等	部位	文様等
1	1-1区		1-3		70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	口絶部	
2	1-1区		3-2	新75回溝横外・12	72	輪足窓系青磁、輪A 2から4	口絶部～全体	
3	1-1区		8		70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体	
4	1-1区		9	新75回溝横外・13	70・71	白磁、施墨	全体下部	
5	1-1区		10-1		70・71	輪足窓系青磁、輪B 1から2	底部	
6	1-1区		10-2		70・71	?	全体	
7	1-1区		11	新76回溝横外・11	70・71	白磁、四葉草文	全体	
8	1-1区		12		70・71	輪足窓系青磁、輪B 2から4	全体	
9	1-1区		26	新75回溝横外・7	72	輪足窓系青磁、輪B 1から2、5	底部	斜波文
10	1-1区	10-F 14	30	新75回S D-16-6	70	白磁、施墨	全体	菊花文
11	1-1区	10-F 14	75	新75回S D-11-2	70・71	輪足窓系青磁、輪B 1から4	全体	斜波文
12	1-1区	10-F 4	75	新75回S D-11-1	70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体	菊花文
13	1-2区		4	新77回溝横外・14	70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体下部	菊花文
14	1-2区	10-F 6	9	新77回溝横外・15	70・71	輪足窓系青磁、輪A 4から	全体下部	斜波文
15	1-2区	10-F 7	30		70・71	輪足窓系青磁、輪B 1から2	全体	菊花文
16	1-2区	10-F 7	31	新77回溝横外・13	70・71	輪足窓系青磁、輪B 1から4	全体	菊花文
17	1-2区	表記	89		70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体下部	
18	1-2区	表記	69-2		70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体	
19	1-2区		61		70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体	菊花文
20	1-2区	表記	87		70・71	四瓣窓系青磁、輪B 1から2	全体	菊花文
21	2-1区	S D-1	8-1		70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体下部	
22	2-1区	11-B 7	15	新80回S D-1-13	72	白磁、四葉草文	全体下部	
23	2-1区	S D-1	77-1		70・71	輪足窓系青磁、輪B 2から4	全体下部	
24	2-2区		24-1		70・71	?	全体	
25	2-3区	20-1-3	8-1	新82回溝横外・6	71	輪足窓系青磁、輪B 2から4	全体下部	斜波下、橫波文
26	2-3区		36-1	新81回S D-6-3	70	輪足窓系青磁、輪B 1から2	全体下部	菊花文
27	4区		62		70・71	輪足窓系青磁、輪C 2から4	全体下部	
28	6区		11		70・71	輪足窓系青磁、輪D 1から4	全体	
29	6区		16		70・71	輪足窓系青磁、輪E 1から2、4	全体下部	
30	6区		39	新80回溝横外・5	70・71	輪足窓系青磁、輪A 4から	全体	
31	6区		113		70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体	

第10表 宮裏遺跡輸入陶磁器等一覧表

No.	調査区	グリット等	登錄No.	実測尺度	可通部	種類等	部位	文様等
1	1区		61-1		70・71	輪足窓系青磁、輪A 4から	全体	
2	1区		165		70・71	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体	織入菊井文、4と同一模体
3	3区	S D-2	29-1		70・71	白磁、施墨	全体	
4	3区	S P-82	407	新120回S P-82-1	72	輪足窓系青磁、輪A 2から4	全体～背部	無入り菊井文、菊花文、斜波文
5	3区	S P-70	402		70・71	白磁、施墨	全体	113回
6	3区	S D-2	496-1		70・71	輪足窓系青磁、輪B 1から2	全体下部	菊井文
7	3区	S D-2	456-2		70・71	輪足窓系青磁、輪C 2から4	全体下部	

第11表 中原遺跡石器一覧表

実測 番号	実測 番号	器 種 名	器 種 名	石 材	区・グリット	通 構	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備 考
1	73	S-2	打撲石器	黑色頁岩	7区	棒手・板	1.9	1.4	0.25	0.3	脚部の一部を欠損
2	73	S-7	打撲石器	黑色頁岩	7区	棒頭一端	1.85	1.4	0.25	0.4	
3	73	S-3	打撲石器	黑色頁岩	1区	舌状尖上	2.05	1.15	0.35	0.6	脚部の一部を欠損
4	73	S-6	石錐	红色頁岩	1区・10-H7	舌状尖上	3.0	1.30	0.45	1.5	
5	73	S-5	打撲石器	黑色頁岩	1区・10-F8	舌状尖上	5.9	3.5	1.4	36.6	
6	73	S-3	打撲石器	黑色頁岩	2-3区・20-J8	舌状尖上	6.55	4.3	1.8	62.4	刃部を折損
7	73	S-5	打撲石器	砂質頁岩	2-3区・20-J3	舌状尖上	8.1	1.3	2.4	92.9	刃部が歪む?
8	73	S-4	刮削	黑色頁岩	1-2区・10-G6	棒4-5端	6.8	5.7	2.1	89.0	
9	73	S-4	刮削	黑色頁岩	1-1区・30-H14	棒4-5端	8.2	4.6	3.0	95.1	
10	S-6	刮削	黑色頁岩	1-1区	Sド-2	3.5	2.7	0.6	5.7		
11	S-7	刮削	黑色頁岩	1-1区	Sド-2	2.35	2.1	0.75	3.2		
12	S-1	刮削	砂質頁岩	1-1区	舌状尖上	2.9	2.5	0.75	4.4		
13	S-2-1	刮削	黑色頁岩	1-1区	舌状尖上	2.3	2.0	1.55	7.1		
14	S-2-2	刮削	黑色頁岩	1-1区	舌状尖上	2.4	3.1	0.7	7.7		
15	S-3	刮削	黑色頁岩	1-2区・30-G6	Sド-8	4.0	1.85	0.5	3.9		
16	S-7	刮削	黑色チヤット	1-2区	Sド-6	2.0	1.4	0.6	1.6		
17	S-1	刮削	黑色頁岩	1-2区	舌状トレンチ	4.3	4.15	1.8	29.0		
18	S-11	刮削	黑色頁岩	2-3区・30-J1	Sド-2	2.3	3.3	0.95	6.8		
19	S-4	刮削	黑色頁岩	5区・29-P3	Sド-2	3.8	6.4	1.1	27.8		
20	S-1	刮削	黑色頁岩	3区	舌状尖上	2.05	1.9	0.5	2.4	破損	
21	S-11	刮削	黑色頁岩	6区	舌状尖上	3.8	2.8	1.5	14.1		
22	S-2	刮削	黑曜石	3区	舌状尖上	2.5	2.2	1.0	5.3		
23	S-4	刮削	チヤット	6区	棒性・板	1.9	2.35	1.2	3.0		
24	S-1	刮削	黑色頁岩	6区	棒性・板	1.3	3.01	1.1	13.4		
25	S-3-1	刮削	黑色頁岩	6区	棒性・板	3.0	3.0	0.6	6.5		
26	S-5-2	刮削	黑色頁岩	6区	棒性・板	3.1	2.3	0.8	3.1		
27	S-4	刮削	黑色頁岩	2-3区・30-J2	舌状尖上	2.9	4.1	0.65	8.1		
28	S-10	刮削	砂質頁岩	6区	舌状尖上	5.0	6.3	1.6	56.1	30-31-32と14-15	
29	S-15-1	刮削	黑色頁岩	6区	舌状尖上	5.2	3.0	1.0	8.3		
30	S-13	刮削	砂質頁岩	6区	舌状尖上	4.75	2.3	0.7	8.4	28-31-34と14-15	
31	S-9	刮削	砂質頁岩	6区	舌状尖上	2.3	4.0	0.75	5.4	28-30-32-34と14-15	
32	S-18	刮削	砂質頁岩	6区	舌状尖上	3.9	1.85	0.7	3.5	28-30-31-33-34と14-15	
33	S-12	刮削	砂質頁岩	6区	舌状尖上	6.4	4.15	1.3	26.1	28-30-32-34と14-15	
34	S-16	刮削	砂質頁岩	6区	舌状尖上	3.5	3.1	0.7	10.0	28-30-32と14-15	
35	73	S-5	砥石	黑色頁岩風化	1-2区・10-G6	擦拭一端	7.25	2.25	2.0	49.6	
36	73	S-2	砥石	黑色頁岩風化	2-1区	5ド-10	7.8	2.1	1.5	37.6	
37	73	S-3	砥石	黑色頁岩風化	2-1区	Sド-10	20.3	2.8	2.95	97.5	
38	73	S-6	砥石	黑色頁岩風化	6区	擦拭	70	3.1	2.8	71.2	
39	73	S-8	砥石	黑色頁岩風化	6区・30-E6	Sド-3	6.1	3.3	0.7	19.5	
40	S-4	カット刀鋸	磨擦修整	2-1区・10-E10	Sド-4	14.2	9.0	7.2	118.5	被削	
41	S-19	礫	磨擦修整	6区	舌状尖上	7.2	6.25	2.15	111.2	被削	
42	S-9	砥石	中粒砂岩	2-3区・20-H6	表上・板	7.5	4.55	3.2	147.8		
43	73	S-5	打撲石	磨擦修整	1-1区	Sド-16	6.7	5.55	1.6	86.5	
44	74	S-10	砥石	中粒砂岩	2-3区・30-J10	Sド-1	10.4	6.8	6.0	446.9	
45	74	S-3	砥石	磨擦修整	5区	Sド-5	12.1	6.2	4.2	432.1	
46	74	S-1	砥石	中粒砂岩	5区	Sド-1	8.0	7.2	7.2	560.5	
47	S-14-1	砥石	中粒砂岩	6区	舌状尖上	5.2	4.25	3.5	92.3		
48	74	S-2	砥石	黑色頁岩	5区	Sド-5	20.3	6.2	5.5	110.5	
49	74	S-17	舌石	磨擦修整	6区	舌状尖上	35.8	15.6	6.5	2492.4	

第12表 宮裏遺跡石器一覧表

実測 番号	実測 番号	器 種 名	器 種 名	石 材	区・グリット	通 構	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備 考
1	74	2	ナイフ形石器	チャート	1区	表上	3.0	1.1	0.6	1.3	
2	74	9	打撲石	砂質頁岩	3区	神話トレンチ	3.1	2.0	0.5	1.7	先端を欠損

第13表 中原遺跡竪穴住居跡・掘立柱建物跡計測値一覧表

調査区	種類	遺構名	真高 概算	寄高 概算	主輪方向	幅 m	奥行 m	床面積 m <sup>2</sup>	備考	
1-1区	竪穴住居跡	SB-1	7	3.4	N-6-E	3.3	4.17	(10.0)		
		SB-2	8	5	N-14.5-W	-	3.65	-		
	掘立柱建物跡	SH-1	9	3.5	N-8-K	-	4.41	-		
		SH-2	10	3.6	N-7-E	6.9	4.26	29.4		
2-1区	竪穴住居跡	SH-3	11	-	N-5-W	-	3.75	-		
		SB-1	18	13	N-31-W	2.72	2.78	6.3	他の住居と重複か	
		SB-2	18	13	N-39-W	-	-	-		
		SB-3	19	14	N-29-W	2.61	3.61	6.4	SB-4と重複	
		SB-4	20	14	N-34-W	3.72	4.13	(9.0)	SH-3と重複	
	掘立柱建物跡	SB-5	21	15	N-24-W	3.32	3.56	9.3		
		SH-1	22	-	N-26-W	4.44	5.60	24.0		
		SH-2	23	-	N-15.5-W	-	-	-		
		SH-3	24	15	N-28.5-W	2.75	4.2	11.6		
2-2区	竪穴住居跡	SH-4	25	16	N-30.5-W	-	3.61	-		
		SB-1	29	17	N-14-W	-	3.52	-	SB-2と重複	
	SB-2	29	17	N-12.5-W	-	-	-	SB-1と重複		
2-3区	竪穴住居跡	SH-1	31	19	N-39-W	4.20	4.47	12.7		
		SB-2	32	19	N-51-W	3.28	2.64	5.2		
		SH-3	33	20	N-32.5-W	-	5.13	-	SH-4と重複	
		SB-4	33	20	N-25-W	-	-	-	SB-3と重複	
		SH-5	34	21	N-41.5-W	-	4.54	(13.7)		
		SB-6	35	21	N-36.5-E	1.77	1.90	1.9		
		SH-7	36	22	N-49-W	-	4.61	(16.3)		
	掘立柱建物跡	SH-1	37	22	N-13-K	4.05	2.30	9.3		
		SB-1	42	26	N-16-E	1.81	-	-		
3区	竪穴住居跡	SH-2	42	-	N-7.5-K	-	-	-	古いに重複しあう	
		SH-3-a	42	-	N-11.5-E	-	-	-		
		SH-3-b	42	-	N-3.5-W	-	-	-		
		SB-4-a	42	26	N-55-K	-	-	-		
		SB-4-b	42	26	N-21-W	-	-	-		
		SH-5	42	26	N-8-W	-	-	-		
		SB-6	43	27	N-10.5-W	-	-	-		
	掘立柱建物跡	SB-7	44	27	N-7-W	-	-	-	SB-9と重複か	
		SB-8	45	28	N-12.5-W	2.42	3.00	(8.1)		
		SB-9	44	27	N-9.5-W	2.90	-	-	SB-7と重複か	
4区	竪穴住居跡	SH-1	46	28	N-10-W	-	-	-		
		SB-1	47	-	N-6.5-W	-	-	-		
		SB-2	48	31	N-17.5-W	-	3.12	-	SB-3等と重複	
		SB-3	49	32	N-8-W	-	-	-	SB-2-4と重複	
		SB-4	49	32	N-10-W	-	-	-	SB-3と重複	
	SH-5	49	-	-	-	-	-	-		
5区	竪穴住居跡	SB-1	50	51	34-35	N-1-E	5.28	5.08	18.95	SB-7と重複
		SB-2	52	36	N-75-W	2.87	2.55	(4.80)		
		SB-3	53	37-38	N-7-E	3.46	3.67	(6.91)		
		SB-4	54	37	N-2-W	2.98	3.11	(6.68)	SH-5と重複	
		SB-5	54	37	N-7-W	2.09	-	-	SB-6と重複	
		SB-6	53	37-38	N-14-W	-	-	-		
		SB-7	50	51	N-35-W	2.98	3.57	(8.12)	SB-1と重複	
	掘立柱建物跡	SB-8	55	-	N-5-E	2.83	2.32	(4.33)	SH-1と重複	
		SH-1	56	-	N-1-E	5.7	5.35	30.5	SB-8と重複	
6区	竪穴住居跡	SB-1	58	49	N-11-W	-	-	-		
		SB-2	59	41	N-14.5-W	3.28	4.05	9.5		
		SB-3	58	42	N-175-W	3.62	3.34	(10.3)		
		SB-4	60	42	N-6-W	2.26	2.45	4.3		
		SB-5	61	43	N-10.5-W	2.67	2.70	4.1		
		SB-6	62	42	N-20-W	-	-	-		
		SB-7	63	43	N-15-W	2.05	3.7	7.2		
	SB-8	64	43	N-10-W	-	2.8	-			
7区	掘立柱建物跡	SH-1	69	46	N-8-W	-	1.88	-		
		SH-2	70	46	N-1-K	-	1.78	-		
		SH-3	71	46	N-7-W	4.02	2.1	8.4		

( ) は既定値  
- は不明

第14表 宮裏遺跡竪穴住居跡・掘立柱建物跡計測値一覧表

調査区	種類	通稱名	面積 m <sup>2</sup>	平均高 度	主軸方向	幅 m	奥行 m	床面積 m <sup>2</sup>	備考
1区	竪穴住居跡	SB-1	102	48-49	N=4-K	3.31	2.91	6.4	SB-2・4と重複
		SB-2	102	48	N=1-E	3.2	-	-	SB-1・4と重複
		SB-3	103	49	N=30-W	-	-	-	
		SB-4	102	48	N=25-W	-	2.3	-	SB-1・2と重複
2区	竪穴住居跡	SB-1	104	50	N=17-W	-	-	-	
		SB-2	104	50	N=12-W	-	-	-	SB-3と重複
		SB-3	104	50	N=15-W	-	-	-	SB-2と重複
3区	竪穴住居跡	SB-1	105	52	N=3-E	3.63	3.15	(5.9)	SB-2と重複
		SB-2	106	52	N=115-W	3.35	3.84	9.6	SB-1と重複
		SB-3 a	107	53	N=18-K	4.54	4.82	17.8	SB-3 bと重複
		SB-3 b	107	53	N=11-E	3.75	3.1	10.6	SB-3 aと重複
		SB-4	108	54	N=4-E	3.67	-	-	SB-5と重複
		SB-5	109	54	N=8-E	-	-	-	SB-4・6と重複
		SB-6	109	54	N=35-E	2.96	-	-	SB-5と重複
		SB-7	110	55	N=5-W	2.5	2.43	4.9	
		SB-8	110	54	E=3-S	2.74	2.62	5.2	
		SB-9	111	55	N=05-W	2.15	-	-	
		SB-10	111	55	N=4-E	4.2	-	-	
		SB-11	112	56	N=3-E	2.4	-	-	
		SB-12	112	56	N=8-W	3.37	-	-	
		SB-13	113	57	N=6-E	6.64	6.5	43.2	
掘立柱建物跡									

( ) は推定値

- は不明

第15表 中原遺跡山茶碗・輸入陶磁器類点数表

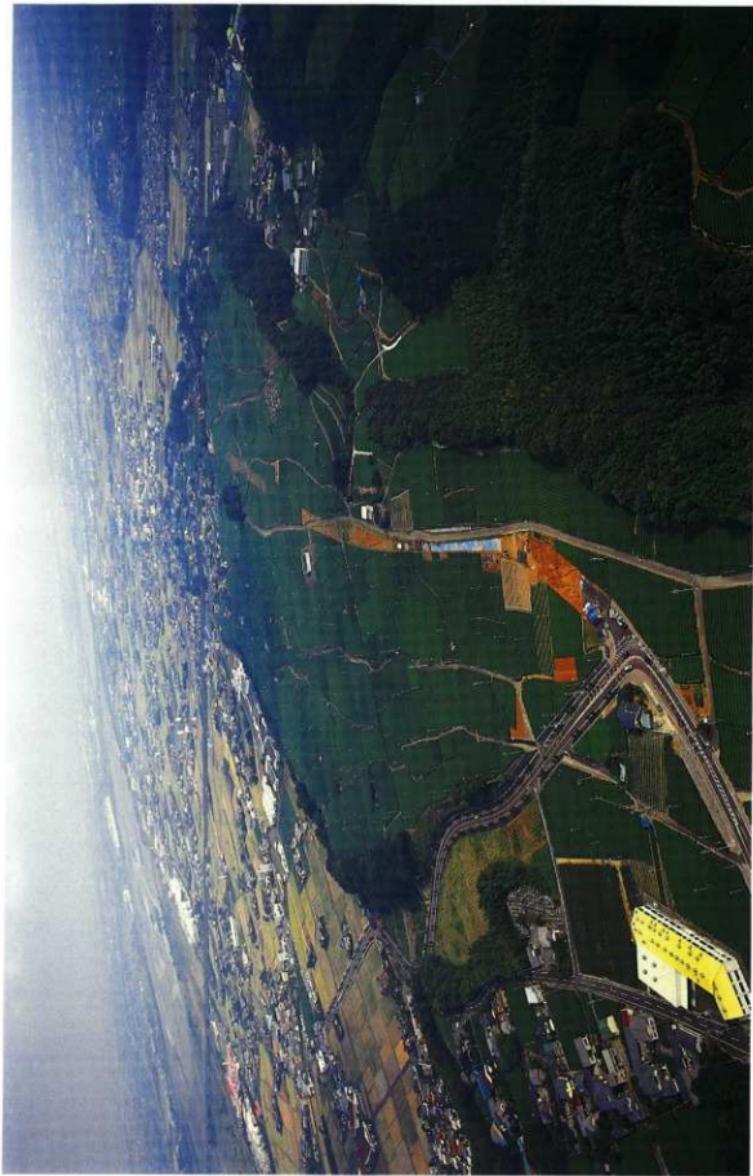
調査区	山茶碗	山田	輸入陶磁器	合計
1-1区	281	53	12	346点
	81.4	15.2	3.4	100%
1-2区	61	24	8	113点
	71.7	21.2	7.1	100%
2-1区	32	7	3	42点
	76.2	16.7	7.1	100%
2-2区	2	0	0	2点
	100	0	0	100%
2-3区	17	3	2	22.5
	77.3	13.6	9.1	100%
3区	7	2	0	9点
	77.8	22.2	0	100%
4区	1	1	1	3点
	33.33	33.33	33.33	100%
5区	0	1	0	1点
	0	100	0	100%
6区	21	8	4	33点
	63.6	24.3	12.1	100%
7区	0	0	0	0点
	0	0	0	0%
合計	445	99	30	574点
	77.5	17.3	5.2	100%

第16表 中原遺跡輸入陶磁器破片点数表

調査区	龍泉窯系青磁			均窯系青磁			白 磁			その他の		合計
	麻	小 磨	圓	碗	瓶	圓	高耳壺	不 明				
点数	15	2	1	7	1	1	2	1	30点			
%	50	6.7	3.3	23.4	3.3	3.3	6.7	3.3				100%

写 真 図 版

中原地区・宮城県周辺



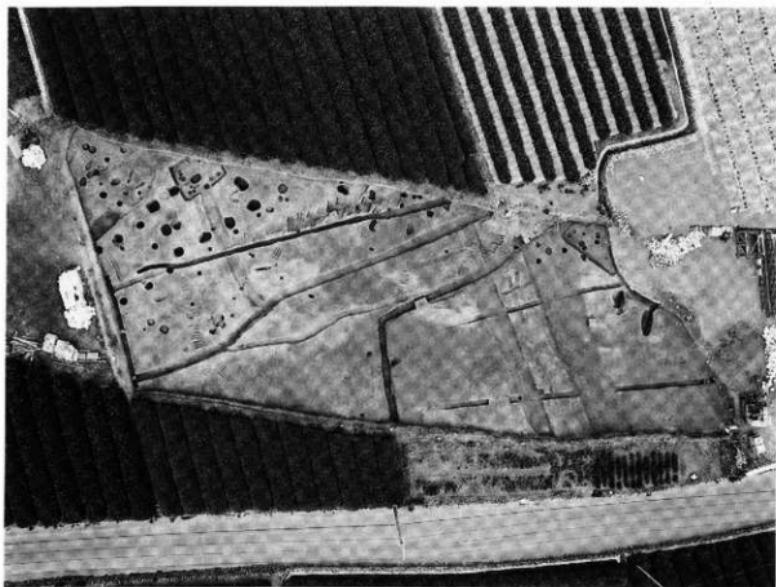
図版 2



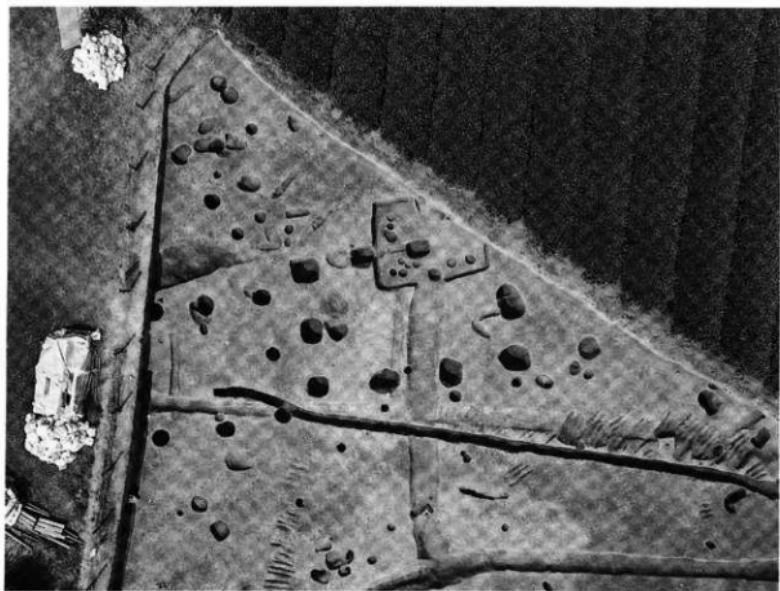
1 中原遺跡遠景



2 中原遺跡周辺



1 中原遺跡1-1区全景



2 1-1区SB-1、SH-1・2

図版4



1 1-1区SB-1



2 1-1区SB-1土器出土状況



1 1-1区SB-2



2 1-1区SH-1

図版 6



1 1-1区SH-2



2 1-1区SD-1



1 1-1区 SD-1・2



2 1-1区 SD-3・9

図版 8



1 1-1区SD-2土器出土状況



2 1-1区SD-2土器出土状況



3 1-1区SD-2土器出土状況



4 1-1区SD-1礫出土状況



5 1-1区SD-1・3礫出土状況



1 1-1区SD-4・12



2 1-1区SD-16

図版10



1 1-1区SP-23  
土器1出土状況



2 1-1区SP-28  
土器1出土状況



3 1-1区SF-18  
礫出土状況



1 中原遺跡1—2区全景



2 1—2区遺構検出状況

図版12



中原遺跡2-1・2区全景



1 2-1区SB-1



2 2-1区SB-2土器出土状況

図版14



1 2-1区SB-3・4



2 2-1区SB-4 土器出土状況

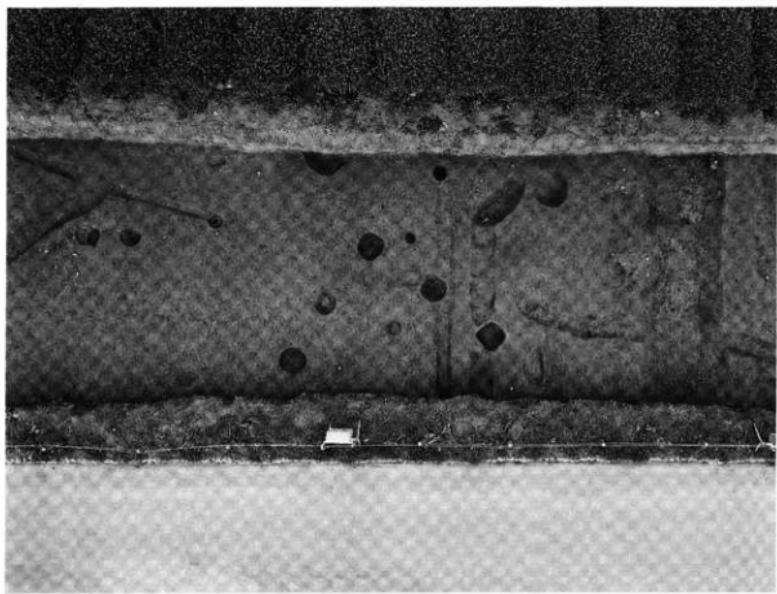


1 2-1区SB-5

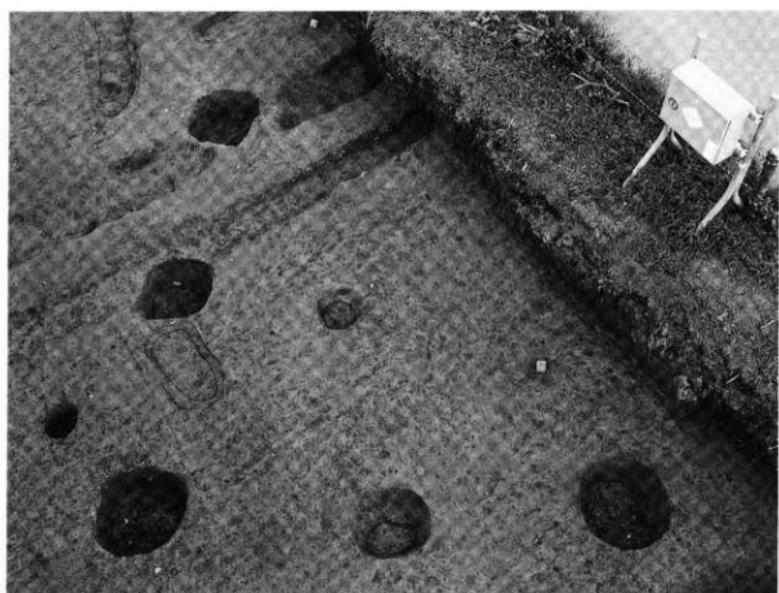


2 2-1区SH-3

図版16



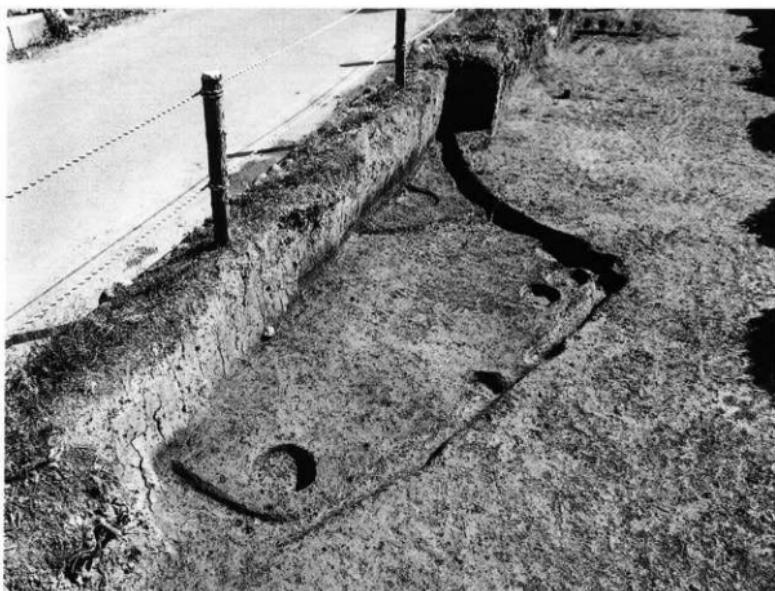
1 2-1区SH-4・SD-10周辺



2 2-1区SH-4



1 2-2区SB-1・2周辺



2 2-2区SB-1・2

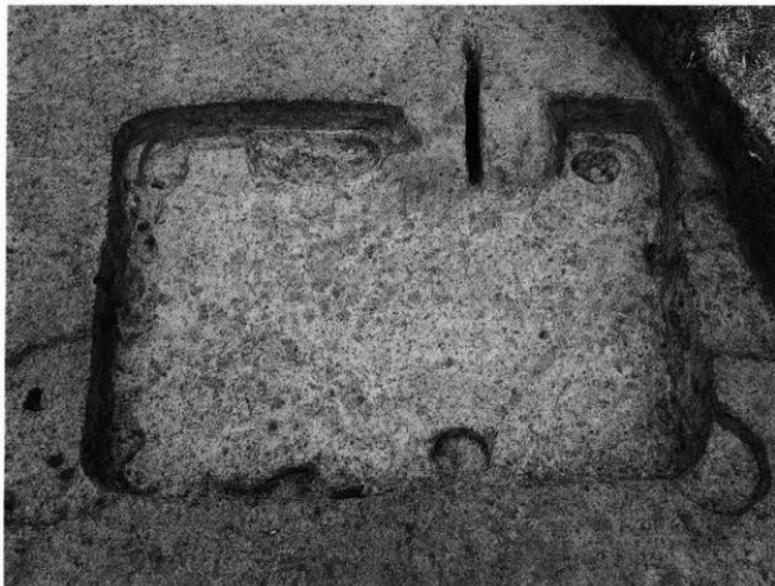
図版18



中原遺跡 2—3 区全景

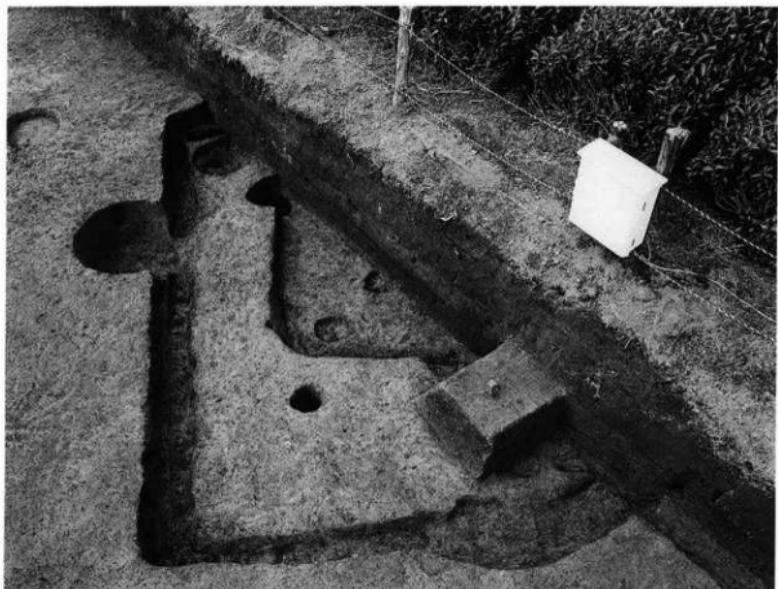


1 2-3区SB-1



2 2-3区SB-2

図版20



1 2-3区SB-3・4



2 2-3区SB-3・4 土壠堆積状況



1 2-3区SB-5



2 2-3区SB-6

図版22



1 2-3区SB-7



2 2-3区SH-1



1 2-3区SD-5・6



2 2-3区SD-5・6

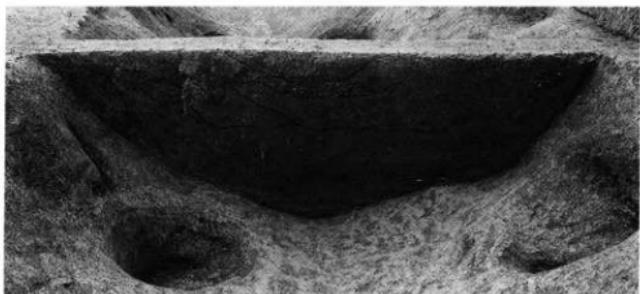
図版24



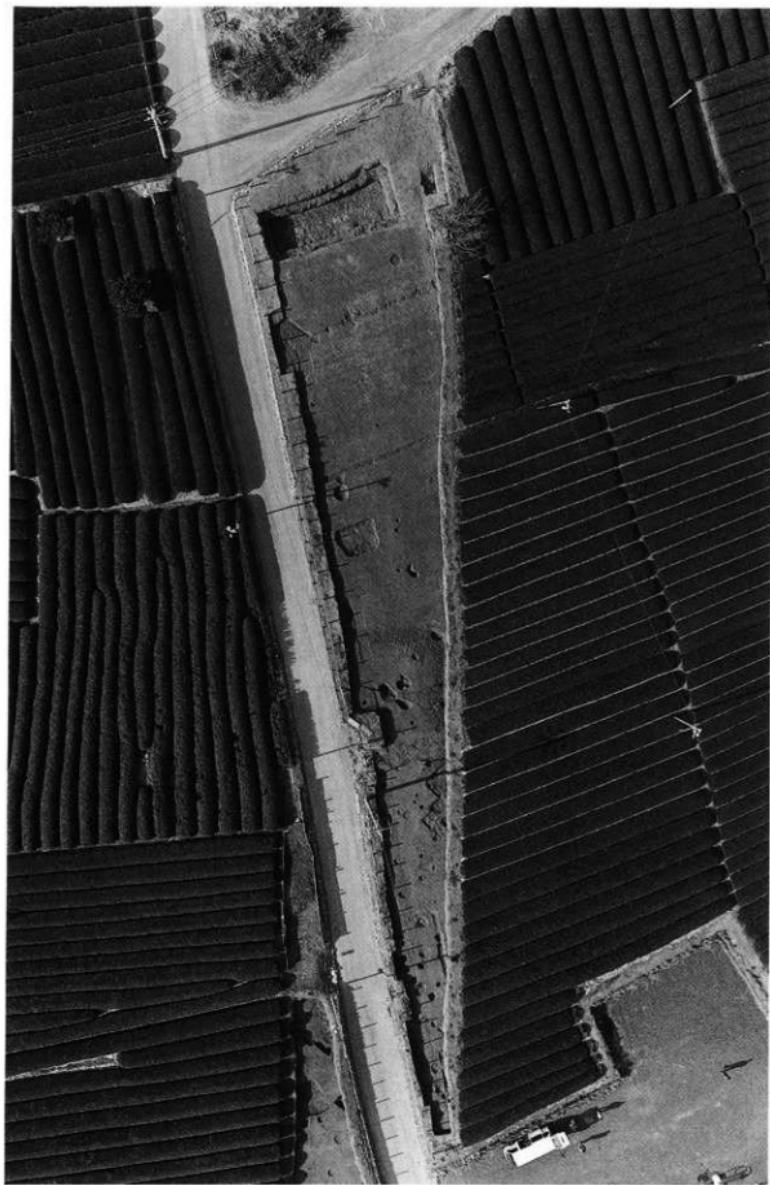
1 2-3区SD-5・6



2 2-3区SD-5・6底面拡大



3  
2-3区SD-5  
土層帶G-H



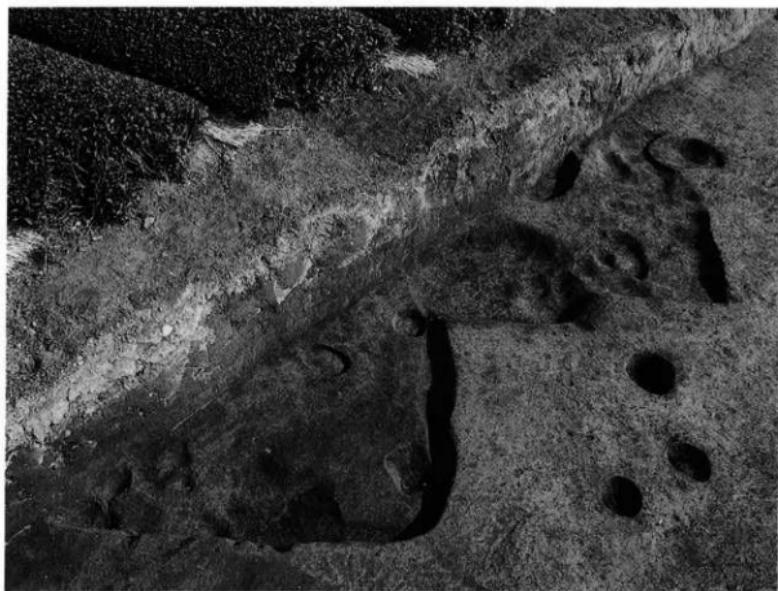
中原遺跡 3区全景

図版26





1 3区SB-6



2 3区SB-7・9

図版28



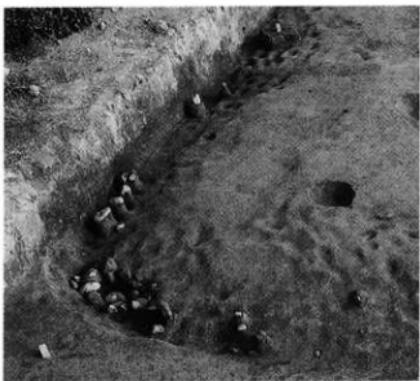
1 3区SB-8



2 3区SH-1



1 3区SD-3



2 3区SD-3 磚出土状況



3 3区SD-3付近出土山皿

図版30



1 中原遺跡 4 区全景



2 中原遺跡 4 区全景



1 4区SB-2



2 4区SB-2カマド



3 4区SB-2カマド内土製支脚



4 4区SB-2 土器出土状況

図版32



1 4区SB-3・4



2 4区SB-4



3 4区SB-4  
灰釉陶器出土状況



中原遺跡 5 区 全景

図版34



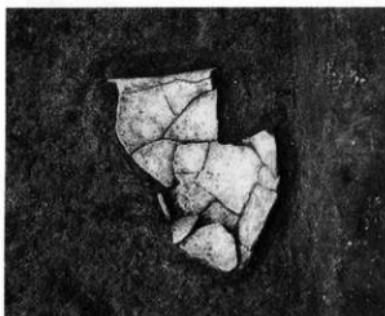
1 5区SB-1



2 5区SB-1掘り方



1 5区SB-7



2 5区SB-1土师器甕出土状况



3 5区SB-1灰釉陶器·須恵器出土状况



4 5区SB-1土师器坏出土状况



5 5区SB-7土师器甕出土状况

図版36



1 5区SB-2



2 5区SB-2 カマド付近土器出土状況



1 5区SB-3~6



2 5区SB-4・5

図版38



1 5区SB-3



2 5区SB-3内黒土器出土状況



3 5区SB-6



中原遺跡 6区全景

図版40



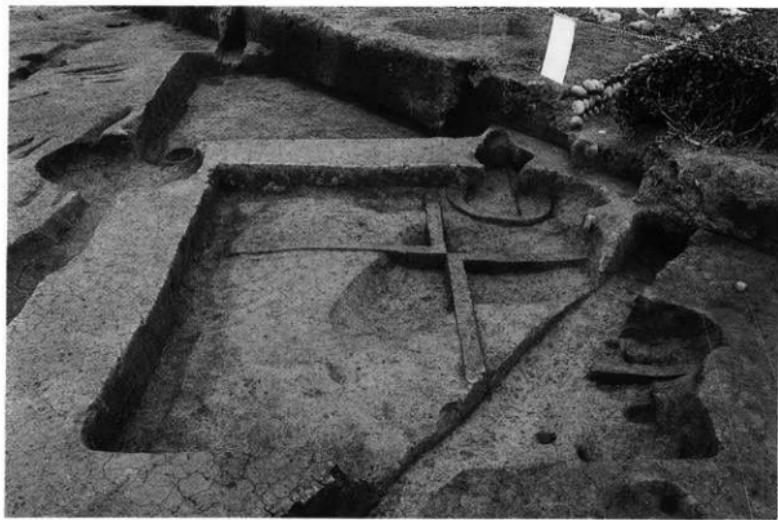
1 6区竪穴住居跡群



2 6区SB-1



1 6区SB-2

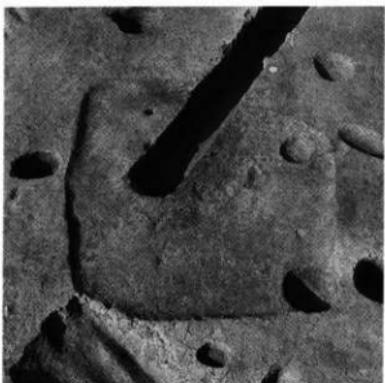


2 6区SB-2掘り方

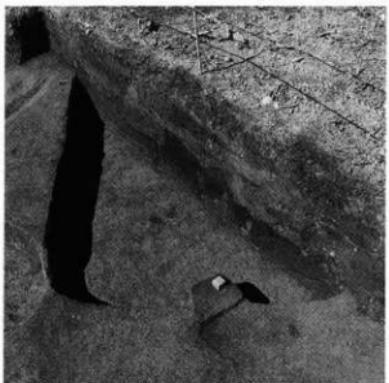
図版42



1 6区SB-3



2 6区SB-4



3 6区SB-6



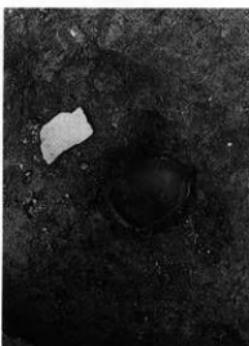
1 6区SB-5



2 6区SB-5掘り方



3 6区SB-7



4 6区SB-7内黒土器出土状況



5 6区SB-8

図版44



1 6区縄文土器出土状況



2 6区縄文土器出土状況



中原遺跡7区全景

図版46



1 7区SH-1・2



2 7区SH-3



1 宮裏遺跡遠景



2 宮裏遺跡 1 区全景

図版48



1 1区SB-1



2 1区SB-1掘り方



3 1区SB-1・2・4掘り方



1 1区SB-1土器出土状況



2 1区SB-3土器出土状況

図版50



1 宮裏遺跡  
1・2区全景



2 2区SB-1



3 2区SB-2・3



宮裏遺跡 3区全景

図版52



1 3区SB-1



2 3区SB-2



1 3区SB-3a・b



2 3区SB-3a  
カマド付近土器出土状況

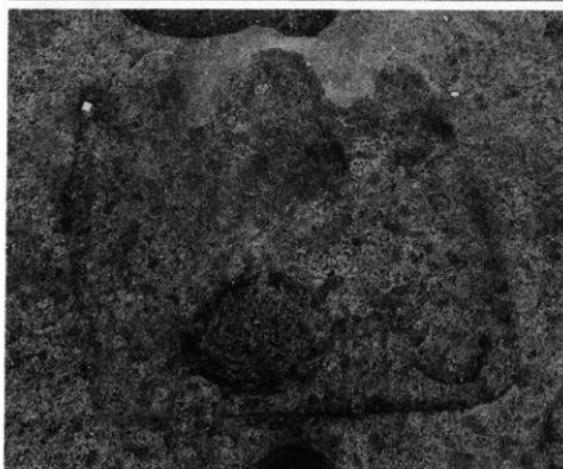


3 3区SB-3a 土器出土状況

図版54



1 3区SB-4~6



2 3区SB-8



3 3区SB-8  
カマド付近土器出土状況



1 3区SB-10



2 3区SB-7



3 3区SB-9

図版56



1 3区SB-11



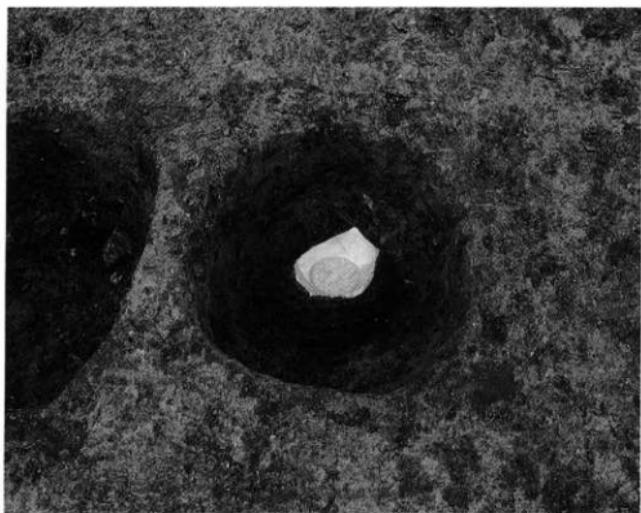
2 3区SB-12



3 3区SD-2・3



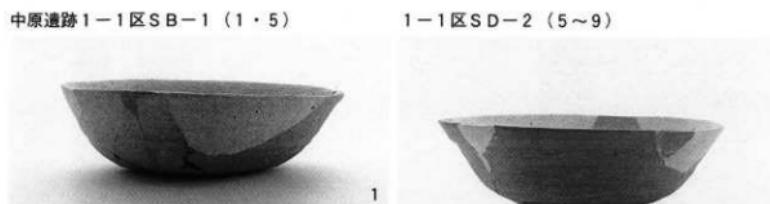
1 3区SH-1



2 3区SP-82青磁碗出土状況

図版58

中原遺跡 1-1区SB-1 (1・5)



1

1-1区SD-2 (5~9)



5

1-1区SD-1 (1・2・11・12)



5



6



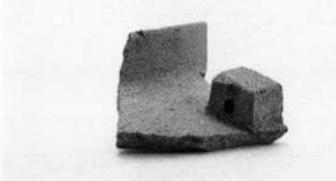
1



2



7



11



8



12



9

1-1区SD-2 (10~14)



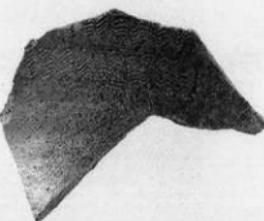
1-1区SP-28 (1)



10

1

1-1区SP-77 (1)



11

1

1-1区SP-23 (1)



12

1

1-1区遺構外 (3)



13

3

1-2区遺構外 (2)

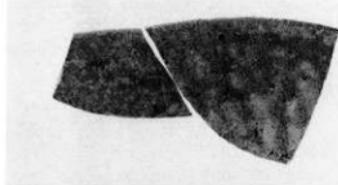


14

2

図版60

2-1区SB-1 (1・3・4)



1

2-1区SB-4 (2・5・6)



2



3



5



4

2-1区SB-2 (1・3)



1

2-1区SD-10 (1・4)



1

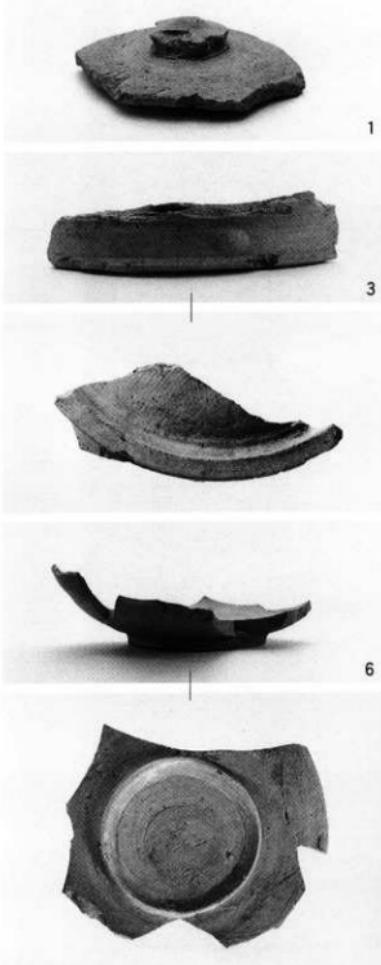


3



4

2-1区SD-1 (1・3・6)



2-2区SD-1 (1)



2-3区SB-1 (1)



2-3区SB-7 (2)



2-3区遺構外 (7)



3区SB-8 (3)



2-1区SP-45 (1)



図版62

3区SB-6 (2・3・4)



3区遺構外 (1)



1

4区SB-2 (1・2・3)



3区SD-2 (2)



1

3



2

4



3

3区SP-1 (1)



2



4区SB-4 (1)



1



1

5区SB-1 (1・2・8~15・23)



1



13



2



14



8



9



15



10



11



12



23

図版64

5区SB-1 (24)



5区SB-2 (2・3)



5区SB-7 (1)



5区SB-3 (1・2)



5区SB-8 (1)



6区SB-2 (4・5)



4

3区SB-2 カマド支脚



1

4区SB-2 カマド支脚



5

6区SB-4 (1)



1



2

6区SB-7 (1)



1



1

図版66

宮裏遺跡1区SB-1 (5・6)



5

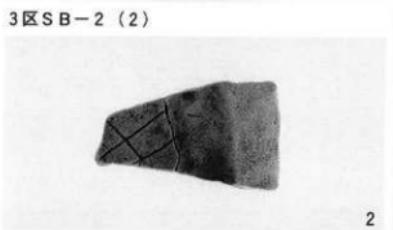


6

3区SB-1 (3)

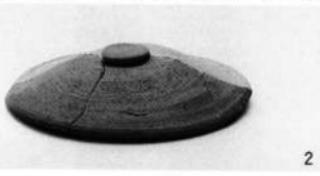


3



2

3区SB-3 (2・5・8・10・11・12・15・16)



2



5



8



10



11



12



15



16

3区SB-3(18・19・23・24・26・27・35・37)



18



37



19



1

3区SB-8(1・4)



23



24



1



26



4

3区遺構外(2)



27



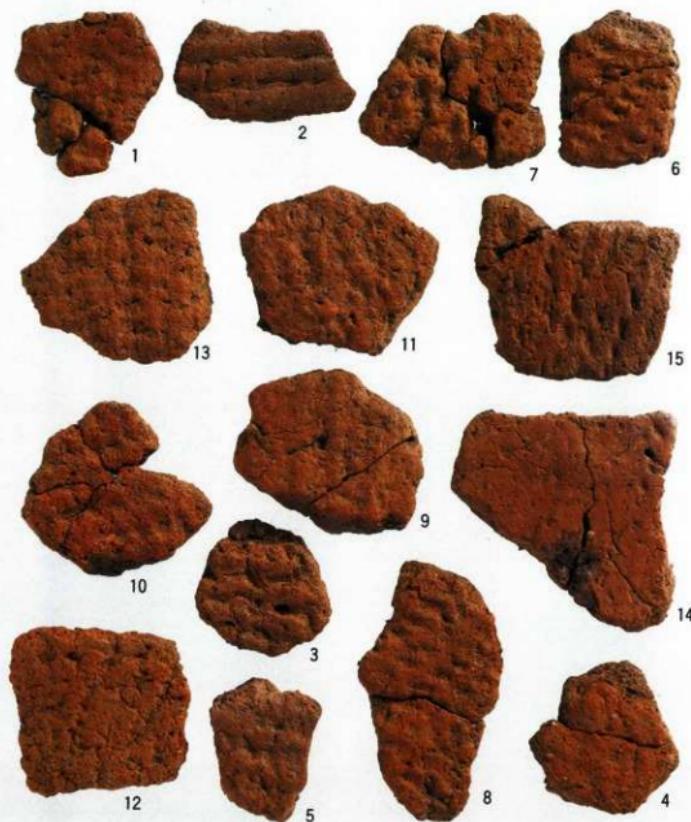
2



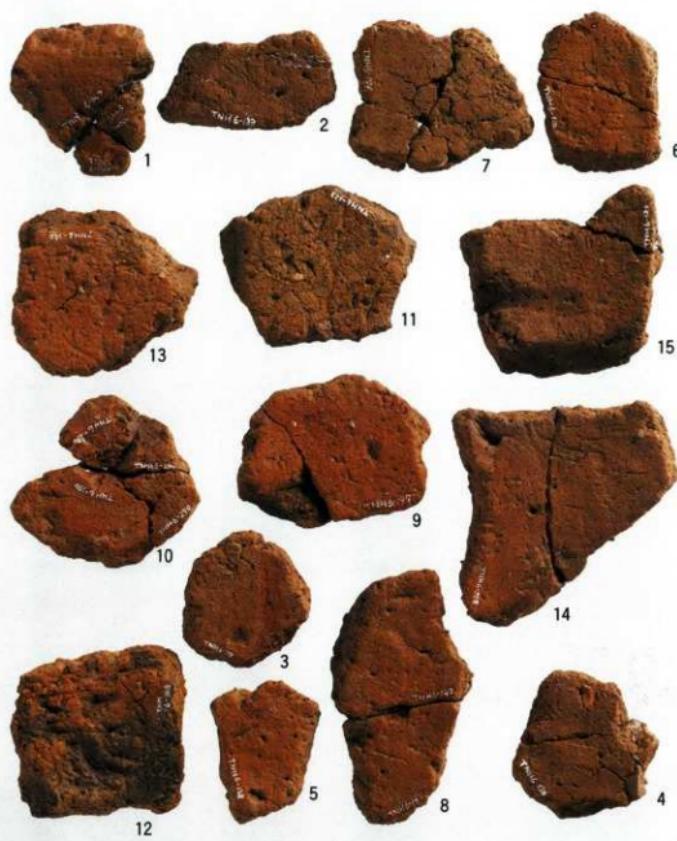
35



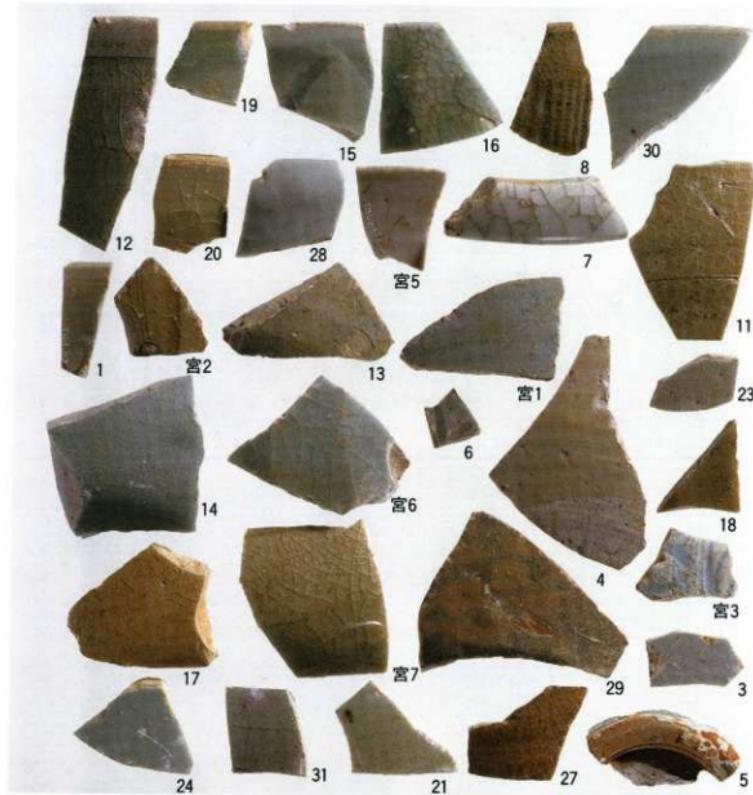
図版68



中原遺跡 6 区出土縄文土器（表）



中原遺跡 6 区出土繩文土器（裏）



中原遺跡・宮裏遺跡出土輸入陶磁器等集合写真（表）



中原遺跡 2-3区 S D-6 出土青磁

中原遺跡 1-1区 S D-16 出土白磁

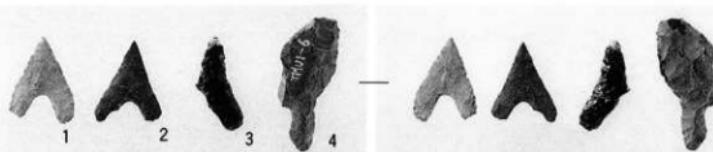


中原遺跡・宮裏遺跡出土輸入陶磁器等集合写真（裏）

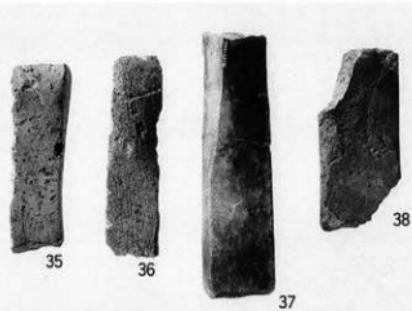
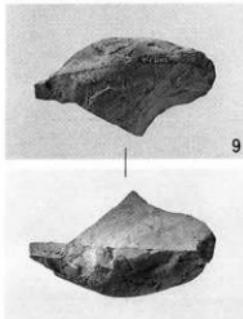


中原遺跡 2-3 区遺構外出土青磁

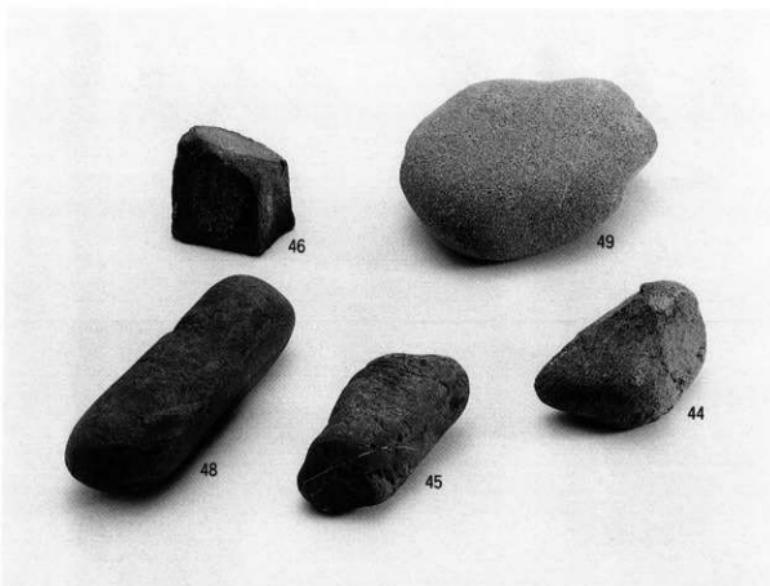




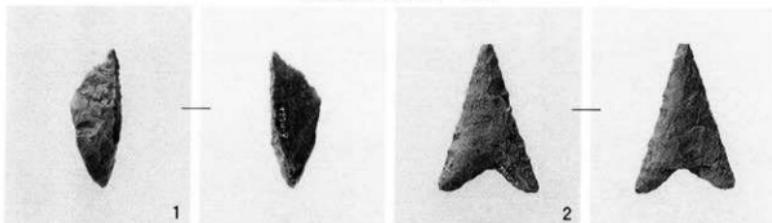
中原遺跡出土打製石斧 (5 ~ 7)



図版74



中原遺跡出土敲打石・台石



宮裏遺跡出土ナイフ形石器・石鎌



中原遺跡・宮裏遺跡出土鉄製品

おわりに

現地調査及び本書の作成にあたって多くの方々にご協力を頂いた。次の方々からは有益なご指導、ご助言、ご協力を賜った。(敬称略)

朝比奈太郎 池上 悟 市原寿文 伊藤通玄 大塚淑夫 加藤芳郎 坂巻隆一  
篠ヶ谷路人 柴田 稔 濵谷昌彦 鶴野雄康

現地調査および整理作業参加者は次の通りである。

発掘作業参加者

浅原一正	秋山 満	新井敏夫	池田卓市	泉地浩和	伊藤富爾	伊藤房次
伊藤みほ	大石かつ江	大石勝司	小野雅史	岸端英二	北川士紋	後藤恭一
坂本真貴	櫻井拓馬	佐藤健次	佐野孝子	佐野安夫	杉本知子	杉本直之
鈴木 博	鈴木弘信	諏訪賀勇	竹田作平	田中茂樹	塙本哲士	津島悦子
戸塚美代子	永田育久	永田美津江	仲安万千子	西野禎之	仁藤幸司	廣田良房
星野愛一	増田敏夫	増本千代	松田英之	松原立次	丸尾安代	水島まさ江
三輪幸子	村田浩子	持塙 真	柳川忠氏	山田季夫	依田昌一	渡辺一孝
渡辺美代子	渡部昭次	八木恵子	糸田三千雄			

整理作業参加者

池松由貴子	入手悦子	海野ひとみ	加藤百合子	佐野矢代伊	下山山好美	鈴木記代
瀧 桂子	西川真由美	平井豊子	松永祥江	山田真弓		
杉山すず代	(写真室)					

# 報告書抄録

ふりがな	なかはらいせき・みやうらいせき							
書名	中原遺跡・宮裏遺跡							
調査名	平成9~12年度 駿道島田吉山郷緊急地方道路改築(B)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第133集							
編集者名	藤又直人							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261㈹							
発行年月日	2002年3月30日							
あたりがな 所以遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ***	東經 ***	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
なかはらいせき 中原遺跡	しづおかんしまだし 静岡県、鳥田市 さからとあざなかはらはか 阪本字中原他	22209	34度 48分 35秒	138度 12分 38秒	19971125 3 20001031	10140	道路改築工事	
みやうらいせき 宮裏遺跡	しづおかんしまだし 静岡県、鳥田市 さからとあざみやうらはか 阪本字宮裏他	22209	34度 48分 18秒	138度 13分 6秒	19980701 3 19991130	2238	道路改築工事	
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
中原遺跡	集落	縄文時代		縄文土器 打製石器3・打製石器1・打製石斧3・剥片27 碑1・打欠石斧1・敲打石1・台石1 須恵器	縄文時代の区画 港や古墳時代～平安時代にかけての堅穴住居跡 多数確認。縄文時代草創期末の多間文系土器も 少量出土。			
		古墳時代後期	堅穴住居跡7 掘立柱建物跡1					
		奈良時代	堅穴住居跡18 掘立柱建物跡7					
		平安時代	堅穴住居跡23 掘立柱建物跡2 溝状遺構4					
		平安時代末期	堅穴住居跡3 溝状遺構62					
		鎌倉時代 江戸時代	溝状遺構1					
宮裏遺跡	集落	旧石器時代		ナイフ形石器1 打製石器1	高根森古墳群に 隣接する集落遺跡。 奈良時代～平安時代の堅穴住居跡多数。 鎌倉時代の掘立柱建物跡も確認。			
		縄文時代						
		奈良時代	堅穴住居跡20					
		平安時代						
		平安時代末期	掘立柱建物跡1					
		鎌倉時代 江戸時代	溝状遺構9					

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第133集

## 中原遺跡・宮裏遺跡

平成9～12年度 県道島田吉田線緊急地方道道路改築（B）事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成14年3月30日発行

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20

T E L (054) 262-4261 (代表)

F A X (054) 262-4266

印刷所 株式会社 三 創

静岡市中村町166番地の1

T E L (054) 282-4031(代)